河内長野市文化財調査報告書第 67 輯
河内長野市埋蔵文化財調査報告書 42
公益財団法人　大阪府文化財センター調査報告書　第 337 集

河内長野市

高　向　遺　跡

河内長野市高向・上原土地区画整理事業に伴う発掘調査報告書

２０２５年３月

河　内　長　野　市　教　育　委　員　会
公益財団法人　大阪府文化財センター

河内長野市文化財調査報告書第 67 輯
河内長野市埋蔵文化財調査報告書 42
公益財団法人 大阪府文化財センター調査報告書　第 337 集

河内長野市

高　向　遺　跡

河内長野市高向・上原土地区画整理事業に伴う発掘調査報告書

河 内 長 野 市 教 育 委 員 会
公益財団法人 大阪府文化財センター

１．１区　掘立柱建物群　全景（北東から）

２．４区　810・812 石積み基礎　全景（北西から）

巻頭写真図版２

１．５区　竪穴建物２　炭化材・土器・台石出土状況（南から）

２．５区　竪穴建物２　出土遺物

序　　文

大阪府の南東部に位置する河内長野市は、豊かな自然に恵まれ、高野街道に代表される街道の要衝として発展しました。また、中世には一山寺院が形成され、市内には現在も数多くの歴史文化遺産があることから、令和元年５月に「中世に出逢えるまち河内長野」のストーリーが、令和２年６月に「女性とともに今に息づく女人高野」と「葛城修験」のストーリーが日本遺産に認定されました。

歴史の魅力あふれる河内長野市は大阪市内への通勤圏に位置しているため、住宅都市として発達してきました。この住宅開発がもたらした文化財や自然に対する影響は大きなものがあります。特に、地下に眠る埋蔵文化財の保存は、開発と直接的に結びつくため、適切な保存措置を講じる必要があります。

遺跡の中に刻まれた河内長野の先人達の歴史を保護・保存し、現在の、更には未来の市民へと伝えていくことは、現代に生きる私達の責務であります。河内長野市においては、重要な課題である開発と文化財保護との調和のため、開発に先立ち埋蔵文化財の発掘調査を実施し、その把握に努めています。

本書は河内長野市高向・上原土地区画整理事業に伴う高向遺跡の埋蔵文化財発掘調査成果を収録しています。皆様が先人達の残したメッセージの一部でもある文化財に対するご理解を深めていただくと共に、文化財の保護・保存を進め、あるいは研究するための資料としてご活用いただければ幸いです。

このたびの発掘調査にご協力いただきました河内長野市高向・上原土地区画整理組合をはじめとするみなさまの埋蔵文化財への深いご理解に末尾ながら謝意を表すものです。

令和７年３月 31 日

河内長野市教育委員会
教育長　松本芳孝

はしがき

河内長野市は大阪の中心部へのアクセスが良い地域で住宅地として発展する一方、自然が豊かで市を囲む山並みは壮観です。さらに、国宝や重要文化財も多く、それらが地域の中で受け継がれており中世の息づく地域でもあります。

この高向遺跡は、当センターの前身である財団法人大阪文化財センターが昭和51年度に実施した分布調査で発見された旧石器時代から中世に続く複合遺跡です。これまで河内長野市教育委員会や大阪府教育庁が主として調査を実施しており、遺跡南側を中心として古代から中世の集落があったことがわかっています。今回の調査では古代の集落が、遺跡のより北側に拡がることを確認できました。中世では寺院に関連すると考えられる石積み基礎が見つかったことから、かつて調査地に寺院が存在したことが明らかになり、地域の歴史的考察に資する重要な成果を得ることができました。

本書がより多くの市民の皆さまに広く活用され、地域の歴史を理解する一助となることを切に願います。

調査の実施にあたりましては、河内長野市高向・上原土地区画整理組合をはじめ、近隣住民の皆様にはご理解と多大なご協力を賜りました。また大阪府教育庁ならびに河内長野市教育委員会よりご指導とご協力をいただきました。深く感謝しますとともに、今後とも当センターの事業に変わらぬご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

令和7年3月31日

公益財団法人　大阪府文化財センター
理事長　坂井秀弥

例　　言

1．本書は河内長野市高向・上原土地区画整理事業に伴い実施した大阪府河内長野市高向所在の高向遺跡の発掘調査報告書である。調査名称は「TKO22 － 1」とした。

2．発掘調査は株式会社島田組の委託を受けた公益財団法人大阪府文化財センターが、河内長野市教育委員会と共同で実施した。遺物整理及び本書の編集は河内長野市教育委員会の指導のもと公益財団法人大阪府文化財センターが行い、令和７年３月 31 日の本書刊行・送付、及び河内長野市教育委員会への全ての資料の移管をもって一連の事業を完了した。

3．契約名称・契約期間は以下のとおりである。

【契約名称】河内長野市高向・上原土地区画整理事業に伴う高向遺跡発掘調査

【契約期間】令和５年３月１日～令和７年３月 31 日

4．現地調査及び整理作業は以下の体制で実施した。

【河内長野市教育委員会】

〔令和４年度〕河内長野市教育委員会　文化財保護課課長補佐　太田宏明

〔令和５年度〕河内長野市立ふるさと歴史学習館館長　太田宏明

〔令和６年度〕河内長野市立ふるさと歴史学習館館長　太田宏明

【公益財団法人大阪府文化財センター】

〔令和４年度〕事務局次長　市本芳三、総務企画課長　亀井　聡

調査課長　岡戸哲紀、調査課長補佐　佐伯博光、副主査　福佐美智子

〔令和５年度〕事務局次長　亀井　聡、総務企画課長　島谷美穂

調査課長　佐伯博光、調査課長補佐　後藤信義、副主査　福佐美智子

〔令和６年度〕事務局次長　亀井　聡、総務企画課長　島谷美穂（～令和６年６月）

永野　仁（令和６年７月～）

調査課長　佐伯博光、調査課長補佐　後藤信義、副主査　福佐美智子

5．遺構の写真撮影は福佐が、遺物の写真撮影は写真室が行った。

6．整理作業の過程で、以下の委託分析を実施し、その結果を第５章に掲載した。

大型植物遺体同定分析　一般社団法人　文化財科学研究センター

7．発掘調査及び報告書の作成にあたっては、以下の諸機関よりご指導・ご協力を賜った。記して感謝の意を表したい。（敬称略）

冨島義幸（京都大学大学院　工学研究科教授）　西形達明（関西大学名誉教授・関西地盤環境研究センター）　三好孝一（公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所）

8．本書の執筆は第１章第１・２節、第２章を太田、第１章第３節・第３～４章を福佐、第５章を文化財科学研究センター、第６章第１節を福佐、第６章第２節を太田・福佐が担当した。編集は福佐が行った。

9．本調査に関わる遺物及び写真･実測図などの記録類は、全て河内長野市教育委員会が保管している。広く利用されることを希望する。

凡　　例

1．遺構及び断面図の標高は、東京湾平均海面（T.P.）を基準とする表示である。数値は全てメートル単位である。

2．調査ならびに本書における使用測地系は、世界測地系（測地成果 2011）に基づく平面直角座標系第Ⅵ系である。座標数値は全てメートル単位であるが、図中では単位を省略している。

3．本書に掲載した遺構実測図に付した北方位は全て座標北を示す。なお座標北は真北より西へ約０°14′、磁北より西へ約７°18′偏移する。

4．現地調査及び遺物整理は、財団法人大阪府文化財センター 2010『遺跡調査基本マニュアル』に準拠することを基本とし、適宜、河内長野市教育委員会と調整を諮りながら進めた。

5．地層及び土器の色調表示は、小山正忠・竹原秀雄編『新版　標準土色帖』2008 年版　農林水産省農林水産技術会議事務局　監修・財団法人日本色彩研究所　色票監修を用いた。

6．本書に用いる遺構番号は、遺構の種類に関わらず調査において検出した順に 1 から始まる通し番号を付し､番号の後に遺構種類を表記した。また建物などの複数の遺構集合体であるものについては、遺構種類名称の後に番号を表記した。この番号は通し番号とは異なる遺構ごとの番号となる。

7．遺構図の縮尺は、各図に即した比率とし各図にスケールを配置して明記する。

8．遺構図における断面位置は、平面図に「└ ┘」を記し、その位置を明示する。

9．柱痕跡もしくは柱抜取穴が認められた柱穴は、平面図中にその範囲をアミカケで示す。

10. 遺物実測図の縮尺は、四分の一を基本とし、一部八分の一とする。
遺物実測図は調整が変化する境を 1 点破線で、稜線を 2 点破線で表した。遺物実測図の断面は須恵器を黒塗り、瓦器・瓦質土器をアミカケとする。黒色土器は内・外面の黒化処理のされた面をアミカケとする。

11. 遺物番号は本文・挿図・図版全てに一致する通し番号である。

12. 地層の表記、出土遺物の器種名や記述においては、以下の文献を参考にした。

・那須孝悌・趙　哲済 2003「第 1 章地理・地質学と考古学　第 2 節地層の見方」『環境考古学マニュアル』同成社

・田辺昭三 1966『陶邑古窯址群Ⅰ』平安学園考古学クラブ

・宮崎泰史・藤永正明編 2006『年代のものさし－陶邑の須恵器－』大阪府立近つ飛鳥博物館図録 40 大阪府立近つ飛鳥博物館

・古代の土器研究会編 1993『古代の土器 1 都城の土器集成』古代の土器研究会

・古代の土器研究会編 1993『古代の土器 2 都城の土器集成』古代の土器研究会

・古代の土器研究会編 1994『古代の土器 3 都城の土器集成』古代の土器研究会

・中世土器研究会編 2022『新版　概説　中世の土器・陶磁器』真陽社

・尾谷雅彦 1994「第 5 章 天野山金剛寺寺出上の土釜埋納土器について」『 河内長野市遺跡調査会報Ⅷ　天野山金剛寺遺跡』 河内長野市遺跡調査会

・宮崎亮一編 2000『大宰府条坊跡 XV －陶磁器分類編－』太宰府市の文化財第 49 集太宰府市教育委員会

目　　次

挿　図　目　次

表　目　次

写　真　目　次

写真図版目次

図版 14
1．3－2区　全景（南から）
2．3－2区北端　全景（南から）
図版 15
1．4区　全景（南から）
2．4区北部　全景（左が北）
3．4区中央部　全景（左が北）
4．4区南部　全景（左が北）
図版 16
1．4区　713 石積み基礎　検出状況（北東から）
2．4区　713 石積み基礎　中位検出状況（北東から）
図版 17
1．4区　713 石積み基礎　A ライン断面（南西から）
2．4区　713 石積み基礎　B ライン断面（南西から）
3．4区　713 石積み基礎　C ライン断面（南西から）
4．4区　713 石積み基礎　D ライン断面（南西から）
5．4区　713 石積み基礎　石積み補強状況（南西から）
6．4区　713 石積み基礎　遺物出土状況（南から）
7．4区　713 石積み基礎　掘方遺物出土状況（南東から）
8．4区　713 石積み基礎　掘方遺物出土状況（南西から）
図版 18
1．4区　713 石積み基礎　石積み全景（北から）
2．4区　713 石積み基礎　完掘状況及び東壁断面（北から）
図版 19
1．4区　713 石積み基礎　石積み北端（北西から）
2．4区　713 石積み基礎　石積み北部（北西から）
3．4区　713 石積み基礎　石積み中部（北西から）
4．4区　713 石積み基礎　石積み北部背面（南西から）
図版 20
1．4区　810・812 石積み基礎　検出状況（北から）
2．4区　810 石積み基礎　石積み検出状況（北から）
3．4区　812 石積み基礎　石積み検出状況（西から）
図版 21
1．4区　810 石積み基礎　A ライン断面（南から）
2．4区　810 石積み基礎　B ライン断面（南から）
3．4区　810 石積み基礎　C ライン断面（南西から）
4．4区　812 石積み基礎　A ライン断面（東から）
5．4区　812 石積み基礎　B ライン断面（東から）
6．4区　810 石積み基礎　掘方遺物出土状況（西から）
7．4区　812 石積み基礎　掘方遺物出土状況（北から）
8．4区　812 石積み基礎　掘方遺物出土状況（北から）
図版 22
1．4区　810・812 石積み基礎　石積み全景（西から）
2．4区　810・812 石積み基礎　石積み全景（北西から）
図版 23
1．4区　810 石積み基礎　裏込め内石積み・石列（南から）
2．4区　810 石積み基礎　石積み前面（北西から）
3．4区　810 石積み基礎　石積み背面（東から）
4．4区　812 石積み基礎　石積み前面（北東から）
図版 24
1．4区　814 土釜埋納遺構　断面（北から）
2．4区　814 土釜埋納遺構　上部瓦質土器皿出土状況（北から）
3．4区　814 土釜埋納遺構　下部土師質土器皿出土状況（北から）
図版 25
1．4区　774 土坑（北西から）
2．4区　774・775・778・787・795 土坑（西から）
3．4区　714 溝（南から）

図版 26

1．4区　南部土坑・溝群（北西から）

2．4区　北部土坑群（西から）

図版 27

1．5区　全景（南西から）

2．5区　全景（北東から）

図版 28

1．５区　竪穴建物１・２、掘立柱建物 10　全景（右が北）

2．5区　竪穴建物１（南東から）

図版 29

1．5区　竪穴建物２（北から）

2．5区　竪穴建物２　989 炉（北から）

3．5区　竪穴建物２　炭化材・土器出土状況（南から）

4．5区　竪穴建物２　土器出土状況（西から）

5．5区　竪穴建物２周壁溝　土器出土状況（南から）

図版 30

1．6区　全景（南東から）

2．6区北半　全景（南西から）

図版 31

1．6区南半　全景（南東から）

2．6区北端　全景（南西から）

図版 32

1．6区　掘立柱建物 11　全景（東から）

2．掘立柱建物 11　1033 柱穴　断面（西から）

3．掘立柱建物 11　1037 柱穴　断面（東から）

4．掘立柱建物 11　1038 柱穴　断面（東から）

5．掘立柱建物 11　1038 柱穴　遺物出土状況（東から）

図版 33

1．6区　1020 土坑　断面（南西から）

2．6区　1020 土坑　炭検出状況（南西から）

3．6区　1069 ～ 1071・1073・1074・1076 ～ 1080 溝　全景（南東から）

図版 34　出土遺物

図版 35　出土遺物

図版 36　出土遺物

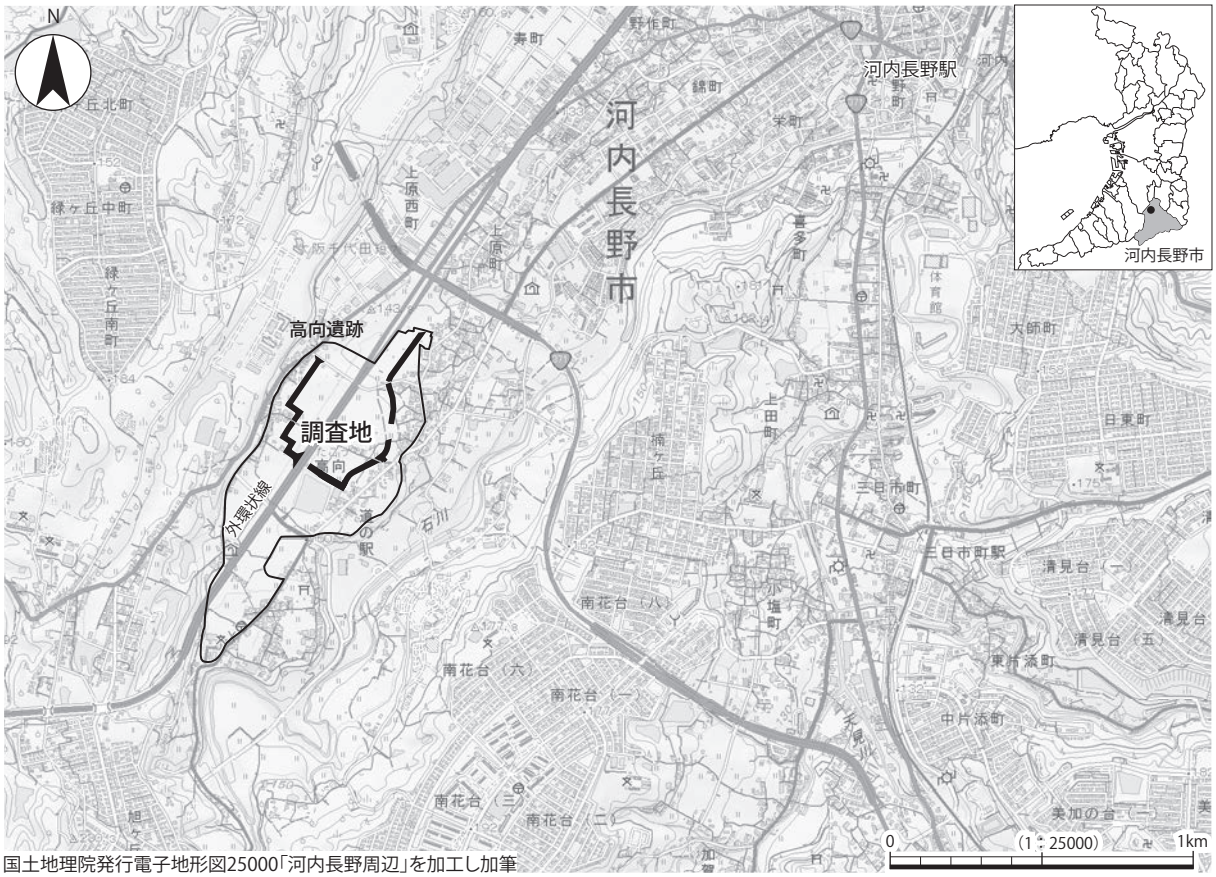
図版 37　出土遺物

第１章　調査に至る経緯と経過

第１節　調査に至る経緯

今回の調査は、河内長野市高向・上原土地区画整理事業に先立ち、区画道路の建設予定地を対象として実施した（図１）。対象地域は周知の埋蔵文化財包蔵地である高向遺跡（遺跡番号 27216-23）にあたる。遺跡は、旧石器時代から中世にかけての集落遺跡で、これまでにも古代の建物跡、溝、中世の建物跡、墓などが検出されていた。河内長野市教育委員会では、事業に先立って、地下遺構の状況を把握するために、令和２年 12 月８日から令和３年１月８日にかけて試掘・確認調査を行った。その結果、道路建設予定地の大部分に遺構が広がっていることを確認した。これにより、記録保存のための発掘調査が必要であると判断された。

これを受けて、開発事業主である河内長野市高向･上原土地区画整理組合（以下「組合」という）は、令和５年１月 23 日付けで文化財保護法 93 条に基づく届出を行うとともに本市へ発掘調査を依頼した。また、事前協議及び調整会議を重ねる中、本件の調査規模はもとより本市における当時の調査体制では発掘調査の実施が困難と判断し、大阪府教育委員会教育長に調査の協力を依頼した。結果、公益財団法人大阪府文化財センター（以下「センター」という）が協力する旨、回答を得た。そこで当該調査の実施に関して、必要な事項を定め、適正かつ円滑な発掘調査をはかることを目的とした協定書の作成に着手した。その後、同年２月 13 日付けで河内長野市高向・上原土地区画整理事業に伴う高向遺跡の埋蔵



国土地理院発行電子地形図25000「河内長野周辺」を加工し加筆

図１　調査位置

文化財発掘調査について、河内長野市教育委員会、組合、株式会社島田組、センターの間で協定の締結を行った。

現地調査は令和５年３月１日から開始した。

第２節　既往の調査

高向遺跡は昭和 51 年度に財団法人大阪文化財センターが実施した大阪外環状線内を対象とした遺跡の分布調査によって発見された遺跡である（図２）。

その後、財団法人大阪府埋蔵文化財協会が範囲確認調査を経て昭和 62 年から昭和 63 年にかけて発

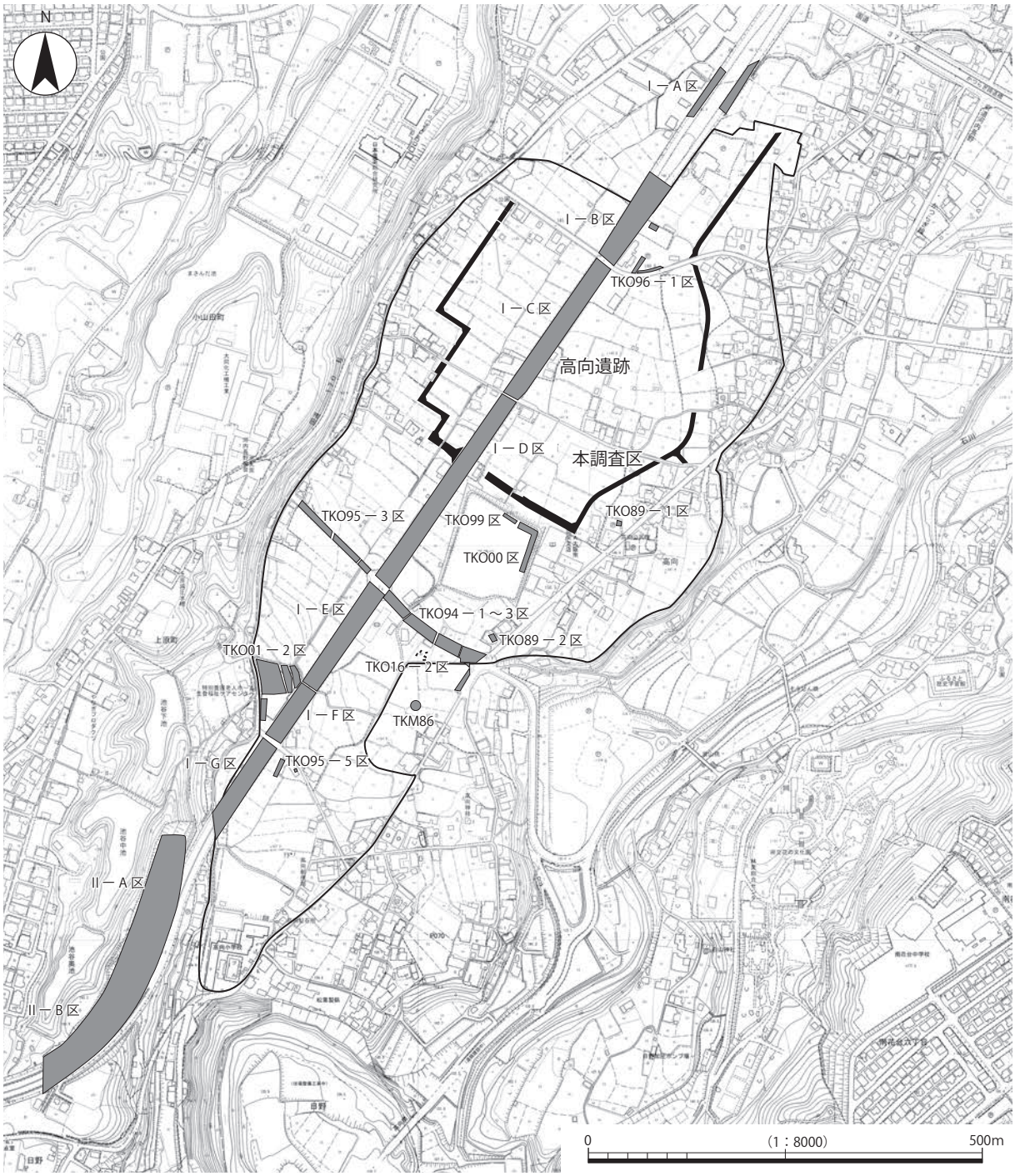


図２　既往調査位置

掘調査を行った（Ⅰ－Ｂ～Ｇ区、Ⅱ－Ａ・Ｂ区）。調査の結果、遺跡が旧石器時代から中世に続く複合遺跡であることが明らかになり、古代の掘立柱建物、溝、中世の掘立柱建物、井戸、墓などが検出された他、特徴的な遺物として古代のフイゴの羽口、鉄滓、製塩土器、中世の曲げ物などが出土した。

昭和 64 年には高向公民館防火水槽の設置（TKO89 －１区）と個人住宅の建設（TKO89 －２区）に伴い遺跡の南部で発掘調査を実施した。この結果、奈良時代の掘立柱建物、溝などが検出された。

平成６年には、府道河内長野かつらぎ線の道路改良工事などに伴って遺跡南部の発掘調査が行われ、古代から中世にかけての掘立柱建物、溝、土坑、窯状遺構などが検出された（TKO94 －１～３区）。

平成７年には、個人住宅の建設に伴い調査を行い中世の溝などが検出された（TKO95 －５区）。また、丹保池２号線整備事業に伴う遺跡南部の調査で古代から中世にかけての土坑、溝、暗渠を検出した（TKO95 －３区）。

平成 10 年から平成 12 年にかけては、丹保池の堤体の改修工事に伴う調査が行われ、古代のピット、柱穴などが検出された（TKO99 区、TKO00 区）。

平成 29 年には個人住宅の建設に伴って遺跡南部で調査を行い、土坑、ピットが検出された（TKO16 －２区）。

以上これまでの調査によって、丹保池周辺を中心とする遺跡南部で主に古代の遺構・遺物が検出され建物が集合しており、遺跡の北部では主に中世の遺構・遺物が検出され、建物が分散していることが明らかになっている。

第３節　調査の経過

現地調査は令和５年３月１日から令和６年５月２日まで実施した。調査区は、１～６区に分け、３区のみ３－１区・３－２区に分割し、１区から順に調査を行った。調査にあたり、調査予定地内を横断する道路や水路について河内長野市教育員会から道路はすべて調査対象地から除外し、水路については継続利用されるものは保全に必要な範囲を含め除外することとの指示を受けた。総調査面積は 7272㎡となった。各調査区の調査期間は表１のとおりである。

調査は、令和５年３月２日より近現代から近世の耕作土層をバックホウによって除去し、それ以下から人力により堆積土の掘削後に遺構の検出、検出した遺構の調査を進めた（写真１・２）。各遺構面から検出された遺構は、遺構平面図・遺物出土状況図・断面図を必要に応じて作成した。出土遺物は現地

表１　現地調査期間一覧

調査区	機械掘削	人力掘削	空中写真撮影	埋戻し
１区	令和５年３月２日～３月 22 日、 ５月 17・18・23 日	令和５年３月２日～５月 23 日	令和５年５月 11 日	令和５年５月 17 日～５月 27 日
２区	令和５年４月６日～５月 16 日	令和５年４月 21 日～６月 13 日	令和５年６月７日	令和５年６月 14 日～６月 21 日
３－１区	令和５年６月８日～６月 21 日	令和５年６月 13 日～７月７日	令和５年７月５日	令和５年７月 11 日～７月 18 日
３－２区	令和５年６月 23 日～７月 21 日	令和５年６月 29 日～８月 28 日	令和５年８月 23 日	令和５年８月 30 日～９月５日
４区	令和３年７月 25 日～８月 29 日、 ９月７日～９月 21 日	令和５年８月８日～ 10 月 27 日、 11 月７日～ 12 月７日	令和５年 10 月 19 日	令和５年 10 月 30 日～ 11 月１日、 12 月１日～ 12 月８日
５区	令和５年 10 月３日～ 11 月６日	令和５年 10 月 27 日～ 11 月７日、 12 月５日～ 12 月 26 日、1 月 15 日～ 1 月 23 日	令和６年１月 17 日	令和６年１月 22 日～２月 14 日
６区	令和５年 12 月 15 日～ 令和６年１月 26 日 令和６年３月 28 日～４月 16 日	令和５年 12 月 25 日～令和６年１月 12 日、 1 月 24 日～２月 29 日 令和６年４月１日～４月 22 日	令和６年２月８日、2 月 28 日 令和６年４月 22 日	令和６年２月 15 日～３月 15 日 令和６年４月 28 日～５月２日

写真１　機械掘削

写真２　遺構調査

写真３　第１回現地公開（１）

写真４　第１回現地公開（２）

写真５　第２回現地公開（１）

写真６　第２回現地公開（２）

にて順次洗浄作業、注記作業を行った後に台帳を作成した。現地調査中には２回の現地見学会を開催した。同年５月 13 日に１区の掘立柱建物群を中心とした調査状況や出土した遺物を公開し、説明を行った。参加者は 132 名である（写真３・４）。同年 10 月 25 日に４区の石積み基礎を中心とした遺構の検出状況や出土した遺物の見学を行った。参加者は 86 名である（写真５・６）。その他に河内長野市立天野小学校や高向小学校、市内中学校の生徒の方々の現場見学や発掘体験を行った。

現地調査終了後、令和６年５月１日から整理作業を開始した。整理作業は、遺物の接合･復元を行い、その後に実測可能な遺物を全て抽出し遺物実測を行った。実測遺物の中から写真図版に掲載する遺物を選別し､写真撮影を行った｡現地調査で撮影した写真は台帳を作成した｡遺構図は図面整理作業を行った。その後遺構・遺物挿図、写真図版を作成し、原稿執筆作業を行い、これらを本報告書に掲載した。令和６年 12 月 27 日に作業を終了し、令和７年３月に報告書の印刷・製本・送付を行った。

【参考文献】

財団法人大阪府埋蔵文化財協会 1989『高向遺跡』

河内長野市教育委員会 1990『河内長野市埋蔵文化財調査報告書Ⅳ』

河内長野市遺跡調査会 1992『河内長野市遺跡調査会報Ⅲ』

河内長野市遺跡調査会 1996『高向遺跡』

河内長野市遺跡調査会 1997『河内長野市遺跡調査会報 17』

河内長野市教育委員会 1999『河内長野市埋蔵文化財調査報告書 15』

大阪府教育委員会 2000『高向遺跡発掘調査概要』

大阪府教育委員会 2001『高向遺跡発掘調査概要Ⅱ』

河内長野市教育委員会 2018『河内長野市埋蔵文化財調査報告書 39』

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　位置と地理的環境

高向遺跡が位置する河内長野市は、大阪府の東南端にあり、奈良県、和歌山県に接している（図１）。市域の面積は 109.63k㎡で、大阪府内では、大阪市、堺市に続き３番目に広い市域を有するが、７割が森林（大部分は人工林）であり、住宅地、耕作地の割合は相対的に少ない。

市域の地形をみると、東部には金剛山地が、南部には岩湧山を始めとする和泉山脈が連なり、中央部には加賀田丘陵が、西部には小山田丘陵が広がっている。そして、それらの間を流れる石見川、天見川、加賀田川、石川、西除川（天野川）の５つの河川に沿って主要な谷と河岸段丘が形成されている。古くからの居住地と耕作地の大部分は、これらの谷や河岸段丘上に位置し、それぞれ独自の歴史と文化が存在する。一方で丘陵上には昭和から平成にかけて開発された団地が広がっている。

地質は、東部にある金剛山地が領家花崗岩類からなり、南部にある和泉山脈脊梁部に和泉層群が分布し、山麓部では泉南層群と、金剛山地から続く領家花崗岩類が見られる（図３）。なお、領家花崗岩類は地表で見られない地域でも市内全域の地下深くに広がっており、丘陵部ではその上位に大阪層群が重なっている。そして、河岸段丘は、上記全てより新しい時代の地層で構成されている。

高向遺跡が位置するのは、市域の中央を流れる石川に沿って形成された河岸中位段丘である。

第２節　歴史的環境

当該遺跡が位置する河内長野市域は可耕地が少ない一方で、豊かな森林資源があり平野部とは異なる歴史の発展をみることができる。また、旧国の大和、紀伊、和泉が河内と境界を接し、各地からの街道が交わるため交通の要衝ともなり、この点も市域の歴史文化に影響を与えた（図４）。

旧石器時代から古墳時代

旧石器時代～縄文時代にかけての遺跡数は、大阪府内のほかの市町村よりも多く、これは、市域の地形が当時の生業に合っていたことによるものと考えられる。

弥生時代では大阪平野部におくれて中期以降に集落が発展する。大型の集落で遺跡の状況が比較的明らかになっているものとして、石見川沿いにある三日市北遺跡がある。三日市北遺跡では、竪穴住居跡 38 棟が検出されており、中河内地域の生駒山西麓産土器が多量に搬入されている状況が確認されている。また、このような様相が見られる遺跡は南河内では石川水系流域沿いに多く、本市に接する和歌山県北部でも見られる。平安時代から利用された高野街道に近いルートで和歌山県へ至る道がすでに成立し、交易のための物流ルートとなっていたことをうかがわせる。

古墳時代前期には、首長墓であり、全長 52 mの前方後円墳である大師山古墳が出現する。集落遺跡では、前期の三日市北遺跡、中期の三日市遺跡がある。後期になると三日市遺跡が継続して営まれるほか、周辺へも居住域が拡大し、新たに小塩遺跡などが市内南部の加賀田川流域の中位・高位段丘上に出現する。

古代

古代には、本市域は河内国錦部郡の一部となるが、市域に集落遺跡は少なく、小塩遺跡など、古墳時

代後期に出現した集落が古代においても断続的に営まれる。このほか、新たに、石川流域で高向遺跡などが形成される。飛鳥～奈良時代の寺院が数多く営まれる南河内地域にあって、この時期の寺院が確認されていないのも本市の特色を示している。なお、高向遺跡は、飛鳥時代に学者・政治家として活躍した高向玄理の出身地とされている。

中世

中世には、一転して市内の遺跡は急増し、市内の大部分の遺跡で何らかの人々の暮らしの跡が見つかっている。このことは、土木技術の向上により河岸段丘面の耕地化が進んだことに加え、高野詣が河内を通るルートが主に行われるようになり、市域を経由した大坂、京、堺と高野山を結ぶ交通・流通が活発化したことに起因していると考えられる。また、当時、市域には藤原氏系の荘園である法成寺領の長野庄が置かれることとなった。また、発掘調査によって三日市遺跡、尾崎遺跡、上原北遺跡、向野遺跡、寺元遺跡、大日寺遺跡では当時の村の跡が見つかっている。

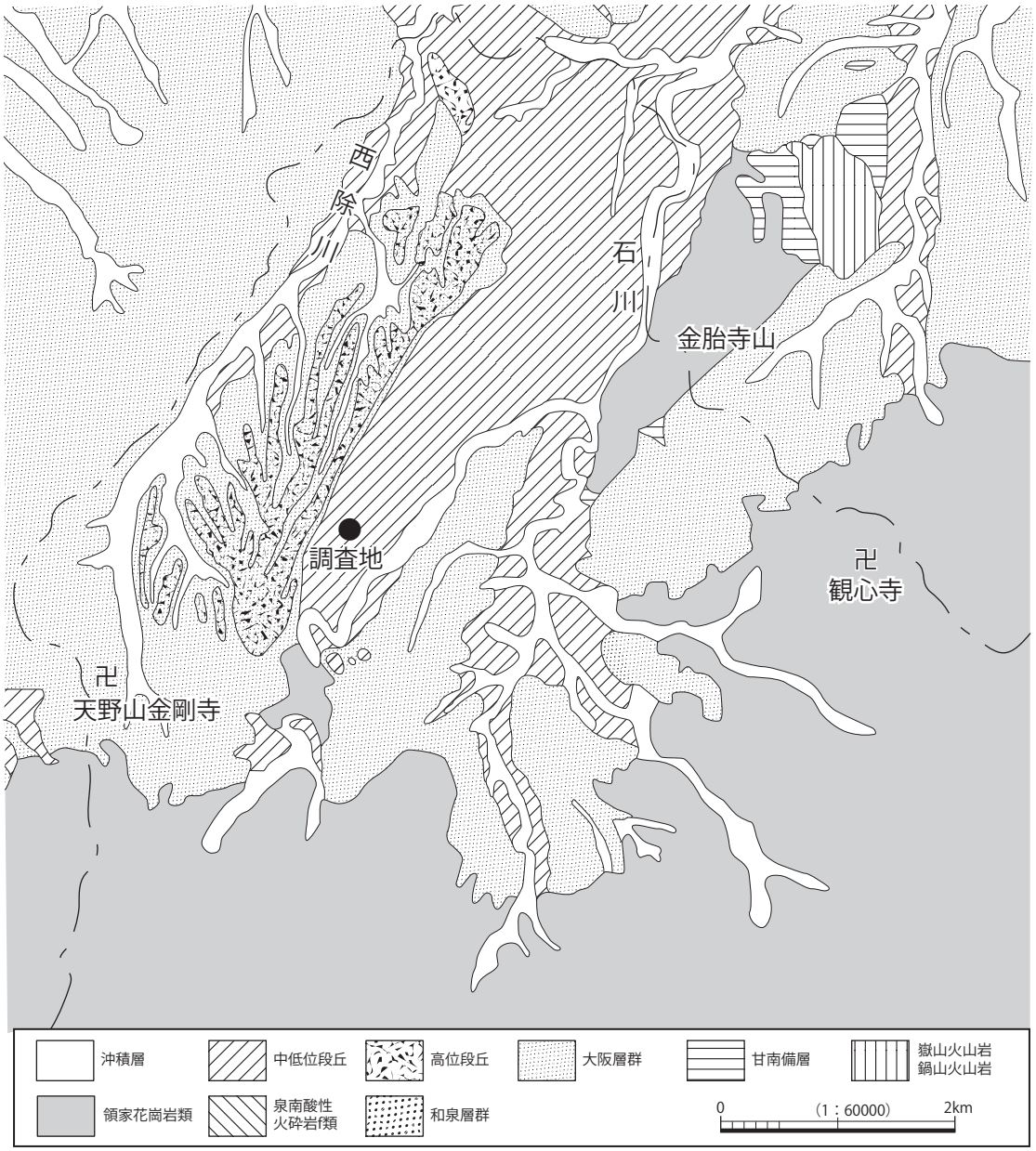


図３　河内長野市域地質


高向遺跡
長野北
上原北遺跡
三日市遺跡
三日市北遺跡
大師山古墳
大師山遺跡
高幡子形城跡
高幡子形古墳
高幡子形六幡神社
向野遺跡
寺元遺跡
観心寺遺跡
観心寺
全昌寺川
長地窯跡群
上原窯跡
上原遺跡
上原中遺跡
上原東遺跡
上原近世瓦窯
上原古墳
塚穴古墳
長野神社遺跡
長野遺跡
長野東遺跡
長野西遺跡
長野中遺跡
長野南遺跡
長野町遺跡
長野町東遺跡
長野町北遺跡
長野町西遺跡
長野作遺跡
長野神社遺跡
長野窯跡
長野古墳
長野城遺跡
長野寺遺跡
長野寺城遺跡
長野寺古墳
長野寺窯

寺社では、多くの子院（付属寺院）を従える真言宗系の一山寺院が成立した。このような一山寺院として、川上地区に大宝元（701）年創建の寺伝がある観心寺が、天野地区に奈良時代創建の寺伝がある金剛寺がある。観心寺、金剛寺は創建の後に高野山の僧侶によって、整備されたものであり、市内東部にある石見川流域と市内西部にある西除川流域を寺辺領として支配し、京の都や高野山、根来寺とも関係をもち、中世末期には隆盛を極めた。両寺には、戦国時代の全盛期の様子を描いたといわれる絵図が残っており、伽藍を中心に多くの子院を従えた都市的な景観が描かれている。これらの子院の一部については、発掘調査が行われており、子院の様子を示す地下遺構に加えて多くの遺物が出土している。両寺院には、多くの中世の歴史文化遺産が伝わっている。これらの歴史文化遺産は、市域で保有されている指定文化財の多くを占めており、その種類も建造物、彫刻、絵画、工芸品、古文書、典籍、祭礼など幅広い分野にわたっている。

このほか、天見地区には石清水八幡宮の所領である甲斐庄山郷が置かれ、そこから勧請された八幡神社が成立するなど、各地区にはそれぞれ特色ある歴史が展開した。

中世における本市域は治承・寿永の内乱期、南北朝期、戦国期の３時期にわたって戦乱の舞台となった。治承・寿永の内乱期には、平家方として戦い、砺波山 (となみやま) の戦いで討ち死した源貞弘が、市域の長野庄を本拠地とする武士として知られている。南北朝内乱期には、南朝の勢力圏となり楠木正成の活躍の舞台ともなった。このため、古戦場跡、中世城郭跡、中世居館跡も多く残っている。これらには、曲輪・土塁、横堀が良好な状態で遺存する史跡烏帽子形城跡をはじめとして、石仏城、旗蔵城でも城郭の遺構が確認できている。これらは、千早赤阪村や富田林市にある中世城郭群と合わせて使用されていたと考えられる。

近世・近代

近世に入ると市域は、天領、旗本領や近江膳所藩、和泉陶器藩、河内狭山藩などの飛地領が置かれ、中世に続き市域が政治的に一体化することはなかった。市域には、38 の村が置かれ、各村では鎮守や村堂を中心に民家、田畑、墓地、小路などが展開する現代にもつながる里山集落の風景が形成された。これらの村落の一部では当時の景観を描いた村絵図が残っており、現代でも近世と変わらない土地利用の状況が見られる地区も存在する。

中世に全盛期を迎えた観心寺、金剛寺は寺領が縮小し、境内の堂宇や子院も減少した。なお、本市に拠点を置いた藩は当初存在しなかったものの、膳所藩から分封した河内西代藩 (1732 年以降は、転封により神戸藩) が延宝７（1679）年から享保 17（1732）年にかけて存在した。延宝７（1679）年に刊行された『河内鑑名所記』や享和元（1801）年に刊行された『河内名所図会』、あるいは嘉永６（1853）年に刊行された『西国三十三所名所図会』には中世に発展した本市の寺社が多く描かれており、観光地として栄えた本市域の様子を伝えている。

近世には高野詣が民衆へも浸透し、本市には高野街道三日市宿が置かれた。三日市宿は、高野詣の中継地として栄え、多くの旅籠で賑わいをみせていたことが知られており、現在でも、旅籠を踏襲した建物が残っているほか、この時期に設置された里程石、道標、石灯籠などが沿道に残り、宿場町の運営に関係する村方文書も残っている。なお、近世の市域の様子については、『河内名所図会』、寺院の境内図、村絵図などの絵図によって詳細を知ることができる。

第３章　調査・整理の方法

発掘調査は、財団法人大阪府文化財センター『遺跡調査基本マニュアル』（以下、「マニュアル」とする）に準拠し、機械掘削、人力掘削の順で実施した。機械掘削は 0.45㎥級のバックホウを使用し、現代の盛土や近世以降の耕作土層を掘削対象とした。中世以前の耕作土層や遺物包含層の掘削、遺構検出、遺構埋土の掘削は人力で行った。人力掘削の過程においては遺構面の測量、調査区・遺構断面などの実測、遺構面や遺構などの写真撮影を随時行った。調査に際しては随時、河内長野市教育委員会文化課に指示を仰ぎ、各調査区ごとに調査完了時には立会を受け進捗状況や成果の報告を行った。

測量は株式会社島田組測量部が担当し、トータルステーションを用いたデジタル測量を主とし、一部デジタルカメラで撮影した写真を基に SFM を用いて 3D モデルを作成し、平面直角座標系Ⅵ系に基づいた座標値と縮尺を付与したオルソ画像に変換し、適宜トレースを行った。

写真は主にニコン社製のデジタル一眼レフカメラ D5300（APS － C）を使用し、全景写真は６×７白黒フィルムも使用した。デジタルカメラにおける写真データの保存型式は RAW と JPEG の二種類とした。撮影にあたっては、当センター所定のラベルに調査名・撮影内容・撮影方向・撮影日時・撮影者を記載し、写し込みを行った。各調査区の全景写真はラジコンヘリコプターを用いた空中写真撮影を行った。

出土遺物に対しては遺跡名・調査区・地区割・層名・遺構名・出土年月日・登録番号を記した河内長野市教育委員会所定のマイラーベースのラベルを添付し、遺構、包含層ごとに適宜取り上げた。

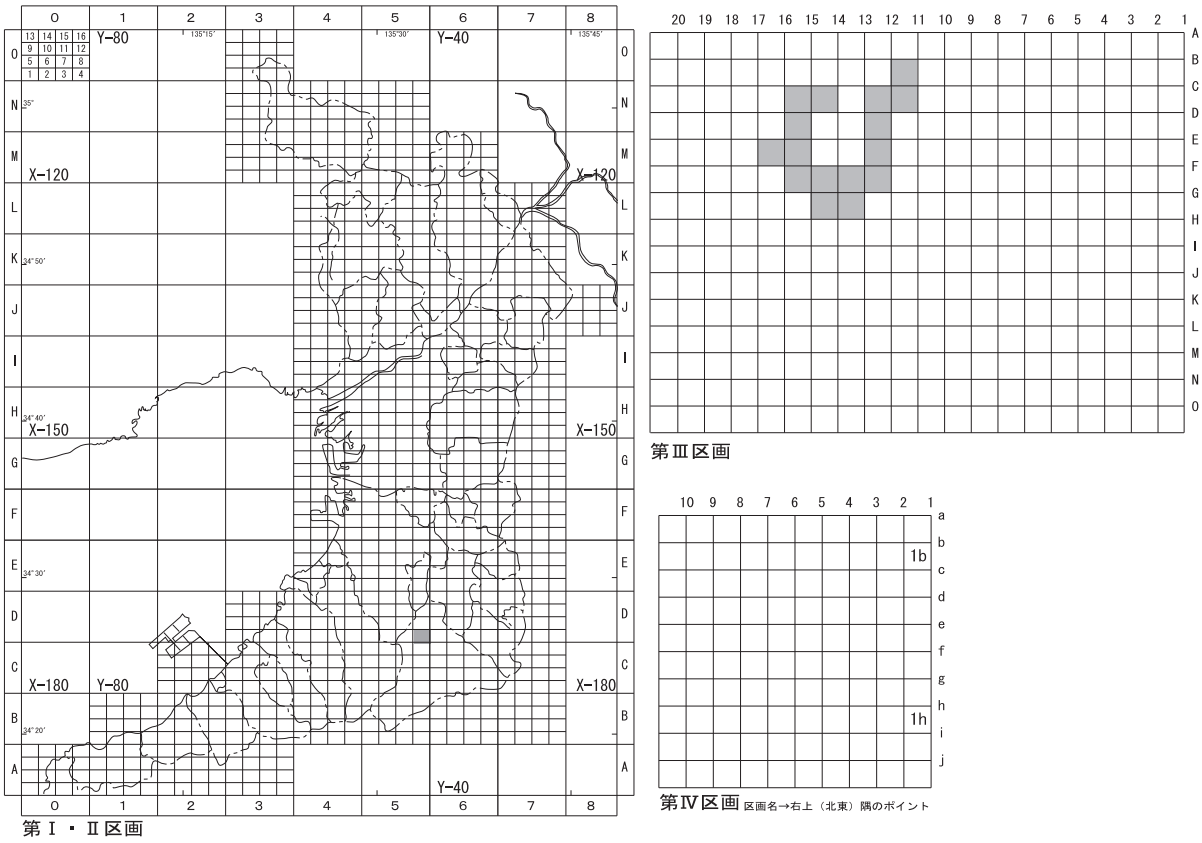


図５　調査区

測量や遺物の取り上げの基本となる地区割は、世界測地系に準拠する平面直角座標系第Ⅵ系を基準とし、大阪府全域を共通の方式で位置を示すことができるように大小４段階の区画を設定した（図５）。第Ⅰ区画は大阪府南西端Ｘ＝－ 192,000、Ｙ＝－ 88,000 を基準とし、縦６km、横８km ごとの基準線で区画し、縦軸をＡ～ Ｏ、横軸を０～８で表示したものである。第Ⅱ区画は第Ⅰ区画を縦 1.5km、横 2.0km でそれぞれ区分し、計 16 区画を設定し、南西端を１、南東端を４として北東端を 16 とする。第Ⅲ区画は第Ⅱ区画を 100m 単位で縦 15、横 20 に区画したもので、北東端を起点に縦軸がＡ～ Ｏ、横軸が１～ 20 となる。第Ⅳ区画は第Ⅲ区画を 10m 単位で縦、横各 10 区画したもので、縦軸がａ～ ｊ、横軸が１～ 10 となる。本調査においては第Ⅳ区画を最小区画とした（図６）。今回の調査区の第Ⅰ区画は「Ｄ ５」、第Ⅱ区画は「４」、第Ⅲ区画は「11Ｂ～ 16Ｅ」の 16 区画に分かれる。遺物取り上げラベルや台帳には、第Ⅲ・Ⅳ区画のみとし「14Ｃ－９ｂ」のように記入した。

出土遺物は調査現場において洗浄し、乾燥後に注記を行った。注記は「N- 登録番号」とした。この

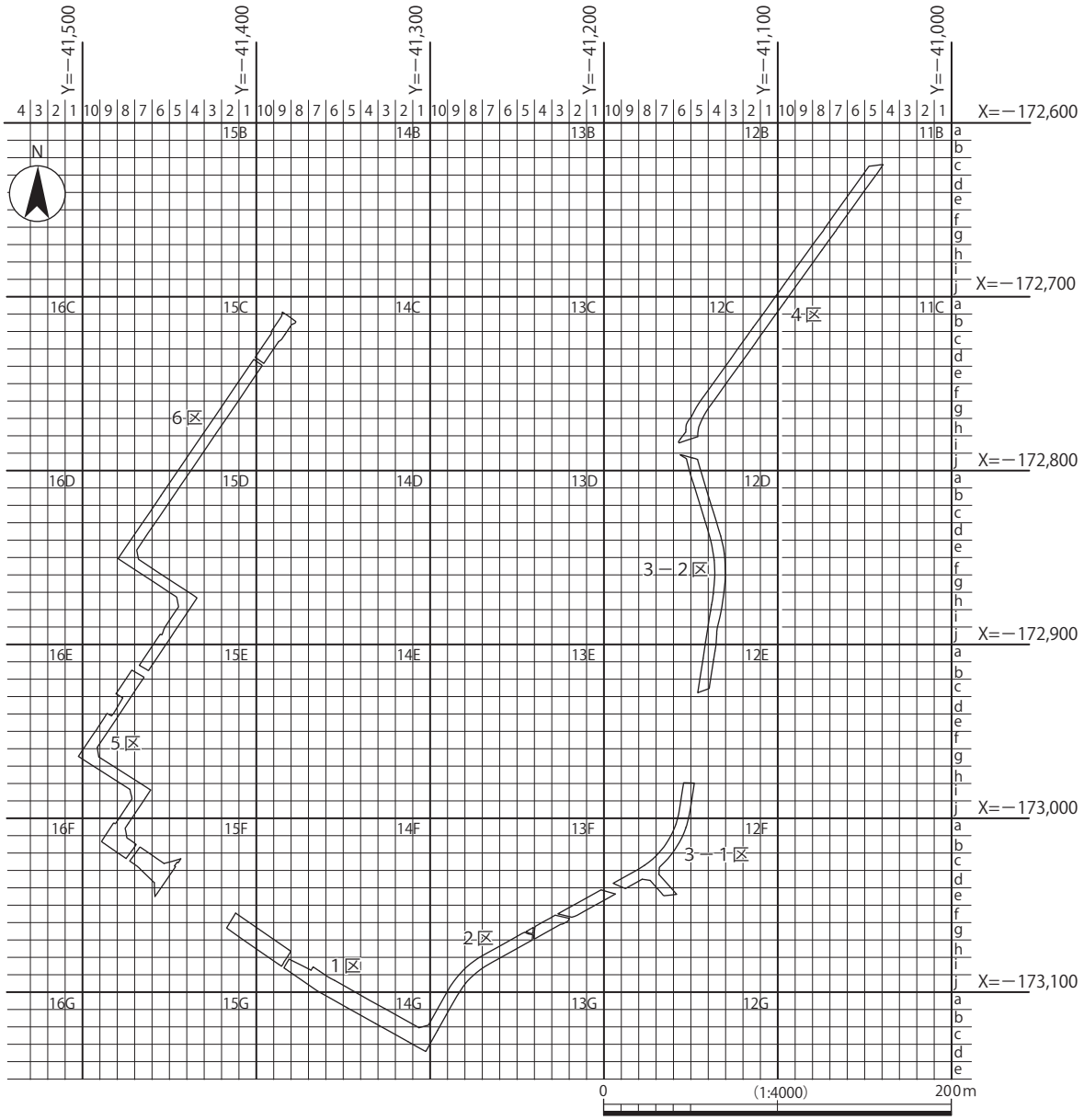


図６　地区割

登録番号は河内長野市内で行われた調査の全ての通し番号である。洗浄・注記終了後は遺構や遺物包含層毎に出土した遺物の接合や必要に応じて復元を行い、遺物の種類や器種・時期を検討し実測可能な遺物を抽出した。実測対象となった遺物は計 285 点である。それ以外の遺物は登録番号ごとに袋に詰め、未掲載遺物としてコンテナへ収納した。

遺物実測は方眼紙に原寸で作成し、その図をスキャナ及びアドビ社の PhotoshopCS6 を用いてデジタルデータ化し、IllustratorCS6 を用いて実測図面の浄書を行い、それぞれの調査区の遺構・包含層ごとに報告書に掲載する遺物挿図の版下を作成した。調査現場において作成した測量データは IllustratorCS6 を用いて校正・編集を行い、報告書掲載用の遺構挿図を作成した。

調査現場で撮影した写真のうちデジタルデータは空中写真とその他の写真に分けて保存し、６×７白黒フィルムは現像後、所定のアルバムに収納した。報告書の写真図版に掲載する遺構については、デジタルカメラで撮影した写真の RAW データを現像し、TIFF データを生成した。遺物については新たに撮影を行った。写真のデジタルデータ化・遺物撮影は、当センター写真室にて行った。写真台帳は調査現場においてデジタルカメラで撮影した画像に加え、写し込みラベルの情報、前述した各フィルムの収納情報を記入した。報告書の写真図版に掲載した写真は図版番号を記入した。

出土遺物は登録台帳、実測遺物については実測遺物台帳を作成した。台帳は Microsoft 社の Excel を使用し、調査区・地区割等の遺物取り上げラベルに記した情報や遺物の種別、収納したコンテナ番号を入力し、実測遺物台帳は登録台帳の情報に加えて、遺物の器形・残存率・口径・器高・色調・胎土、報告書に掲載した遺物番号・写真図版番号を入力した。

報告書に掲載した遺物は未掲載遺物とは別に掲載遺物用コンテナに収納し、掲載・未掲載遺物コンテナのそれぞれにコンテナ番号を付けた。報告書掲載遺物コンテナには挿図番号・遺物番号を記したラベル、未掲載遺物は登録番号を記したラベルを貼り付けた。

これらの作業と並行してアドビ社の InDesignCS6 を用い報告書の原稿を執筆し、遺構・遺物挿図の編集を行った。

第４章　調査成果

第１節　基本層序

調査地全体の地層は、第１層から第５層に大別される。古代以降は氾濫などによる土砂の供給が認められず、中世から現代にいたる耕作に伴って古土壌が削平や攪拌を受けていた状況である。第１～４層は概ね調査区全体に堆積し、第５層は一部に分布する。調査では第１・２層を重機により掘削除去し、第３層以下の層からは人力により掘削を行った。

調査地は南北 580 m、東西 300 mの広範囲のため、調査区間で標高差が認められる。特に１区から４区、５区から６区への南北方向の傾斜が顕著である。現地表面の標高は１区南端が T.P. ＋ 148.9 m、４区北端が T.P. ＋ 141.2 mを測り、１～４区間の 580 mで 7.7 m低くなる。また５区の南端は T.P. ＋ 149.4 m、６区北端は T.P. ＋ 145.8 mで両区間も 300 mで 3.6 m傾斜する。この調査地南北方向の傾斜に対して、東西方向は緩く、５区西端は T.P. ＋ 149.3 m、１区東端は T.P. ＋ 148.9 mでわずかに東に低くなる。

この南から北へと下る地形に沿って現代の耕地区画が雛壇状に造成されている。それぞれの耕地区画内の南端は近現代の耕作によりかなり削平されている。そのため、重機で近現代耕作土層を掘削除去すると基盤層が露出する箇所も見られ、北側にいくにつれ第３・４層が厚く堆積する。またくぼみや谷状地形を呈する箇所では第５層が分布する。

１・２区（図７・8、図版２）

第１層:近現代耕作土　全域に分布し２層に細分され、第１－１層は灰黄褐色や暗オリーブ褐色･オリーブ黒色の粗砂から極粗砂混じりシルト質砂である。層厚は 0.1 ～ 0.2 m。

第１－２層はオリーブ褐色粗砂から極粗砂混じりシルト質砂で第１－１層より砂粒を多く含む。最大層厚は 0.1 m。

第２層：近現代耕作土　２区中央から北端にかけて分布する。２区中央では褐色粗砂から極粗砂混じり砂質シルトで南方では粗粒化し南端ではオリーブ褐色粗砂混じりシルト質砂である。最大層厚は 0.1 m。

第３層：中世耕作土　調査区南端以外に分布し、オリーブ褐色や暗灰黄色粗砂から極粗砂混じりシルト質砂で細礫を含む。最大層厚は 0.2 m。古代から中世の陶磁器、瓦器、瓦質土器、土師質土器、須恵器、土師器や石器、サヌカイト剥片を包含する。

第４層：中世耕作土　オリーブ褐色中砂から粗砂混じり砂質シルトで第３層より細粒である。最大層厚は 0.2 m。古代から中世の瓦器、瓦質土器、土師質土器、須恵器、土師器やサヌカイト剥片を包含する。

第５層：古土壌　１区西側と２区北側に分布し、１区西側は黒褐色粗砂混じり粘土質シルト、２区北側は暗褐色中砂から極粗砂混じり砂質シルトである。２区北端に近づくにつれ極粗砂が多く混じり、細礫を含む。最大層厚は 0.2 m。古代の須恵器、土師器を包含する。

3―１区（図９、図版３）

第１層：近現代耕作土　全域に分布し２層に細分される。第１－１層は灰黄褐色粗砂混じりシルト質砂である。層厚は 0.15 ～ 0.3 m。

第１－２層はオリーブ褐色粗砂から極粗砂混じりシルト質砂である。層厚は 0.05 ～ 0.3 m。

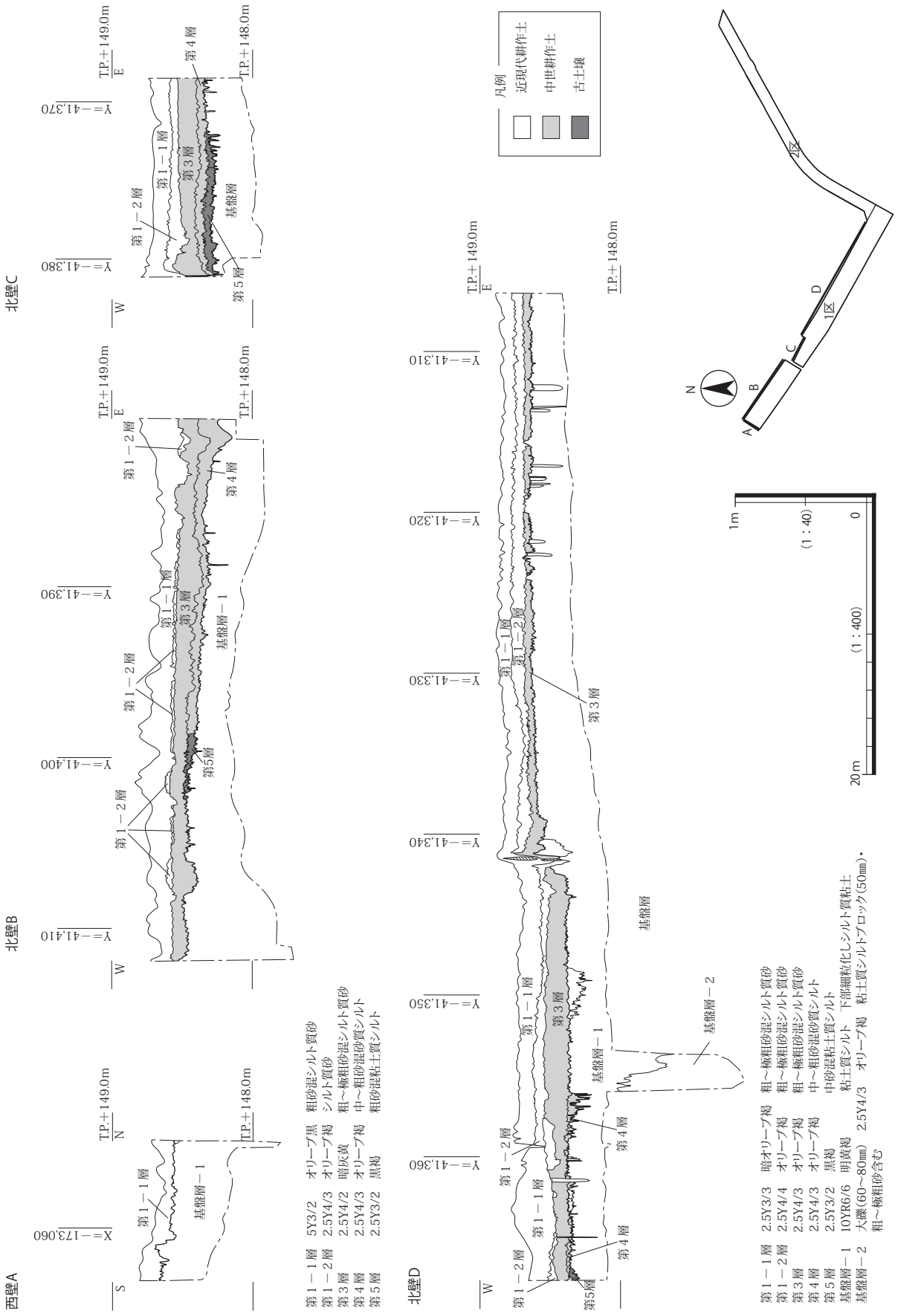

西壁A
北壁B
北壁C
北壁D
凡例
近現代耕作土
中世耕作土
古土壤
第1－1層　5Y3/2　オリーブ黒　粗砂混シルト質砂
第1－2層　2.5Y4/3　オリーブ褐　シルト質砂
第3層　2.5Y4/2　暗灰黄　粗～極粗砂混シルト質砂
第4層　2.5Y4/3　オリーブ褐　中～粗砂混砂質シルト
第5層　2.5Y3/2　黒褐　粗砂混粘土質シルト
第1－1層　2.5Y3/3　暗オリーブ褐　粗～極粗砂混シルト質砂
第1－2層　2.5Y4/4　オリーブ褐　粗～極粗砂混シルト質砂
第3層　2.5Y4/3　オリーブ褐　粗～極粗砂混シルト質砂
第4層　2.5Y4/3　オリーブ褐　中～粗砂混砂質シルト
第5層　2.5Y3/2　黒褐　中砂混粘土質シルト
基盤層－1　10YR6/6　明黄褐　粘土質シルト　下部細粒化しシルト質粘土
基盤層－2　大礫(60～80mm)　2.5Y4/3　オリーブ褐　粘土質シルトブロック(50mm)・粗～極粗砂含む
1区
2区
(1：400)
(1：40)

図7　1区　北・西壁断面


西壁A
西壁B
西壁C
西壁D
1区
2区
N
A
B
C
D
X=−173.120
X=−173.110
X=−173.100
X=−173.090
X=−173.080
X=−173.070
X=−173.060
X=−173.050
T.P.＋149.0m
T.P.＋148.0m
T.P.＋147.0m
T.P.＋146.0m
第1−1層
第1−2層
第2層
第3層
第4層
第5層
基盤層
448溝
449溝
攪乱
凡例
近現代耕作土
中世耕作土
古土壌
1m
(1：40)
(1：400)
20m
0
第1−1層　10YR4/2　灰黄褐　シルト質砂　粗砂含む
第1−2層　2.5Y4/3　オリーブ褐　シルト質砂
第2層　10YR4/4　褐　粗〜極粗砂混砂質シルト
第3層　2.5Y4/3　オリーブ褐　中〜粗砂混シルト質砂　細礫含む
第4層　2.5Y4/3　オリーブ褐　中〜粗砂混砂質シルト
第5層　10YR3/4　暗褐　粗〜極粗砂混砂質シルト　細礫含む

図8　2区　西壁断面

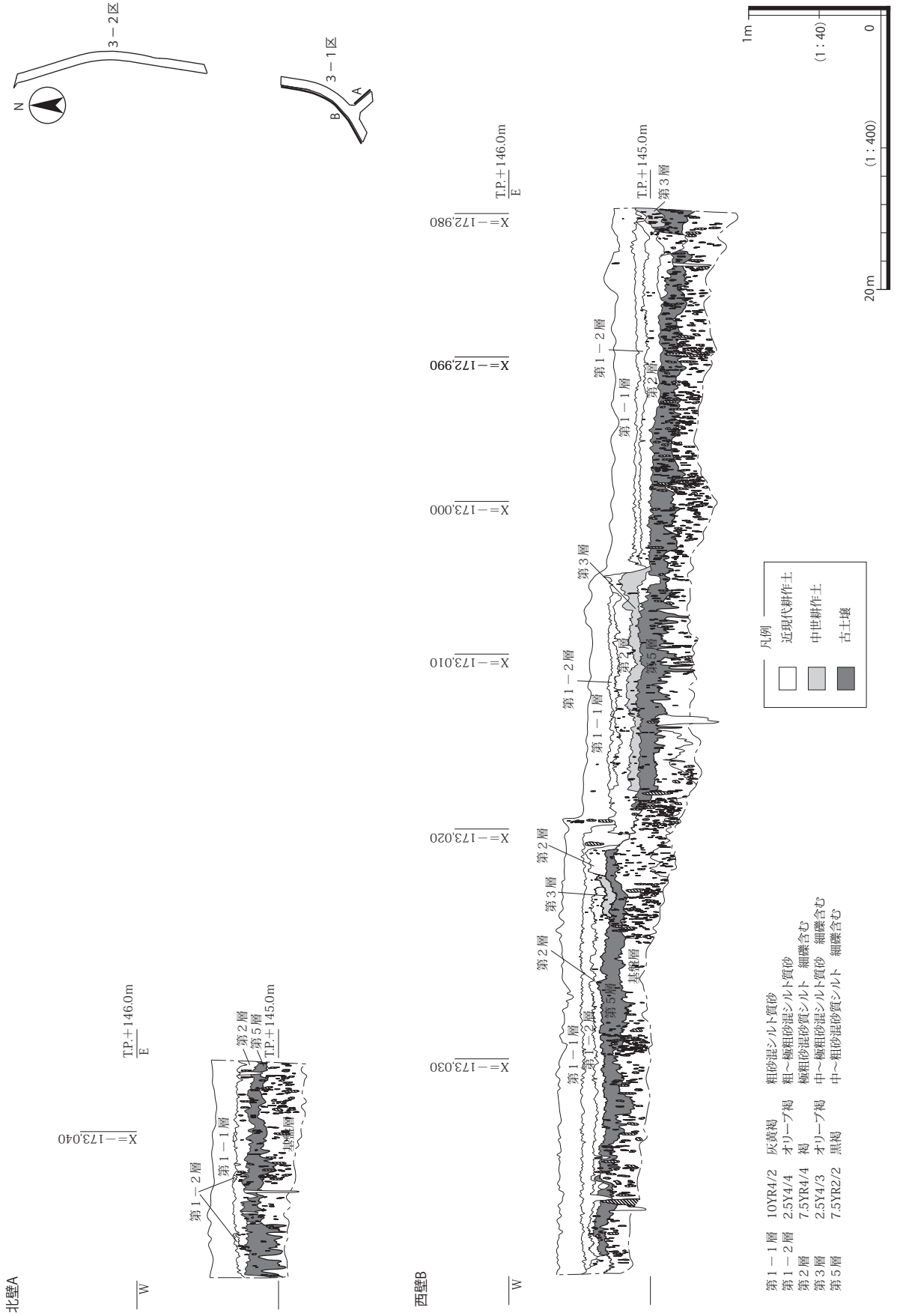

3－2区
N
3－1区
A
B
北壁A
W
E
T.P.＋146.0m
X＝－173,040
第1－2層
第1－1層
第2層
第5層
T.P.＋145.0m
基礎層
西壁B
X＝－173,030
X＝－173,020
X＝－173,010
X＝－173,000
X＝－172,990
X＝－172,980
第3層
1m
20m
(1：40)
(1：400)
0
凡例
近現代耕作土
中世耕作土
古土壌
第1－1層　10YR4/2　灰黄褐　粗砂混シルト質砂
第1－2層　2.5Y4/4　オリーブ褐　粗～極粗砂混シルト質砂
第2層　7.5YR4/4　褐　極粗砂混砂質シルト　細礫含む
第3層　2.5Y4/3　オリーブ褐　中～極粗砂混シルト質砂　細礫含む
第5層　7.5YR2/2　黒褐　中～粗砂混砂質シルト　細礫含む

図9　3－1区　北・西壁断面

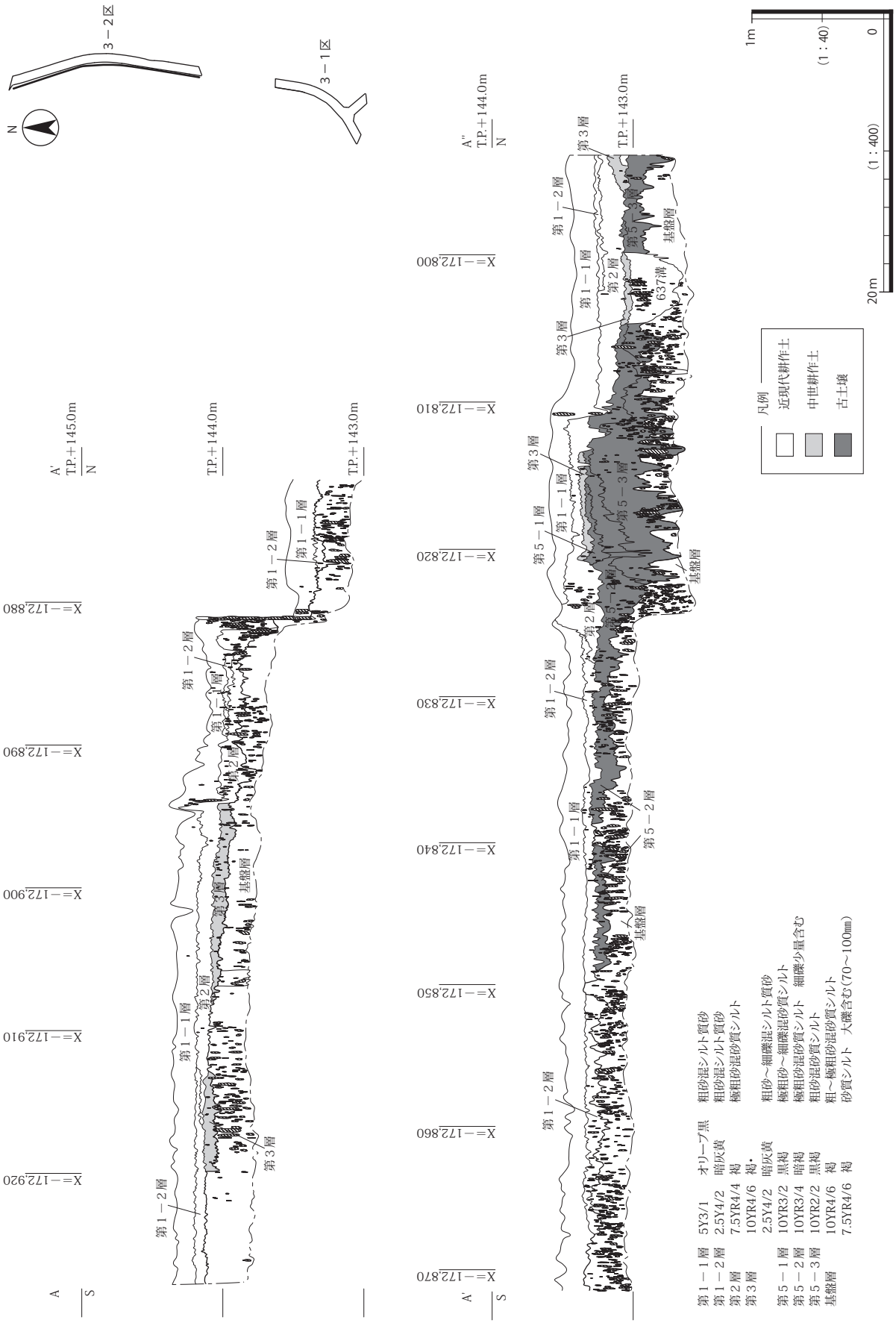

3－2区
3－1区
N
A
S
A'
T.P.＋145.0m
T.P.＋144.0m
T.P.＋143.0m
A"
X＝－172,920
X＝－172,910
X＝－172,900
X＝－172,890
X＝－172,880
X＝－172,870
X＝－172,860
X＝－172,850
X＝－172,840
X＝－172,830
X＝－172,820
X＝－172,810
X＝－172,800
第1－1層
第1－2層
第2層
第3層
第5－1層
第5－2層
第5－3層
基盤層
637溝
凡例
近現代耕作土
中世耕作土
古土壌
1m
20m
(1：400)
(1：40)
0
第1－1層　5Y3/1　オリーブ黒　粗砂混シルト質砂
第1－2層　2.5Y4/2　暗灰黄　粗砂混シルト質砂
第2層　7.5YR4/4　褐　極粗砂混砂質シルト
第3層　10YR4/6　褐・2.5Y4/2　暗灰黄　粗砂～細礫混シルト質砂
第5－1層　10YR3/2　黒褐　極粗砂～細礫混砂質シルト
第5－2層　10YR3/4　暗褐　極粗砂混砂質シルト　細礫少量含む
第5－3層　10YR2/2　黒褐　粗砂混砂質シルト
基盤層　10YR4/6　褐　粗～極粗砂混砂質シルト
7.5YR4/6　褐　砂質シルト　大礫含む(70～100mm)

図10　3－2区　西壁断面


A'
T.P.+144.0m
N
T.P.+143.0m
T.P.+142.0m
A''
A
N
凡例
近現代耕作土
中世耕作土
古土壌
1m
0
20m
(1：40)
(1：400)
X=−172,720
X=−172,730
X=−172,740
X=−172,750
X=−172,760
X=−172,770
X=−172,780
X=−172,670
X=−172,680
X=−172,690
X=−172,700
X=−172,710
T.P.+143.00m
T.P.+142.00m
盛土
撹乱
基盤層
第1−1層
第1−2層
第2−1層
第2−2層
第3層
第4−1層
第4−2層
第5−1層
第5−2層
A
S
第1−1層　5Y4/1　灰～2.5Y3/2　黒褐　極粗砂～細礫混シルト質砂
第1−2層　5Y4/2　灰オリーブ　粗～極粗砂混シルト質砂
第2−1層　7.5YR4/4　褐　極粗砂混砂質シルト
第2−2層　10YR4/3　にぶい黄褐　粗～極粗砂混砂質シルト
第3層　2.5Y4/3　オリーブ褐　粗～極粗砂混シルト質砂　細礫少量含む
第4−1層　2.5Y4/2　暗灰黄　粗～極粗砂混砂質シルト
第4−2層　10YR4/2　灰黄褐　極粗砂～細礫混砂質シルト　細礫多く含む　中礫(20～30mm)含む
第5−1層　10YR3/3 暗褐　極粗砂～細礫混砂質シルト
第5−2層　10YR3/3 暗褐～10YR2/3　黒褐　粗砂混砂質シルト　細礫含む　中～大礫(50～80mm)少量含む
基盤層　10YR4/4　褐　シルト質砂　中～大礫多く含む(50～100mm)

図11　4区　西壁断面（1）

第２層：近現代耕作土　ほぼ全域に分布しする褐色極粗砂混じり砂質シルトで細礫を含む。層厚は 0.04 ～ 0.2 m。

第３層：中世耕作土　調査区中央に分布するオリーブ褐色中砂から細礫混じりシルト質砂である。最大層厚は 0.15 m。

第５層：古土壌　全域に分布し、黒褐色中砂から粗砂混じり砂質シルトに細礫を含み、調査区南部ほど礫を多く含む。層厚は 0.1 ～ 0.2 m。

３－２区（図 10、図版３）

第１層：近現代耕作土　全域に分布し、２層に細分される。第１－１層はオリーブ黒色粗砂混じりシルト質砂である。層厚は 0.1 ～ 0.35 m。

第１－２層は暗灰黄色粗砂混じりシルト質砂である。最大層厚は 0.15 m。

第２層：近現代耕作土　調査区中央付近以外全域に分布する褐色極粗砂混じり砂質シルトである。最大層厚は 0.3 m。

第３層：中世耕作土　調査区南・北側の一部に分布する褐色や暗灰黄色粗砂から細礫混じりシルト質砂である。最大層厚は 0.1 m。古代から中世の瓦器、瓦質土器、土師質土器、須恵器、土師器を包含する。

第５層：古土壌　調査区北半から４区南端にかけて堆積し、３－２区北端から４区南端にかけては谷状の地形であったと見られる。

３層に細分される。第５－１層は黒褐色極粗砂から細礫混じり砂質シルト、第５－２層は暗褐色極粗砂混じり砂質シルト、第５－３層は黒褐色極粗砂混じり砂質シルトである。最大層厚は 0.6 m。中世の土師質土器を包含する。

４区（図 11・12、図版 3）

第１層：近現代耕作土　２層に細分される。第１－１層は灰色や黒褐色極粗砂から細礫混じりシルト

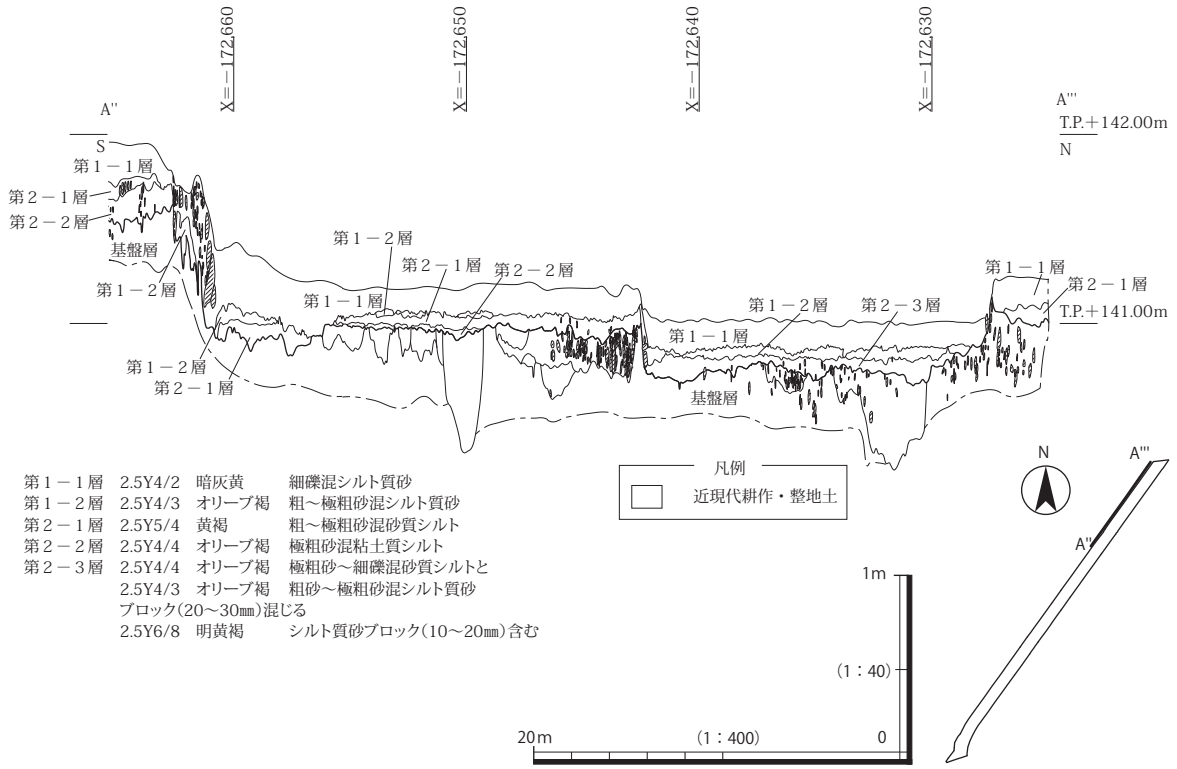


図 12　４区　西壁断面（２）

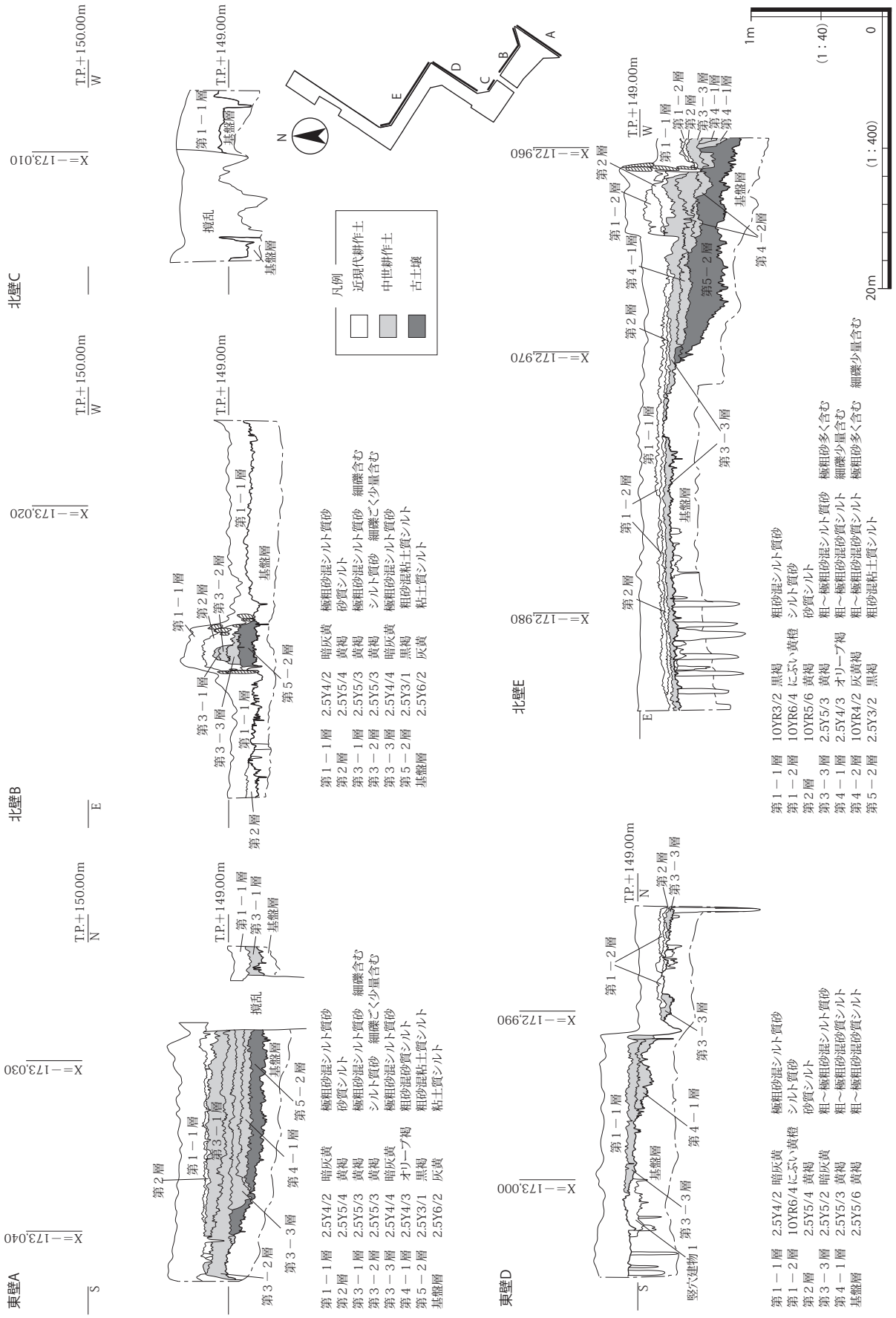


図13　5区　北・東壁断面（1）

質砂である。層厚は 0.1 ～ 0.3 m。

第１－２層は灰オリーブ色粗砂から極粗砂混じりシルト質砂である。最大層厚は 0.15 m。

第２層：近現代耕作土・整地土　３層に細分され、第２－１層は褐色極粗砂混じり砂質シルトである。最大層厚は 0.2 m。

第２－２層はにぶい黄褐色粗砂から極粗砂混じり砂質シルトである。最大層厚は 0.1 m。第２－１・２層ともに耕作土である。

第２－３層は調査区北側のＸ＝－ 172,640 からＸ＝－ 172,630 付近に分布する整地土である。オリーブ褐色極粗砂から細礫混じり砂質シルトに第３層に由来するオリーブ褐色粗砂から極粗砂混じりシルト質砂ブロックと基盤層に由来する明黄褐色シルト質砂ブロック土が混じる。最大層厚は 0.12 m。

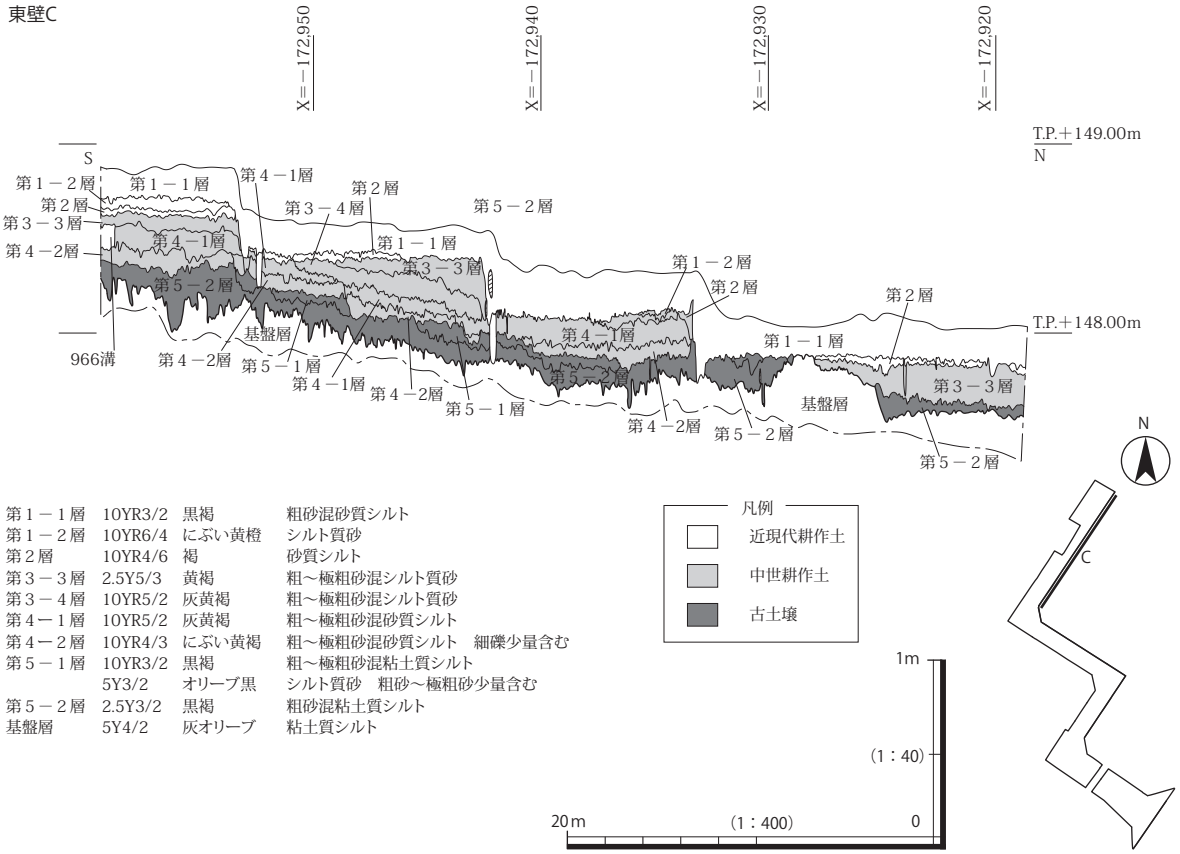
第３層：中世耕作土　調査区南側に分布するオリーブ褐色粗砂から極粗砂混じりシルト質砂である。最大層厚は 0.15 m。中世の磁器、瓦質土器、土師質土器を包含する。

第４層：中世耕作土　調査区南側に分布する。２層に細分され、第４－１層は暗灰黄色粗砂から極粗砂混じり砂質シルトで極粗砂が多く混じる。最大層厚は 0.18 m。

第４－２層は灰黄褐色極粗砂から細礫混じり砂質シルトで細礫が多く混じり第４－１層に比べ粗粒である。最大層厚は 0.35 m。

第５層：古土壌　調査区南端から中央にかけて分布し、南端は谷状の落込みを呈し、最大層厚 0.5 mになる。２層に細分され、第５－１層は暗褐色極粗砂から細礫混じり砂質シルトである。最大層厚は 0.1 m。

第５－２層は暗褐色～黒褐色粗砂混じり砂質シルトである。最大層厚は 0.4 m。



第１－１層	10YR3/2	黒褐	粗砂混砂質シルト
第１－２層	10YR6/4	にぶい黄橙	シルト質砂
第２層	10YR4/6	褐	砂質シルト
第３－３層	2.5Y5/3	黄褐	粗～極粗砂混シルト質砂
第３－４層	10YR5/2	灰黄褐	粗～極粗砂混シルト質砂
第４－１層	10YR5/2	灰黄褐	粗～極粗砂混砂質シルト
第４－２層	10YR4/3	にぶい黄褐	粗～極粗砂混砂質シルト　細礫少量含む
第５－１層	10YR3/2	黒褐	粗～極粗砂混粘土質シルト
	5Y3/2	オリーブ黒	シルト質砂　粗砂～極粗砂少量含む
第５－２層	2.5Y3/2	黒褐	粗砂混粘土質シルト
基盤層	5Y4/2	灰オリーブ	粘土質シルト

図 14　５区　東壁断面（２）

５区（図 13・14、図版 4）

第１層：近現代耕作土　２層に細分され、第１－１層は暗灰黄色や黒褐色粗砂から極粗砂混じりシルト質砂である。層厚は 0.12 ～ 0.55 m。

第１－２層はにぶい黄橙色シルト質砂である。最大層厚は 0.12 m。

第２層：近現代耕作土　黄褐色砂質シルトである。最大層厚は 0.2 mである。

第３層：中世耕作土　調査区南東端では堆積が厚く、３層に細分される。第３－１層は黄褐色極粗砂混じりシルト質砂である。最大層厚は 0.12 m。

第３―２層は黄褐色シルト質砂で第３－１層より細粒である。最大層厚は 0.12 m。

第３－３層は暗灰黄色粗砂から極粗砂混じりシルト質砂で、この層が調査区全体に分布し他の地区の第３層に相当する。最大層厚は 0.2 m。古代から中世の瓦器、瓦質土器、土師質土器、須恵器、土師器を包含する。

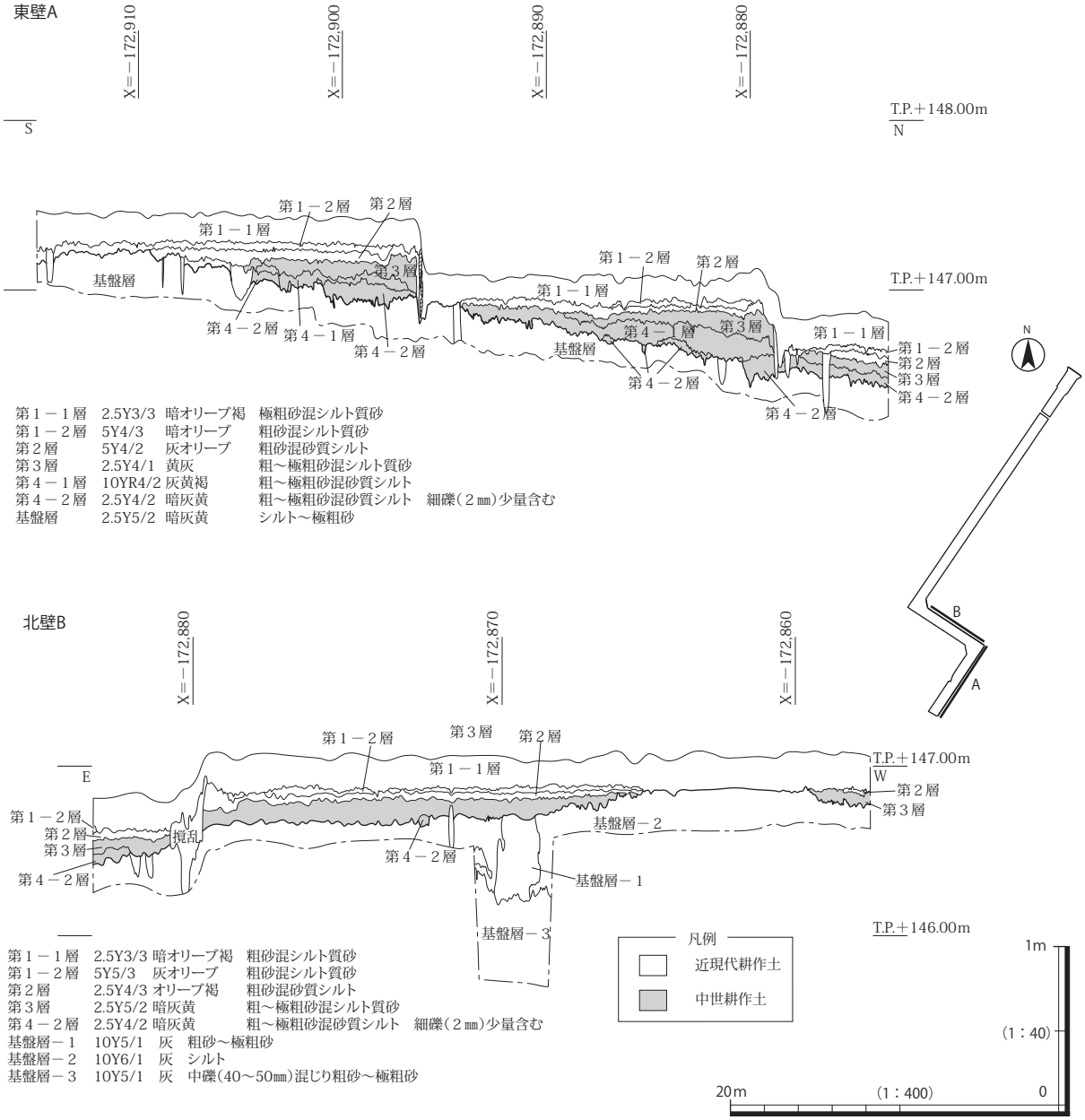


図 15　６区　北・東壁断面

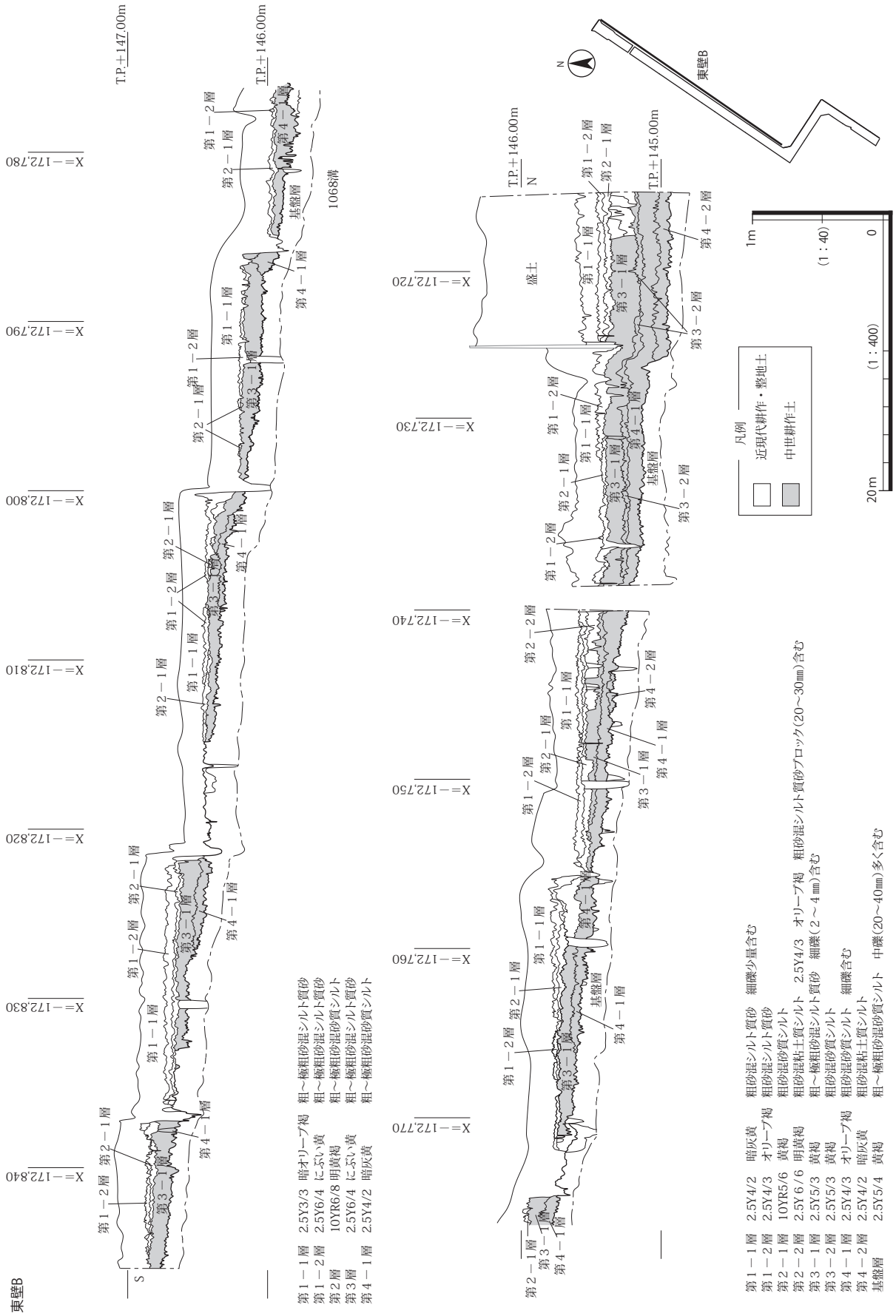

東壁B
T.P.＋147.00m
T.P.＋146.00m
T.P.＋145.00m
X＝－172,840
X＝－172,830
X＝－172,820
X＝－172,810
X＝－172,800
X＝－172,790
X＝－172,780
X＝－172,770
X＝－172,760
X＝－172,750
X＝－172,740
X＝－172,730
X＝－172,720
1068溝
盛土
基盤層
第1－1層 2.5Y4/2 暗灰黄 粗砂混シルト質砂 細礫少量含む
第1－2層 2.5Y4/3 オリーブ褐 粗砂混シルト質砂
第2－1層 10YR5/6 黄褐 粗砂混砂質シルト
第2－2層 2.5Y 6/6 明黄褐 粗砂混粘土質シルト 2.5Y4/3 オリーブ褐 粗砂混シルト質砂ブロック(20～30㎜)含む
第3－1層 2.5Y5/3 黄褐 粗～極粗砂混シルト質砂 細礫(2～4㎜)含む
第3－2層 2.5Y5/3 黄褐 粗砂混砂質シルト
第4－1層 2.5Y4/3 オリーブ褐 粗砂混砂質シルト 細礫含む
第4－2層 2.5Y4/2 暗灰黄 粗砂混粘土質シルト
基盤層 2.5Y5/4 黄褐 粗～極粗砂混砂質シルト 中礫(20～40㎜)多く含む
第1－1層 2.5Y3/3 暗オリーブ褐 粗～極粗砂混シルト質砂
第1－2層 2.5Y6/4 にぶい黄 粗～極粗砂混シルト質砂
第2層 10YR6/8 明黄褐 粗～極粗砂混砂質シルト
第3層 2.5Y6/4 にぶい黄 粗～極粗砂混シルト質砂
第4－1層 2.5Y4/2 暗灰黄 粗～極粗砂混砂質シルト
凡例
近現代耕作・整地土
中世耕作土
1m
(1：40)
0
20m
(1：400)
N
東壁B

図16　6区　東壁断面

第４層：中世耕作土　調査区北半は２層に細分され、調査区全体では第４－１層が分布する。第４－１層はオリーブ褐色や黄褐色、灰黄褐色粗砂から極粗砂混じり砂質シルトである。最大層厚は 0.16 m。

第４－２層は灰黄褐色やにぶい黄褐色粗砂から極粗砂混じり砂質シルトで第４－１層より極粗砂が多く混じる。最大層厚は 0.12 m。古代から中世の瓦質土器、土師質土器、須恵器、土師器を包含する。

第５層：古土壌　調査区南東端と中央から北端の谷状の落込みに堆積する。２層に細分され、第５－１層は黒褐色粗砂～極粗砂混じり粘土質シルトである。最大層厚は 0.1 m。

第５－２層は黒褐色粗砂混じり粘土質シルトである。最大層厚は 0.25 m。古代の須恵器、土師器を包含する。

６区（図 15・16、図版 4）

第１層：近現代耕作土　２層に細分され、第１－１層は暗灰黄色や暗オリーブ褐色粗砂から極粗砂混じりシルト質砂である。層厚は 0.12 ～ 0.5 m。

第１－２層はにぶい黄色やオリーブ褐色粗砂混じりシルト質砂である。最大層厚は 0.1 m。

第２層：近現代耕作土　２層に細分され、第２－１層は調査区全体に堆積した耕作土層で明黄褐色やオリーブ褐色粗砂混じり砂質シルトである。調査区北側では極粗砂が混じる。最大層厚は 0.1 m。

第２－２層は調査区北側のＸ＝－ 172,740 付近に堆積した整地土で基盤層の明黄褐色粘土質シルトに第３層のオリーブ褐色粗砂から極粗砂混じりシルト質砂ブロックが混じる砂質シルトである。最大層厚は 0.1 mである。

第３層：中世耕作土　２層に細分され、第３－１層はにぶい黄色～黄灰色粗砂から極粗砂混じりシルト質砂で調査区全体に分布する。最大層厚は 0.15 m。

第３－２層は黄褐色粗砂混じり砂質シルトで調査区北側のＸ＝－ 172,738 m付近から調査区北端にかけて分布する。最大層厚 0.08 m。古代から中世の磁器、陶器、瓦器、瓦質土器、土師質土器、須恵器、土師器、サヌカイト剥片を包含する。

第４層：中世耕作土　２層に細分される。第４－１層はほぼ調査区全体に分布する灰黄褐色やオリーブ褐色粗砂から極粗砂混じり砂質シルトである。最大層厚は 0.15 m。

第４－２層は調査区北端に分布する暗灰黄色粗砂混じり粘土質シルトである。最大層厚は 0.15 m。古代から中世の磁器、瓦器、瓦質土器、土師質土器、須恵器、土師器、サヌカイト剥片を包含する。

第２節　１・２区

１・２区は調査地の中で南東端に位置する。遺構検出面の標高は、南東端が T.P. ＋ 148.65 mと最も高く、そこから西に向かって緩やかに下る。南から北へはかなり低くなり、北端は T.P. ＋ 145.5 mで南東端とは 3.15 mの高低差を有する。

遺構は１区南東側から２区にかけて密集しており、掘立柱建物９棟、溝８条、多数のピット・土坑を検出した（図 17・18、図版５・６）。時期は、掘立柱建物の柱穴から出土した遺物はごくわずかな細片で時期を明らかにできないが、建物柱穴と重複し後出するピットから８世紀後半を下ることがない遺物が出土していること、周囲の土坑やピットからの出土遺物は７世紀中葉～８世紀のものであることから、これらと同時期の可能性が高いと考えられる。

掘立柱建物１（図 17・19・20、図版７・8）

１区東側で検出した。南北棟の建物で、主軸は 15°東に偏る。検出した建物規模は桁行３間（5.1 m）、

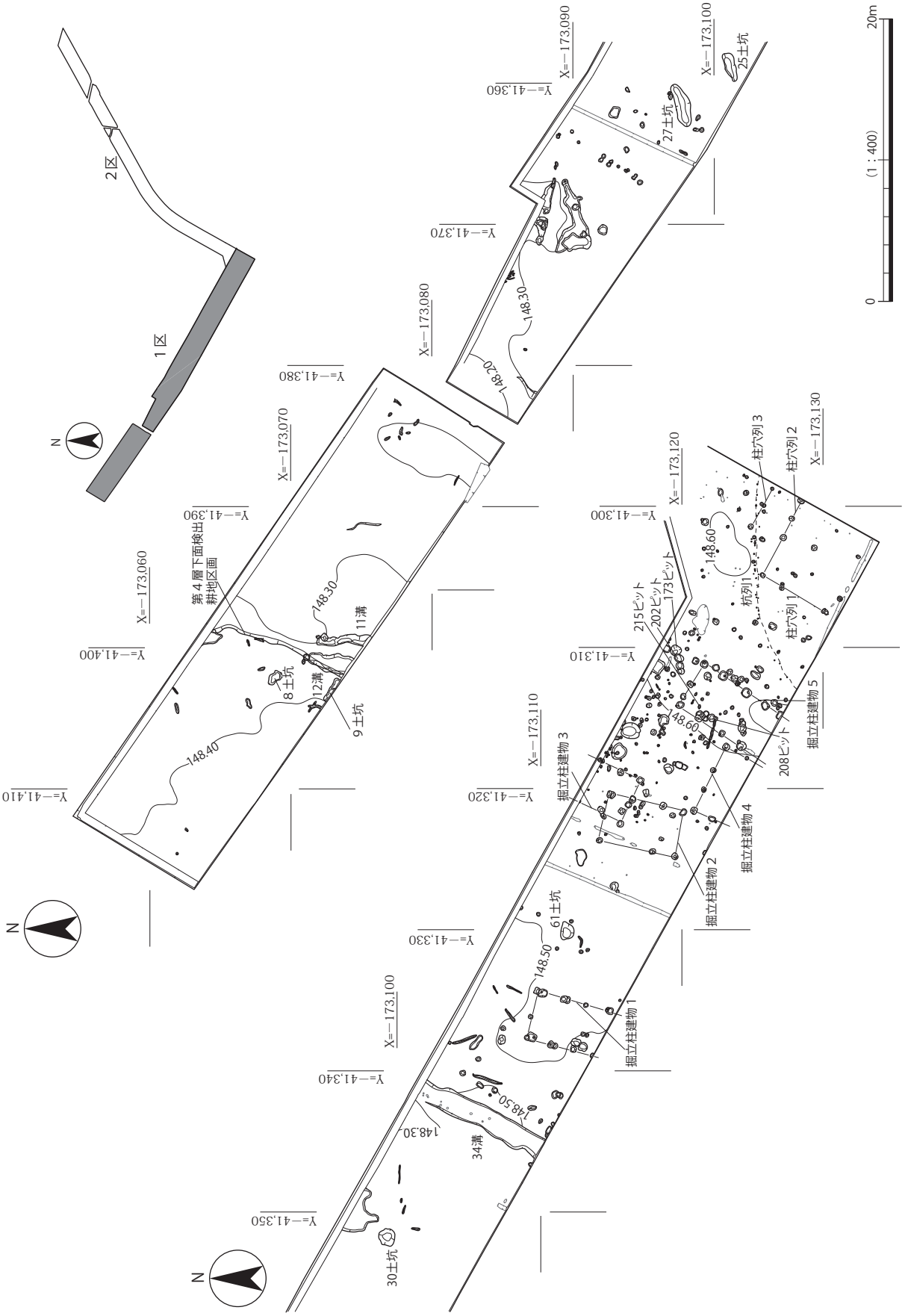

2区
1区
N
X=−173,060
X=−173,070
X=−173,080
X=−173,090
X=−173,100
X=−173,110
X=−173,120
X=−173,130
Y=−41,410
Y=−41,400
Y=−41,390
Y=−41,380
Y=−41,370
Y=−41,360
Y=−41,350
Y=−41,340
Y=−41,330
Y=−41,320
Y=−41,310
Y=−41,300
第4層下面検出
耕地区画
148.40
148.30
148.20
148.50
148.60
8土坑
9土坑
11溝
12溝
25土坑
27土坑
30土坑
34溝
61土坑
173ピット
202ピット
215ピット
208ピット
柱穴列1
柱穴列2
柱穴列3
杭列1
掘立柱建物1
掘立柱建物2
掘立柱建物3
掘立柱建物4
掘立柱建物5
0
(1：400)
20m

図17　1区　平面

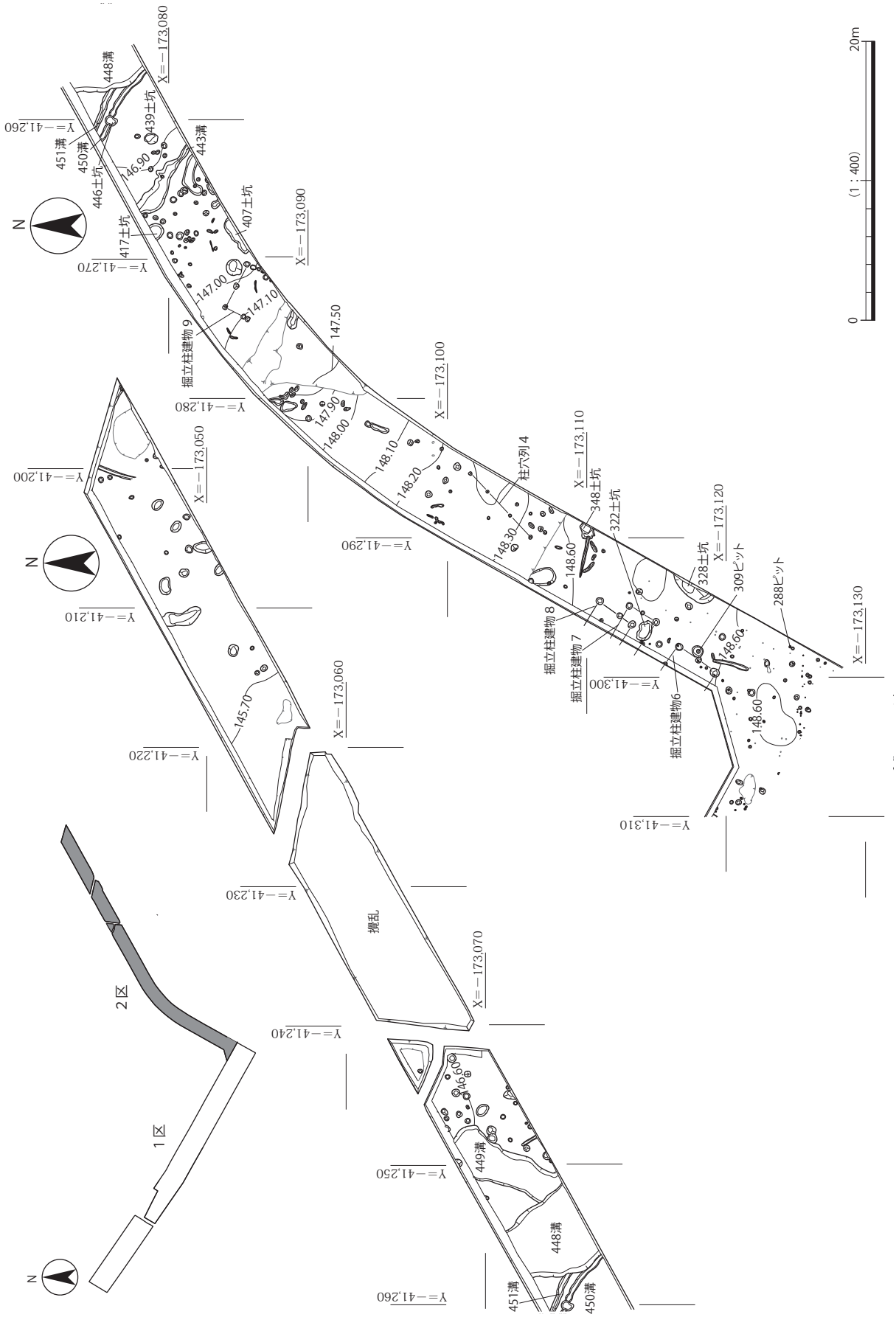

0
(1：400)
20m
X=−173,080
X=−173,090
X=−173,100
X=−173,110
X=−173,120
X=−173,130
X=−173,050
X=−173,060
X=−173,070
Y=−41,260
Y=−41,270
Y=−41,280
Y=−41,290
Y=−41,300
Y=−41,310
Y=−41,200
Y=−41,210
Y=−41,220
Y=−41,230
Y=−41,240
Y=−41,250
Y=−41,260
N
448溝
439土坑
451溝
450溝
446土坑
443溝
417土坑
407土坑
146.90
147.00
147.10
147.50
147.90
148.00
148.10
148.20
148.30
148.60
148.60
148.60
148.60
146.60
145.70
掘立柱建物9
柱穴列4
348土坑
322土坑
328土坑
309ピット
288ピット
掘立柱建物8
掘立柱建物7
掘立柱建物6
449溝
448溝
451溝
450溝
撹乱
2区
1区

図18　2区　平面

梁行２間（3.4 m）でさらに南妻側が調査区外南側にのびる。身舎柱間寸法はばらつきがあり、桁行西面が北から 1.84 m、1.68 m、1.44 m、東面が北から 1.92 m、1.60 m、1.68 mである。桁行北端の柱間寸法が他と比べ長い。39・40・42・43 柱穴はそれぞれ 332・49・50・51 柱穴と同柱筋で重複しており、建て替えに伴うものと考えられる。

掘方平面形は方形もしくは長方形を呈し、規模は一辺 0.35 ～ 0.65 m、深さ 0.10 ～ 0.20 mである。掘方底面の標高は T.P. ＋ 148.3 ～ 148.4 mにおさまる。38・39・42・43 柱穴からは柱痕跡を検出し、39・50 柱穴は柱当りの部分が一段低い。掘方埋土は粗砂から細礫混じり砂質シルトや基盤層に由来する粗砂混じり粘土質シルトである。

遺物は出土していない。

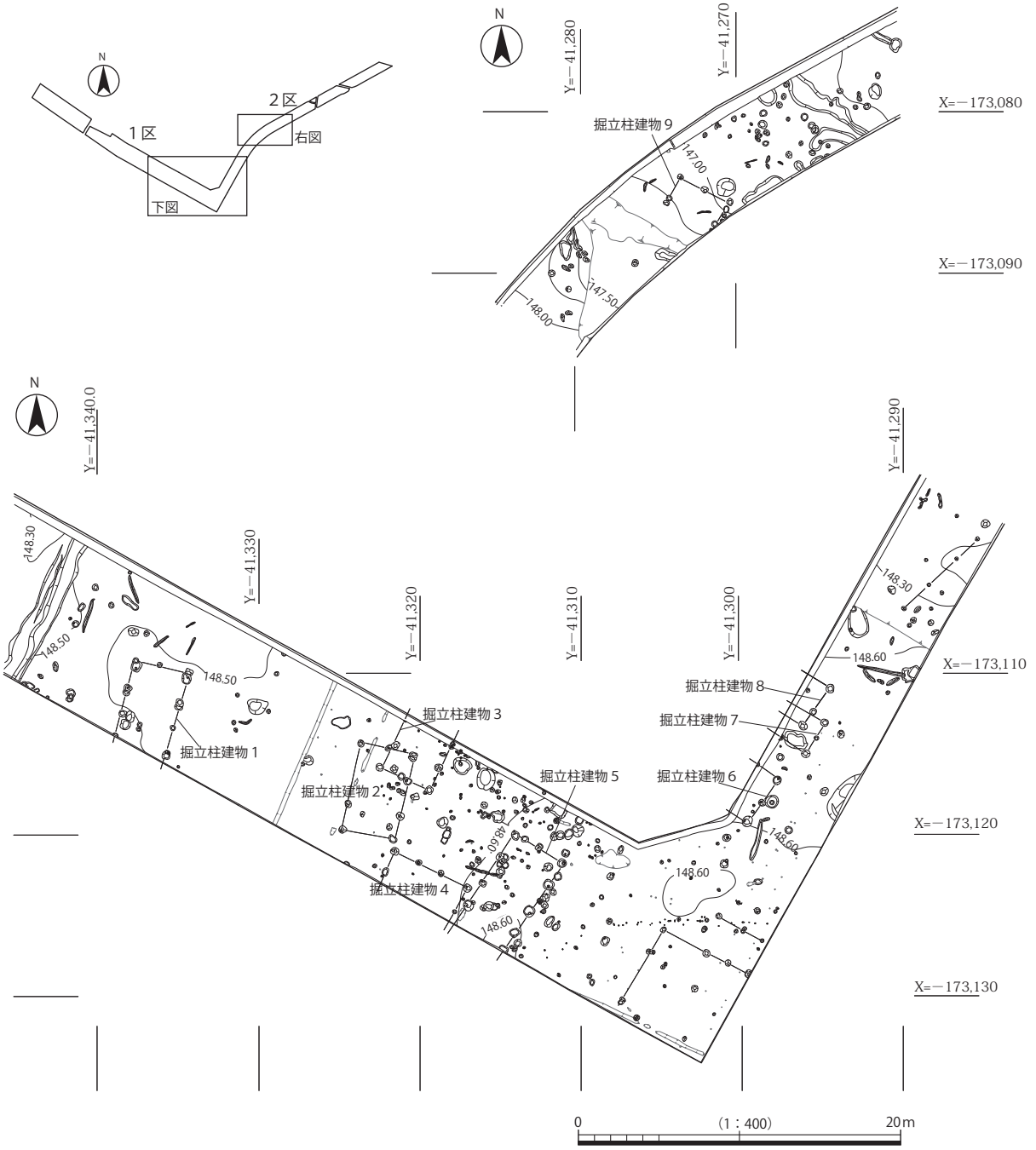
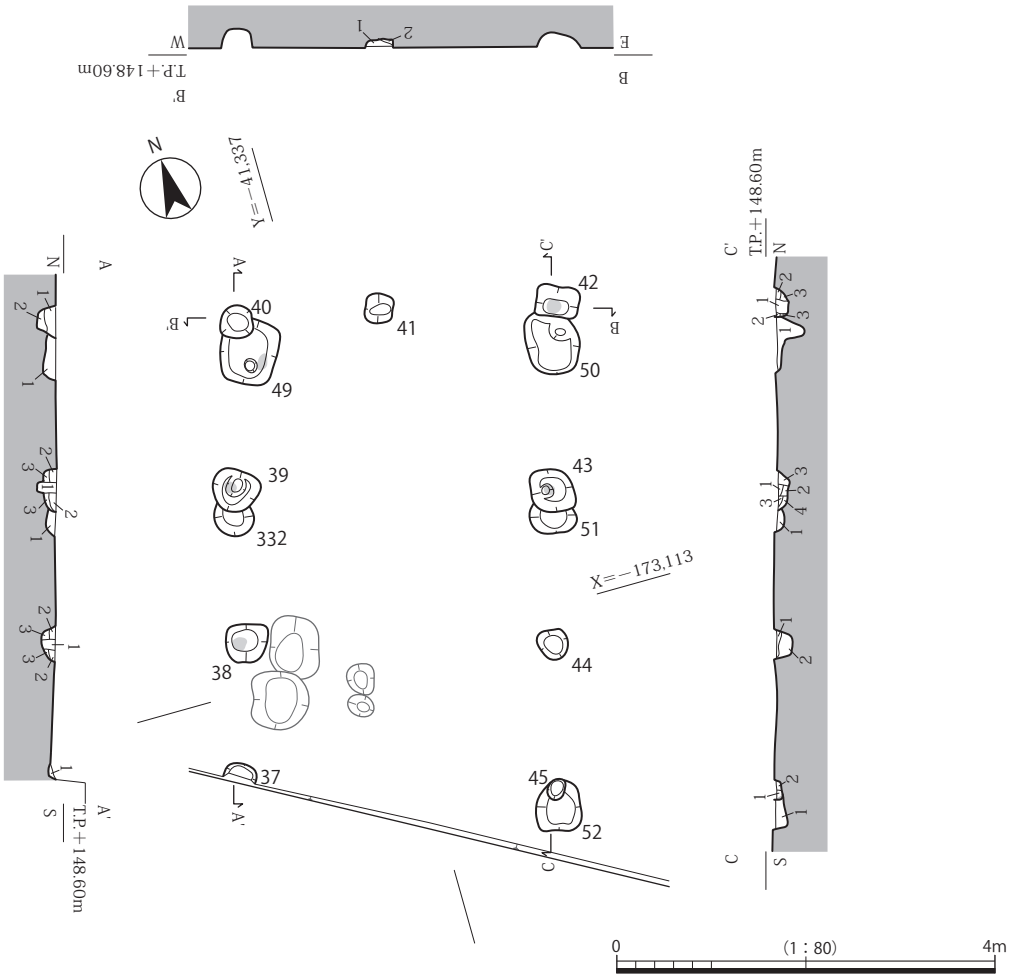


図 19　掘立柱建物１～９　平面

掘立柱建物２（図 17・19・21、図版７・８）

１区東側で検出した。南北棟の建物である。主軸は 13°東に偏り、概ね掘立柱建物１と同軸となる。建物規模は桁行３間（5.6 m）、梁行２間（3.4 m）、面積は 19.04㎡である。83 柱穴は掘立柱建物３の 89 柱穴と重複し先行する。身舎柱間寸法は、判明した桁行東面を見るとばらつきがあり、北から 1.76 m、2.30 m、1.60 mである。桁行中央の柱間寸法が他と比べ長い。



37
1.2.5Y4/2　暗灰黄　粗～極粗砂混砂質シルト　細～中礫（３～10㎜）含む
38
1.10YR4/2　灰黄褐　粗砂混砂質シルト　細礫（10㎜）含む
2.10YR4/2　灰黄褐　粗砂混砂質シルト　細礫（３～５㎜）含む
3.10YR4/3　にぶい黄褐　粗砂混砂質シルト　細礫（５㎜）含む
332
1.2.5Y4/4　オリーブ褐　中～極粗砂混砂質シルト
39
1.2.5Y4/2　暗灰黄　粗砂混砂質シルト　細礫（５㎜）含む
2.2.5Y4/3　オリーブ褐　粗砂混砂質シルト　細礫（５～10㎜）含む
3.2.5Y4/3　オリーブ褐　粗～極粗砂混粘土質シルト
49
1.2.5Y4/3　オリーブ褐　粗砂混砂質シルト　細礫（３～５㎜）・中礫（20㎜）含む
40
1.2.5Y5/3　黄褐　粗～極粗砂混砂質シルト　細～中礫（10～40㎜）含む
2.10YR5/2　灰黄褐　粗砂混砂質シルト　細礫（５㎜）含む
41
1.10YR3/2　黒褐　粗砂混砂質シルト　細礫（２～３㎜）含む
2.2.5Y3/2　黒褐　粗砂混砂質シルト　細礫（２～３㎜）・中礫（10～15㎜）含む
42
1.10YR4/2　灰黄褐　粗砂混砂質シルト
中礫（10～20㎜）少量含む
2.10YR4/3　にぶい黄褐　粗～極粗砂混砂質シルト　細～中礫（５～10㎜）含む
3.10YR4/3　にぶい黄褐　粗～極粗砂混粘土質シルト
50
1.2.5Y5/3　黄褐　粗～細礫混砂質シルト
10YR4/2　灰黄褐　砂質シルトブロック
（10～15㎜）含む　中礫（20～25㎜）含む
43
1.10YR4/3　にぶい黄褐　粗～極粗砂混砂質シルト　細礫（２～４㎜）含む
2.10YR4/3　にぶい黄褐　粗～極粗砂混粘土質シルト
3.10YR4/3　にぶい黄褐　粗～細礫混砂質シルト
中礫（10～15㎜）含む
4.10YR5/6　黄褐　粗～極細砂混砂質シルト
細礫（３～６㎜）少量含む
51
1.10YR5/4　にぶい黄褐　粗～極粗砂混砂質シルト
細～中礫（５～10㎜）含む
44
1.2.5Y4/2　暗灰黄　粗～極粗砂混砂質シルト
中礫（20～25㎜）含む
2.10YR5/4　にぶい黄褐　粘土質シルト
中礫（40mm）少量含む
45
1.10YR4/3　にぶい黄褐　粗砂混粘土質シルト
2.10YR4/4　褐　粗砂混粘土質シルト
52
1.10YR4/4　褐　粗砂混粘土質シルト
中礫（20㎜）少量含む

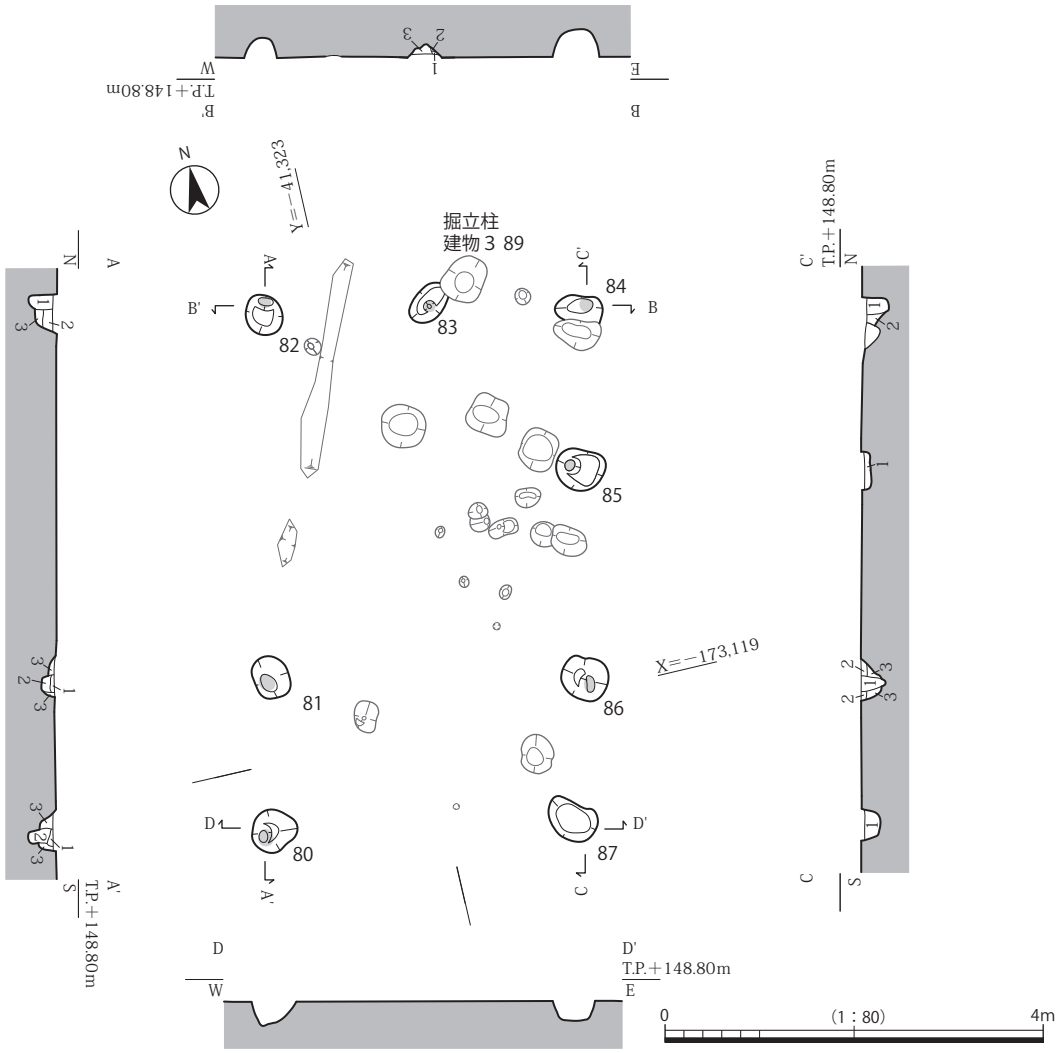
図 20　掘立柱建物１　平・断面

掘方平面形は方形や楕円形を呈し、規模は一辺 0.40 ～ 0.50 m、深さ 0.10 ～ 0.30 mである。掘方底面の標高は T.P. ＋ 148.30 ～ 148.42 mで隅柱の 82・84 柱穴は他柱穴と比べて深い。87 柱穴を除いた全ての柱穴から柱痕跡を検出し、柱当りの部分が深い。掘方埋土は粗砂から極粗砂混じり砂質シルトや基盤層に由来する粗砂混じり粘土質シルトである。

遺物は 82 柱穴から土師器杯・甕片、84 柱穴から須恵器壺片・土師器細片、87 柱穴から須恵器壺片・土師器杯片が出土したがいずれも細片のため詳細な時期は明らかにできない。

掘立柱建物３（図 17・19・22、図版８）

１区東側で検出した。南北棟の建物で、主軸は 25°東に偏る。検出した建物規模は桁行２間（3.3 m）、



80
１.10YR3/4　暗褐　粗砂混砂質シルト　細礫（２～３㎜）含む　炭化物粒（２㎜）含む
２.2.5Y3/3　暗オリーブ褐　粗砂混砂質シルト
３.2.5Y4/2　暗灰黄　粗～極粗砂混砂質シルト
　10YR4/3　にぶい黄褐　砂質シルトブロック（10～15㎜）含む
　細～中礫（３～20㎜）含む
81
１.10YR3/3　暗褐　粗～極粗砂混砂質シルト
２.10YR3/4　暗褐　粗砂混粘土質シルト
３.10YR4/6　褐　粗砂～細礫混シルト質砂
82
１.10YR3/2　黒褐　粗～極粗砂混砂質シルト
２.10YR4/4　褐　粗～極粗砂混砂質シルト
　2.5Y4/3　オリーブ褐　粗～極粗砂混砂質 シルトブロック（15～20㎜）含む
　細礫含む　炭（５㎜）少量含む
３.10YR5/4　にぶい黄褐　粘土質シルト

83
１.2.5Y4/3　オリーブ褐　粗～極粗砂混砂質シルト
２.10YR4/2　灰黄褐　粗砂混砂質シルト
３.10YR4/4　褐　砂質シルト
　2.5Y4/3　オリーブ褐　砂質シルトブロック（３～５㎜）含む
84
１.10YR3/3　暗褐　粗～極粗砂混砂質シルト
２.10YR4/4　褐　粗～極粗砂混シルト質砂　中礫（６～８㎜）少量含む
85
１.10YR3/4　暗褐　粗砂混砂質シルト
86
１.10YR4/3　にぶい黄褐　粗～極粗砂混 砂質シルト
　炭化物粒少量含む
２.10YR5/6　黄褐　極粗砂～細礫混砂質シルト

図 21　掘立柱建物２　平・断面

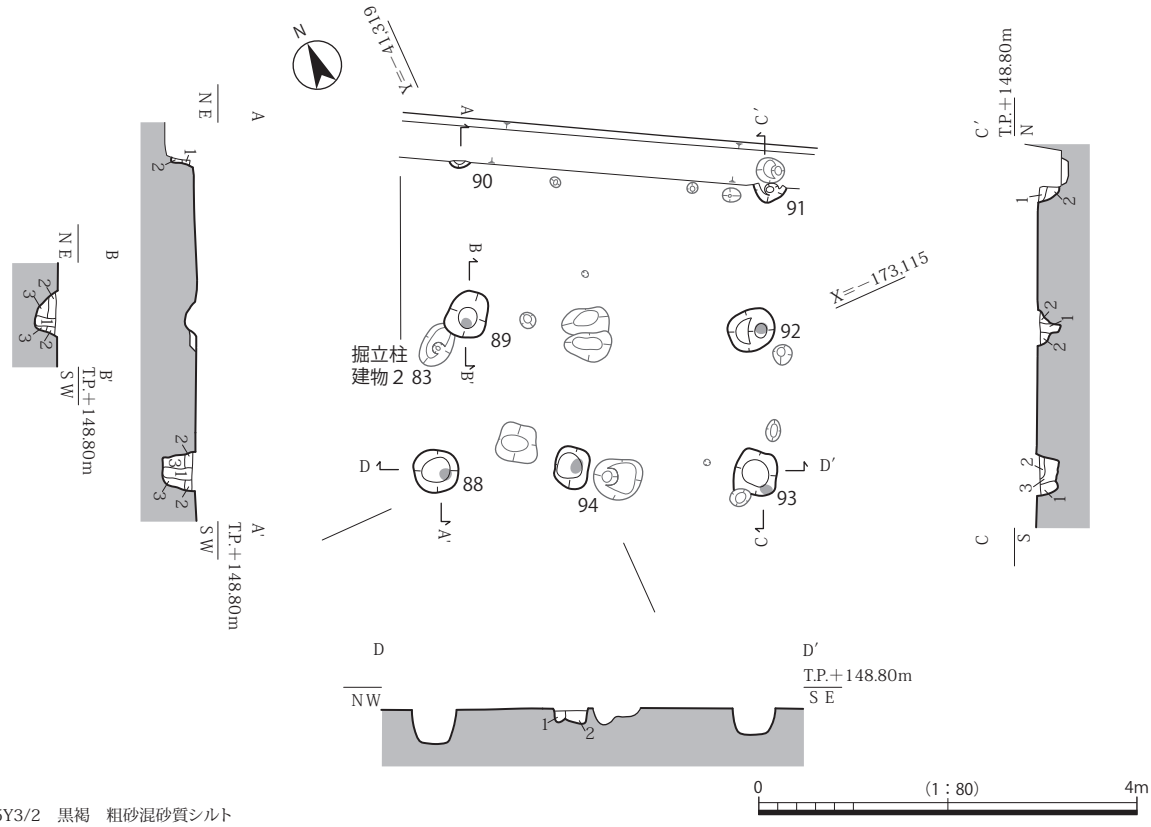
梁行２間（3.2 m）で北妻側がさらに調査区外北側にのびる。89 柱穴は掘立柱建物２の 83 柱穴と重複し後出する。身舎柱間寸法は、桁行西面が北から 1.72 m、1.60 m、東面が北から 1.50 m、1.69 mとばらつきがある。

掘方平面形は方形を呈し、規模は一辺 0.40 ～ 0.50 m、深さ 0.15 ～ 0.35 mである。掘方底面の標高は梁行の 94 柱穴のみ T.P. ＋ 148.40 mと浅く、他は T.P. ＋ 148.25 ～ 148.35 mである。全体を検出した柱穴の全てで柱痕跡を検出し、92 柱穴は柱当りの部分が 10㎝程深い。掘方埋土は粗砂から極粗砂混じり砂質シルトや基盤層由来の粘土質シルトである。

遺物は出土していない。

掘立柱建物４（図 17・19・23）

１区東側で検出した。東西棟の建物である。主軸は 26°東に偏り、概ね掘立柱建物３と同軸である。この建物は 0.6 m北西に掘立柱建物２と 0.6 m東に掘立柱建物５が近接し、これらの建物との同時併存は考え難い。



88
1．2.5Y3/2　黒褐　粗砂混砂質シルト
2．2.5Y4/2　暗灰黄　粗～極粗砂混砂質シルト
　10YR4/6　褐　砂質シルトブロック（５～10㎜）・細礫含む
3．10YR5/4　にぶい黄褐　粗～極粗砂混砂質シルト　細礫（10㎜）含む
89
1．2.5Y4/3　オリーブ褐　粗砂混砂質シルト
2．2.5Y4/2　暗灰黄　粗～極粗砂混砂質シルト
　10YR4/6　褐　砂質シルトブロック（10～15㎜）含む　細礫含む
3．10YR5/4　にぶい黄褐　粗砂～極粗砂混砂質シルト　細礫（10㎜）含む
90
1．2.5Y4/2　暗灰黄　粗～極粗砂混砂質シルト
　10YR4/6　褐　砂質シルトブロック（10～15㎜）・細礫含む
2．10YR5/4　にぶい黄褐　粗～極粗砂混砂質シルト　細礫（10㎜）含む
91
1．2.5Y4/2　暗灰黄　粗～極粗砂混砂質シルト
　10YR4/6　褐　砂質シルトブロック（10～15㎜）含む　細礫含む
2．10YR4/6　褐　粘土質シルト
　10YR4/3　にぶい黄褐　砂質シルトブロック（10～20㎜）含む
92
1．10YR3/3　暗褐　砂質シルト　粗砂含む
2．10YR4/3　にぶい黄褐　粗～極粗砂混砂質シルト
　10YR4/6　褐　砂質シルトブロック（15～20㎜）含む
　細～中礫（３～10㎜）・炭粒（２～３㎜）少量含む
93
1．10YR4/2　灰黄褐　粗砂混砂質シルト　細礫（３㎜）含む
2．10YR4/2　灰黄褐　粗～極粗砂混砂質シルト
　2.5Y5/3　黄褐　砂質シルトブロック（５～10㎜）含む
3．10YR4/3　にぶい黄褐　粗砂混砂質シルト　中礫（５㎜）少量含む
94
1．10YR5/2　灰黄褐　粗～極粗砂混砂質シルト
2．10YR5/2　灰黄褐　粗～極粗砂混砂質シルト
　10YR4/3　にぶい黄褐　粗砂混砂質シルト
　ブロック（10～15㎜）含む）

図 22　掘立柱建物３　平・断面

検出した建物規模は桁行３間（5.0 m）、梁行１間（1.3 m）でさらに調査区外南側に広がる。身舎柱間寸法は、桁行北面が西から 1.72 m、1.55 m、1.74 mで中央柱間寸法が両脇と比べ狭い。

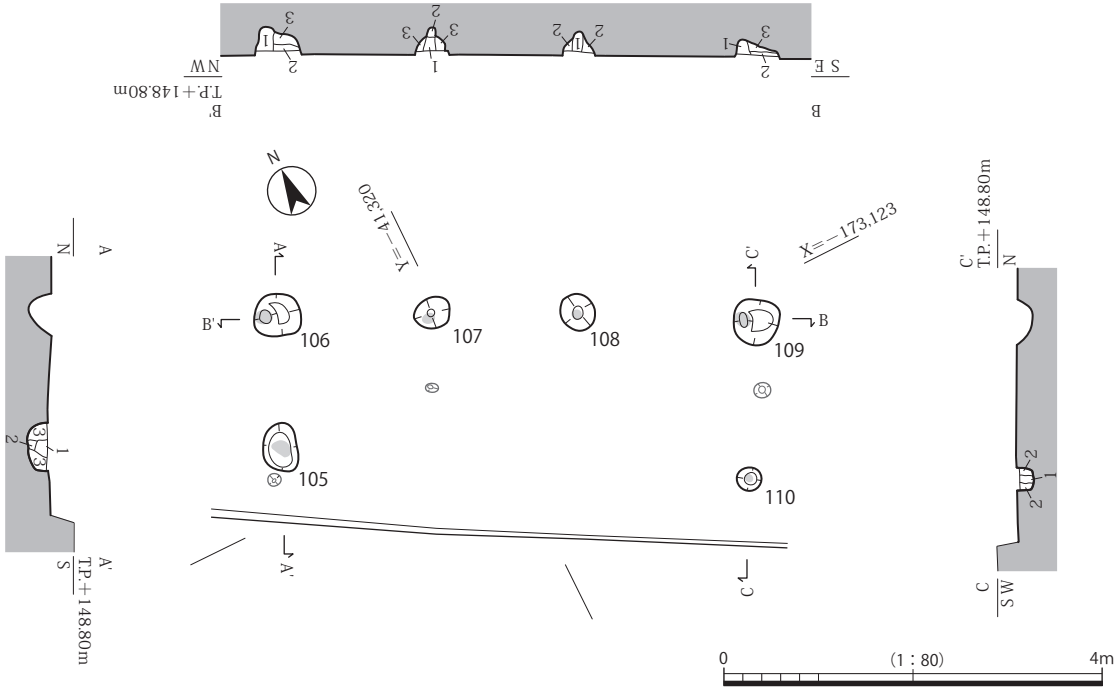
掘方平面形は、隅柱は方形を呈し、他は円形もしくは楕円形に近い。規模は直径 0.25 ～ 0.50 m、深さ 0.20 ～ 0.30 m、掘方底面の標高は T.P. ＋ 148.30 ～ 148.40 mである。全ての柱穴から柱痕跡を検出し、106 ～ 108 柱穴は柱当りの部分が一段深い。掘方埋土は基盤層由来の粗砂から極粗砂混じり砂質シルトや粘土質シルトに灰黄褐色砂質シルトブロックが混じるものが主体である。

遺物は 107 柱穴から土師器細片、109 柱穴から土師器杯片が出土したが、いずれも細片のため詳細な時期は明らかでない。

掘立柱建物５（図 17・19・24、図版 9）

１区東側で検出した。南北棟の建物で主軸は 34°東に偏り、掘立柱建物６と同軸である。検出した建物規模は桁行４間（6.5 m）、梁行２間（3.5 m）で南妻側がさらに調査区外南側にのびる。身舎柱間寸法は、桁行西面が北から 1.70 m、1.96 m、1.74 m、東面が北から 1.72 m、2.06 m、1.75 mと揃っており、桁行中央の柱間寸法が他と比べ長い。

掘方平面形は方形もしくは長方形を呈し、規模は一辺 0.46 ～ 0.67 m、深さ 0.10 ～ 0.25 m、掘方

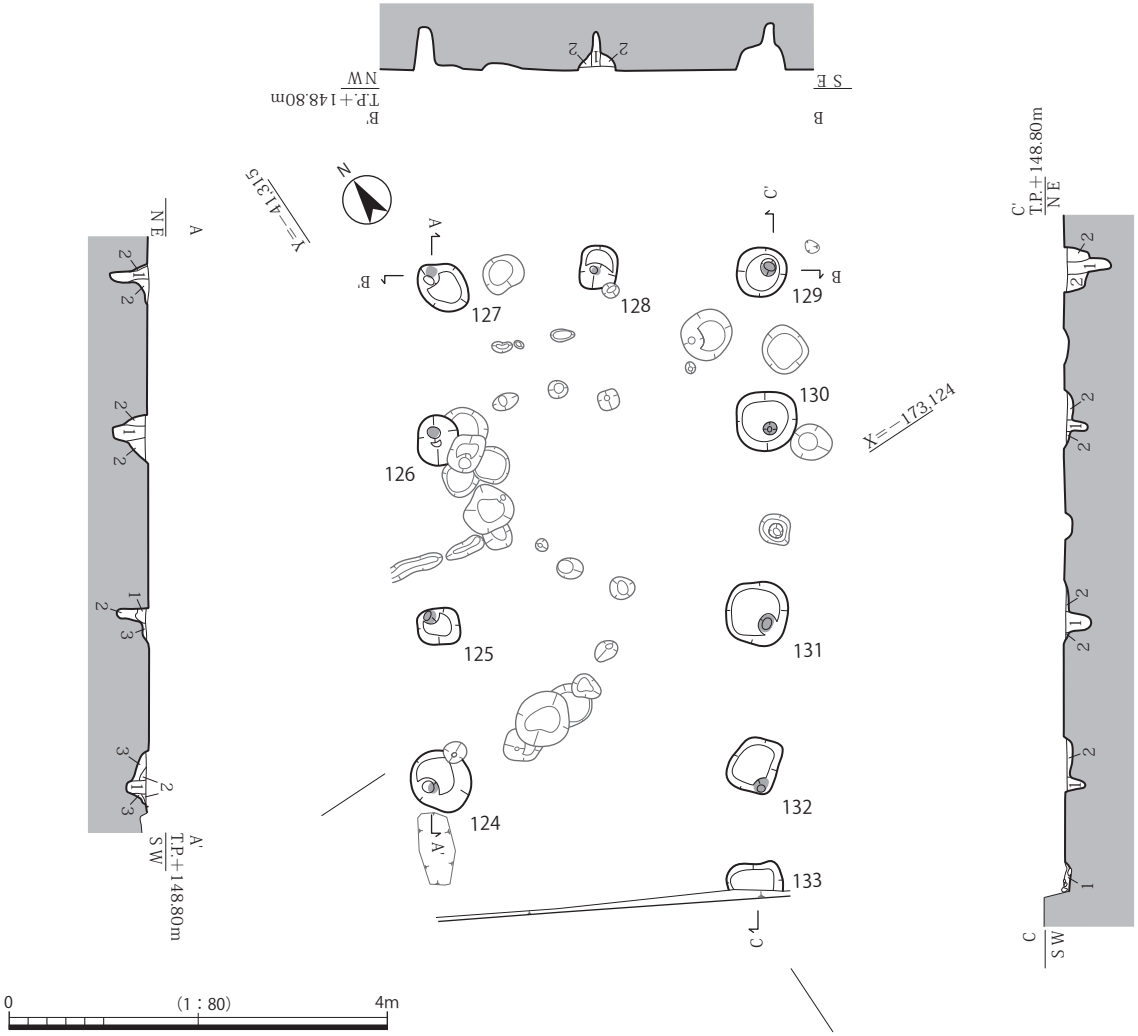


105
１.10YR4/3　にぶい黄褐　粗砂混シルト質砂
２.2.5Y4/2　暗灰黄　粗砂混砂質シルト
３.10YR5/4　にぶい黄褐　粗～極粗砂混シルト質砂
　10YR5/2　灰黄褐　砂質シルトブロック（５～10㎜）含む
106
１.2.5Y5/4　黄褐　粗～極粗砂混砂質シルト
２.2.5Y5/4　黄褐　粗～極粗砂混砂質シルト
　細～中礫（３～10㎜）含む　炭粒（２㎜）少量含む
３.10YR4/4　褐　極粗砂～細礫混粘土質シルト
　2.5Y5/4　黄褐　砂質シルトブロック（５～10㎜）含む
107
１.10YR4/2　灰黄褐　粗～極粗砂混粘土質シルト
　細礫少量含む　炭粒（３～５㎜）含む
２.10YR5/4　にぶい黄褐　粘土質シルト
３.10YR5/2　灰黄褐　粗～極粗砂混砂質シルト
　10YR5/4　にぶい黄褐　砂質シルトブロック（５～10㎜）含む
　細礫（２～３㎜）少量含む　炭粒（２～３㎜）含む
108
１.2.5Y3/2　黒褐　粘土質シルト　粗砂含む
２.10YR4/4　褐　粗砂混砂質シルト
　2.5Y3/2　黒褐　粗砂混砂質シルトブロック（10～15㎜）・炭粒含む
109
１.2.5Y3/2　黒褐　粗砂混砂質シルト
２.10YR5/4　にぶい黄褐　粗～極粗砂混シルト質砂
　10YR5/2　灰黄褐　砂質シルトブロック（５～10㎜）含む
３.10YR5/3　にぶい黄褐　粗砂混砂質シルト
110
１.2.5Y3/2　黒褐　粗砂混砂質シルト
２.10YR5/3　にぶい黄褐　粗～極粗砂混砂質シルト
　10YR5/2　灰黄褐　砂質シルトブロック（５～８㎜）・炭粒含む

図 23　掘立柱建物４　平・断面

底面の標高はT.P. ＋ 148.1 ～ 148.4 mである。全ての柱穴から柱痕跡を検出し、柱当りの部分が一段深い。掘方埋土は暗褐・暗灰黄色粗砂混じり砂質シルトや基盤層由来の粗砂から細礫混じり砂質シルトが主体である。遺物は124柱穴から土師器杯・甕片、132柱穴から土師器杯片が出土したが細片のため実測しえなかった。

建物の時期は出土遺物からは明らかでないが、掘立柱建物6と同軸であることから同時に併存した時期があったと考えると8世紀後半を下らない。



124
1．10YR4/2　灰黄褐　粗～極粗砂混砂質シルト
2．10YR4/4　褐　粗砂混砂質シルト
3．10YR4/4　褐　粗砂混砂質シルト　10YR4/2　灰黄褐　砂質シルトブロック(10～15㎜)・10YR4/2　灰黄褐　粗砂～細礫混砂質シルトブロック(50㎜)・炭粒(２～３㎜)含む

125
1．2.5Y4/3　オリーブ褐　粗～極粗砂混砂質シルト
2．10YR4/2　灰黄褐　粗砂混砂質シルト
3．10YR4/4　褐　粗砂混砂質シルト(基盤層)と2.5Y4/3　オリーブ褐　粗～極粗砂混砂質シルトブロック(30～40㎜)が混じる

126
1．10YR3/4　暗褐　粗砂混砂質シルト
2．10YR4/3　にぶい黄褐　粗砂～細礫混砂質シルト　中礫(８～10㎜)含む

127
1．10YR3/4　暗褐　粗砂混砂質シルト
2．10YR4/4　褐　粗砂混砂質シルト

128
1．10YR3/4　暗褐　粗砂混砂質シルト　細礫少量含む
2．10YR4/6　褐　粗砂混砂質シルトと10YR4/2　灰黄褐　粗～極粗砂混砂質シルトブロック(10～15㎜)混じる　細礫含む

129
1．10YR3/4　暗褐　粗砂混砂質シルト　細礫少量含む　炭粒(２～３mm)含む
2．10YR4/2　灰黄褐　粗砂～細礫混砂質シルトと10YR4/6褐　粗～極粗砂混砂質シルトブロック(30～50mm)が混じる

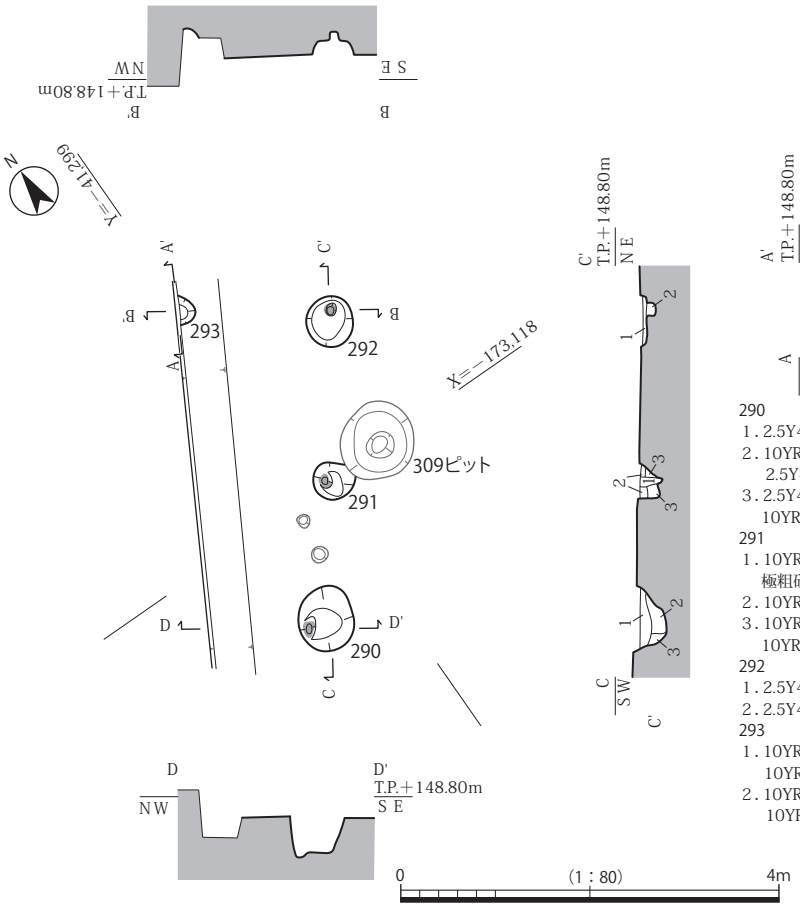
130
1．2.5Y4/2　暗灰黄　粗砂混砂質シルト　炭粒(１～２mm)少量含む
2．10YR4/4　褐　粗～極粗砂混砂質シルト　2.5Y4/2　暗灰黄　粗～極粗砂混砂質シルトブロック(10～20mm)含む

131
1．2.5Y4/2　暗灰黄　粗～極粗砂混砂質シルト　10YR4/4　褐　粗～極粗砂混砂質シルトブロック(15～10mm)含む
2．10YR4/4　褐　粗～極粗砂混砂質シルト　2.5Y4/2　暗灰黄　粗～極粗砂混砂質シルトブロック(10～20mm)含む　中礫(20～30mm)含む

132
1．2.5Y4/2　暗灰黄　粗砂混砂質シルト　炭粒(１～２mm)少量含む
2．10YR4/4　褐　中～粗砂混砂質シルト　10YR4/3　オリーブ褐　粗砂混シルト質ブロック(５～８mm)含む　中礫(30mm)少量含む　大礫(100mm)少量含む　炭粒(３～５mm)少量含む

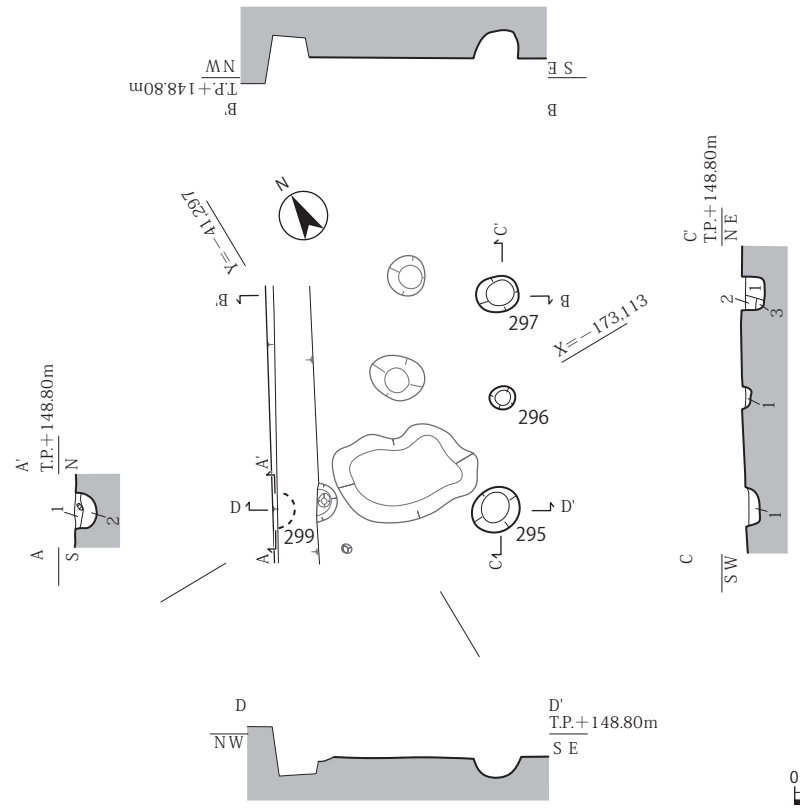
133
1．10YR4/3　にぶい黄褐　粗砂混砂質シルト　10YR4/4　褐　粗砂混砂質シルトブロック(10～15㎜)含む　中礫(50～60㎜)多く含む

図24　掘立柱建物5　平・断面



290
1．2.5Y4/2　暗灰黄　中砂～細礫混砂質シルト
2．10YR4/4　褐　中砂混砂質シルト
　2.5Y4/2　暗灰黄　中砂混砂質シルトブロック（5～15㎜）含む
3．2.5Y4/2　暗灰黄　中砂混砂質シルト
　10YR4/4　褐　中砂混砂質シルトブロック（10㎜）含む
291
1．10YR3/2　黒褐　中～粗砂混砂質シルト
　極粗砂・炭粒（5mm）含む
2．10YR3/2　黒褐　中～粗砂混砂質シルト
3．10YR4/4　褐　中砂混砂質シルト
　10YR3/2　黒褐　中砂混砂質シルトブロック（3～5㎜）含む
292
1．2.5Y4/2　暗灰黄　中砂～細礫混砂質シルト
2．2.5Y4/2　暗灰黄　中砂混砂質シルト
293
1．10YR4/3　にぶい黄褐　中～粗砂混砂質シルト
　10YR4/6　褐　砂質シルトブロック（10㎜）含む
2．10YR3/4　暗褐　粗砂混砂質シルト
　10YR4/6　褐　砂質シルトブロック（10㎜）含む

図 25　掘立柱建物 6　平・断面



295
1．10YR4/4　褐　中～粗砂混砂質シルト
　2.5Y4/2　暗灰黄　中砂混砂質シルト
　ブロック（10㎜）・細～中礫（2～8㎜）含む
296
1．10YR4/4　褐　中～粗砂混砂質シルト
　2.5Y4/2　暗灰黄　中砂混砂質シルト
　ブロック（10㎜）・細～中礫（2～8㎜）含む
297
1．10YR3/2　黒褐　中～極粗砂混砂質シルト
　10YR4/4　褐　中砂 混砂質シルト
　ブロック（10～15㎜）・細礫含む
2．10YR4/4　褐　中砂混砂質シルトと
　10YR3/2　黒褐　中～極粗砂混砂質シルト
　ブロック（15～30㎜）混じる
3．10YR4/4　褐　中砂混砂質シルト
299
1．10YR4/2　灰黄褐　中～粗砂混砂質シルト
　細礫含む
2．10YR4/6　褐　中砂混砂質シルト
　10YR4/2　灰黄褐　砂質シルト
　ブロック（5㎜）含む

図 26　掘立柱建物 7　平・断面

掘立柱建物６（図 18・19・25、図版 10）

２区南端で検出した。東西棟の建物である。主軸は 34°東に偏り、掘立柱建物５と同軸である。291 柱穴は 309 ピットと重複し先行する。検出した建物規模は桁行１間（1.59 m）、梁行２間（3.4 m）でさらに西妻側が調査区外西側にのびる。

掘方平面形は、隅丸長方形を呈し、規模は長辺 0.45 ～ 0.65 m、短辺 0.35 ～ 0.58 m、深さ 0.10 ～ 0.30 m、梁行の 291 柱穴は一回り小さい。掘方底面の標高は T.P. ＋ 148.2 ～ 148.3 mである。293 柱穴を除く柱穴から柱痕跡を検出し、いずれも柱当りの部分が一段深い。掘方埋土は黒褐色から暗灰黄色中砂から細礫混じり砂質シルトを主体とし、基盤層由来のブロックが混じる。

遺物は 290 柱穴から須恵器壺片・土師器甕片が出土したが細片のため実測しえなかった。そのため建物の時期は出土遺物からは明らかにできないが、柱穴と重複する 309 ピットの時期から８世紀後半を下らない。

掘立柱建物７（図 18・19・26、図版 10）

２区南端で検出した。東西棟の建物で、主軸は 31°東に偏る。検出した建物規模は桁行１間（2.3 m）、梁行２間（2.2 m）でさらに東妻側が調査区外西側にのびる。

掘方平面形は、円形を呈し、規模は直径 0.27 ～ 0.50 m、深さ 0.10 ～ 0.27 m、梁行の 296 柱穴は一回り小さい。掘方底面の標高は T.P. ＋ 148.35 ～ 148.45 mである。297 柱穴から柱痕跡を検出した。掘方埋土は基盤層の中砂から粗砂混じり砂質シルトを主体とし黒褐色中砂から極粗砂混じり砂質シルトが混じる。

遺物は出土していない。

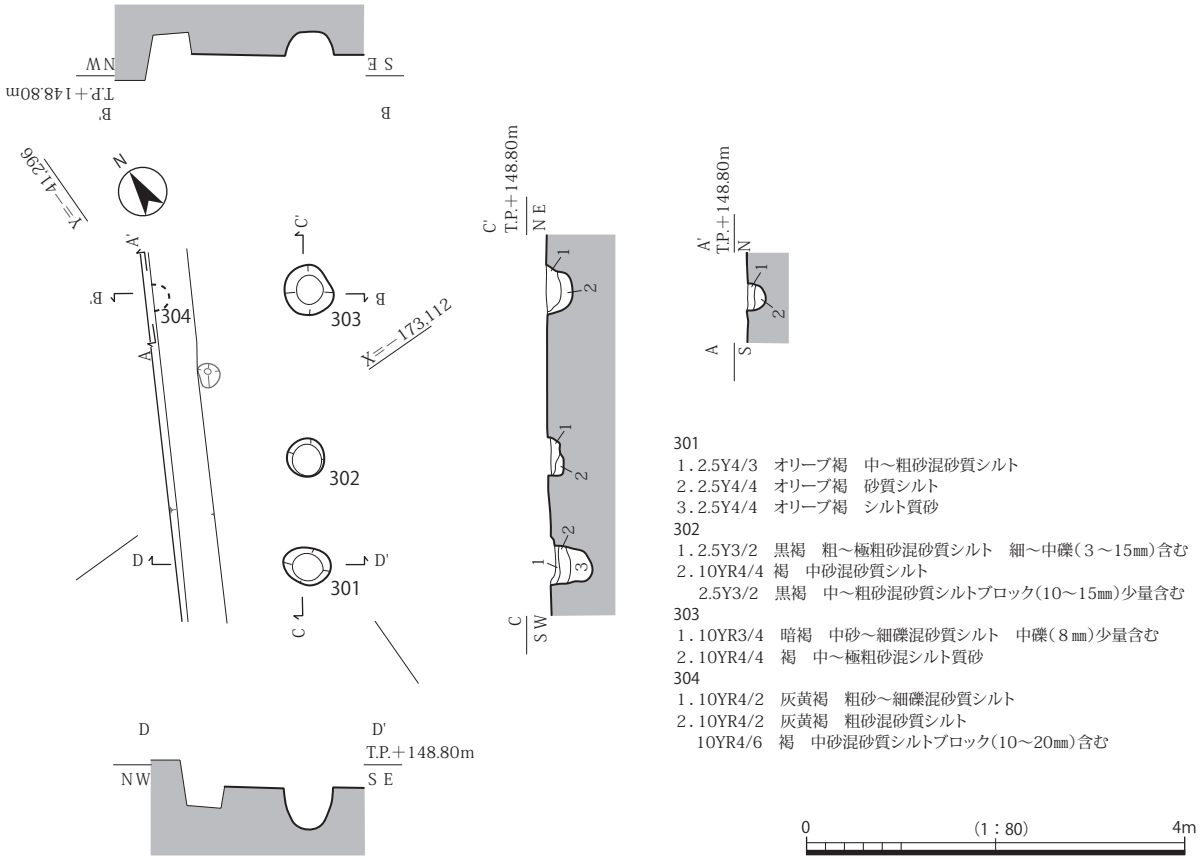


図 27　掘立柱建物８　平・断面

掘立柱建物８（図 18・19・27、図版 10）

２区南端で検出した。東西棟の建物である。主軸は 31°東に偏り、掘立柱建物７と同軸である。この建物は掘立柱建物７と同軸で重複しており、新旧は不明であるが建て替えの可能性が考えられる。

検出した建物規模は桁行１間（1.6 m）、梁行２間（2.8 m）でさらに西妻側が調査区外西側にのびる。掘方平面形は、円形もしくはやや楕円形を呈し、規模は直径 0.38 ～ 0.50 m、深さ 0.19 ～ 0.44 mである。隅柱の 301・303 柱穴はやや大きく深い。掘方底面の標高は T.P. ＋ 148.10 ～ 148.33 mである。掘方埋土は基盤層の中砂から極粗砂混じり砂質シルトからシルト質砂を主体とし黒褐色～灰黄褐色中砂から細礫混じり砂質シルトが混じる。

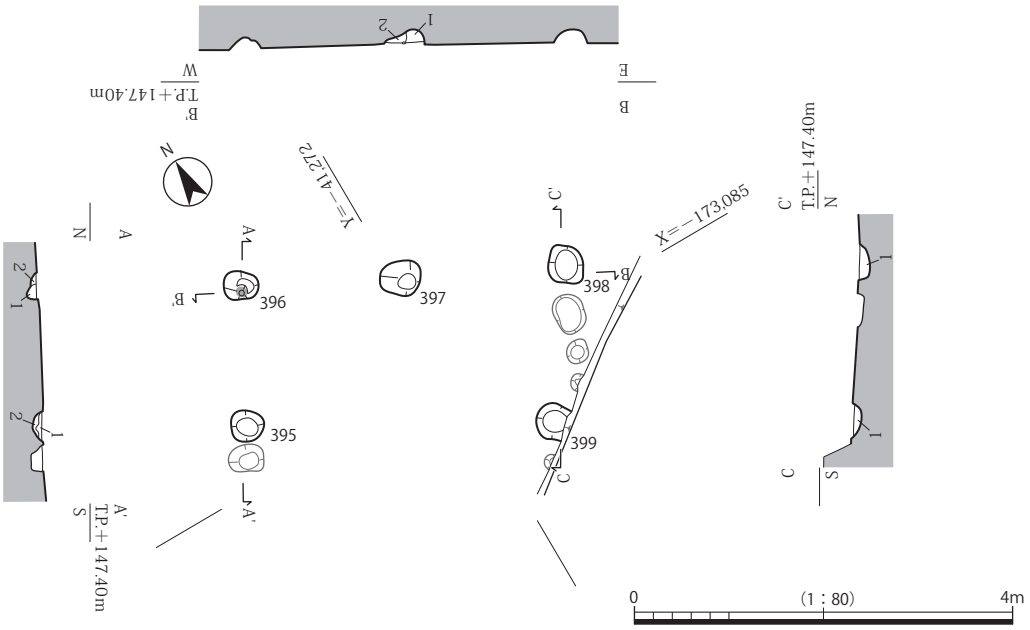
遺物は出土していないため詳細な時期は不明であるが、この建物は掘立柱建物６とほぼ同軸で、且つ東側の柱筋がほぼ揃うことから同時期に存在したと考えると８世紀後半を下らない。

掘立柱建物９（図 18・19・28）

２区中央付近で検出した。南北棟の建物である。主軸は 33°東に偏り、概ね掘立柱建物５・６と同軸である。

検出した建物規模は桁行１間（1.6 m）、梁行２間（3.4 m）で西側桁行は削平により南側が残存せず、東側桁行は調査区外南側に広がる。掘方平面形は、方形を呈し、規模は一辺 0.35 ～ 0.40 m、深さ 0.07 ～ 0.15 mである。掘方底面の標高は T.P. ＋ 146.80 ～ 146.90 mである。掘方埋土はオリーブ褐色から暗褐色粗砂から細礫混じり砂質シルトを主体とし基盤層が混じる。

遺物は 398 柱穴から須恵器甕片、399 柱穴から須恵器杯身片が出土したが、いずれも細片のため詳細な時期は明らかでない。

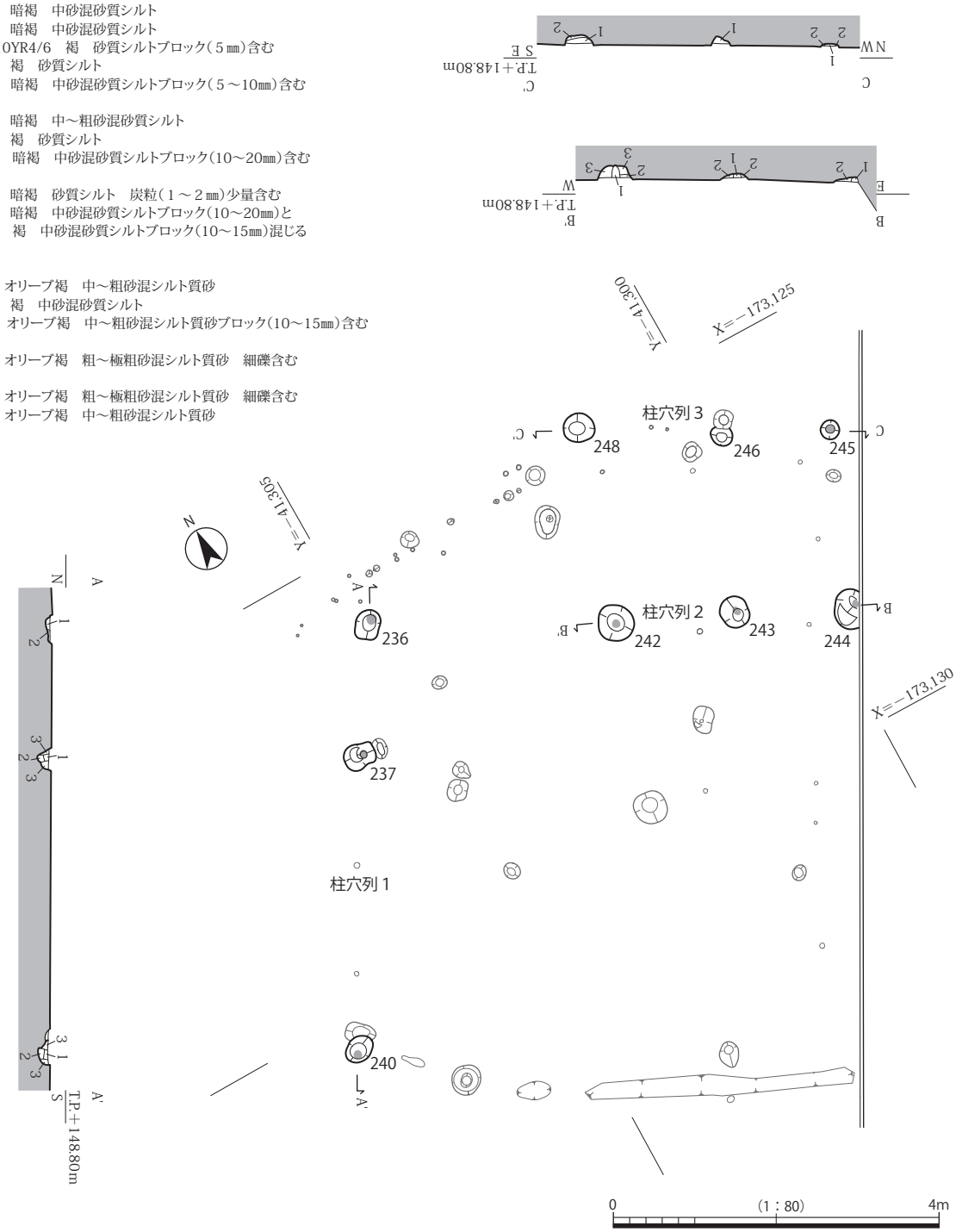


395
1．2.5Y4/3　オリーブ褐　粗砂～細礫混砂質シルト
2．10YR4/6　褐　粗～極粗砂混シルトと
　2.5Y4/4　オリーブ褐　粗～極粗砂混砂質シルト混じる
396
1．2.5Y4/3　オリーブ褐　粗～極粗砂混砂質シルト
2．10YR4/6　褐　粗～極粗砂混シルトと
　2.5Y4/4　オリーブ褐　粗～極粗砂混砂質シルト混じる

397
1．10YR3/3　暗褐　粗～極粗砂混砂質シルト
2．10YR3/3　暗褐　粗～極粗砂混砂質シルト
　10YR4/6　褐　粗砂～細礫混砂質シルト含む
398
1．10YR4/2　灰黄褐　粗砂～細礫混砂質シルト
399
1．10YR4/2　灰黄褐　粗砂～細礫混砂質シルト

図 28　掘立柱建物９　平・断面

柱穴列２
242
１.10YR3/4　暗褐　中砂混砂質シルト
２.10YR3/4　暗褐　中砂混砂質シルト
　極粗砂・10YR4/6　褐　砂質シルトブロック（５㎜）含む
３.10YR4/6　褐　砂質シルト
　10YR3/4　暗褐　中砂混砂質シルトブロック（５～10㎜）含む
243
１.10YR3/3　暗褐　中～粗砂混砂質シルト
２.10YR4/6　褐　砂質シルト
　10YR3/4　暗褐　中砂混砂質シルトブロック（10～20㎜）含む
244
１.10YR3/3　暗褐　砂質シルト　炭粒（１～２㎜）少量含む
２.10YR3/3　暗褐　中砂混砂質シルトブロック（10～20㎜）と
　10YR4/6　褐　中砂混砂質シルトブロック（10～15㎜）混じる
柱穴列３
245
１.2.5Y4/6　オリーブ褐　中～粗砂混シルト質砂
２.10YR4/6　褐　中砂混砂質シルト
　2.5Y4/6　オリーブ褐　中～粗砂混シルト質砂ブロック（10～15㎜）含む
246
１.2.5Y4/6　オリーブ褐　粗～極粗砂混シルト質砂　細礫含む
248
１.2.5Y4/6　オリーブ褐　粗～極粗砂混シルト質砂　細礫含む
２.2.5Y4/6　オリーブ褐　中～粗砂混シルト質砂



柱穴列１
236
１.10YR4/3　にぶい黄褐　中～粗砂混砂質シルト
２.10YR4/6　褐　中砂混シルト　10YR4/3　にぶい黄褐　中～粗砂混砂質シルトブロック（10～15㎜）含む
237
１.10YR4/2　灰黄褐　粗砂混砂質シルト　極粗砂含む
２.10YR4/2　灰黄褐　砂質シルト　粗砂含む
３.10YR4/2　灰黄褐　粗～極粗砂混砂質シルト　細礫含む
240
１.10YR3/4　暗褐　粗砂混砂質シルト
２.10YR3/4　暗褐　粗砂混砂質シルト　10YR4/3　にぶい黄褐　中砂混砂質シルトブロック（20㎜）含む
３.10YR3/4　暗褐　中砂混砂質シルト　10YR4/6　褐　中砂混砂質シルトブロック（５～10㎜）含む

図 29　柱穴列１～３　平・断面

柱穴列１（図 17・29、図版 10）

１区東端で検出した。南北方向の３基からなり、主軸は 31°東に偏る。掘方平面形は、長方形を呈し、規模は長辺 0.30 ～ 0.37 m、短辺 0.28 m、深さ 0.09 ～ 0.12 mである。

遺物は 236 柱穴から土師器甕片が出土したが細片のため実測しえなかった。

柱穴列２（図 17・29、図版 10）

１区東端で検出した。東西方向の４基からなり、柱穴列１と直交する。掘方平面形は、円形を呈し、規模は直径 0.37 ～ 0.42 m、深さ 0.09 ～ 0.17 mである。

遺物は 244 柱穴から須恵器杯片が出土したが細片のため実測しえなかった。

柱穴列３（図 17・29、図版 10）

１区東端で検出した。東西方向の３基からなり、柱穴列２から北に 2.2 mに位置し並行する。掘方平面形は、円形を呈し、規模は直径 0.21 ～ 0.37 m、深さ 0.11 ～ 0.17 mである。

遺物は 248 柱穴から土師器杯・甕片が出土したが細片のため実測しえなかった。

柱穴列４（図 18、図版 10）

２区南側の 13G － 9 a で検出した。東西方向の４基からなる。掘方平面形は、円形を呈し、規模は一辺 0.20 ～ 0.28 m、深さ 0.10 ～ 0.17 mである。遺物は 351 柱穴から土師器甕片が出土したが細片のため実測しえなかった。

173 ピット（図 17・31、図版 11・34）

１区東側で検出し、202 ピットと重複し先行する。掘方平面形は、隅丸方形を呈し、規模は一辺 0.70 m、深さ 0.25 mである。埋土は暗褐色粗砂混じり砂質シルトと基盤層の褐色砂質シルトが混じる。

遺物は須恵器杯、土師器杯・甕が出土し、そのうち１点を実測した。１は２層の掘方から出土した須恵器杯蓋である。外面全体にオリーブ灰色の自然釉が厚く付着する。かえり内面に焼成時に付着した別個体の口縁端部片が残る。

時期は出土遺物から７世紀中葉と考えられる。

202 ピット（図 17・31、図版 11・34）

１区東側で検出し、173 ピットと重複し後出する。掘方平面形は、隅丸長方形を呈し、規模は長辺 0.63 m、短辺 0.51 m、深さ 0.10 mである。埋土は暗褐色中砂もしくは粗砂混じり砂質シルトと基盤層に由来する砂質シルトである。

遺物は須恵器杯、土師器杯・鉢・甕が出土し、そのうち３点を実測した。３は須恵器杯身で体部下半から底部にかけて回転ヘラケズリを行う。

５・６は土師器で５は杯、６は鉢である。５は内外面ともに剥離により調整は不明瞭だが、内面にヘラミガキが一部残存する。６は口縁部が直立し、端部は内傾する。調整は外面口縁端部が横方向のナデ、口縁部から底部にかけて内外面ともにヘラミガキを行う。外面の口縁部から体部に煤が付着する。

時期は出土遺物から８世紀前半と考えられる。

208 ピット（図 17・31）

１区東側で検出し、209 ピットと重複し後出する。掘方平面形は、不整形な方形を呈し、規模は一辺 0.50 ～ 0.53 m、深さ 0.20 mである。埋土は黒褐色粗砂混じり砂質シルトと基盤層に由来する砂質シルトである。

遺物は須恵器杯、土師器杯・甕が出土し、そのうち2の須恵器杯蓋を実測した。調整は、頂部外面が

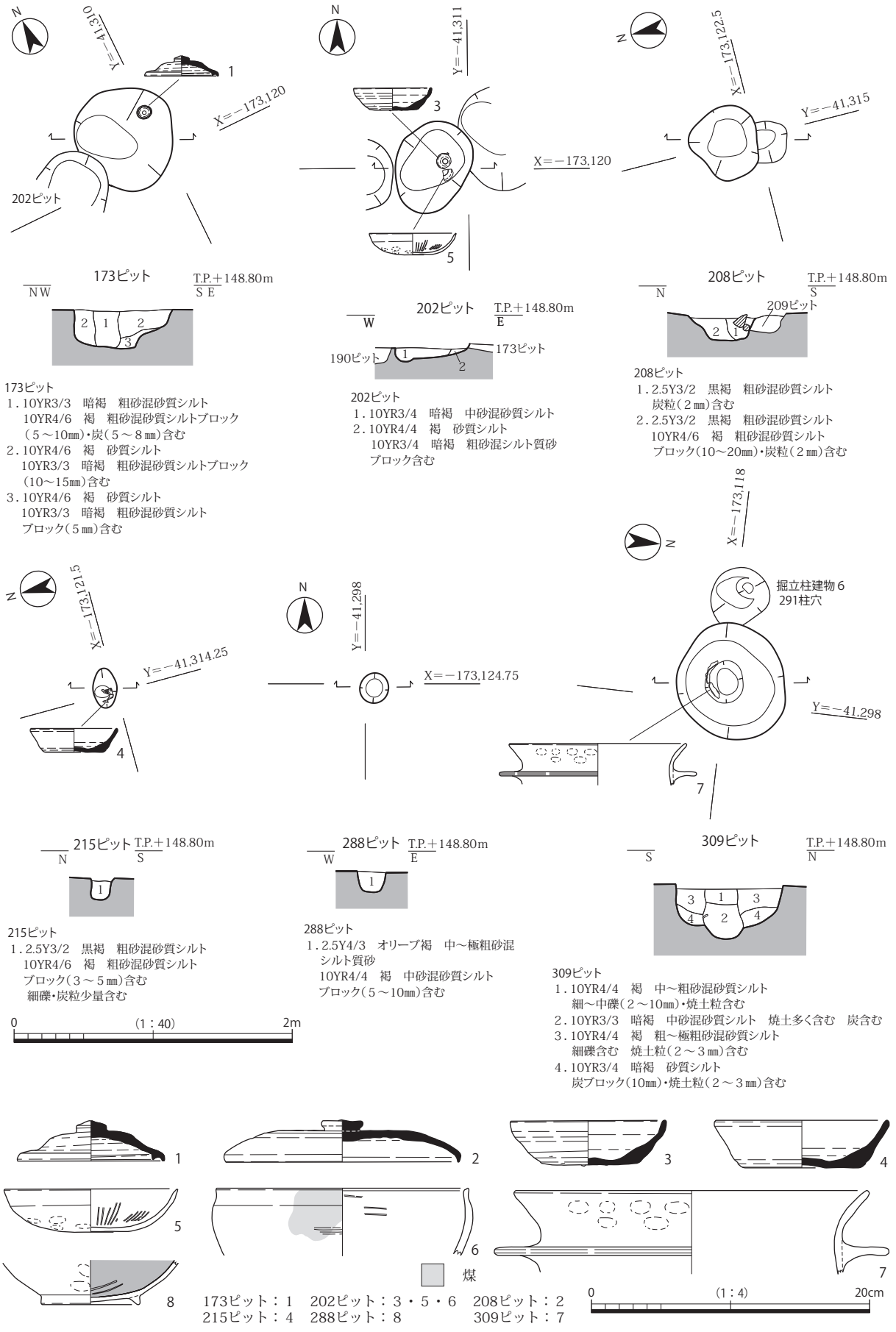


図 31　173・202・208・215・288・309 ピット　平・断面・遺物実測

回転ヘラケズリ後ナデを行う。口縁部付近外面のみ重ね焼きにより濃い灰色を呈する。

時期は8世紀中葉に比定される。

215ピット（図17・31、図版11）

1区東側で検出した。掘方平面形は、楕円形を呈し、規模は長辺0.30 m、短辺0.17 m、深さ0.15 mである。埋土は黒褐色粗砂混じり砂質シルトに基盤層のブロックが混じる。

遺物は須恵器杯身・蓋、土師器杯が出土し、そのうち4の8世紀前半の須恵器杯身を実測した。

288ピット（図18・31）

2区東南端で検出した。掘方平面形は、円形を呈し、規模は直径0.20 m、深さ0.12 mである。埋土はオリーブ褐色中砂から極粗砂混じりシルト質砂に基盤層のブロックが混じる。

遺物は土師器甕、黒色土器椀が出土し、そのうち8の黒色土器椀を実測した。調整は、外面は摩滅により不明、内面は黒化処理し、調整は摩滅により不明瞭であるがヘラミガキを行う。10世紀前半に比定される。

309ピット（図18・31、図版11）

2区南側で検出し、掘立柱建物6の291柱穴と重複し後出する。掘方平面形は、円形を呈し、規模は直径0.80 m、深さ0.40 mである。

埋土は中～極粗砂混じり砂質シルトや砂質シルトを主体とする。柱痕に沿うように土師器羽釜が出土し、2層は層全体に焼土を多く含む。

遺物は須恵器杯、土師器羽釜が出土し、そのうち7の土師器羽釜を実測した。胎土は生駒山西麓産である。8世紀後半に比定される。

8土坑（図17・32）

1区西側で検出した。平面形は不整形な長方形を呈し、規模は長辺1.10 m、短辺0.60 m、深さ0.09 mである。埋土は粗砂混じり砂質シルトにシルト質砂ブロックを含む。遺物は出土していない。

9土坑（図17・32）

1区西側で検出した。全体平面形・規模は南半が調査区外に広がるため不明であるが、検出規模は長辺1.80 m、短辺0.32 m、深さ0.15 mである。

埋土は2層に分けられ、第5層の黒褐色粗砂混じり粘土質シルトを主体とし2層には基盤層のブロックを含む。遺物は出土していない。

25土坑（図17・32、図版11）

1区中央で検出した。平面形は楕円形を呈し、規模は長辺2.07 m、短辺0.75 m、深さ0.40 mである。

埋土は3層に分けられ、3層は砂質シルトに基盤層のブロックを含む。2層は基盤層に1・3層や第4層のブロックが多く混じり、1層は粗砂から極粗砂混じり砂質シルトである。遺物は出土していない。

27土坑（図17・32）

1区中央で25土坑から3.5 m北西に並行して検出した。平面形は楕円形を呈し、規模は長辺3.10 m、短辺1.05 m、深さ0.43 mである。

埋土は4層に分けられ、3・4層は粘土質シルト、2層は粗砂混じり砂質シルト、1層は第4層に類似する層が堆積する。遺物は土師器杯が出土したが細片のため実測しえなかった。

30土坑（図17・33）

1区中央で検出した。平面形は不整形な隅丸方形を呈し、規模は一辺1.15 m、深さ0.25 mである。

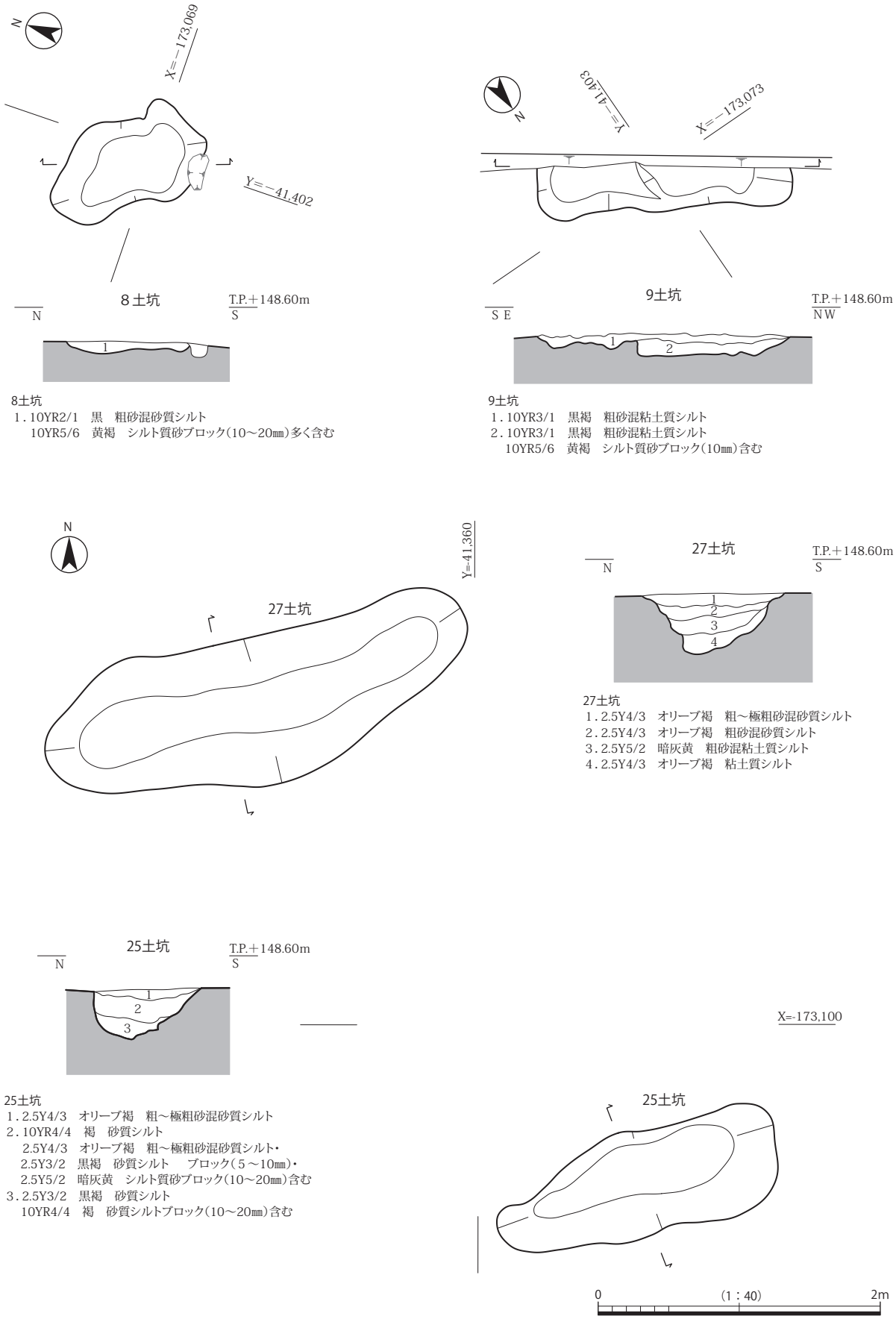


図 32　8・9・25・27 土坑　平・断面

埋土は３層に分けられ、３層は基盤層に２層のブロックを含む。２層は粘土質シルトに基盤層のブロックを含む。１層は第４層に類似する層が堆積する。遺物は出土していない。

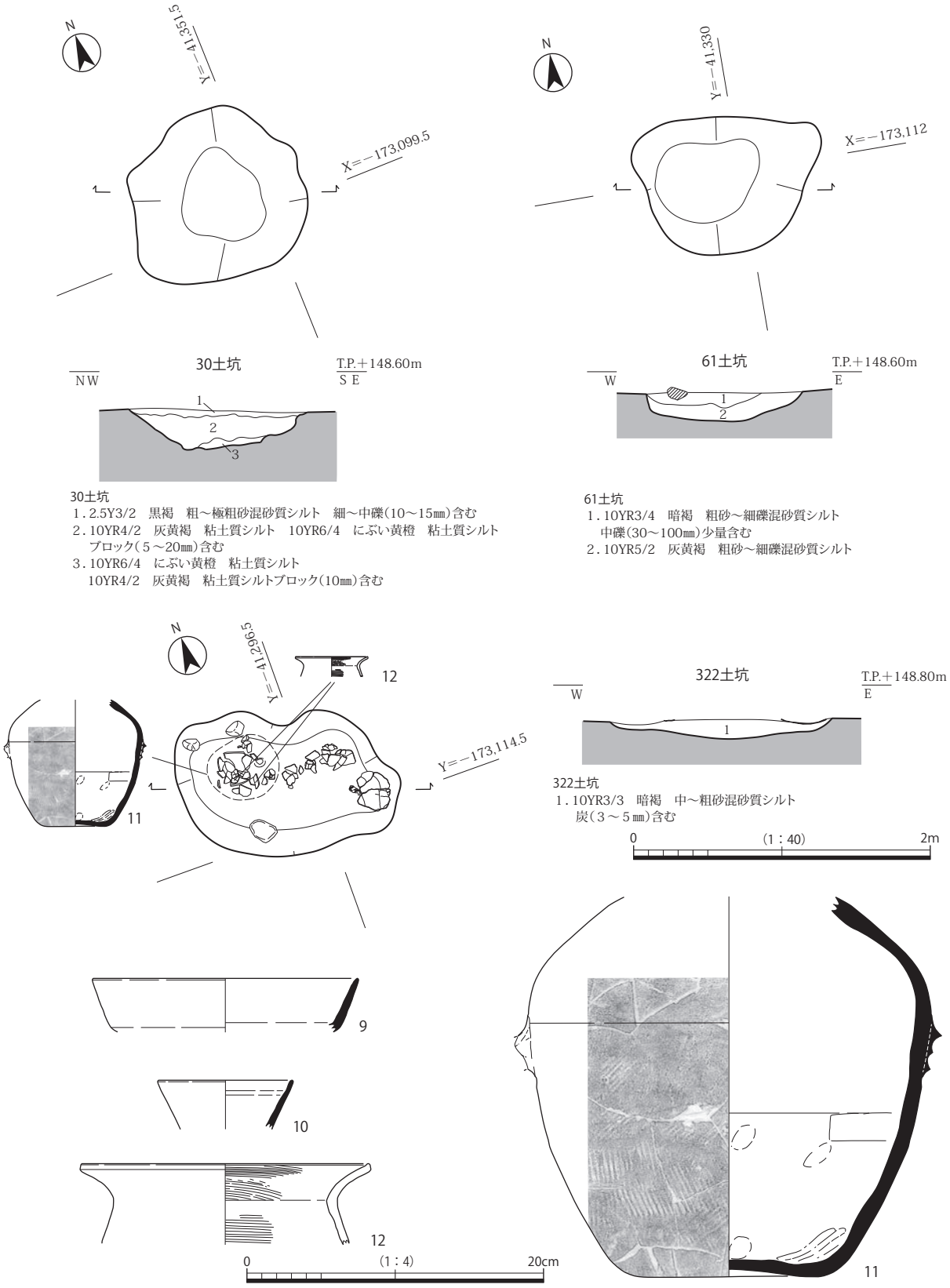


図 33　30・61・322 土坑　平・断面、322 土坑　遺物実測

61 土坑（図 17・33）

１区東側で検出した。平面形は不整形な長方形を呈し、規模は長辺 1.20 m、短辺 0.90 m、深さ 0.20 mである。埋土は２層に分けられ、いずれも粗砂から細礫混じり砂質シルトで１層より２層は細礫を多く含む。遺物は出土していない。

322 土坑（図 18・33、図版 11・34）

２区南側で検出した。平面形は不整形な長方形を呈し、規模は長辺 1.30 m、短辺 0.90 m、深さ 0.15 mである。埋土は中砂から粗砂混じり砂質シルトである。

土坑内からは須恵器杯蓋・杯身・壺・甕、土師器杯・甕の遺物がまとまって出土した。そのうち4点を実測した。

９～ 11 は須恵器で９は杯身、10・11 は壺である。10 は口縁部内外面に自然釉が掛かる。11 の調整は体部上半が内外面ともに回転ナデ、体部下半は外面がタタキ後ナデ、内面はユビオサエ後ナデを行う。肩部に自然釉が掛かり、溶着物がある。

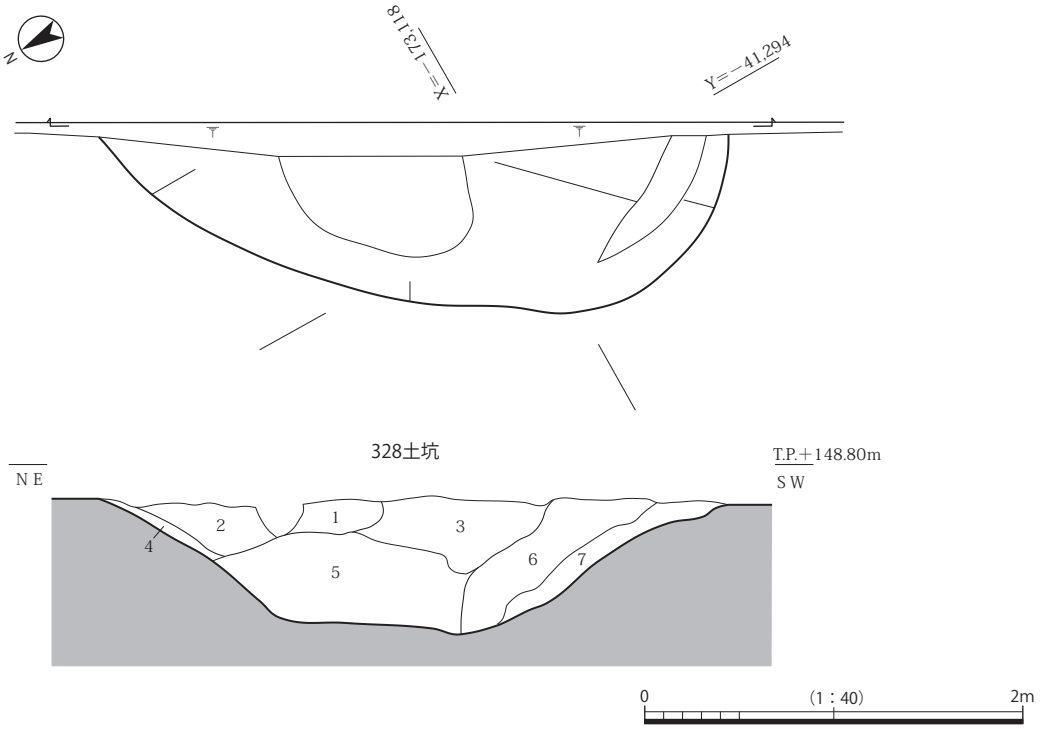
12 は土師器甕で調整は、外面が摩滅により不明、内面はハケを行う。

時期は出土遺物から８世紀前半に比定される。

328 土坑（図 18・34）

２区南側の東壁際で検出した。土坑東半が調査区外に広がるため全体平面形・規模は不明であるが、検出規模は長辺 3.30 m、短辺 0.83 m、深さ 0.53 mである。

埋土は７層に分けられ、７層は基盤層の中砂混じり砂質シルトと礫が混じる崩落土である。６層は



328土坑
1．10YR4/3　にぶい黄褐　シルト質砂混細～中礫（２～15㎜）
2．10YR3/2　黒褐　粗～極粗砂混砂質シルト
3．10YR4/3　にぶい黄褐・10YR4/4　褐　中砂混砂質シルト　細～中礫（２～６㎜）含む
4．2.5Y4/2　暗灰黄　粗～極粗砂混砂質シルト
5．2.5Y4/2　暗灰黄　粗砂混砂質シルトブロック（30～80㎜）と10YR4/4　褐　中砂混砂質シルトブロック（50～100mm）混じる　細～中礫（２～８㎜）含む
6．10YR3/2　黒褐　中砂混砂質シルトブロック（50～100㎜）と10YR4/4　褐　中砂混砂質シルトブロック（50～100㎜）混じる
7．10YR4/4　褐　中砂混砂質シルトと細～中礫（２～８㎜）混じる

図 34　328 土坑　平・断面

基盤層のブロックと黒褐色中砂混じり砂質シルトブロックが混じりあう層で人為的な埋め戻し土と見られる。この６層堆積以降に掘り直しがされ、その後に堆積したのが５～３層である。５層は暗灰黄色粗砂混じり砂質シルトと基盤層のブロック土が混じりあう埋め戻し土である。４層は粗砂から極粗砂混じり砂質シルト、３層は中砂混じり砂質シルトである。３層堆積後に再度掘り直しがされ、２層の粗砂から極粗砂混じり砂質シルト、１層のシルト質砂が混じる細礫から中礫により埋め戻される。

遺物は上層から須恵器杯・甕、土師器杯・甕が出土したが、細片のため実測しえなかった。

348 土坑（図 18・35、図版 11・34）

２区東側で検出し、西端の一部は第３層に伴う溝状耕作痕に壊される。全体平面形・規模は土坑東半が調査区外に広がるため不明であるが、検出規模は長辺 1.20 m、短辺 0.90 m、深さ 0.15 mである。

埋土は中砂から細礫が混じる砂質シルトと中砂から粗砂混じり砂質シルトブロックが混じる。

遺物は須恵器杯、土師器杯・甕が出土し、３点を実測した。13・14 は須恵器で 13 は杯蓋、14 は杯である。13 は外面全体にオリーブ灰色の自然釉が掛かる。14 は底部内面に不定方向のナデを行い、粘土接合痕が残る。

15 は土師器杯である。調整は外面の口縁部上半が横方向のナデ、下半から底部がユビオサエ後ナデ、内面はヘラミガキを行う。

時期は出土遺物から７世紀後葉に比定される。

407 土坑（図 18・36）

２区中央東壁際で検出した。東半が調査区外のため全体平面形・規模は不明であるが、検出規模は長辺 2.84 m、短辺 0.56 m、深さ 0.27 mである。

埋土は２層に分けられ、２層は極粗砂から細礫混じり砂質シルト、１層は粗砂から細礫混じり砂質シルトで１層は細礫が多く混じる。遺物は出土していない。

417 土坑（図 18・36、図版 34）

２区中央北壁際で検出した。北端は側溝により壊されるが平面形は円形を呈すると推定され、検出規模は直径 1.15 m、深さ 0.17 mである。

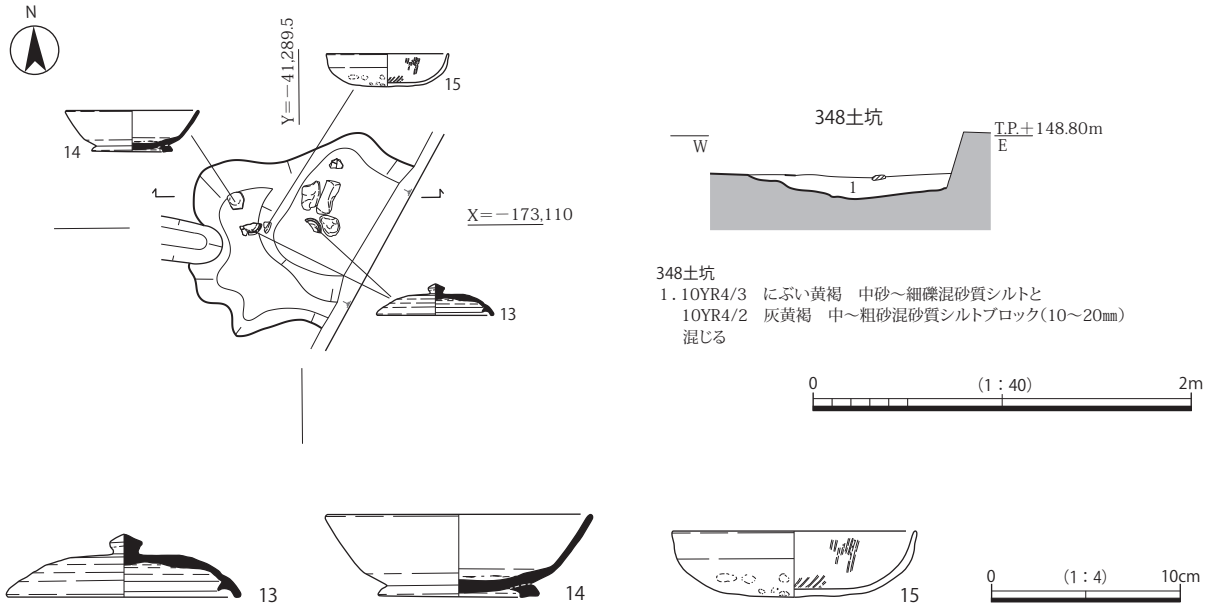


図 35　348 土坑　平・断面・遺物実測

埋土は基盤層の中砂混じり砂質シルトに第５層に類似する中砂から粗砂混じり砂質シルトが混じる。

遺物は 16 の瓦器椀が出土した。16 は口縁端部が丸く、高台は断面三角形をなす。調整は外面がユビオサエ後雑なヘラミガキ、内面は口縁部にヘラミガキ、見込みに格子状暗文を施す。

時期は 12 世紀前半に比定される。

439 土坑（図 18・36）

２区中央で検出した。平面形は楕円形を呈し、規模は長辺 1.00 m、短辺 0.78 m、深さ 0.19 mである。埋土は中砂混じり砂質シルトである。

遺物は土師器杯・甕片が出土したが細片のため実測しえなかった。

446 土坑（図 18・36）

２区中央で検出した。平面形は不整形な長方形を呈し、規模は長辺 0.80 m、短辺 0.55 m、深さ 0.20

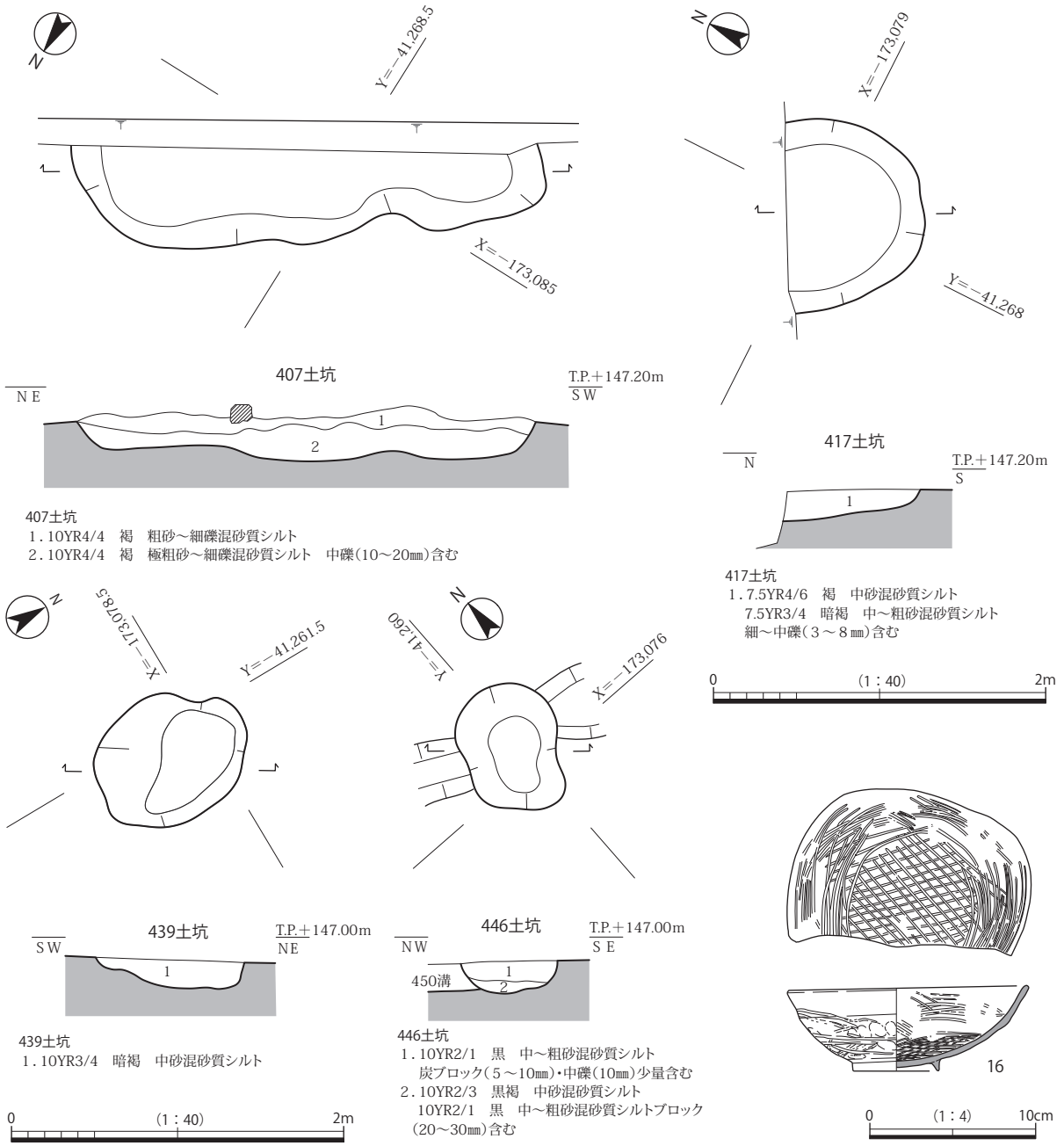


図 36　407・417・439・446 土坑　平・断面、417 土坑　遺物実測

mである。

埋土は２層に分けられ、２層は中砂混じり砂質シルトに１層のブロックが混じる。１層は中砂から粗砂混じり砂質シルトで層全体に炭が混じる。遺物は出土していない。

11・12 溝（図 17・37）

１区西側で検出した。2条の溝は並行して南北方向に延び、調査区外南側に続く。規模は 11 溝が幅 0.60 m、深さ 0.20 ～ 0.40 mで南側へ深くなる。12 溝は幅 0.80 ～ 1.35 m、深さ 0.20 mである。

埋土はいずれも第５層の粗砂から極粗砂混じり粘土質シルトやシルト質砂に基盤層のブロック土が混じる埋め戻し土である。遺物は出土していない。

34 溝（図 17・37、図版 12）

１区中央で検出した。北東から南西方向に延び、調査区外に続く。規模は幅 1.50 ～ 1.70 m、深さ 0.20 mである。溝を挟んで東側が西側より 0.15 m低い。

埋土は４層に分けられ、４層堆積後に掘り直しされたと見られる。いずれも粗砂から極粗砂混じり

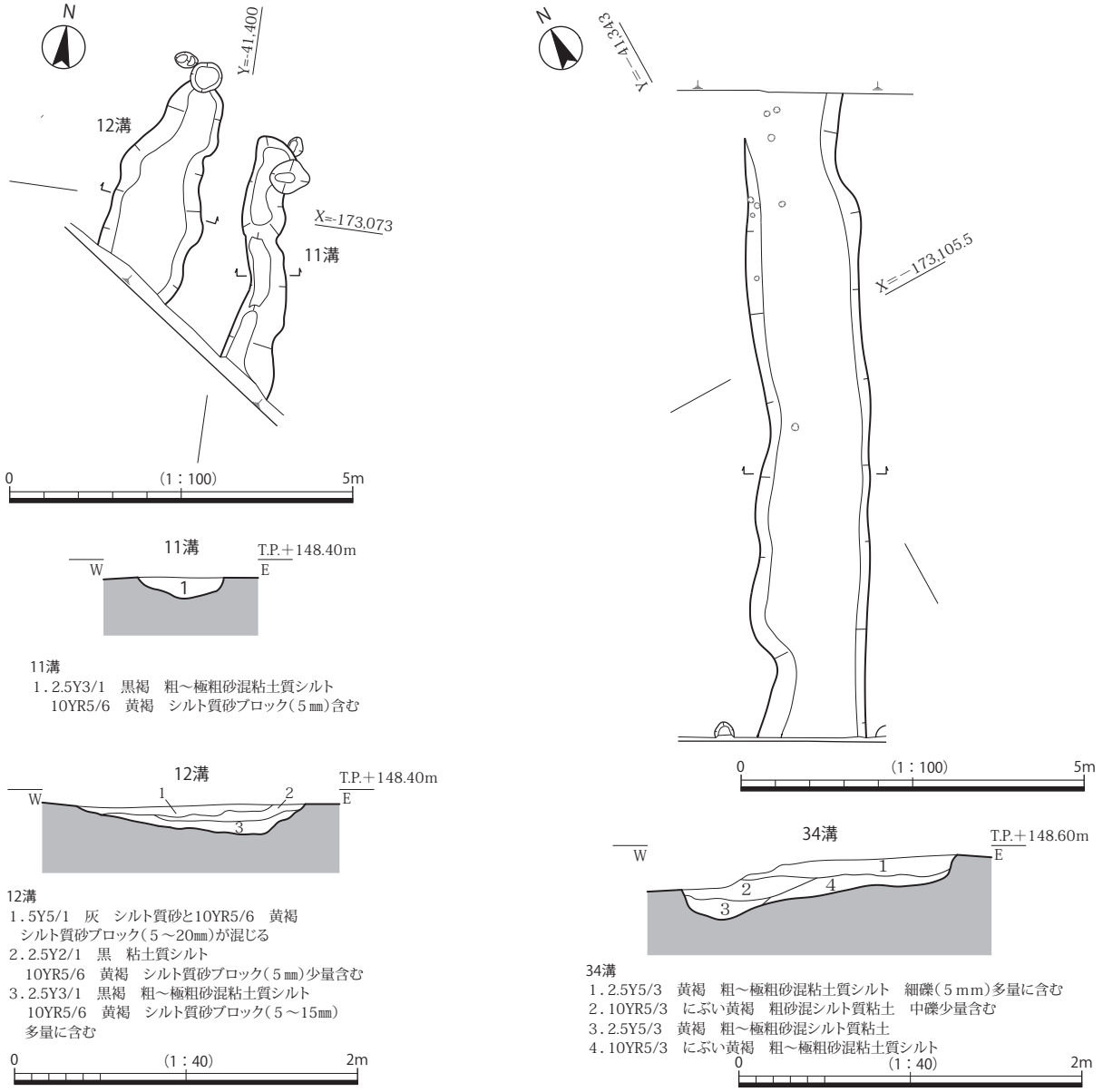


図 37　11・12・34 溝　平・断面

粘土質シルトで 1 層には細礫を多く含む。遺物は出土していない。

この溝は現在の水田区画境とほぼ同位置で、区画の高低差も同様に西から東に低くなる。このことから溝は、時期は不明ながらも耕作にともなう区画溝もしくは水路と考えられる。

443 溝（図 18・38・39、図版 12・34）

２区中央で検出した。北西から南東方向に延び、調査区外に続く。規模は幅 0.30 ～ 1.50 m、深さ 0.10 mである。埋土は第 5 層の中砂から粗砂混じり砂質シルトで細礫を多く含む。

遺物は須恵器杯、土師器杯・甕、不明土製品が出土し、そのうち 2 点を実測した。17 は須恵器杯身である。

18 は土師質の不明土製品である。円形に廻る突帯の下部に先端が尖る三角錐の形状をなすものが取り付く。三角錐部分の表面にハ字状に粘土帯が貼り付くのが特徴的で、裏面はユビオサエ調整である。円面硯の脚部であろうか。

時期は出土遺物から 7 世紀後半に比定される。

448 溝（図 18・38・39、図版 12・34）

２区中央の 443 溝の北に 7 mで検出し、北西から南東方向に延び調査区外に続く。449・450・451 溝と重複し、いずれの溝より後出する。規模は幅 3.80 ～ 5.70 m、深さ 0.10 ～ 0.33 mである。溝の検出面の高さは西側が東側より 0.15 m高い。

埋土は 2 層に分けられ、2 層は基盤層の中砂混じり砂質シルト、1 層は第 5 層の中砂から粗砂混じり砂質シルトである。

遺物は須恵器皿・壺・甕、土師器杯・甕、製塩土器 4 点（31.92 g）が出土し、そのうち 2 点を実測した。19 は須恵器皿で底部外縁は回転ヘラケズリを行う。

20 は製塩土器である。器壁は厚く、調整は外面が摩滅により不明瞭であるがユビオサエ、内面は粘土紐接合痕をとどめ、横方向の強いナデを行う。

時期は出土遺物から 8 世紀後半に比定される。

449 溝（図 18・38・39、図版 12・34）

２区中央で検出した。周辺の 443・451・450・448 溝が北西から南東方向に延びるのに対して、この溝は北東から南西方向に延び、調査区外に続く。448 溝と重複し、先行する。規模は幅 2.30 ～ 3.00 m、深さ 0.15 mである。

埋土は 2 層に分けられ、2 層は黒褐色砂質シルト、1 層は第 5 層の中砂から粗砂混じり砂質シルトである。

遺物は須恵器杯・鉢・甕、土師器杯・甕が出土し、土師器甕には胎土が生駒山西麓産のものが多く含まれる。6 点を実測した。21 ～ 25 は須恵器で 21 ～ 23 は杯蓋、24 は杯身、25 は鉢である。21 のつまみは扁平で、頂部は回転ヘラケズリを行う。22・23 は口縁部が屈曲し、22 の頂部は平らで回転ヘラケズリを行う。23 は重ね焼きにより口縁部付近は他所より色調が濃い。25 はいわゆる鉄鉢形で口縁部は内彎する。

26 は土師器蓋と見られるが器種は不明である。口径 24㎝と大型の蓋で器厚 0.9㎝で厚みがある。

時期は出土遺物から 8 世紀後半と考えられる。

450・451 溝（図 18・38、図版 12）

２区中央の 443 溝と並行して検出した。2 条の溝は北西から南東方向に並行して延び、調査区外に

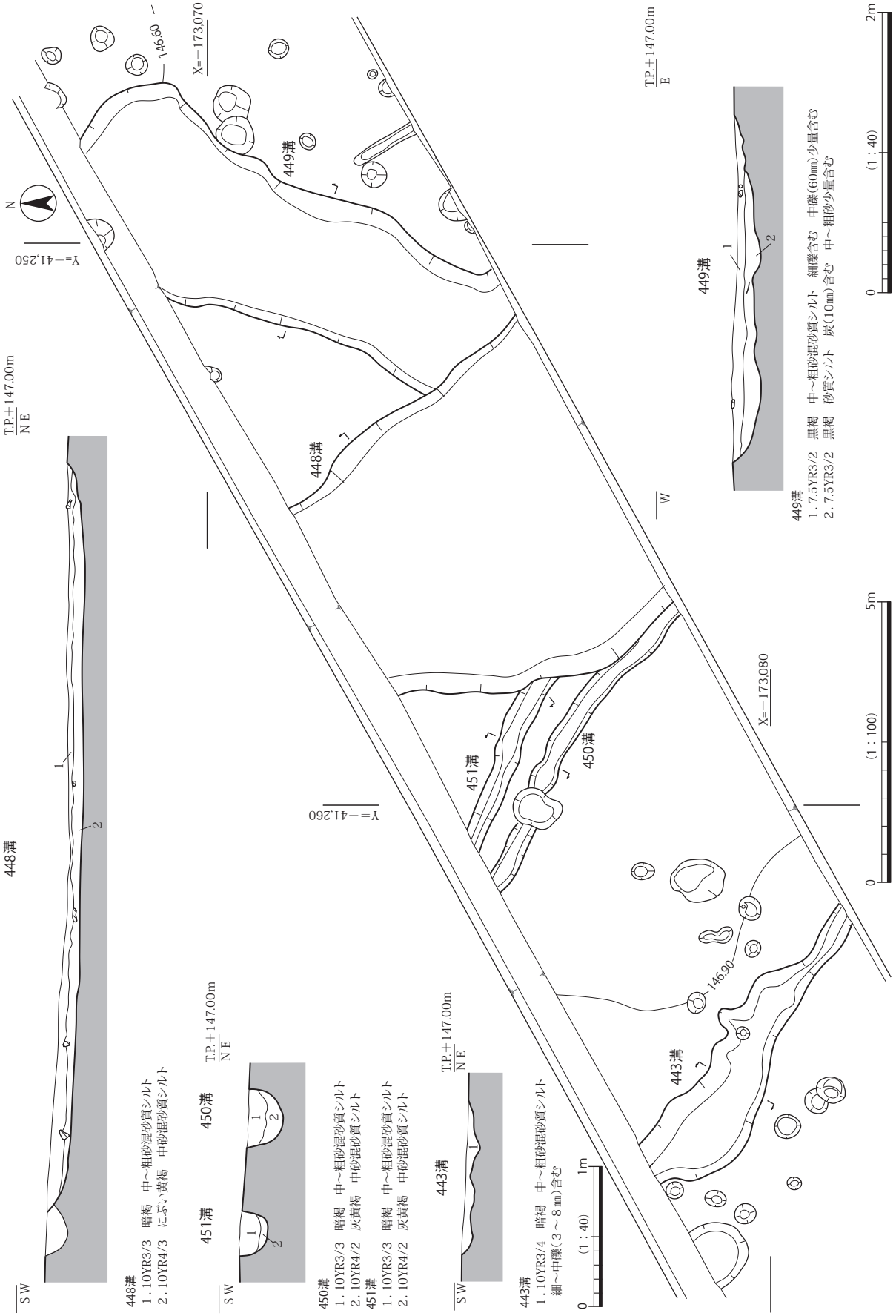


図 38　443・450・451・448・449 溝　平・断面

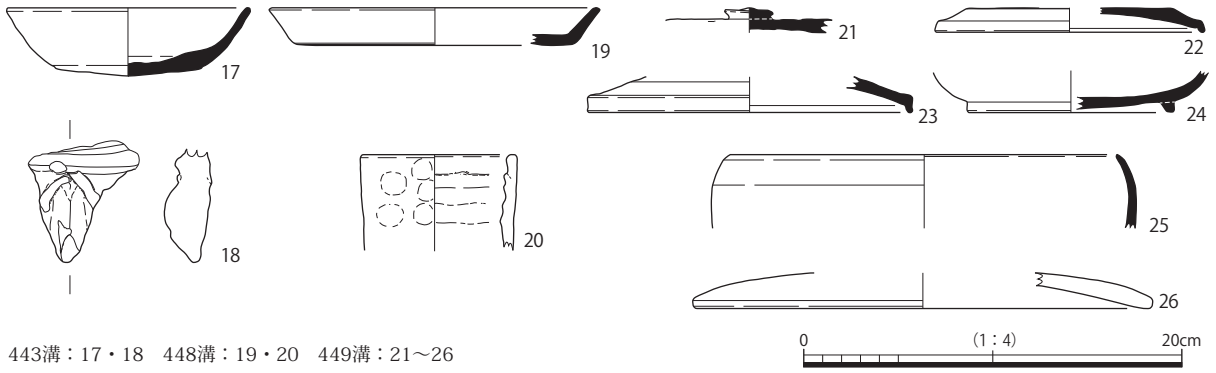


図 39　443・448・449 溝　遺物実測

続く。448 溝と重複し、先行する。規模は幅 0.30 ～ 0.45 m、深さは 450 溝が 0.13 ～ 0.24 m、451 溝が 0.18 mである。両溝の埋土は同様で 2 層に分けられた。2 層は中砂混じり砂質シルト、1 層は第 5 層の中砂から粗砂混じり砂質シルトである。

遺物は 451 溝から土師器細片が出土したのみである。

杭列 1（図 17・40、図版 12）

1 区南東端で検出した。第 3 層を取り除いた基盤層上面で東西方向に円弧を描くように 35 基の小ピット列を検出した。このピットは、規模が直径 0.08 m、深さ 0.10 ～ 0.30 mで掘方はないため、杭そのものは残存しなかったが杭列跡と判断した。

この杭列を境に北側の基盤層が灰オリーブ色にグライ化し変色していたことから、この杭列は耕地区の南端に設けられたもので第 3 層もしくは第 4 層の中世段階の耕地を区画していたと考えられる。

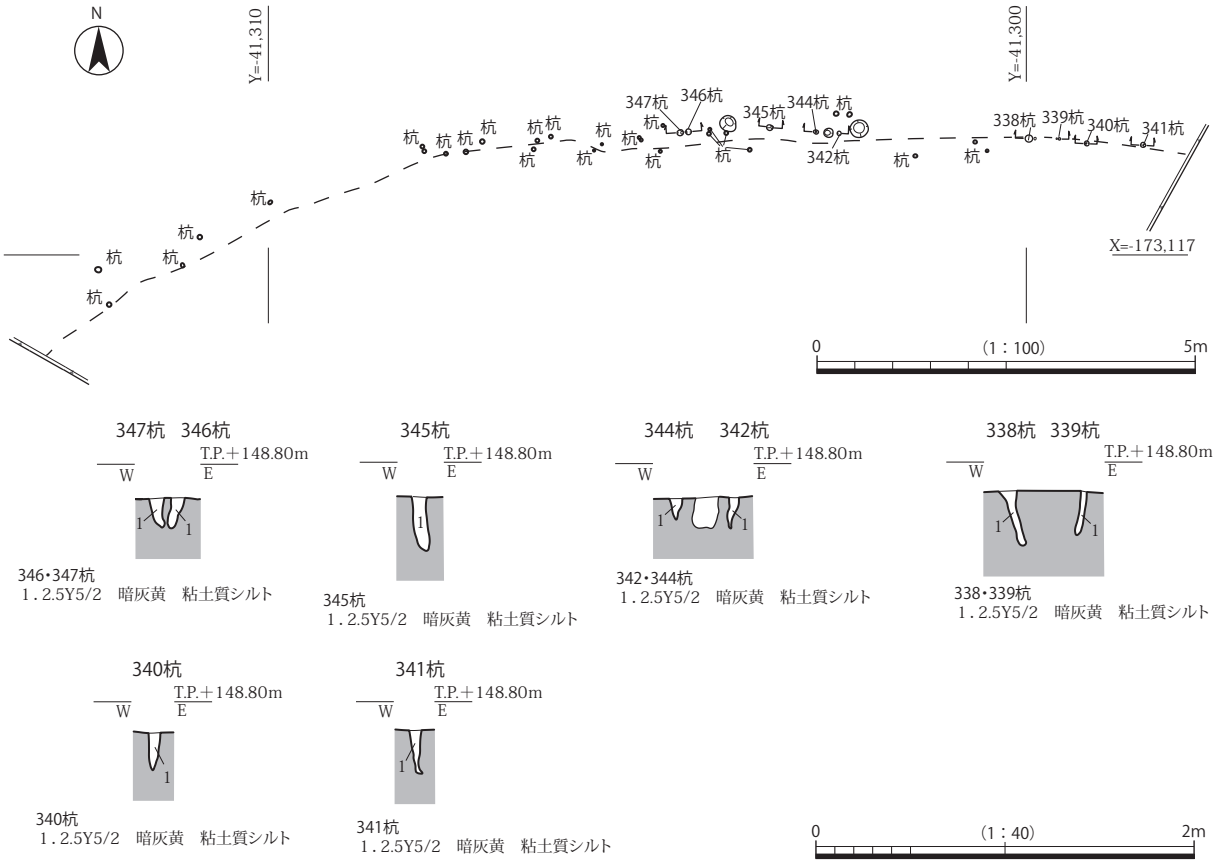


図 40　杭列 1　平・断面

第３層出土遺物

１区（図 41・42、図版 34・35）

１区の第３層は最も出土遺物が多く、白磁、陶器、灰釉陶器、瓦器、東播系須恵器、瓦質土器、土師質土器、須恵器、土師器、製塩土器、丸瓦、砥石、銭貨、石器、木炭が出土し、全体の中で古代の須恵器や土師器の出土量が多い。木炭は１区南西側を中心に長さ４～5.5㎝・幅１～2.5㎝・厚み 1㎝の大

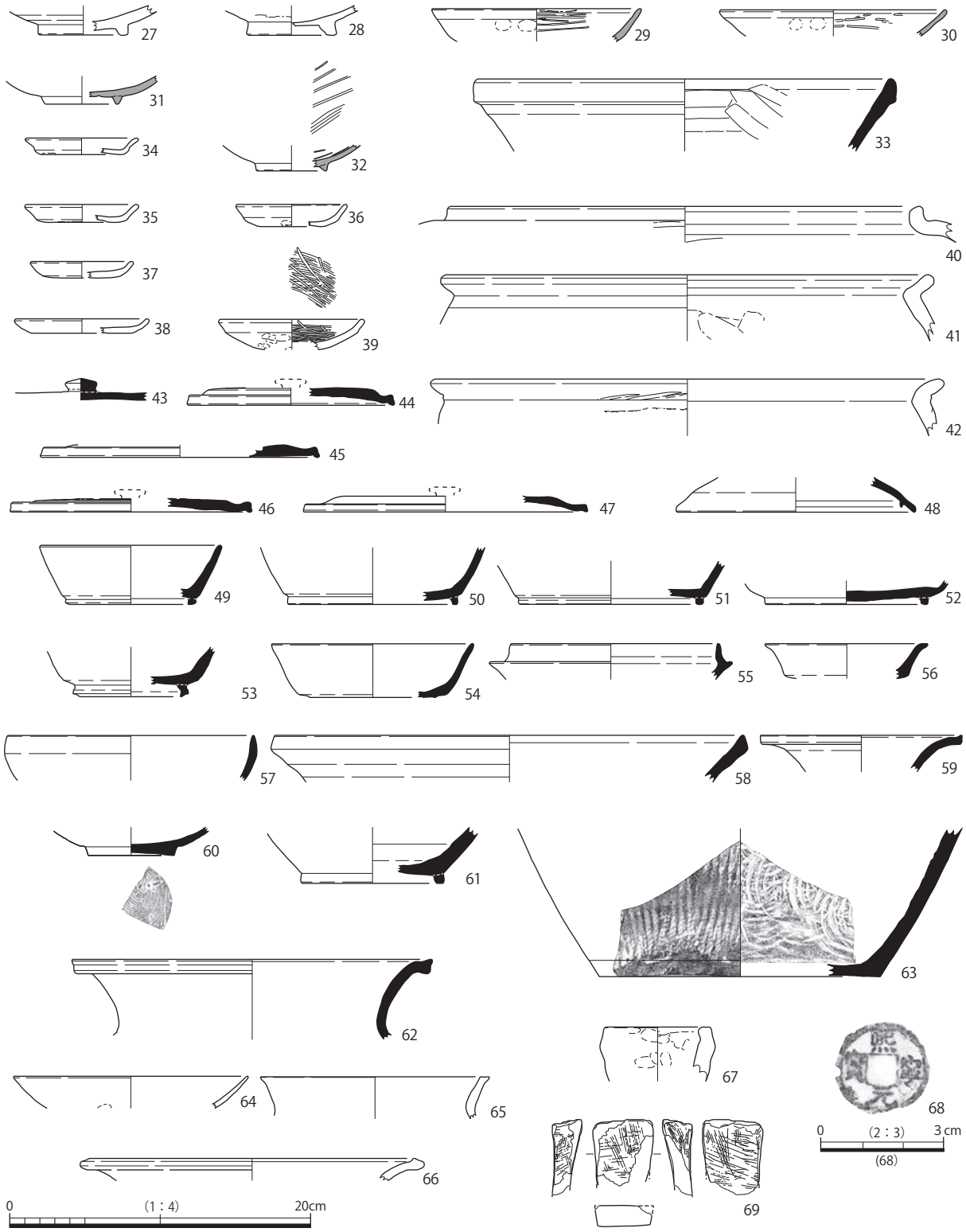


図 41　第３層（１区）　遺物実測（１）

きさのものが多く出土した。

27・28 は白磁である。27 の碗は外面に回転ヘラケズリ痕が残る。高台内部のケズリは浅く、そのため底部の器厚が厚い。28 の皿は 27 より高台内部のケズリが深い。釉は外面下部まで掛かり、釉調は灰黄色で 27 より黄色味を帯び、釉の厚さは薄い。27・28 は福建省系。時期は 11 世紀後半から 12 世紀前半に比定される。

29 ～ 32 は瓦器椀である。29・30 の調整は口縁端部が横方向のナデ、外面はユビオサエ、内面はヘラミガキである。31 はイブシが不完全なものである。32 は見込みに暗文を施す。12 世紀後半に比定される。

33 は東播系須恵器鉢である。口縁端部は上方に突出し、口縁部の面は丸みを帯びる。器厚は 6 ～ 7 ㎜と薄い。13 世紀前半に比定される。

34 ～ 42 は土師質土器である。34 ～ 39 は皿である。34 ～ 37 の調整は、外面口縁部は強い横方向のナデ、底部ユビオサエ後ナデである。39 は外面口縁端部が横方向のナデ、下半はユビオサエ、内面に細かいヘラミガキを行う。13 世紀代に比定される。40 ～ 42 は甕で口縁部が 40 は肩部から短く垂直に立ち上がり、41・42 は短く外反し、丸くおさめる。42 は外面体部がタタキ調整である。

43 ～ 63 は須恵器で 43 ～ 55 は杯である。43 ～ 48 の杯蓋のうち 43 ～ 47 はつまみをもつ杯蓋で 43・44・46・47 は頂部に回転ヘラケズリを行う。8 世紀後半に比定される。48 は口縁部内面に短いかえりをもち、7 世紀後半に比定される。49 ～ 55 は杯身で 53 は内面全体に自然釉がかかる。49 ～ 51 は 8 世紀末から 9 世紀初頭、52 ～ 54 は 8 世紀前半に比定される。55 は立ち上がりと受部の端部は丸くおさめる。6 世紀中頃に比定される。6 世紀代の土器の出土量は全体に非常に少ない。

56 は皿である。平底の小型皿で口縁端部は外に引き出される。

57 は鉢で口縁部が内彎ぎみに立ち上がる。58 は盤、59 ～ 61 は壺である。59 は口縁端部は外面に面をもち、頸部が強く外反する。8 世紀後半に比定される。60 は底部外面に糸切痕が残る。

62・63 は甕で 63 は外面体部タタキ後底部との接合付近のみナデ、内面は当具痕が残る。

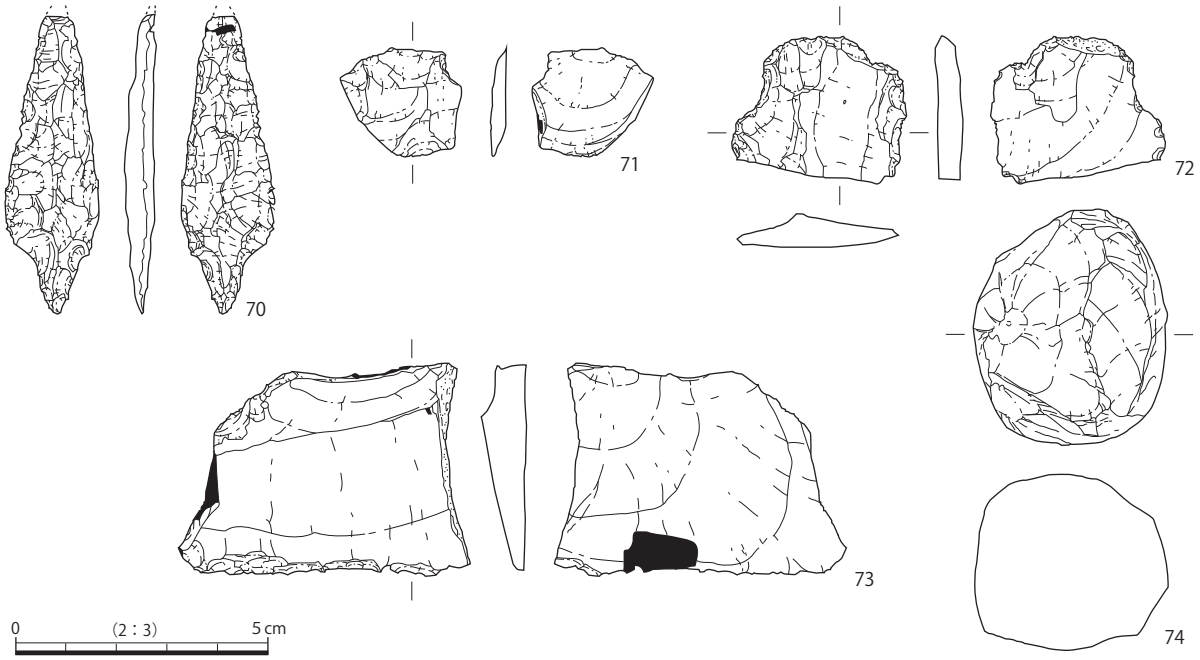


図 42　第 3 層（1 区）　遺物実測（2）

64 ～ 66 は土師器で 64 の皿、65・66 の甕がある。65 は全体にシャープな作りで口縁端部を外方につまみ出す。66 は口縁部内面をつまみ上げ突帯状をなす。

67 は製塩土器である。口縁部はやや屈曲して内彎ぎみに立ち上がり、端部は平坦になる。器厚は厚手である。8 世紀後半であろうか。この他に製塩土器は実測しえなかったが、22 点（164.36 g）出土している。

68 は銭貨、1068 年に初鋳の熙寧元寶。書体は真書。

69 は砥石で中砥石と見られる。表裏及び側面が平滑で細かい擦痕が残り、特に表・裏面はかなり磨り減る。石材は凝灰岩。

70 は有茎型の石鏃で先端が欠けているがほぼ完形である。弥生時代であろうか。71 ～ 73 は剥片、74 は石核である。73 は下端に調整剥離が見られる。70 ～ 74 の石材はサヌカイト。

2 区（図 43）

２区の第３層からは、白磁、瓦器、東播系須恵器、瓦質土器、土師質土器、須恵器、土師器、平瓦、製塩土器、サヌカイト剥片が出土した。製塩土器は細片のため実測しえなかったが 5 点（30.00 g）出土した。

75 は白磁碗で口縁部は玉縁状を呈し、釉調は灰白色である。福建省系。11 世紀後半から 12 世紀前半に比定される。

76 は東播系須恵器鉢で口縁端面は丸みを帯び、端部はやや上方に突出する。14 世紀前半に比定される。77・78 は土師質土器皿で調整は外面口縁部が強い横方向のナデ、底部がユビオサエ後ナデを行う。78 は瓦質土器羽釜で鍔下面に煤が付着する。15 世紀後半であろうか。

79・80 は須恵器で 79 の杯蓋、80 の杯身がある。79 は外面頂部に回転ヘラケズリを行う。8 世紀前半に比定される。

81 は平瓦で凹面は摩滅しているが布目痕が残る。82・83 はサヌカイト剥片。

第４層出土遺物

１区（図 44、図版 35）

1 区の 4 層からは瓦器、土師質土器、瓦質土器、須恵器、土師器、平瓦、製塩土器、サヌカイト剥片・石核、木炭が出土した。木炭は長さ 2.5 ～ 5.5㎝・幅 1.5 ～ 2.5㎝・厚さ 1 ～ 1.5㎝のものが 10 点程出

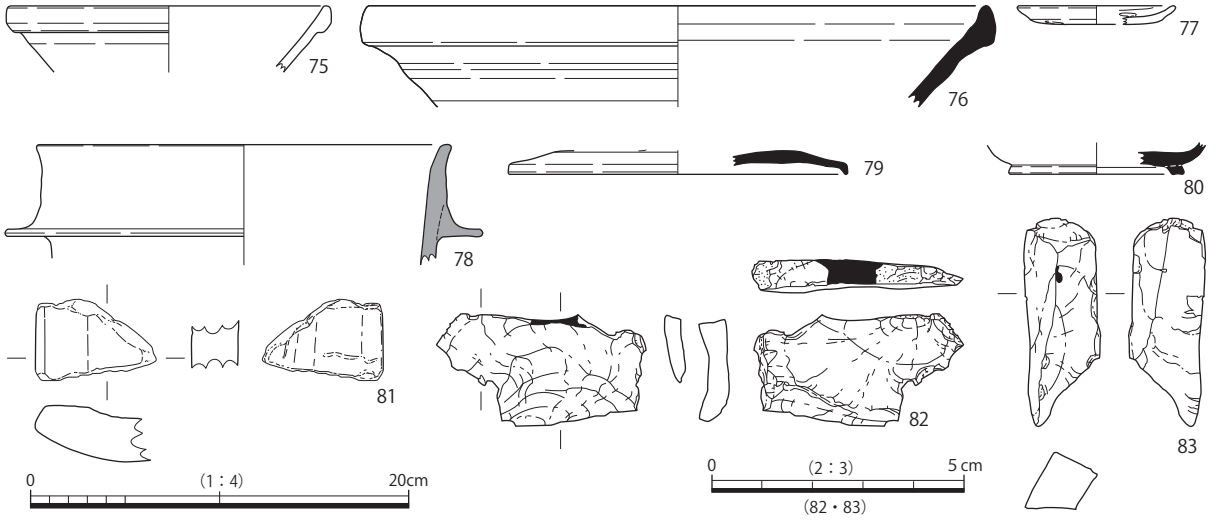


図 43　第３層（２区）　遺物実測

土している。

84 ～ 95 は須恵器で 84 ～ 92 の杯、93・94 の壺、95 の甕がある。84 ～ 89 の杯蓋のうち 84 ～ 86 は頂部につまみをもつもので、84 は扁平な宝珠形をなす。外面頂部は回転ヘラケズリを行う。86 は頂部に粘土紐の接合痕が残る。8 世紀前半に比定される。87･88 は口縁部内面にかえりをもつもので、頂部は回転ヘラケズリを行う。7 世紀後半に比定される。90 ～ 92 の杯身のうち 91・92 は 8 世紀前半と見られる。93 の壺は口縁部が短く直立し、肩部の一部に自然釉が掛かる。

96 の製塩土器は口縁部が外反するタイプで 8 世紀中葉から後葉であろうか。この他に製塩土器は 18 点（246.20 g）出土した。

97 はミニチュア土器で口縁部が肥大し、色調は灰白色。

98 は剥片、99 は石核である。99 は下端を両面から調整剥離を行っているので刃器と利用しているかもしれない。弥生時代の可能性が高い。いずれも石材はサヌカイト。

２区（図 44、図版 35）

2 区の第 4 層からは青磁、瓦器、瓦質土器、土師質土器、黒色土器、須恵器、土師器、 製塩土器が出土した。製塩土器は 3 点（18.70 g）出土した。100 の東播系須恵器鉢は 13 世紀であろうか。101 の須恵器杯身は 8 世紀前半に比定される。

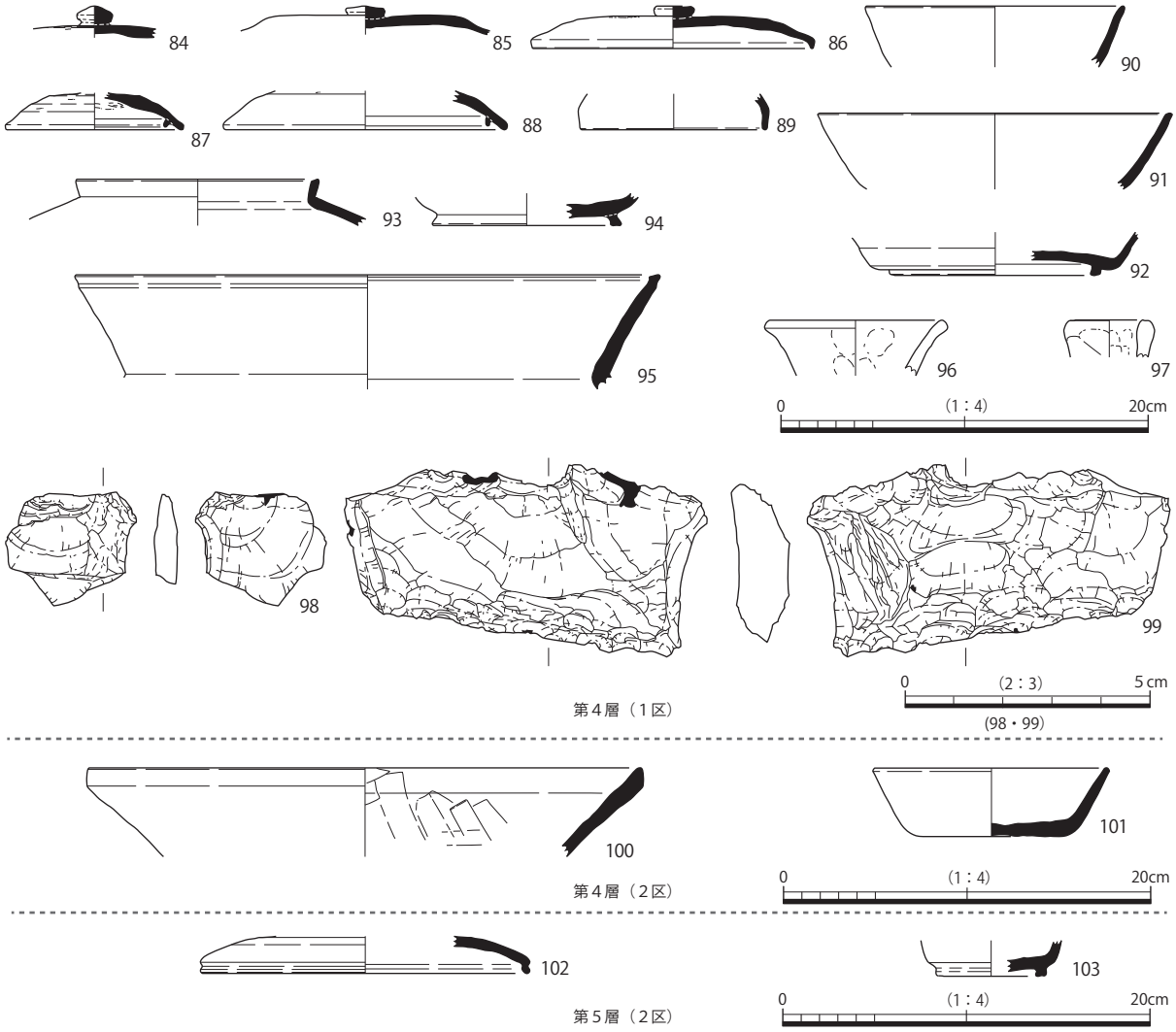


図 44　第４・５層　遺物実測

第５層出土遺物（図 44）

１・２区ともに須恵器・土師器が出土し、102 の須恵器杯蓋、103 の壺を実測した。その他に２区からは図化しえなかったが、製塩土器が８点（56.90 g）出土した。

第３節　３―１区

３－１区は２区の北側に位置する。遺構検出面の標高は南端が最も高い T.P. ＋ 145.2 mで北に向かって下る。遺構は縄文時代のピット、中世の土坑を検出し、その他に時期は不明であるがピット・炉・土

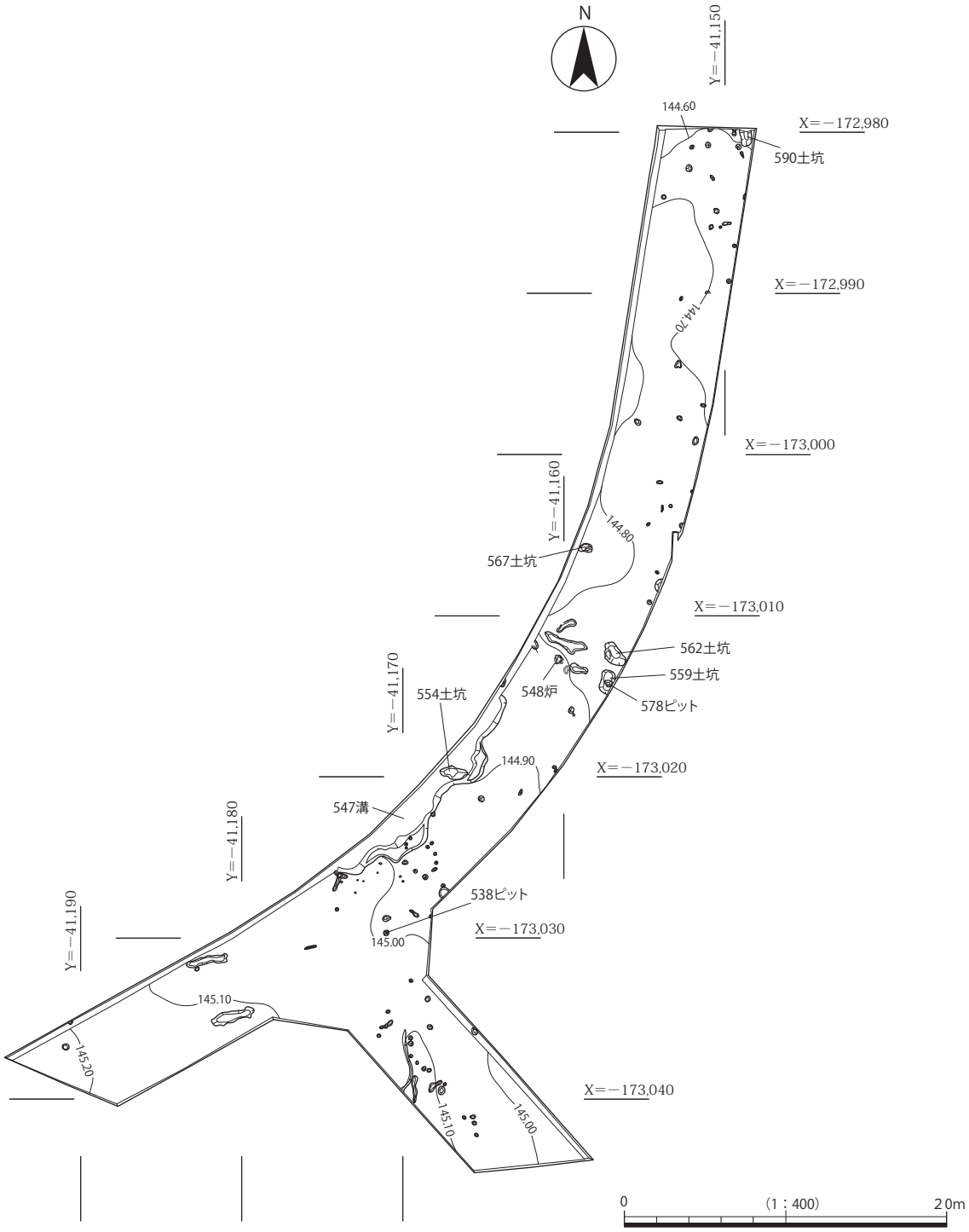


図 45　３－１区　平面

坑・溝を検出した（図 45、図版 13）。

538 ピット（図 45・46、図版 13・35）

３－１区南側で検出した。平面形は円形を呈し、規模は直径 0.32 m、深さ 0.10 mである。

埋土は３層に分けられ砂質シルトと基盤層の中砂混じり砂質シルトを主体とし、これらのブロック土が混じる。

ピット内には 104 の縄文土器深鉢が据えられていた。上部は耕作土により削平されており、底部付近のみ残存した。体部下方外面に単節縄文（LR）を施す。

時期は縄文時代中期末葉から後期初頭と考えられる。

548 炉（図 45・46、図版 13）

３－１区中央で検出した。平面形は不整形な長方形を呈し、規模は長辺 0.55 m、短辺 0.40 m、深さ 0.05 mである。

埋土は２層に分けられ、２層は中砂から粗砂混じり砂質シルトで被熱により赤色化し、所々に炭が混じる。１層は焼土が混じる炭層である。埋土を洗浄したが遺物は出土していない。

554 土坑（図 45・47）

３－１区中央で検出した。547 溝と重複し、先行する。平面形は不整形な楕円形を呈し、規模は長辺 1.70 m、短辺 0.70 m、深さ 0.35 mである。

埋土は第５層の中砂から粗砂混じり砂質シルトである。遺物は出土していない。

559 土坑（図 45・47、図版 13・35）

３－１区中央で検出した。平面形は、土坑の南東側は調査区外に広がっているが長方形を呈すると

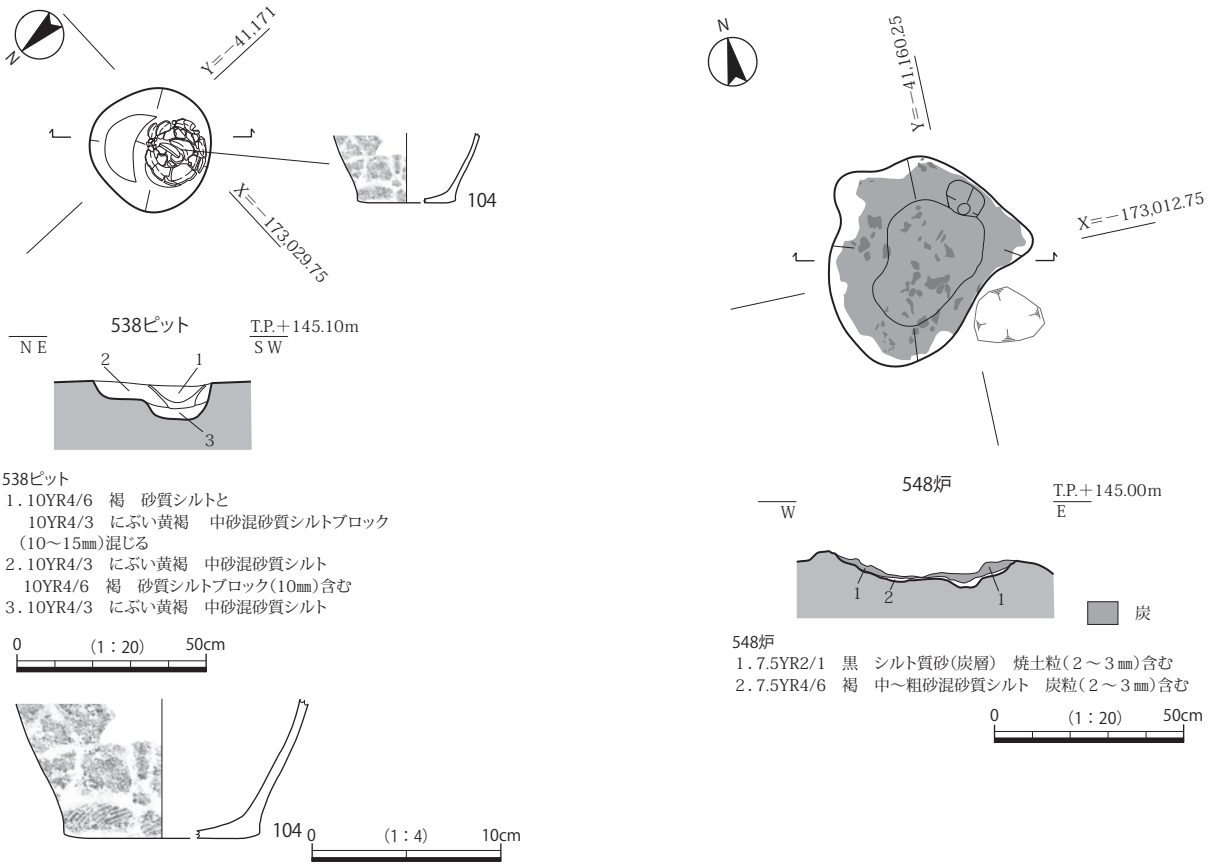


図 46　538 ピット・548 炉　平・断面、538 ピット　遺物実測

推定され、検出規模は長辺 1.50 m、短辺 0.85 m、深さ 0.20 mである。

埋土は中砂混じり粘土質シルトに基盤層のブロックや拳大の礫が多く混じる。

土坑の北側肩から底面向けて投げ込まれたように 105 ～ 110 の 6 点の土師質土器皿が出土した。105 ～ 109 の口径 8.6 ～ 9.6㎝の小型と 110 の口径 14.8㎝の大型がある。小型の皿は 105 ～ 107 の口径と底径がほぼ同じで口縁部がほぼ直角に短く立ち上がるもの、108 の丸みをもった底部から口縁部は内彎ぎみに立ち上がるもの、109 の底部から外反ぎみに広がるものに分けられる。調整はいずれも口縁部は横方向のナデ、底部はユビオサエを行い、105 ～ 107 はユビオサエ後ナデを行う。107 は

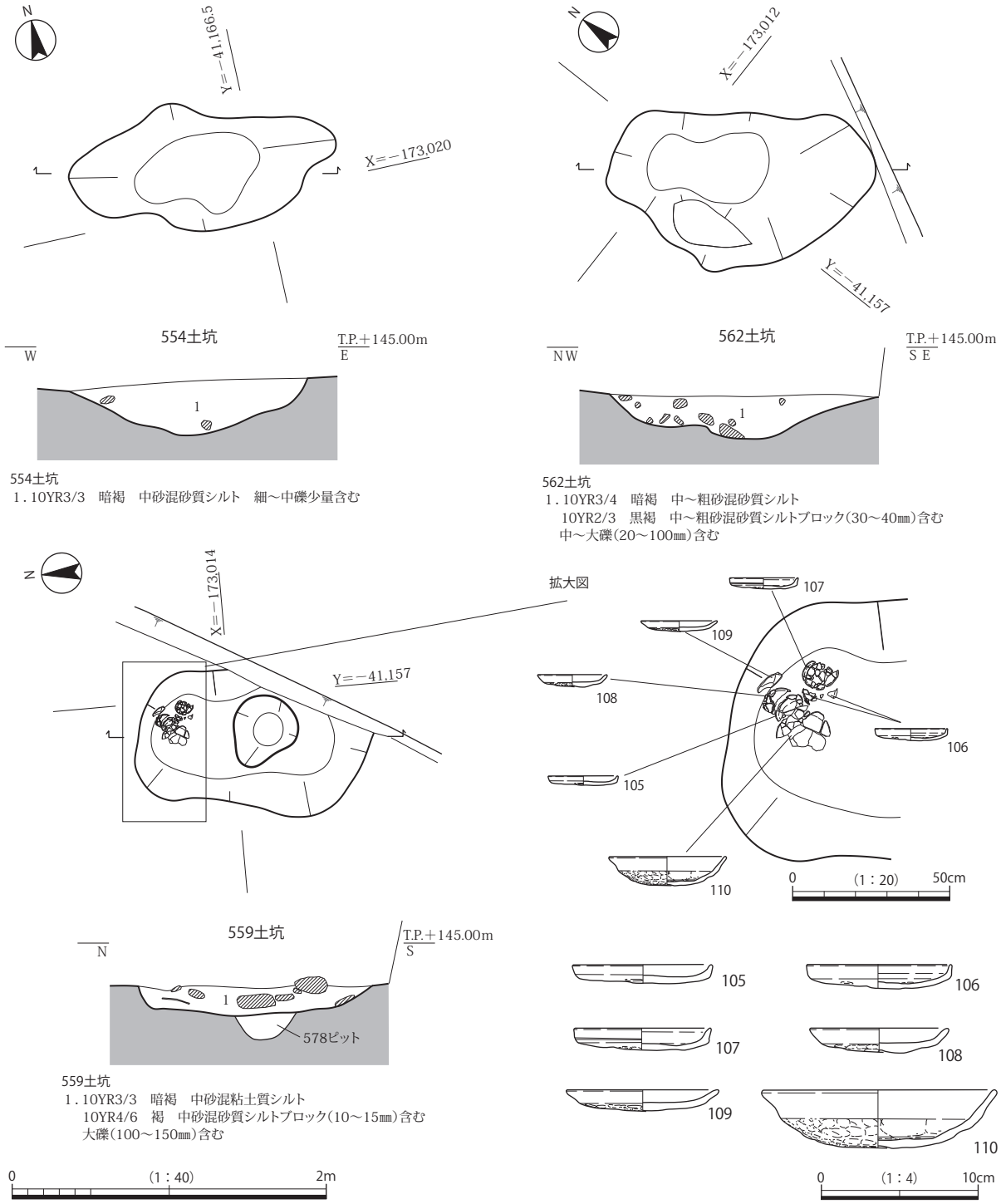


図 47　554・559・562 土坑　平・断面、559 土坑　遺物実測

底部に粘土接合痕が一部残る。

110 の大型の皿は器高が高く、底部から口縁部に内彎しつつ立ち上がる。調整は口縁部上半が強い横方向のナデで段をなし、口縁部下半から底部はユビオサエ、内面体部下半はナデを行う。

時期は出土遺物から 13 世紀後半と考えられる。

562 土坑（図 45・47）

3－1 区中央で検出した。平面形は不整形な長方形を呈し、規模は長辺 1.70 m、短辺 1.00 m、深さ 0.30 mである。埋土は第 5 層の中砂から粗砂混じり砂質シルトである。遺物は出土していない。

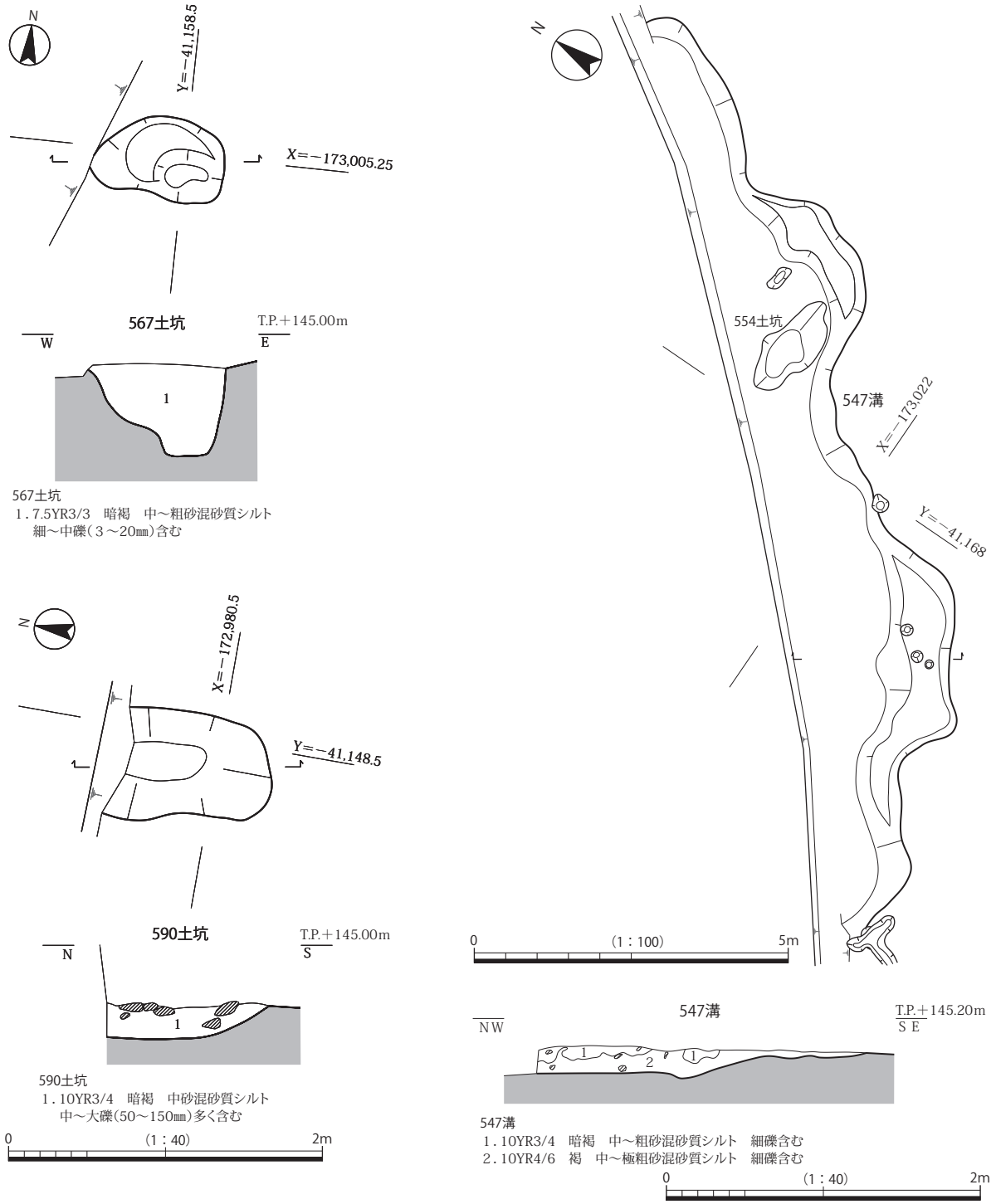


図 48　567・590 土坑、547 溝　平・断面

567 土坑（図 45・48）

３－１区中央で検出した。平面形は不整形な長方形を呈し、規模は長辺 0.85 m、短辺 0.55 m、深さ 0.60 mである。埋土は第５層の中砂から粗砂混じり砂質シルトである。遺物は出土していない。

590 土坑（図 45・48）

３－１区北端で検出した。平面形は北側が調査区外に広がるが長方形を呈すると推定され、検出規模は長辺 0.90 m、短辺 0.70 m、深さ 0.20 mである。

埋土は第５層に類似する中砂混じり砂質シルトで礫が多く混じる。遺物は出土していない。

547 溝（図 45・48、図版 13）

３－１区中央で検出した。554 土坑と重複し、後出する。北東から南西方向に延び、調査区外に続く。溝の方向は周囲の等高線と一致しており、地形に即して掘削されていると見られる。検出規模は幅 1.10 ～ 2.40 m、深さ 0.10 ～ 0.20 mである。溝底の高さは南から北へ 0.34 m低くなる。

埋土は２層に分けられ、２層は基盤層に類似した中砂から極粗砂混じり砂質シルト、１層は第５層中砂から粗砂混じり砂質シルトである。遺物は出土していない。

第４節　３－２区

３－２区は３－１区の北側に位置する。遺構検出面の標高は南端が T.P. ＋ 144.1 mで最も高く北に向かって低くなり、北端は T.P. ＋ 142.9 mである。

この調査区では X ＝－ 172,810 から X ＝－ 172,820 付近の第３層下面において耕地区画と南北方向の溝状耕作痕を検出した（図 49）。さらに第４層が残存した X ＝－ 172,800 から X ＝－ 172,820

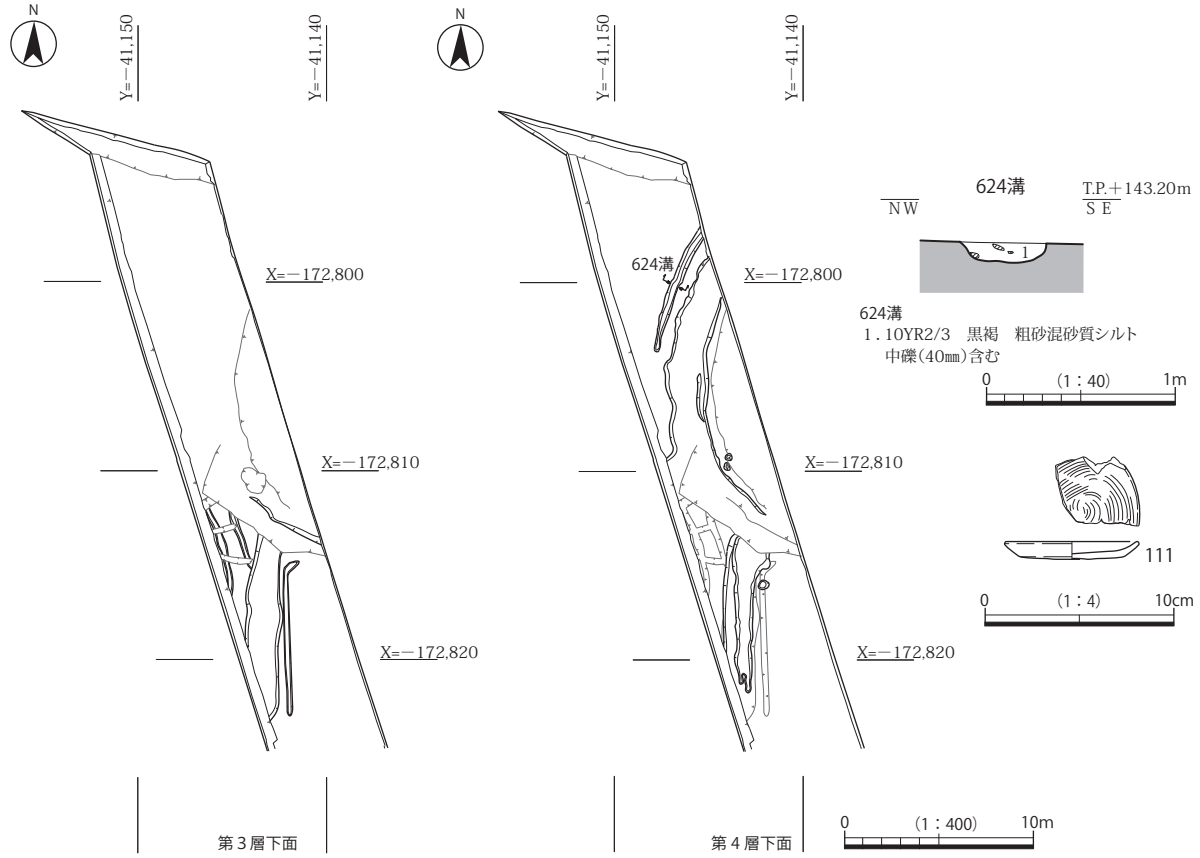


図 49　３－２区　第３・４層下面　平面、624 溝　断面・遺物実測

にかけては同下面において溝・耕地区画・溝状耕作痕を検出した（図 49）。

第３・４層下面で検出した耕地区画は、現在の耕地区画とほぼ同位置で同方向であることから区画は中世から踏襲していると考えられる。

第３・4 層を掘削除去した基盤層上面では土坑・溝を検出した（図 50、図版 14）。

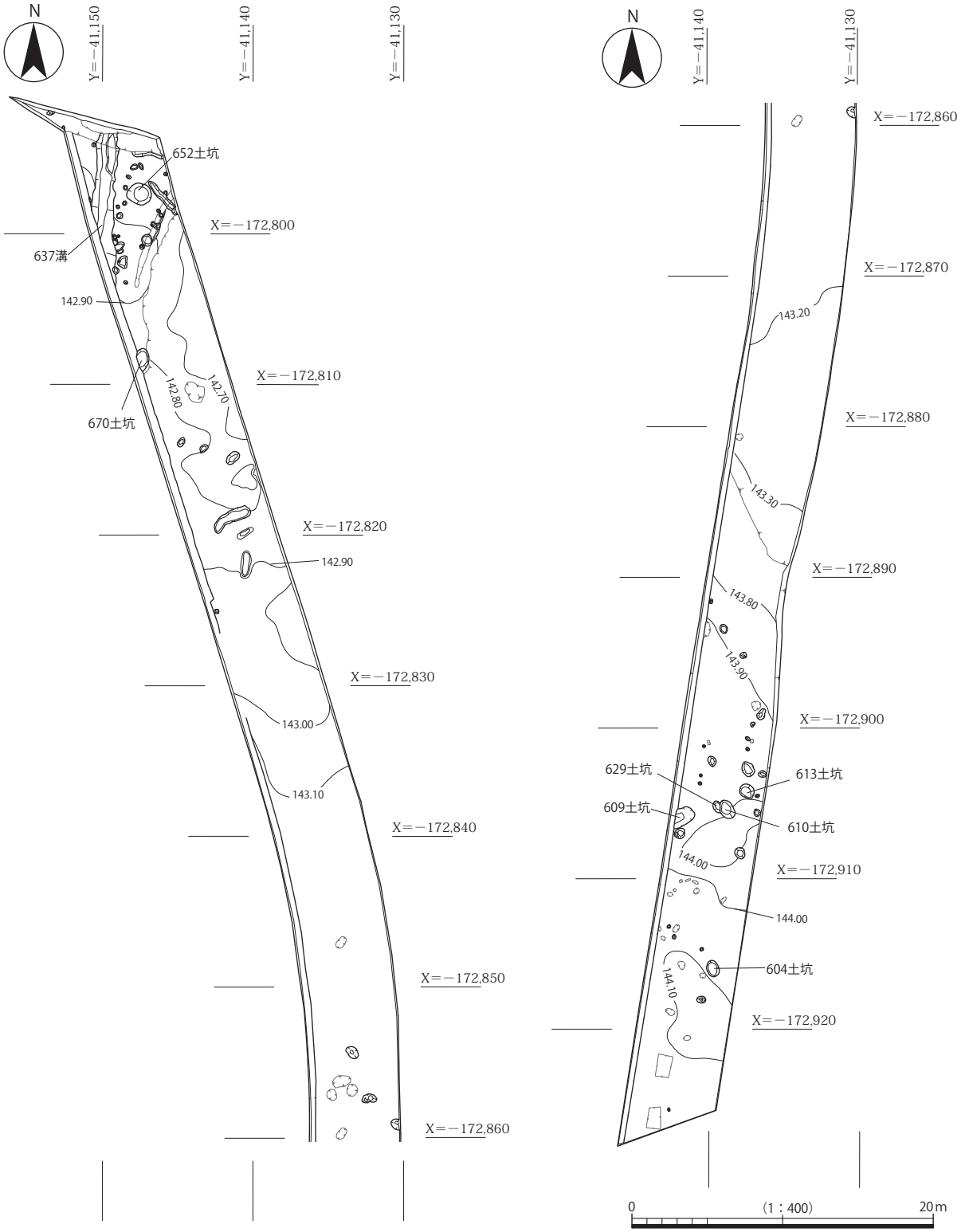


図 50　３－２区　平面

624 溝（図 49）

３－２区北側において第 4 層下面で検出した。耕地区画に沿って南西から北東方向に延び、調査区外に続く。規模は幅 0.45 m、深さ 0.05 ～ 0.15 mである。

埋土は第 5 層の黒褐色粗砂混じり砂質シルトである。

遺物は土師質土器皿が出土し、1 点を実測した。111 の土師質土器皿は、調整は外面口縁部が横方向のナデ、底部がナデ、内面はハケ調整が明瞭に残る。15 世紀のものであろうか。

604 土坑（図 50・51）

３－２区で検出した。平面形は長方形を呈し、規模は長辺 1.10 m、短辺 0.80 m、深さ 0.22 mである。

埋土は 2 層に分けられ、2 層は中砂から粗砂混じり砂質シルト、1 層は基盤層に中砂混じり砂質シル

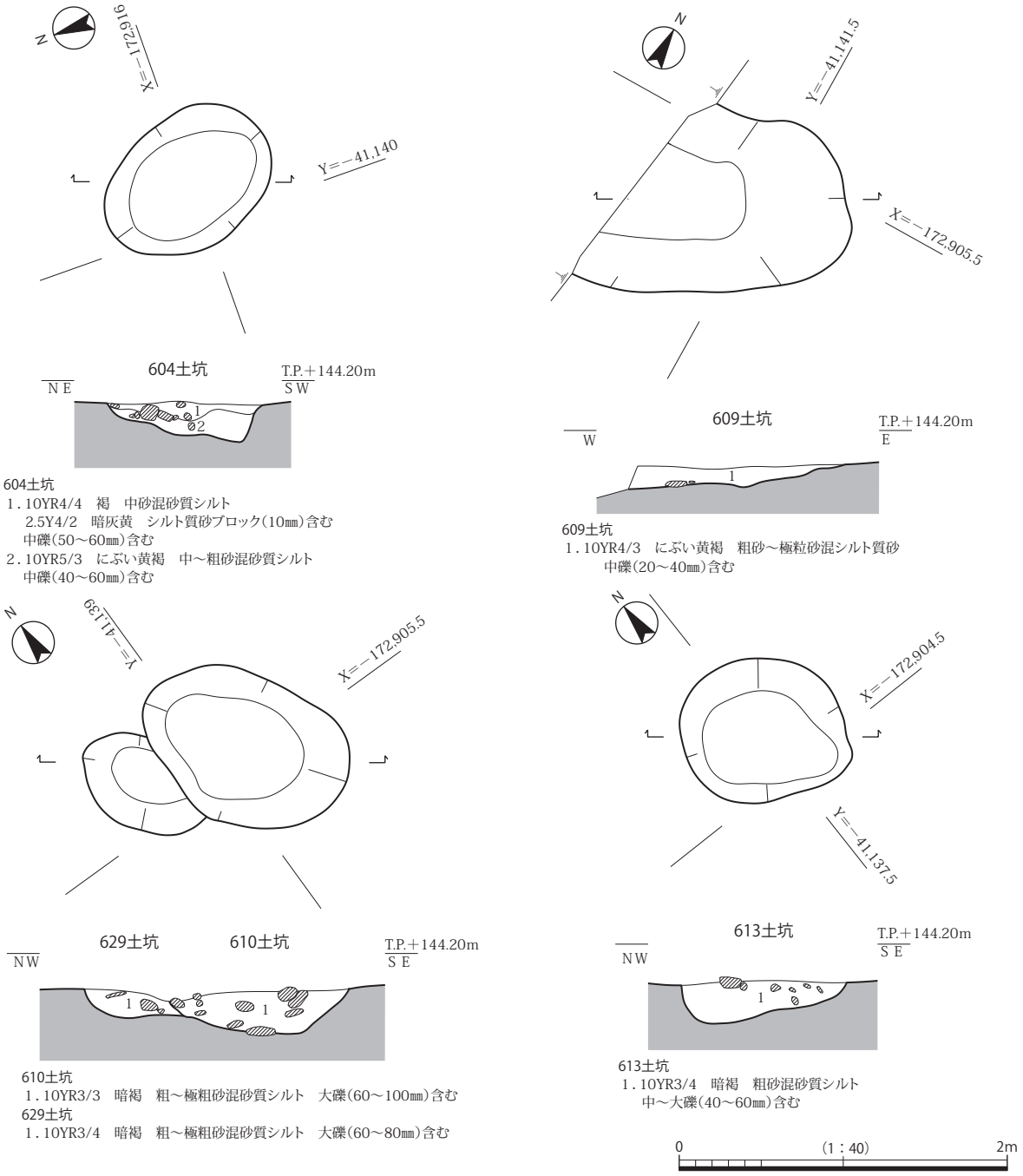


図 51　604・609・610・613・629 土坑　平・断面

トに第３層に類似するシルト質砂ブロックが混じる。遺物は出土していない。

609 土坑（図 50・51）

３－２区南側で検出した。西側は調査区外に続くが平面形は長方形を呈すると推定され、検出規模は長辺 1.33 m、短辺 1.13 m、深さ 0.15 mである。

埋土は第３層に類似する粗砂から極粗砂混じりシルト質砂である。遺物は土師質土器皿・羽釜片が出土したが、実測しえなかった。

610・629 土坑（図 50・51）

３－２区南側で検出した。610 土坑が 629 土坑より後出する。平面形はいずれも不整形な長方形を

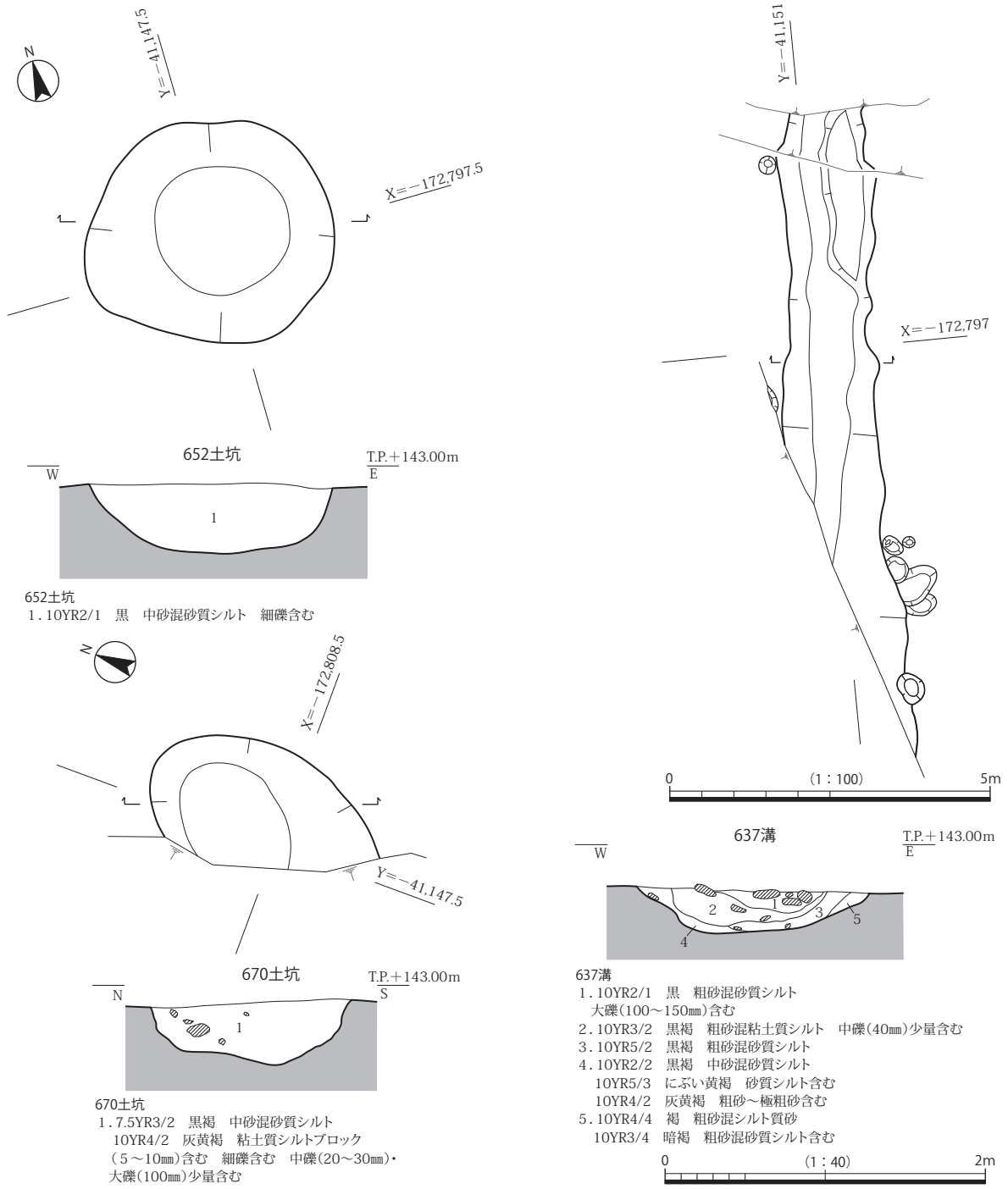


図 52　652・670 土坑、637 溝　平・断面

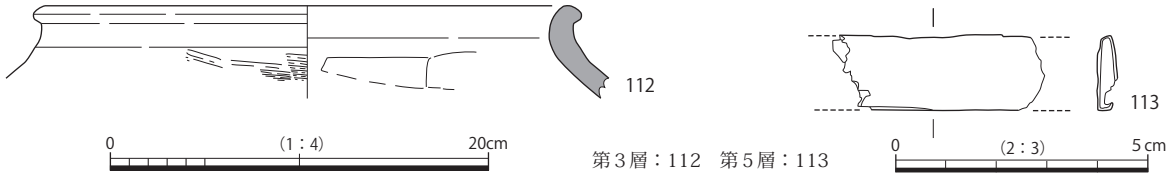


図 53　第３・５層　遺物実測

呈し、610 土坑の規模は長辺 1.30 m、短辺 0.90 m、深さ 0.27 mである。629 土坑の検出規模は長辺 0.57 m、短辺 0.53 m、深さ 0.15 mである。

いずれも埋土は粗砂から極粗砂混じり砂質シルトである。遺物はどちらからも出土していない。

613 土坑（図 50・51）

３－２区の南側で検出した。平面形は長方形を呈し、規模は長辺 1.00 m、短辺 0.87 m、深さ 0.25 mである。埋土は粗砂混じり砂質シルトである。遺物は出土していない。

652 土坑（図 50・52）

３－２区北側で検出した。平面形は長方形を呈し、規模は長辺 1.50 m、短辺 1.37 m、深さ 0.42 m である。

埋土は第５層の黒色中砂混じり砂質シルトである。遺物は出土していない。

670 土坑（図 50・52）

３－２区北側の 12D － 5 a で検出した。平面形は西側が調査区外に続くため不明、検出規模は長辺 1.20 m、短辺 0.85 m、深さ 0.40 mである。

埋土は第５層に粘土質シルトブロックを含む。遺物は出土していない。

637 溝（図 50・52）

３－２区南端で検出した。南北方向に延び、調査区外に続く。規模は幅 1.20 ～ 1.50 m、深さ 0.23 ～ 0.35 mである。埋土は５層に分けられ、５層は基盤層の粗砂混じりシルト質砂に第５－３層の粗砂混じり砂質シルトが混じる。４層は中砂混じり砂質シルトに粗砂から極粗砂が混じり、３層は第５－３層の粗砂混じり砂質シルトが堆積する。３層の堆積後に溝は掘り直され、２層の粗砂混じり粘土質シルト堆積後に１層の大礫を多く含む第５－３層の粗砂混じり砂質シルトで埋め戻される。

遺物は土師質土器皿、須恵器杯・甕、土師器杯が出土したが、実測しえなかった。

第３層出土遺物（図 53）

第３層からは瓦器、瓦質土器、土師質土器、須恵器、土師器が出土したが小片が多く、1 点のみ実測した。112 は瓦質土器甕である。口縁部は短く外方に折れ、調整は外面体部は平行タタキを行う。15 世紀代と見られる。

第５層出土遺物（図 53）

第５層からは中世の土師質土器小片と小柄の一部が出土した。113 の小柄は長さ 3.8㎝残存し、幅 1.5 ㎝である。裏面は棟方との接合部分が欠損する。成形は厚さ 0.1㎝弱の金属板を折り曲げ棟方部分で接合する。

第５節　４区

４区は３－２区の北側に位置する。遺構検出面の標高は調査区南側の X ＝－ 172,750 付近が最も高い T.P. ＋ 142.4 mを測り、そこから南端、北端へとそれぞれ低く傾斜するが、特に南端は３－２区北

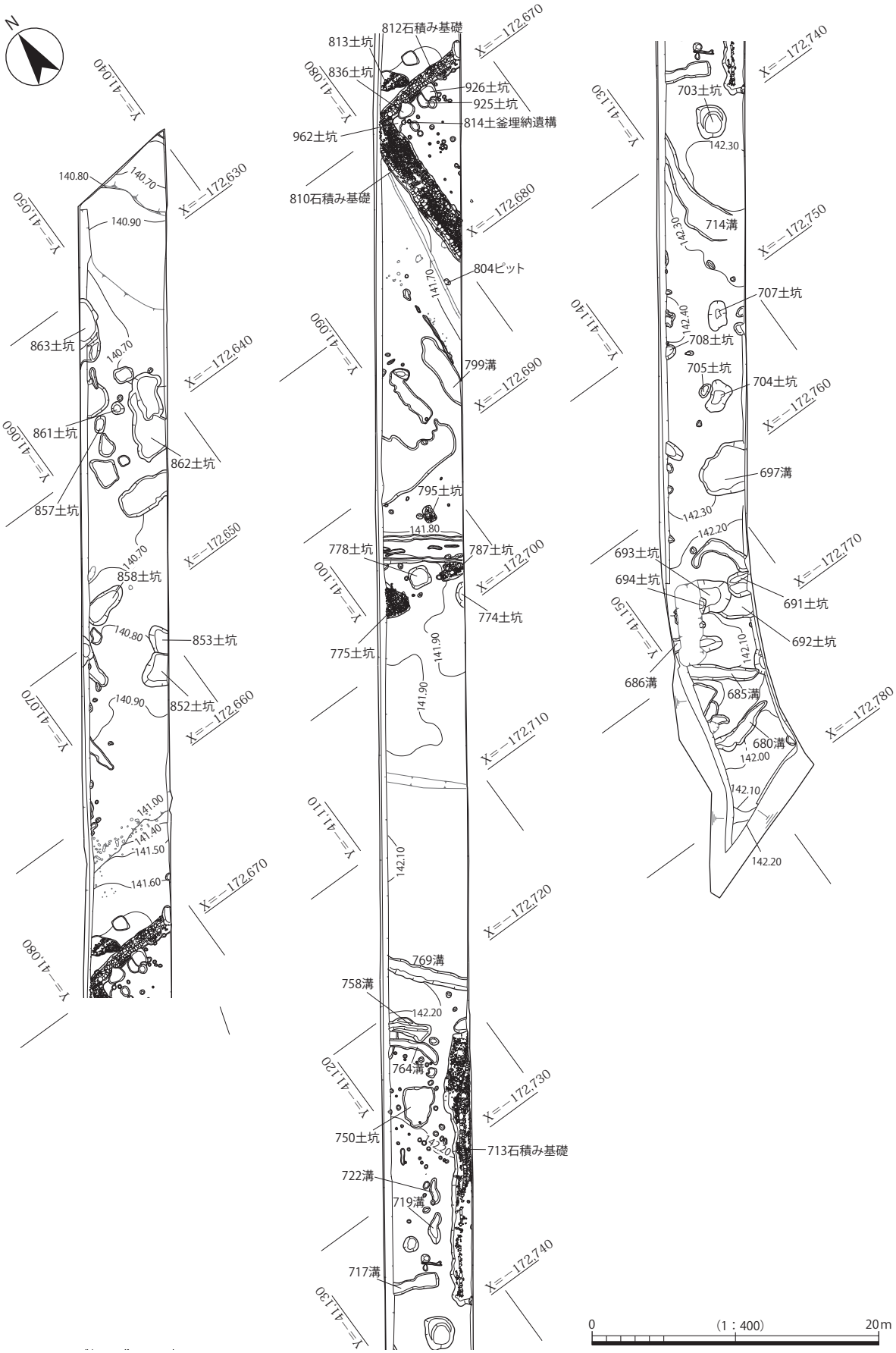

N
812石積み基礎
813土坑
836土坑
926土坑
925土坑
814土釜埋納遺構
962土坑
810石積み基礎
804ピット
799溝
795土坑
778土坑
787土坑
774土坑
775土坑
769溝
758溝
764溝
750土坑
713石積み基礎
722溝
719溝
717溝
703土坑
714溝
707土坑
708土坑
705土坑
704土坑
697溝
693土坑
694土坑
691土坑
692土坑
686溝
685溝
680溝
863土坑
861土坑
862土坑
857土坑
858土坑
853土坑
852土坑
X=−172.630
X=−172.640
X=−172.650
X=−172.660
X=−172.670
X=−172.680
X=−172.690
X=−172.700
X=−172.710
X=−172.720
X=−172.730
X=−172.740
X=−172.750
X=−172.760
X=−172.770
X=−172.780
Y=−41.040
Y=−41.050
Y=−41.060
Y=−41.070
Y=−41.080
Y=−41.090
Y=−41.100
Y=−41.110
Y=−41.120
Y=−41.130
Y=−41.140
Y=−41.150
0
(1：400)
20m

図54　4区　平面

端から続く谷状の地形を呈する。

4区では縄文時代のピット1基、中世の石積み基礎3箇所、土釜埋納遺構1基をはじめとして南側では土坑群と溝、北側では大型の土坑群等の多くの遺構や遺物を検出した（図54、図版15）。

この石積み基礎は寺社等の基壇状の高まりの周囲をめぐる石積みの基礎部分と考えられる。そのため3箇所で検出した石積み基礎に近接して検出した遺構はそれに関連する遺構である可能性が高いため、ここでは縄文時代のピットを除き、3箇所の石積み基礎間で検出した遺構、南部の遺構、北部の遺構に分けて掲載することとする。

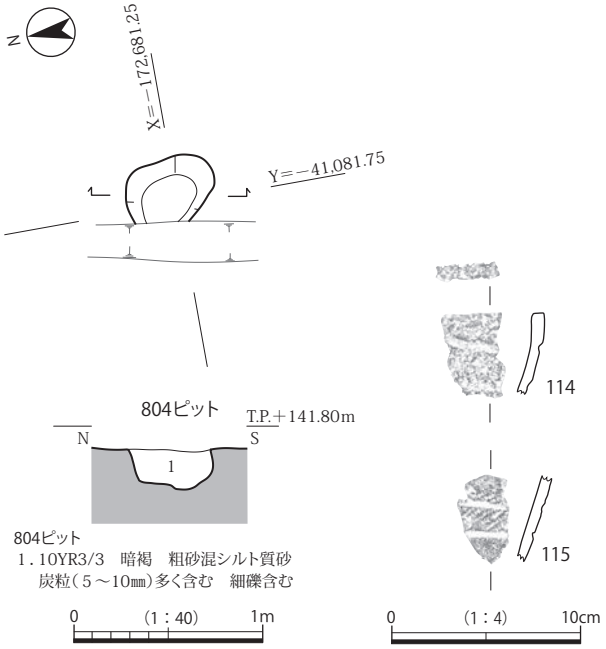


図55　804ピット　平・断面・遺物実測

804ピット（図54・55、図版35）

4区中央北寄りで検出した。全体平面形・規模は、西端を攪乱されるが平面形は不整形な長方形を呈し、検出規模は長辺0.50 m、短辺0.38 m、深さ0.20 mである。埋土は粗砂混じりシルト質砂で炭粒を多く含む。

遺物は縄文土器が出土した。114･115は縄文土器深鉢である。114は口縁部で沈線と単節縄文（LR）を施文する。115は体部で沈線間に磨消縄文を施文する。縄文時代中期末葉～後期初頭と考えられる。

713石積み基礎（図54・56～59、図版16～19・35・36）

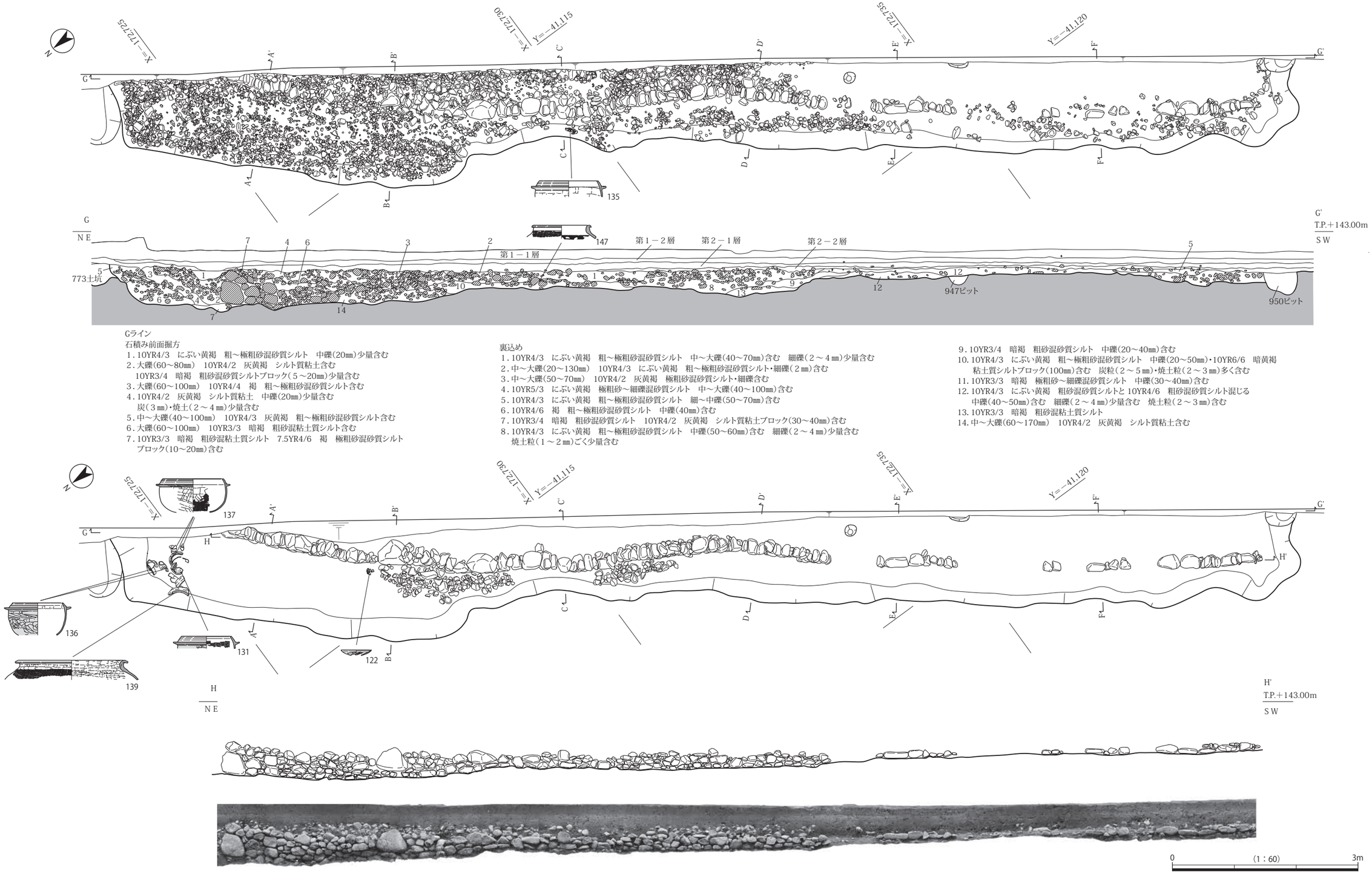
4区中央南寄りの東壁際で北東から南西方向に検出した石積みの基礎である。基壇状の高まりの西辺にあたるとみられ、調査区外東側に続く。近現代耕作土の第2層を掘削除去後に検出した。773土坑、947・950ピットと重複し950ピットに先行し、773土坑・947ピットに後出する。

石積みは長さ16.5 mわたり西に面を揃え弓形に曲線を描くように自然石を組み合わせ積み上げる。主軸は北から東に30～46°偏る。残存する高さは、北側が0.5 mで4段残存するが、南方ほど残存状況が悪く1段もしくは石積みが残存しない箇所もある。積方は、北端からD・E断面間までは小口積みでそれより南側は長辺を面として積む。

石材の大きさは主に長さ20～40㎝、幅15～25㎝、厚さ10～20㎝程で、最大は北端の東壁際とB断面地点の石積みがやや屈曲する箇所に据えたもので長さ・幅50㎝、厚さ40㎝である。屈曲部から南側では西方向に石積みのずれが生じており、その前面には補強のためと考えられる10～20㎝の礫が集中して充填されていた。

掘方の検出規模は長さ19.10 m､幅1.40～1.90 m､深さ0.10～0.60 mである。底部高は北端がT.P.＋141.8 m、南端がT.P.＋142.2 mで北から南へ段をなして高くなり、積方が小口積みから変わる付近から南側は掘方の深さは一段と浅くなる。北端の石積み前面の掘方は他の箇所と比べ一回り広く、且つ深く掘られていることから、ここが石積みの北角にあたると推定される。

掘方埋土は、石積み前面が粗砂から極粗砂混じり砂質シルトと砂質シルトに中礫が混じる。北端部分のみ西端から礫が多く混じる土、砂質シルトを主体とする土を埋め、石積み際には拳大の礫を充填す



Gライン
石積み前面掘方
1．10YR4/3　にぶい黄褐　粗～極粗砂混砂質シルト　中礫(20㎜)少量含む
2．大礫(60～80㎜)　10YR4/2　灰黄褐　シルト質粘土含む
　10YR3/4　暗褐　粗砂混砂質シルトブロック(５～20㎜)少量含む
3．大礫(60～100㎜)　10YR4/4　褐　粗～極粗砂混砂質シルト含む
4．10YR4/2　灰黄褐　シルト質粘土　中礫(20㎜)少量含む
　炭(３㎜)・焼土(２～４㎜)少量含む
5．中～大礫(40～100㎜)　10YR4/3　灰黄褐　粗～極粗砂混砂質シルト含む
6．大礫(60～100㎜)　10YR3/3　暗褐　粗砂混粘土質シルト含む
7．10YR3/3　暗褐　粗砂混粘土質シルト　7.5YR4/6　褐　極粗砂混砂質シルト
　ブロック(10～20㎜)含む

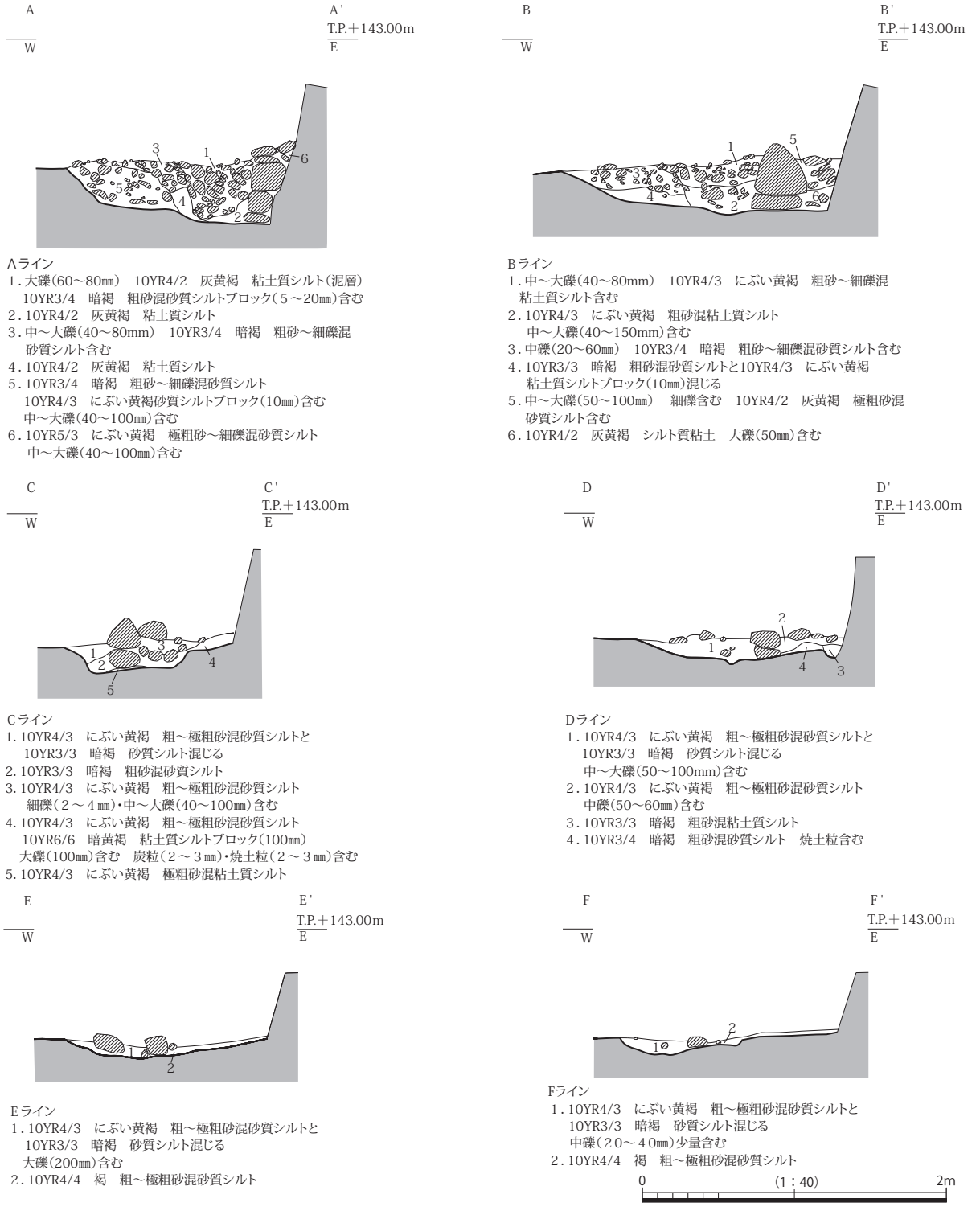
裏込め
1．10YR4/3　にぶい黄褐　粗～極粗砂混砂質シルト　中～大礫(40～70㎜)含む　細礫(２～４㎜)少量含む
2．中～大礫(20～130㎜)　10YR4/3　にぶい黄褐　粗～極粗砂混砂質シルト・細礫(２㎜)含む
3．中～大礫(50～70㎜)　10YR4/2　灰黄褐　極粗砂混砂質シルト・細礫含む
4．10YR5/3　にぶい黄褐　極粗砂～細礫混砂質シルト　中～大礫(40～100㎜)含む
5．10YR4/3　にぶい黄褐　粗～極粗砂混砂質シルト　細～中礫(50～70㎜)含む
6．10YR4/6　褐　粗～極粗砂混砂質シルト　中礫(40㎜)含む
7．10YR3/4　暗褐　粗砂混砂質シルト　10YR4/2　灰黄褐　シルト質粘土ブロック(30～40㎜)含む
8．10YR4/3　にぶい黄褐　粗～極粗砂混砂質シルト　中礫(50～60㎜)含む　細礫(２～４㎜)少量含む
　焼土粒(１～２㎜)ごく少量含む
9．10YR3/4　暗褐　粗砂混砂質シルト　中礫(20～40㎜)含む
10．10YR4/3　にぶい黄褐　粗～極粗砂混砂質シルト　中礫(20～50㎜)・10YR6/6　暗黄褐
　粘土質シルトブロック(100㎜)含む　炭粒(２～５㎜)・焼土粒(２～３㎜)多く含む
11．10YR3/3　暗褐　極粗砂～細礫混砂質シルト　中礫(30～40㎜)含む
12．10YR4/3　にぶい黄褐　粗砂混砂質シルトと10YR4/6　粗砂混砂質シルト混じる
　中礫(40～50㎜)含む　細礫(２～４㎜)少量含む　焼土粒(２～３㎜)含む
13．10YR3/3　暗褐　粗砂混粘土質シルト
14．中～大礫(60～170㎜)　10YR4/2　灰黄褐　シルト質粘土含む

図 56　713 石積み基礎　平・断面・立面

る。この大礫の間にはシルト質粘土の泥層が堆積していたことから構築時にはほぼ礫のみを充填していたと見られる。背面の裏込め埋土も北端に近づくほど栗石である礫が多く充填される。石積み際は前面と同様に拳大の礫が充填される。礫を北側では多く充填するのに対して南側はほとんどみられない。

このように石積みの積方、掘方の深さや埋め方が北側と南側とで異なるのは、上部の石積みの構造に違いがあったと推測される。

遺物は掘方の石積み前面と背面の裏込めともに出土した。瓦質土器や土師質土器などの破片が出土



Aライン
1．大礫(60～80㎜)　10YR4/2　灰黄褐　粘土質シルト(泥層)
　10YR3/4　暗褐　粗砂混砂質シルトブロック(５～20㎜)含む
2．10YR4/2　灰黄褐　粘土質シルト
3．中～大礫(40～80mm)　10YR3/4　暗褐　粗砂～細礫混
　砂質シルト含む
4．10YR4/2　灰黄褐　粘土質シルト
5．10YR3/4　暗褐　粗砂～細礫混砂質シルト
　10YR4/3　にぶい黄褐砂質シルトブロック(10㎜)含む
　中～大礫(40～100㎜)含む
6．10YR5/3　にぶい黄褐　極粗砂～細礫混砂質シルト
　中～大礫(40～100㎜)含む

Bライン
1．中～大礫(40～80mm)　10YR4/3　にぶい黄褐　粗砂～細礫混
　粘土質シルト含む
2．10YR4/3　にぶい黄褐　粗砂混粘土質シルト
　中～大礫(40～150mm)含む
3．中礫(20～60㎜)　10YR3/4　暗褐　粗砂～細礫混砂質シルト含む
4．10YR3/3　暗褐　粗砂混砂質シルトと10YR4/3　にぶい黄褐
　粘土質シルトブロック(10㎜)混じる
5．中～大礫(50～100㎜)　細礫含む　10YR4/2　灰黄褐　極粗砂混
　砂質シルト含む
6．10YR4/2　灰黄褐　シルト質粘土　大礫(50㎜)含む

Cライン
1．10YR4/3　にぶい黄褐　粗～極粗砂混砂質シルトと
　10YR3/3　暗褐　砂質シルト混じる
2．10YR3/3　暗褐　粗砂混砂質シルト
3．10YR4/3　にぶい黄褐　粗～極粗砂混砂質シルト
　細礫(２～４㎜)・中～大礫(40～100㎜)含む
4．10YR4/3　にぶい黄褐　粗～極粗砂混砂質シルト
　10YR6/6　暗黄褐　粘土質シルトブロック(100㎜)
　大礫(100㎜)含む　炭粒(２～３㎜)・焼土粒(２～３㎜)含む
5．10YR4/3　にぶい黄褐　極粗砂混粘土質シルト

Dライン
1．10YR4/3　にぶい黄褐　粗～極粗砂混砂質シルトと
　10YR3/3　暗褐　砂質シルト混じる
　中～大礫(50～100mm)含む
2．10YR4/3　にぶい黄褐　粗～極粗砂混砂質シルト
　中礫(50～60㎜)含む
3．10YR3/3　暗褐　粗砂混粘土質シルト
4．10YR3/4　暗褐　粗砂混砂質シルト　焼土粒含む

Eライン
1．10YR4/3　にぶい黄褐　粗～極粗砂混砂質シルトと
　10YR3/3　暗褐　砂質シルト混じる
　大礫(200㎜)含む
2．10YR4/4　褐　粗～極粗砂混砂質シルト

Fライン
1．10YR4/3　にぶい黄褐　粗～極粗砂混砂質シルトと
　10YR3/3　暗褐　砂質シルト混じる
　中礫(２０～４０㎜)少量含む
2．10YR4/4　褐　粗～極粗砂混砂質シルト

図 57　713 石積み基礎　断面

しているが、石積み前面の掘方北西角からは完形でないものの瓦質土器羽釜・甕がまとまって出土しており何らかの意図があって置かれた可能性もある。またそこから３m南の掘方底面から完形ではないが、図 58 － 122 の瓦質土器皿が出土した。

掘方の石積み前面からは陶器皿、瓦質土器皿・擂鉢・羽釜・甕、土師質土器皿・甕、石鍋、平瓦が出土し、

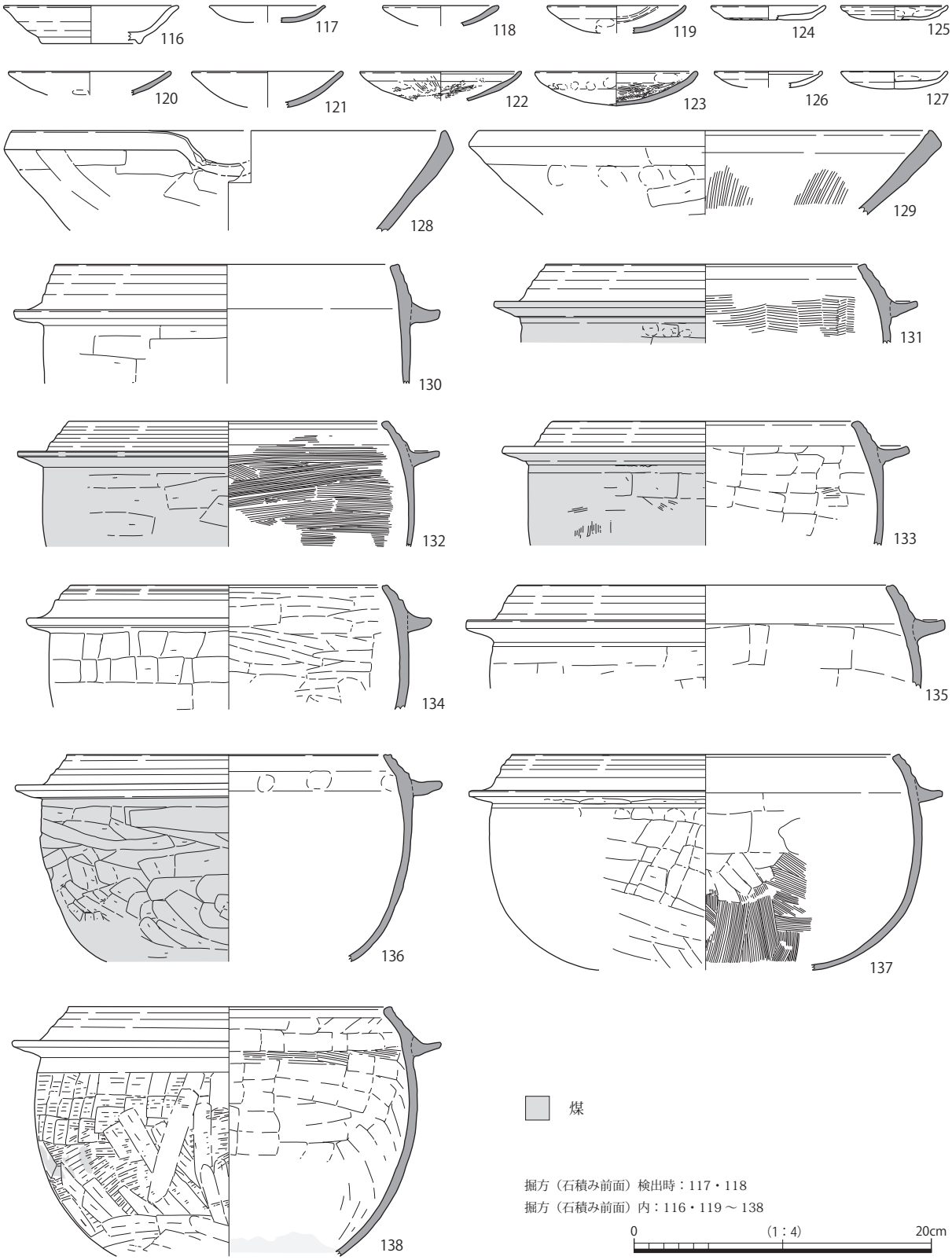


図 58　713 石積み基礎　遺物実測（1）

そのうち 28 点を実測した。116 は陶器瀬戸美濃の端反皿である。

117 ～ 123 は瓦質土器皿である。大きさは、117・118 の口径 7.6 ～ 7.8㎝、119 ～ 123 の口径 9.2 ～ 10.8㎝のものがある。117・118 は遺構検出時に出土した。調整は摩滅により不明瞭なものが多いが、119 は口縁部は横方向のナデ、内面は一部にヘラミガキを行う、外面に粘土接合痕が残存する。122・123 は口縁部はユビオサエ後横方向のナデ、底部内面はハケ、122 は摩滅しているが底部外面もハケを行う。いずれも焼成不良で土師質となっている。

124 ～ 127 は土師質土器皿で口径 7 ～ 8 ㎝の平底のものである。126 は口縁端部を内側に折り込む。調整は口縁部は横方向のナデ、底部はユビオサエ後ナデを行う。

128・129 は瓦質土器擂鉢でいずれも口縁部は内傾し、128 は口縁部上端をやや尖りぎみにつまみ上げ、129 は断面三角形をなす。調整は内外面ともに摩滅により不明瞭である。

130 ～ 138 は瓦質土器羽釜である。口縁部が 130 のほぼ直立するものと、131 ～ 138 の内傾がするものがあり、明瞭な段をもつ。調整は 130 ～ 137 は外面体部は横方向のヘラケズリ、内面は体部上半が 131・132 はハケ、133 ～ 137 はナデを行う。131 ～ 133・136 は鍔から体部にかけて煤が付着する。130・131・135・136 は口縁部に炭素の吸着がわずかに残るものの体部にはみられない。イブシが不完全であるため、色調はにぶい黄橙色や灰白色を呈し土師質となっている。胎土は砂粒を多く含む。138 は体部外面調整が他と異なり、タタキによる成形の後に上部は横方向、下部は斜め方向のヘ

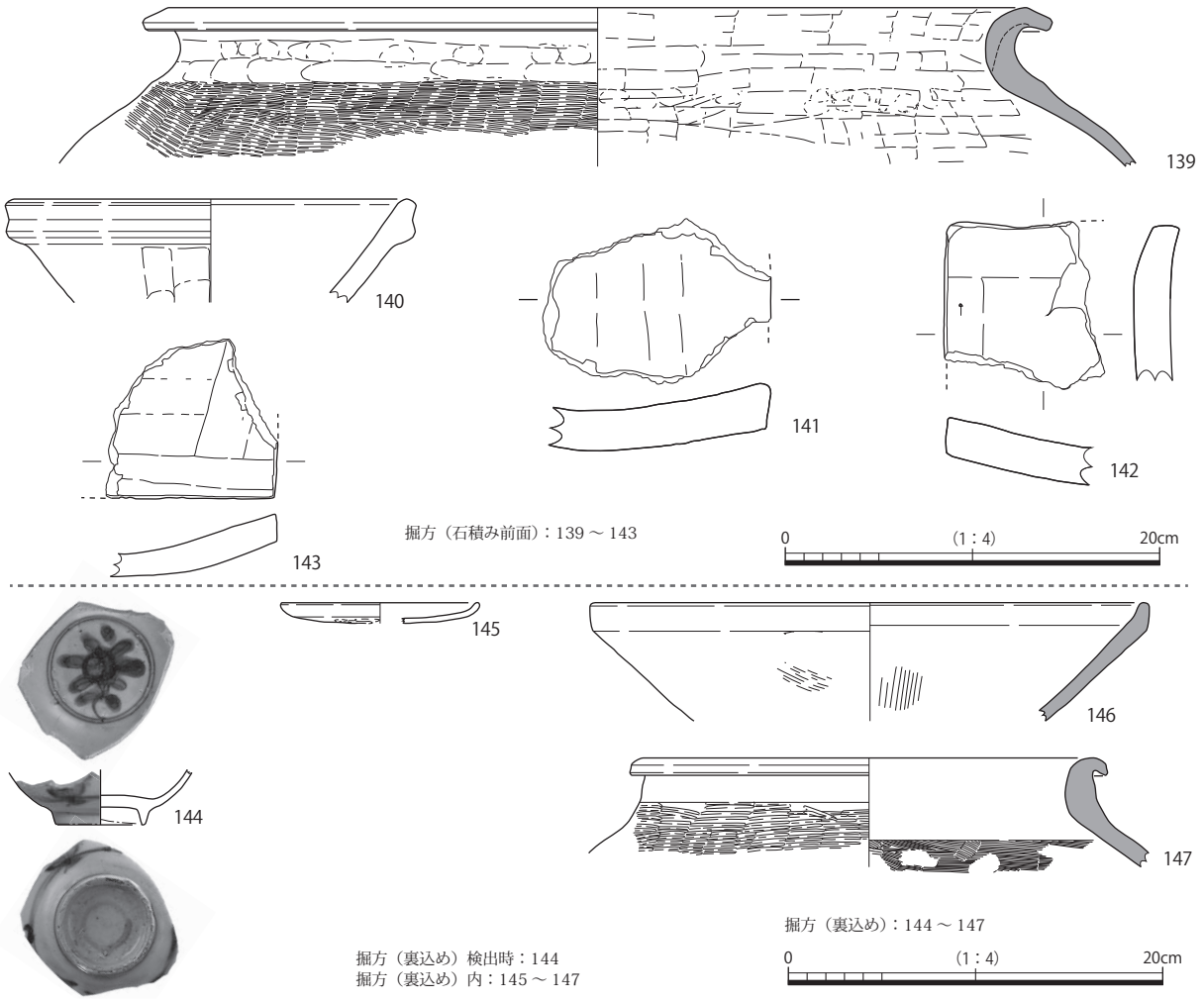


図 59　713 石積み基礎　遺物実測（2）

ラケズリを行った後一部にナデを行う。内面はハケ後ナデである。タタキによる成形は播磨に見られる技法で影響をうけたものであろうか。

139 は瓦質土器甕で肩部から頸部は短く立ち上がり、口縁部は外反する。調整は、外面が細かいタタキ、内面は指オサエ後ナデを行う。

140 は石製品石鍋である。口縁部直下に鍔をケズリ出し、体部外面はケズリの痕跡が残る。内面は研磨により滑らかで細かい無数の擦痕が見られる。石材は滑石。

141 ～ 143 は平瓦で凹面はナデ、凸面は未調整でコビキ痕が残る。

石積み背面の裏込めからは磁器染付碗、瓦質土器皿・擂鉢・羽釜・甕、土師質土器皿・甕が出土し、そのうち 4 点を実測した。

144 は中国磁器染付碗で遺構検出時に出土した。外面に文様を描き、内面の見込み部分は緩やかに盛り上がり、花卉文を描く。高台内は界線を描き、高台畳付は釉を掻きとりその周囲に砂が付着する。福建省漳州窯産。

145 は土師器皿で口縁部は横方向のナデ、底部はユビオサエ後ナデを行う。146 は瓦質土器擂鉢で口縁部は内傾し、断面三角形をなす。内外面摩滅により調整不明瞭。

147 は瓦質土器甕で口縁部を短く折り返し、調整は体部外面がタタキ、内面はハケ後一部ナデを行う。

117・118 の 15 世紀後半の瓦質土器皿、144 の 16 世紀後半の中国磁器染付碗があるが、いずれも遺構検出時に出土しており混入と考えられる。構築時期は、掘方底面から出土した 126・127 の 15 世紀初頭の瓦質土器皿や 139・147 の 14 世紀末から 15 世紀前半の瓦質土器甕から、15 世紀初頭と考えられる。

810・812 石積み基礎（図 54・60 ～ 65、図版 20 ～ 23・36・37）

4 区北側で、810 石積み基礎（以下 810）が南北方向、812 石積み基礎（以下 812）が東西方向に検出し、調査区外に続く。基壇状の高まりの 810 が西辺、812 が北辺にあたると考えられる。810 は 928・962 土坑、848・922・955・956 ピットと重複し 962 土坑・956 ピットを除く遺構に先行する。812 は 836・925・926・961・962 土坑と重複し 962 土坑を除く遺構に先行する。

石積みは、810 が掘方の西端に長さ 9.5 mにわたり西に面を揃え、自然石を積み上げる。812 は掘方の中央に長さ 6. 7 mにわたり北に面を揃え自然石を積み上げる。主軸は 810 は北、812 は北から 88°でほぼ東西南北の方角に一致する。石積みは、810・812 ともに 1 ～ 2 段残存し、積方は小口積である。812 は一部に残存しない箇所がある。

810 は、中央で石積みと直交する石積みと石列を検出した。南北方向の石積みは直交する石積みと石列間のみ裏込め側にややずれている。北側の石積みは南に面を揃えて 2 列に長さ 15 ～ 30㎝、幅 10 ～ 20㎝、厚さ 10㎝の自然石を整然と並べ、2 段積み上げる。南側の石列は石積みより大きな長さ 40㎝、幅 20 ～ 40㎝、厚さ 15 ～ 20㎝の石を並べる。裏込めの東端にはこの石積みから南側のみ土留めと見られる石が並ぶ。

石材の大きさは、810 が長さ 20 ～ 45㎝、幅 15 ～ 35㎝、厚さ 15 ～ 25㎝で南側が大型の石、石積みから北側は小型の石を用いる。812 は長さ 20 ～ 35㎝、幅 15 ～ 30㎝、厚さ 10 ～ 15㎝で 810 北側の石と同じ大きさである。

掘方の規模は、810 が幅 2.00 ～ 2.20 m、深さ 0.20 ～ 0.37 mである。掘方西端に石積みが並び、その背面の裏込めは幅 1.40 ～ 1.75 mと広い。埋土は、石積み前面は礫は含まず粗砂から極粗砂混じ

図 60　810・812 石積み基礎　平・断面

り砂質シルトで埋められる。石積み背面の裏込めは、南側が上層から下層まで礫が多く充填され、C 断面の南側付近では礫のみを充填した箇所もみられた。北側は下層ほど礫が少なくなる傾向にある。

812 の掘方規模は幅 1.00 ～ 1.20 m、深さ 0.20 mである。石積みは掘方のほぼ中央に並び、810 の掘方規模と比較すると幅がかなり狭く、２分の１程である。埋土は、810 と異なり礫を裏込めよりも石積み前面に多く詰め、礫の大きさは石積みに用いられた礫よりも大きなものもある。

810 は石積みの石の大きさや裏込めの様相から南側に向かって石積みが高く積まれていたと考えられる。

出土遺物は、810 は石積み前面の掘方から青磁、陶器甕、瓦質土器皿・擂鉢・甕、土師質土器皿、瓦、砥石、粘土塊が出土し、そのうち７点を実測した。148 ～ 150 は瓦質土器で 148 は皿である。149 の

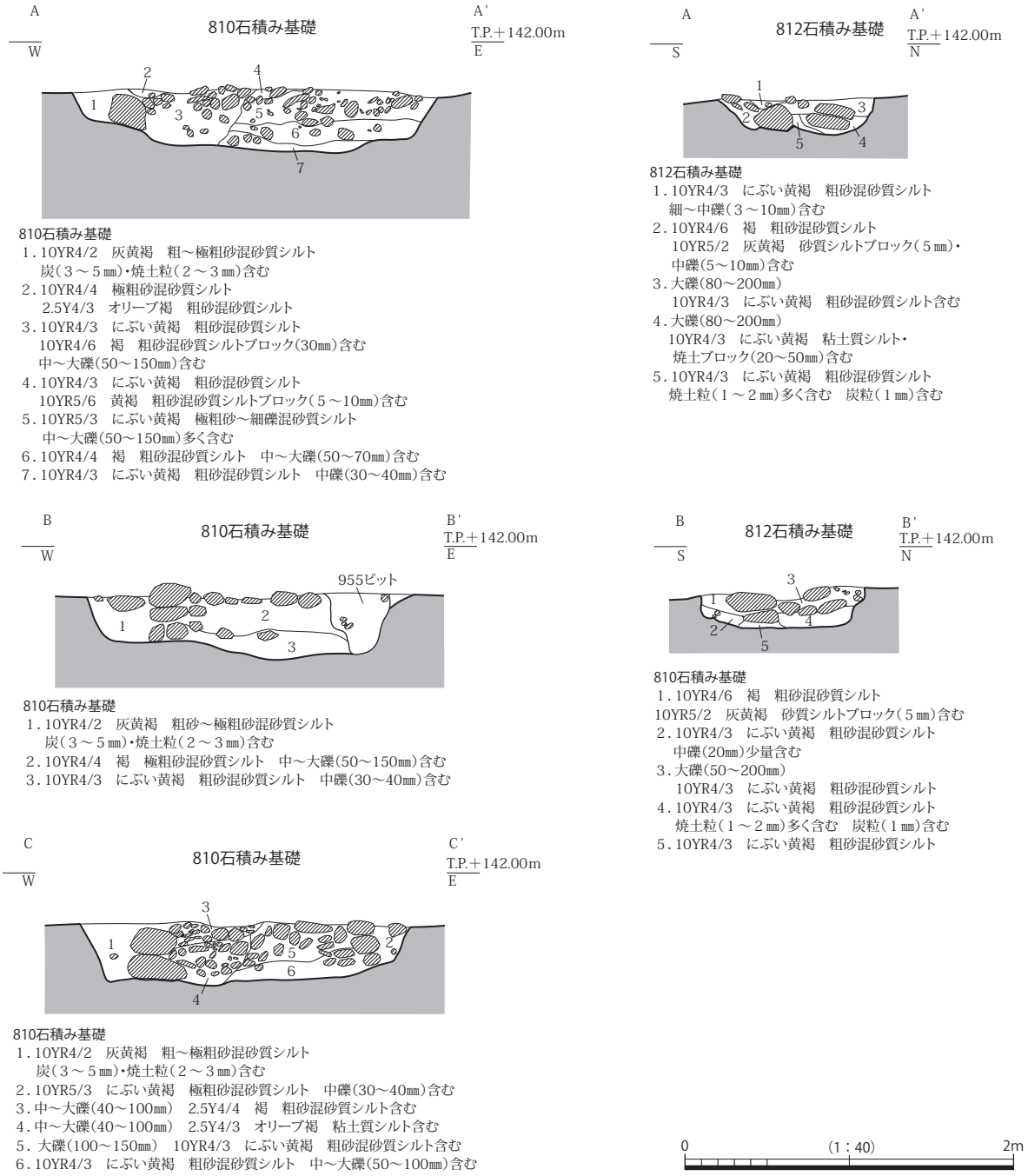


図 61　810・812 石積み基礎　断面

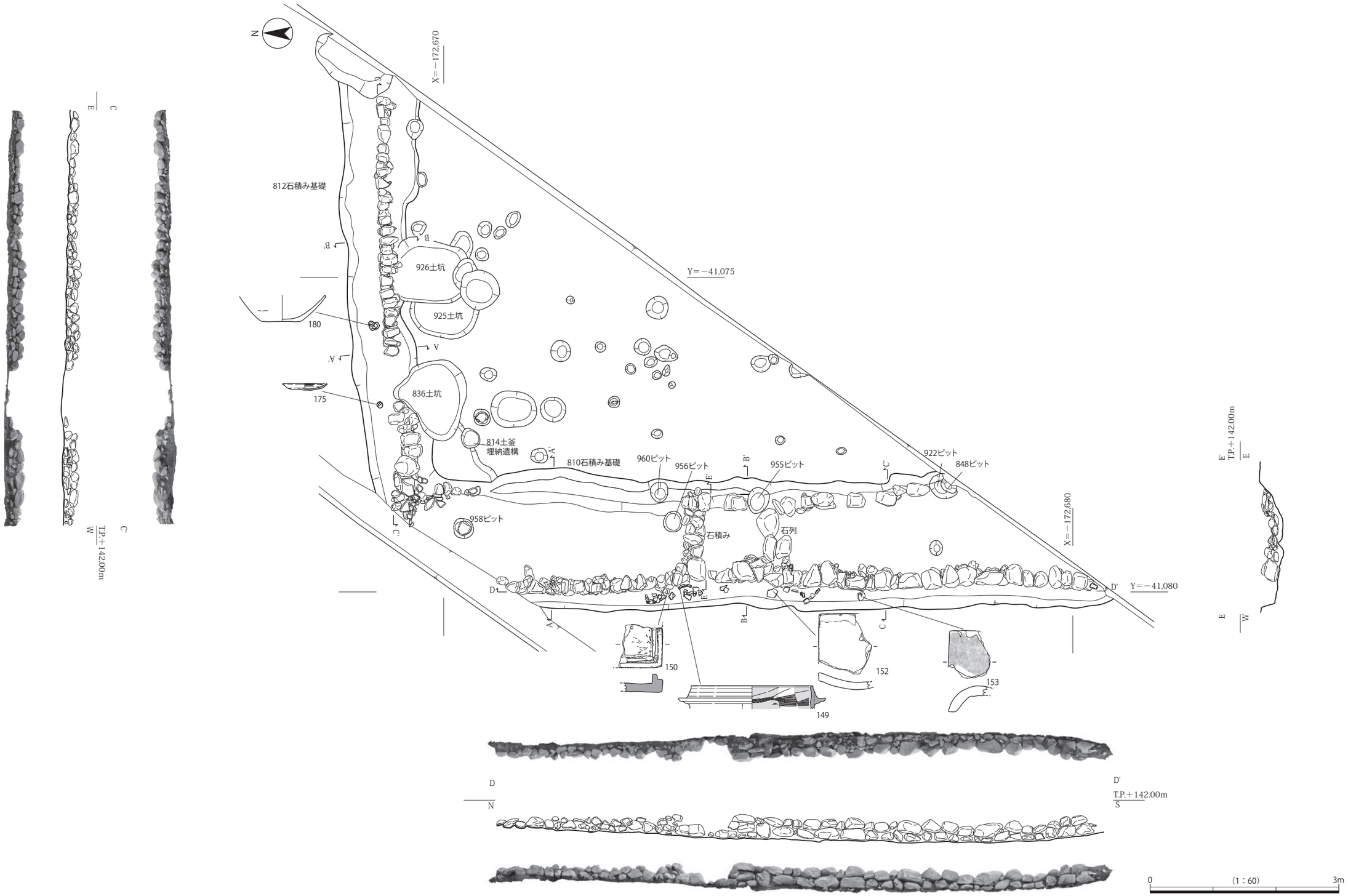


図 62　810・812 石積み基礎　平・立面

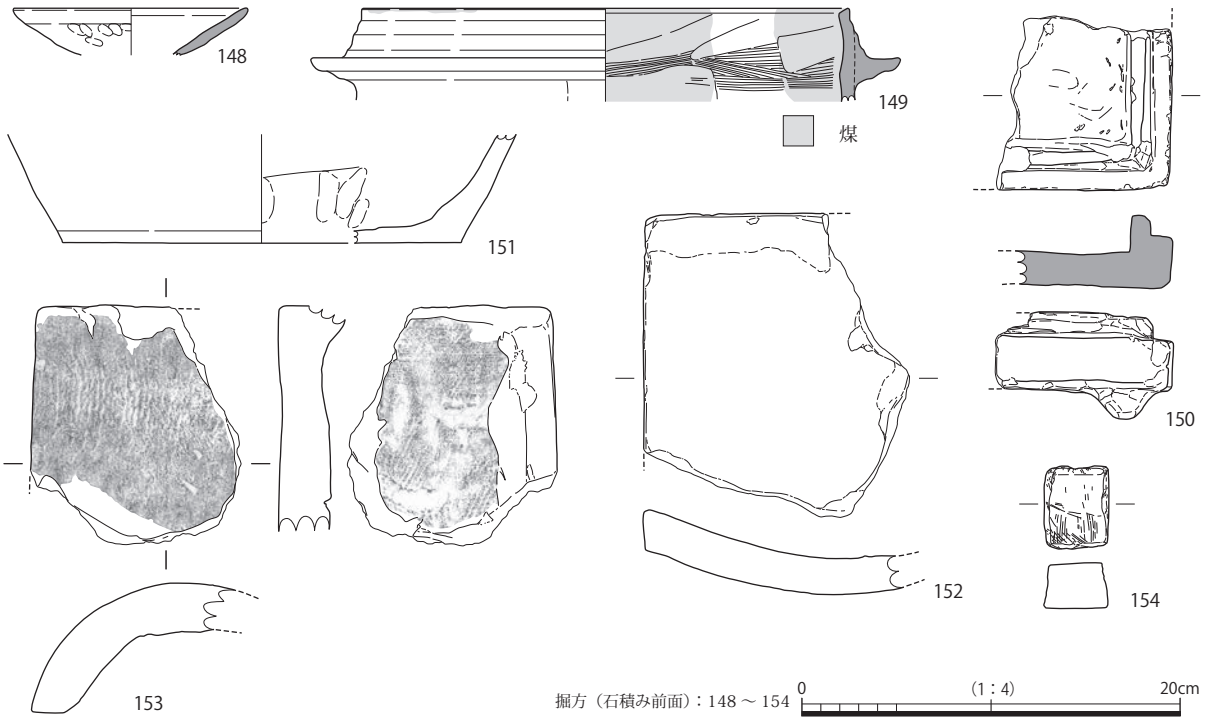


図 63　810 石積み基礎　遺物実測（1）

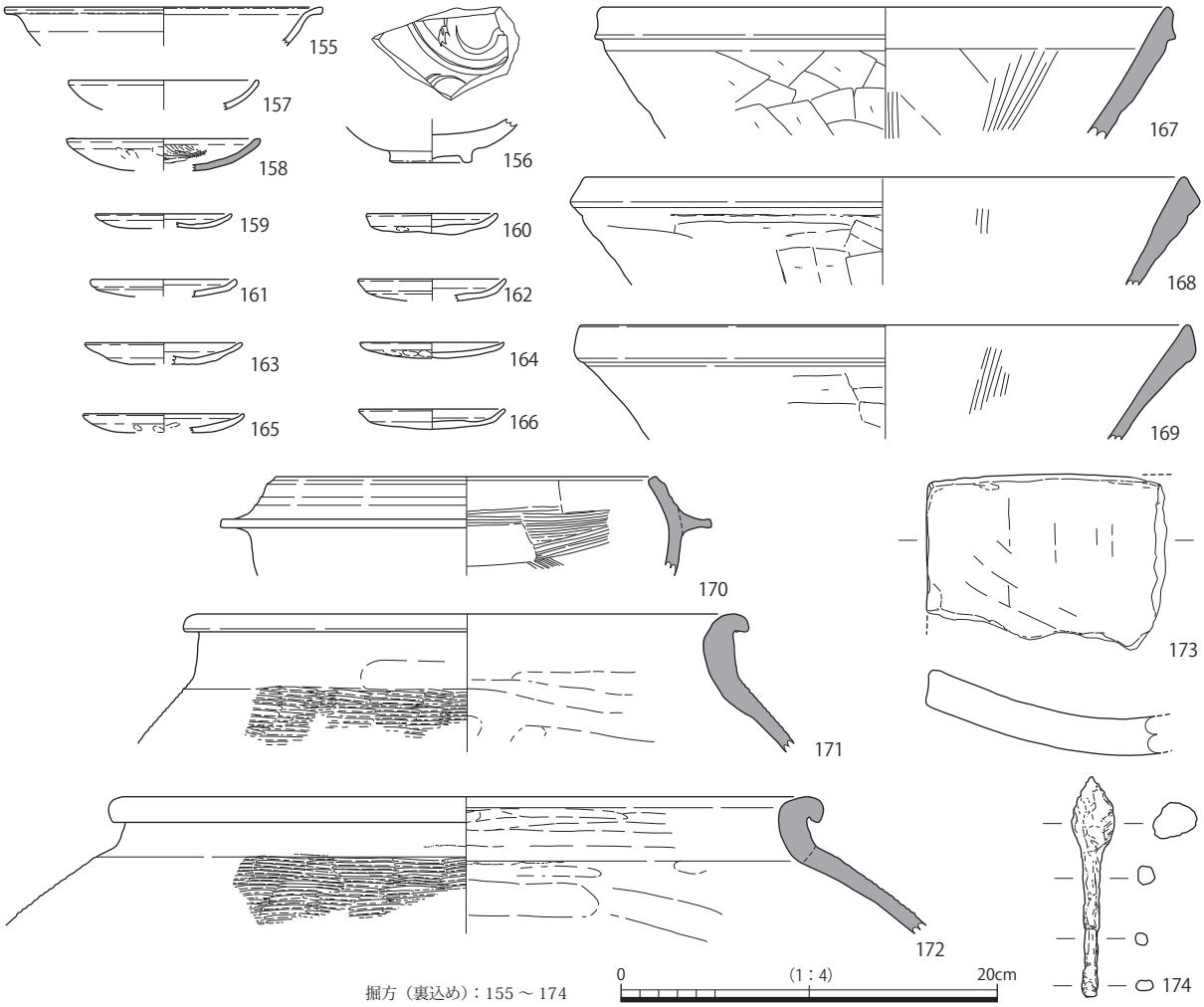


図 64　810 石積み基礎　遺物実測（2）

羽釜は口縁部は直立し、明瞭な段をもつ。調整は、外面体部がケズリ、内面が横方向のハケ後ナデを行う。内面には煤が厚く付着する。150 の火鉢は方形で四隅に脚が付くものと見られる。口縁部内面の一部に焦げが付着する。151 は陶器備前壺である。

152 は平瓦、153 は丸瓦である。152 の凹面は瓦を葺いた際の重ね合わせ幅 2 ㎝を除き、露出していた箇所は摩耗する。凸面角にはコビキ痕が残る。153 は凸面はタタキ後ナデを行い、縄目痕がわずかに残る。凹面は布目痕が残る。

154 は砥石で全ての面に細かい擦痕が残る。石材は凝灰岩。

石積み背面の裏込めからは青磁碗、白磁碗・皿、陶器甕、瓦質土器皿・擂鉢・羽釜・甕、土師質土器皿・甕、瓦、粘土塊が出土し、20 点を実測した。155・156 は青磁碗である。156 は内面見込みに花文を描く。高台は断面四角形で高台内部は刳りが浅く、そのため底部は器厚が厚い。高台部畳付け及びその内部は露胎である。釉調は青味を帯びた緑色である。龍泉窯。12 ～ 13 世紀に比定される。156 の釉調は灰白色である。157 は白磁皿である。12 世紀後半に比定される。

158 は瓦質土器皿で調整は外面がユビオサエ、内面はハケのちナデを行う。

159 ～ 166 は土師質土器皿である。口径は 6.8 ～ 8.4㎝、平底の底部から口縁部は短く立ち上がる。

167 ～ 169 は瓦質土器擂鉢で、口縁部縁帯の端部に明瞭な稜をもつ 167 と稜が曖昧となる 168・169 がある。調整はいずれも外面はヘラケズリ、内面はナデを行う。170 は瓦質土器羽釜で口縁部は内傾する。171・172 は瓦質土器甕である。口縁部は短く折り返す。調整は体部は外面がタタキ成形、内面はナデを行う。173 は平瓦、174 は鉄鏃である。

812 は石積み前面の掘方から陶器甕、土師質土器皿、瓦質土器皿・擂鉢・甕、瓦、粘土塊、石積み背面の裏込めからは砥石が出土し、そのうち 9 点を実測した。175・178 ～ 181 は石積み前面から出土した。175 は瓦質土器皿である。調整は内面口縁部にハケを行う。178・179 は瓦質土器擂鉢である。調整はいずれも外面はヘラケズリ、内面は摩滅により不明瞭。179 は擂目が密に入る。

180 は土師器甕で調整は、内外面ともに摩滅により不明瞭である。181 は平瓦で凹面ナデ、凸面端

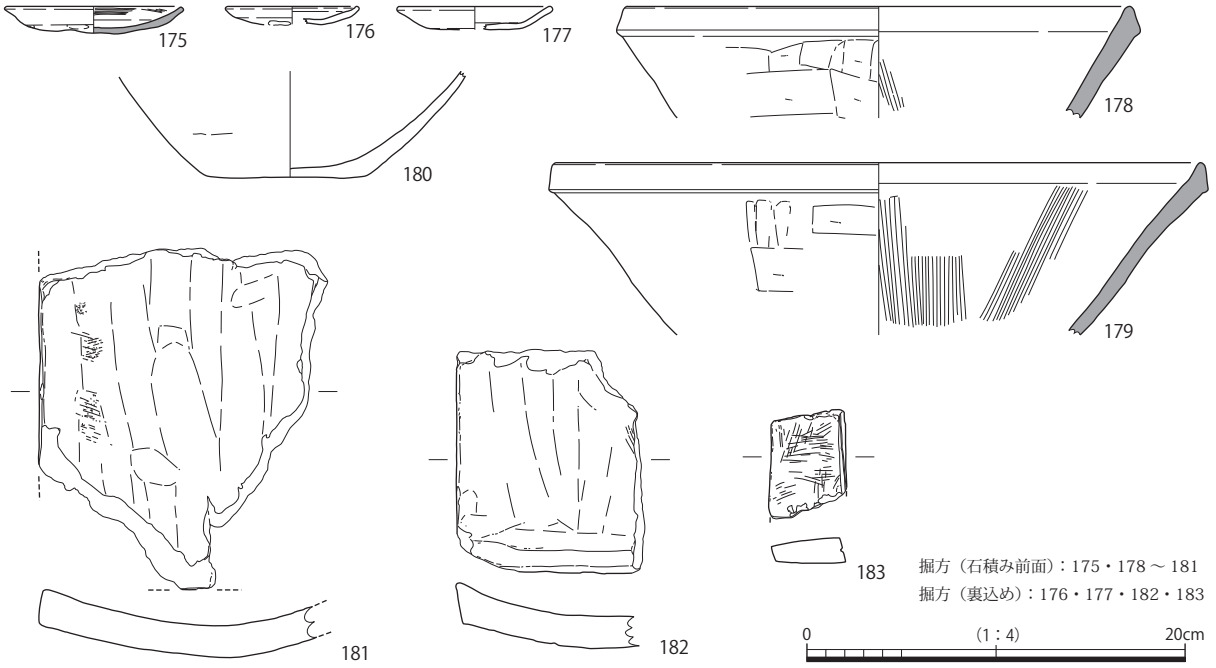


図 65　812 石積み基礎　遺物実測

にハケのような痕跡が残る。

176・177・182・183 は裏込めから出土した。176・177 は土師質土器皿である。182 は平瓦で凹面はナデのち面取りを行う。183 は砥石。4 面に擦痕があり、側面に幅 2㎜の溝状の研磨痕が残る。

遺構の構築時期は 14 世紀末から 15 世紀前半と考えられる。

810・812 石積み基礎に囲まれた箇所で検出した遺構（図 60）

814 土釜埋納遺構（図 54・60・62・66、図版 24・36）

調査区北側の 810 石積み基礎と 812 石積み基礎の北西角から検出した。掘方の平面形は円形を呈し、規模は直径 0.30 m。深さ 0.13 mである。掘方中央に瓦質土器羽釜が据えられ、その内部に土師質土器皿 10 点（190 ～ 199）、その上に瓦質土器皿 6 点（184 ～ 189）を納める。土師質土器皿は非常に

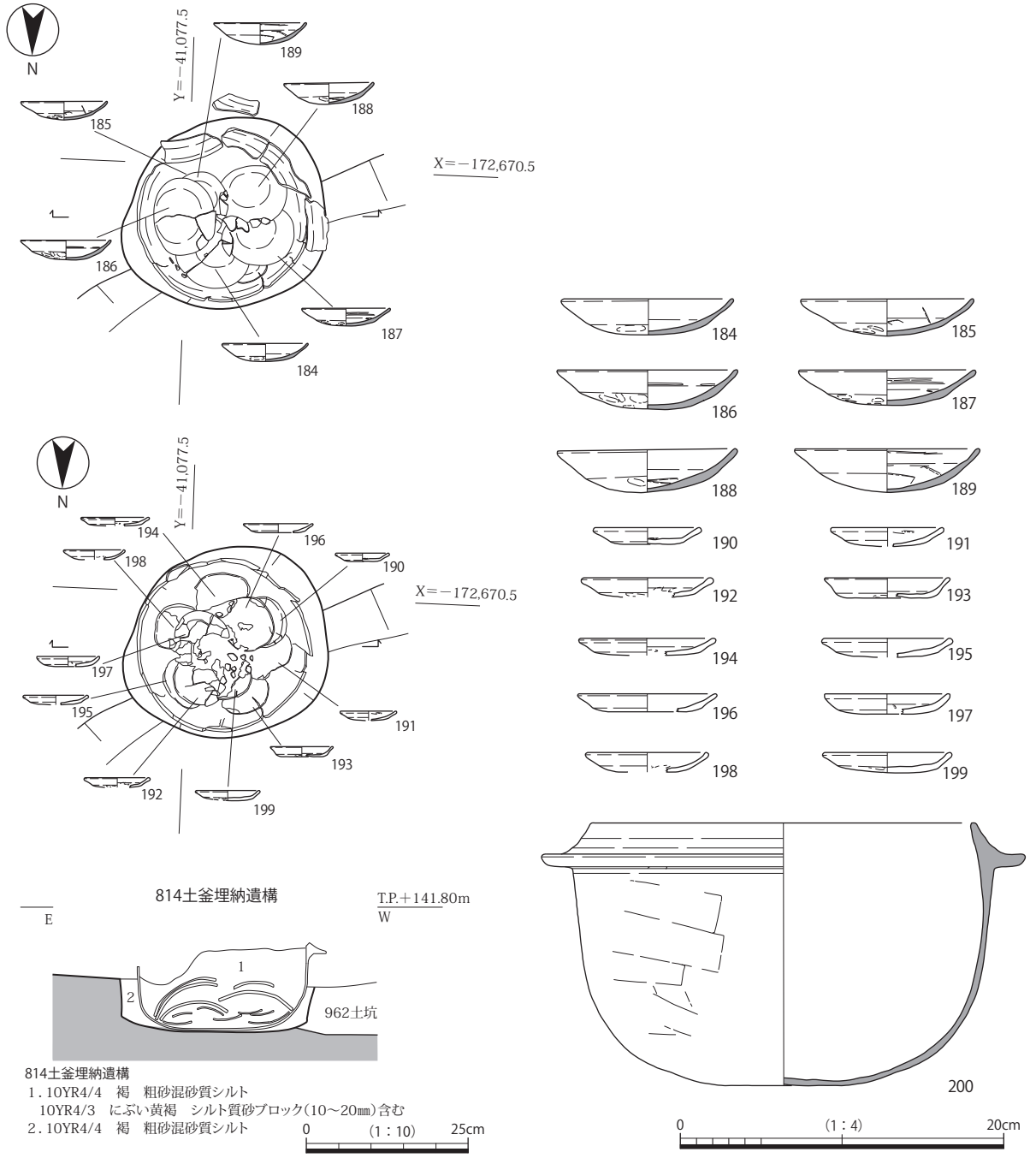


図 66　814 土釜埋納遺構　平・断面・遺物実測

脆弱で完形で取り上げることが出来なかった。そのため本来すべて完形であったが、実測図では底部が残存していないものがある。

184 ～ 189 は瓦質土器皿である。188・189 が口径 11.0 ～ 11.4㎝、器高 2.7㎝である。184・185・187 は 188・189 より口径・器高ともに小さく、口径 10.5 ～ 10.9㎝、器高 2.2 ～ 2.3㎝である。器形は丸底に近い底部から口縁部へ内彎ぎみにのびる。調整は口縁部が横方向のナデ、外面は体部から底部はユビオサエである。内面は、187 が体部ナデ後一部へラミガキ、189 は口縁端部にへラミガキ、体部から底部にかけてへラ状工具痕が残る。

190 ～ 199 は土師質土器皿である。口径は 6.5 ～ 8.5㎝で口縁部は強い横方向のナデにより外反ぎみであるものが大半を占める。

200 は瓦質土器羽釜で口縁部が内傾し、調整は体部外面が摩滅により不明瞭であるがへラケズリと見られる。底部内面は褐色に変色する。

時期は 14 世紀末から 15 世紀初頭と考えらえる。

836 土坑（図 54・60・62・67）

４区中央北寄りの 810・812 石積み基礎で囲われた箇所で検出した。812 石積み基礎・962 土坑と

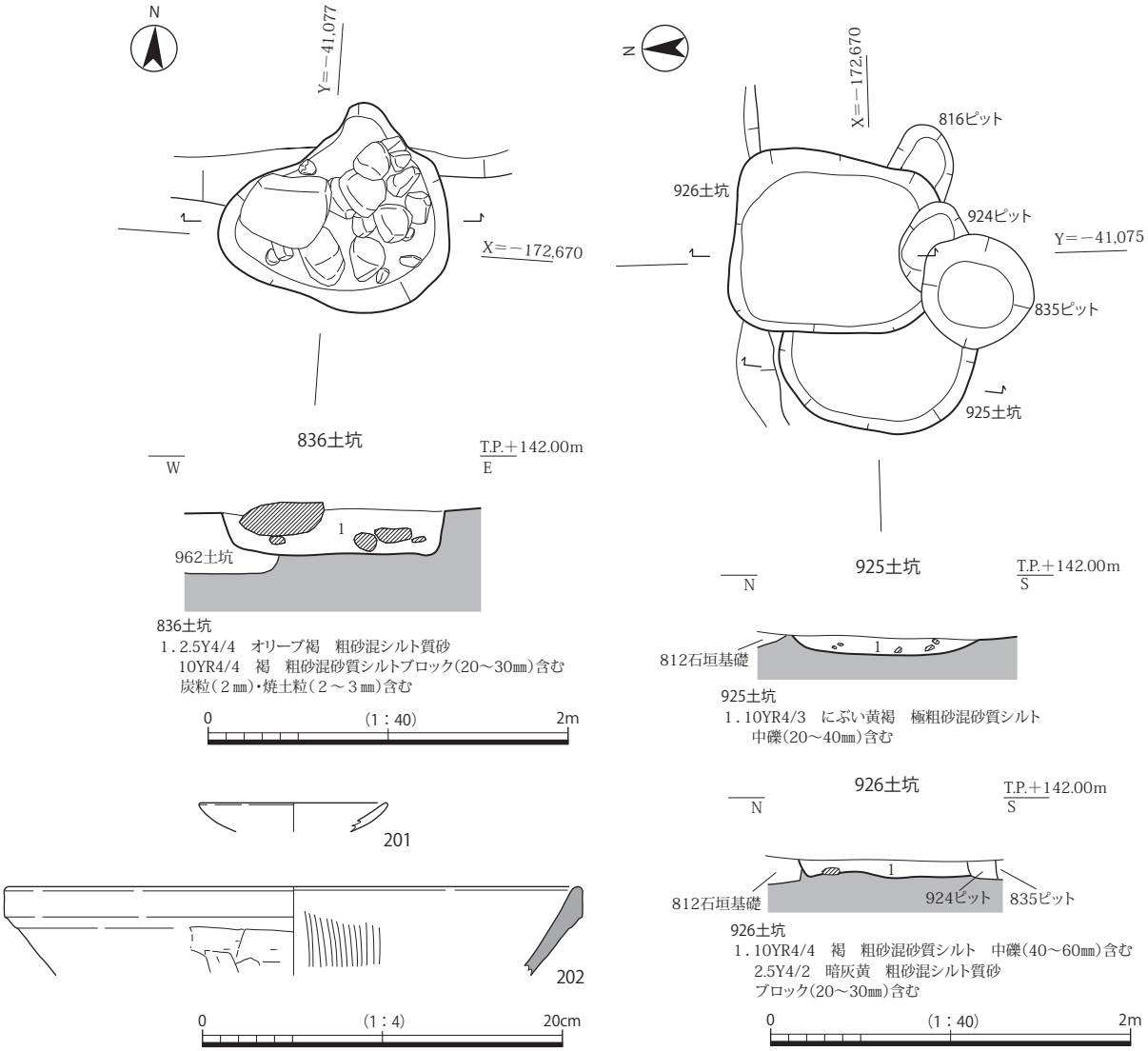


図 67　836・925・926 土坑　平・断面、836 土坑　遺物実測

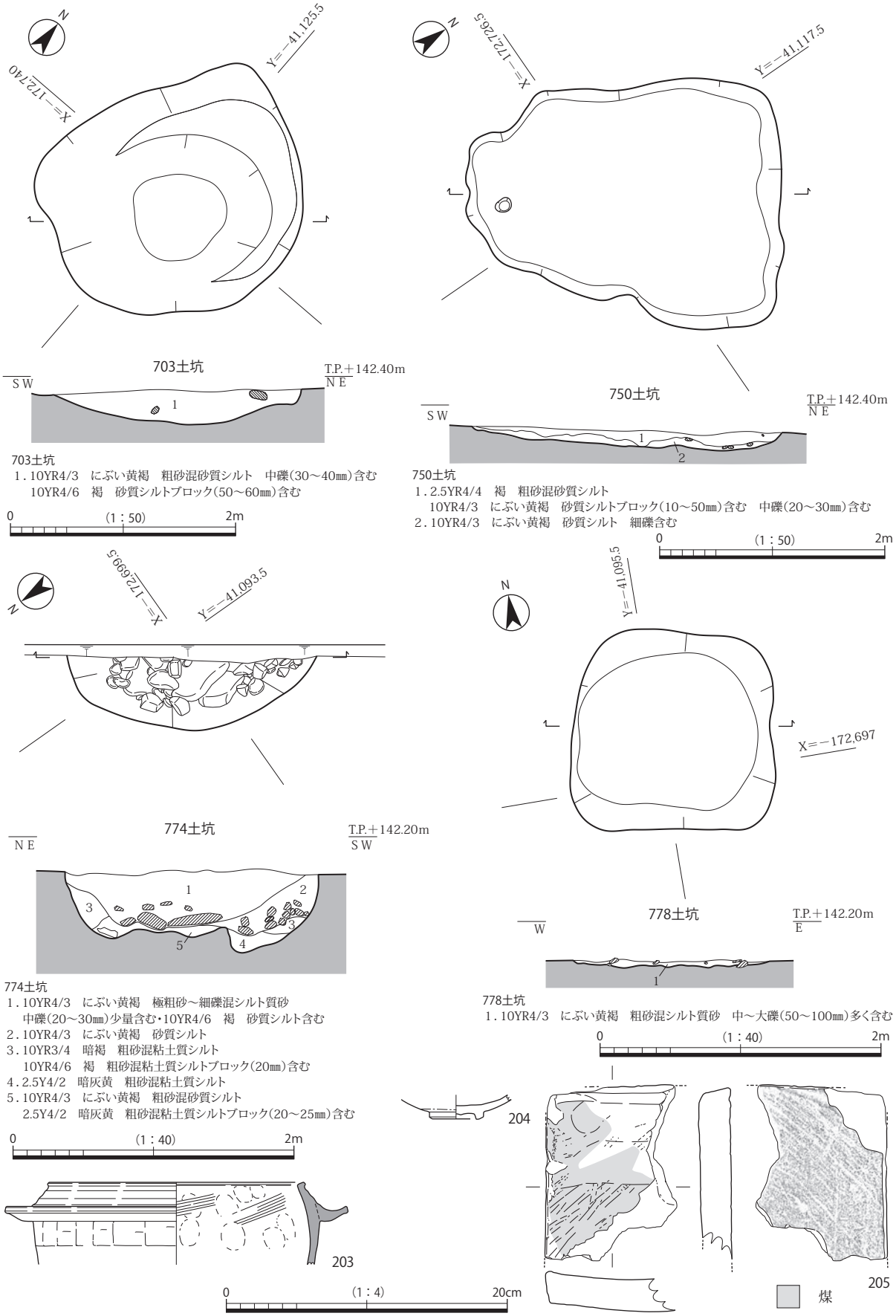


図 68　703・750・774・778 土坑　平・断面、774・778 土坑　遺物実測

重複し後出する。平面形は不整形な台形を呈し、規模は一辺 1.00 m、深さ 0.25 mである。

埋土は粗砂混じりシルト質砂に基盤層のブロックや炭粒・焼土粒を含む。土坑内には 20 ～ 40㎝の扁平な石が詰め込まれており、周囲の不要な石を廃棄した土坑であろうか。

遺物は白磁皿、東播系須恵器鉢、土師質土器皿・甕、平瓦が出土し、そのうち 2 点を実測した。201 は白磁皿である。12 世紀後半に比定される。

202 は瓦質土器擂鉢である。調整は外面が口縁部直下は横方向のヘラケズリ、それより下部は縦方向のヘラケズリ、内面は擦り目を施す。15 世紀末に比定される。

925 土坑（図 54・60・62・67）

4 区中央北寄りの 810・812 石積み基礎で囲われた箇所で検出し、926 土坑・835 ピットと重複し先行する。平面形は長方形を呈すると推定され、規模は長辺 1.10 m、短辺 0.55 m、深さ 0.10 mである。

埋土は中礫を含む極粗砂混じり砂質シルトである。遺物は出土していない。

926 土坑（図 54・67）

4 区の中央北寄りの 810・812 石積み基礎で囲われた箇所で検出し、812 石積み基礎、925 土坑、816・835・924 ピットと重複し、835・924 ピットに先行し、812 石積み基礎・925 土坑・816 ピットに後出する。平面形は長方形を呈し、規模は長辺 1.10 m、短辺 1.00 m、深さ 0.10 mである。

埋土は基盤層の粗砂混じり砂質シルトに粗砂混じりシルト質砂ブロックや中礫を含む。遺物は瓦質土器甕、土師質土器皿・甕が出土したが実測しえなかった。

713 石積み基礎から 810・812 石積み基礎の間及び近接して検出した遺構

703 土坑（図 54・68）

4 区南半の 713 石積み基礎南西側で検出した。平面形は長方形を呈し、規模は長辺 2.25 m、短辺 2.05 m、深さ 0.30 mである。

埋土は粗砂混じり砂質シルトに基盤層のブロックを含む。遺物は出土していない。

750 土坑（図 54・68）

4 区南半の 713 石積み基礎西側で検出した。平面形は不整形な長方形を呈し、規模は長辺 2.80 m、短辺 1.80 m、深さ 0.15 mである。埋土は 2 層に分けられ、2 層は基盤層の砂質シルト、1 層は粗砂混じり砂質シルトに基盤層のブロックを含む。遺物は須恵器杯蓋が 1 点出土したが実測しえなかった。

774 土坑（図 54・68、図版 25）

4 区中央の 787 土坑の南に近接し検出した。全体平面形・規模は東半が調査区外であるため、平面形は不明、検出規模は長辺 1.75 m、短辺 0.52 m、深さ 0.60 mである。

埋土は 6 層に分けられ、5 層は粗砂混じり砂質シルトに 3・4 層の粗砂混じり粘土質シルトがブロックで混じる。3・4 層は粗砂混じり粘土シルトで 3 層には基盤層のブロックが混じる。3 層堆積後に掘り直しがされその後 2・1 層が堆積する。2 層は砂質シルトで層下部に 10㎝前後の礫が集中する。1 層は極粗砂から細礫混じりシルト質砂に基盤層の砂質シルトを含む。層下部に 10 ～ 20㎝の石や一辺 30 ～ 40㎝の大きな扁平な石が埋まる。

遺物は 5 層から 203 の瓦質土器羽釜が出土した。口縁部は内傾し、体部外面は横方向のケズリ、内面は横方向のハケを行う。胎土は砂粒を多く含み粗い。15 世紀前半に比定される。

778 土坑（図 54・68、図版 25）

4 区中央の 775 土坑の東側に検出した。平面形は方形を呈し、規模は一辺 1.40 m、深さ 0.07 mである。

埋土は中礫から大礫を多く含む粗砂混じりシルト質砂である。

遺物は白磁皿、瓦質土器甕、土師質土器羽釜・甕、平瓦が出土し、そのうち２点を実測した。204は白磁皿である。外面は体部から高台部の境付近まで釉を施し、底部内面は蛇の目釉剥ぎを施す。

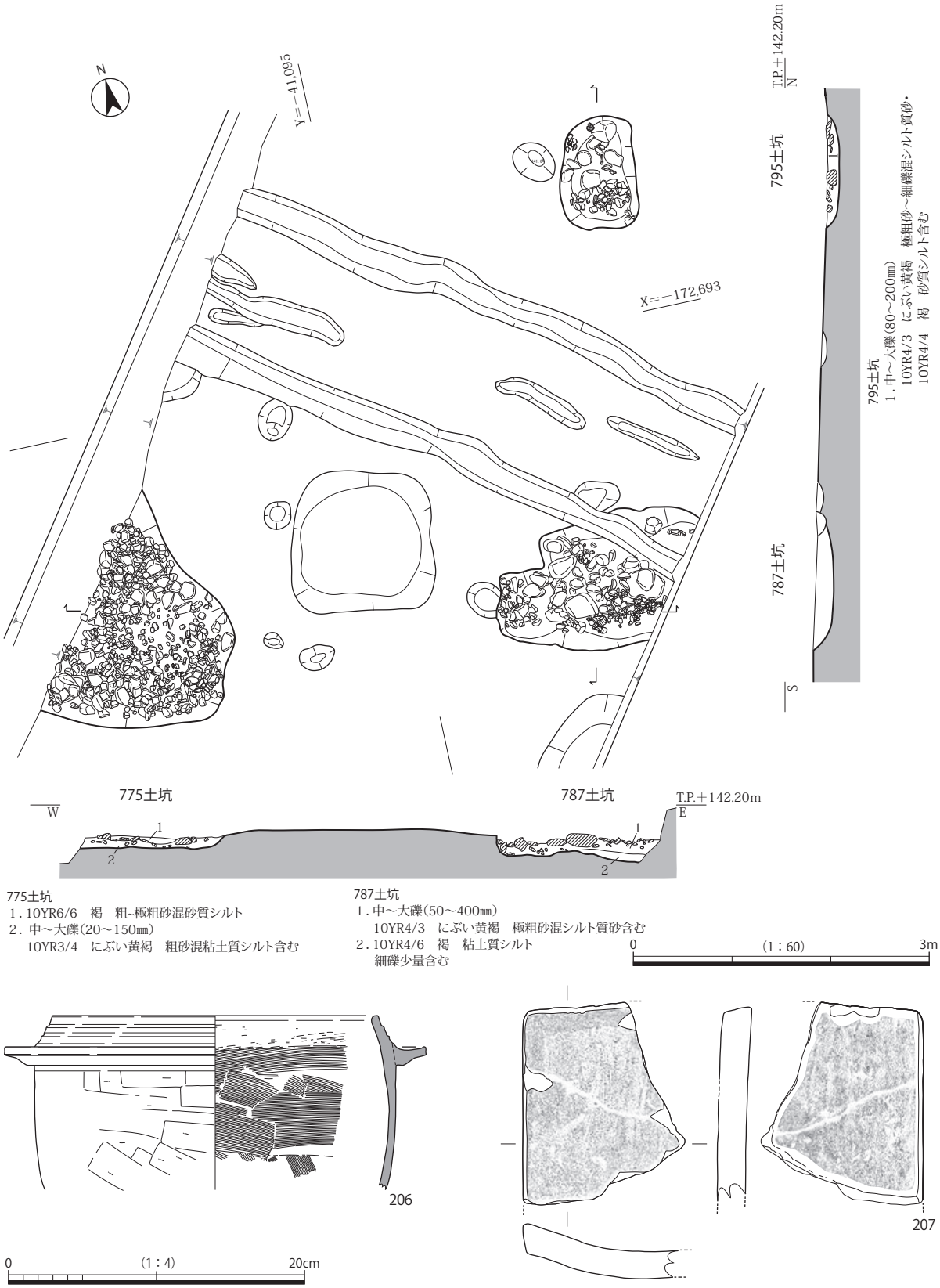


図 69　775・787・795 土坑　平・断面、795 土坑　遺物実測

205 は平瓦である。凹面はナデを行うが一部コビキ痕が残り、煤が付着する。凸面は未調整でコビキ痕が残る。

775・787・795 土坑（図 54・69、図版 25）

４区中央の 713・810 石積み基礎の中間で３基の土坑を検出した。これらの土坑は約 4.5 m間隔でＬ字形に並び、礫が充填されていた。

775 土坑の検出規模は長辺 2.40 m、短辺 1.50 m、深さ 0.10 mである。埋土は２層に分けられた。２層は直径５～ 15㎝の礫を敷き詰め粗砂混じり粘土質シルトで礫間を埋める。１層は基盤層の褐色粗砂から極粗砂混じり砂質シルトである。

遺物は瓦質土器羽釜、東播系須恵器鉢が出土したが実測しえなかった。

787 土坑は東端が調査区外であるが平面形は長方形を呈すると推定され、検出規模は長辺 1.70 m、短辺 1.35 m、深さ 0.20 mである。

埋土は２層に分けられ、下層は基盤層の褐色粘土質シルト、上層は 20 ～ 40㎝程の大礫と５～ 10㎝程の礫に極粗砂混じりシルト質砂で埋める。礫に大小のばらつきがある。遺物は瓦質土器羽釜が出土したが実測しえなかった。

795 土坑の平面形は長方形を呈し、規模は長辺 1.12 m、短辺 0.76 m、深さ 0.13 mである。埋土は５～ 10㎝程と 20㎝前後の大礫を主体とし極粗砂から細礫混じりシルト質砂である。

遺物は瓦質土器羽釜と平瓦が出土し、２点を実測した。206 は瓦質土器羽釜である。外面体部はヘラケズリ、内面がハケ後口縁部はナデを行う。207 は平瓦である。凹面は一部コビキ痕が残る。

時期は遺物が僅少だが 15 世紀前半と考えられる。

これら３基の土坑内は礫が充填しているが付き固めた状況は確認できなかった。そのため周辺の不要な礫を廃棄したものと考えられるが、何らかの構造物の基礎の可能性を指摘しておきたい。

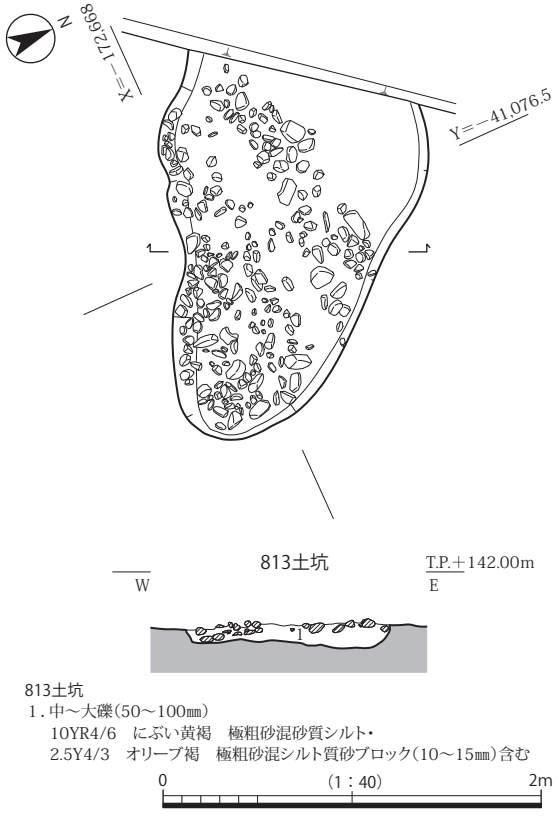


図 70　813 土坑　平・断面

813 土坑（図 54・70）

４区中央北寄りの 812 石積み基礎に隣接し検出した。全体平面形･規模は西半が調査区外であるが、平面形は楕円形を呈すると推定され、検出規模は長辺 2.00 m、短辺 1.40 m、深さ 0.10 mである。埋土は土坑内の上部は５～ 10㎝の大礫が詰められ、下部は極粗砂混じり砂質シルトに極粗砂混じりシルト質砂ブロックが混じる。

遺物は瓦質土器甕、東播系須恵器鉢、土師質土器皿・甕が出土したが実測しえなかった。

714 溝（図 54・71・72、図版 25）

４区中央南寄りの 713 石積み基礎の南側で検出した。北から南方向に延び、調査区外に続く。規模は幅 0.80 ～ 2.25 m、深さ 0.10 mである。埋土は細礫や大礫が混じる粘土質シルトである。

出土遺物は埋土最上部から瓦質土器甕、土師質

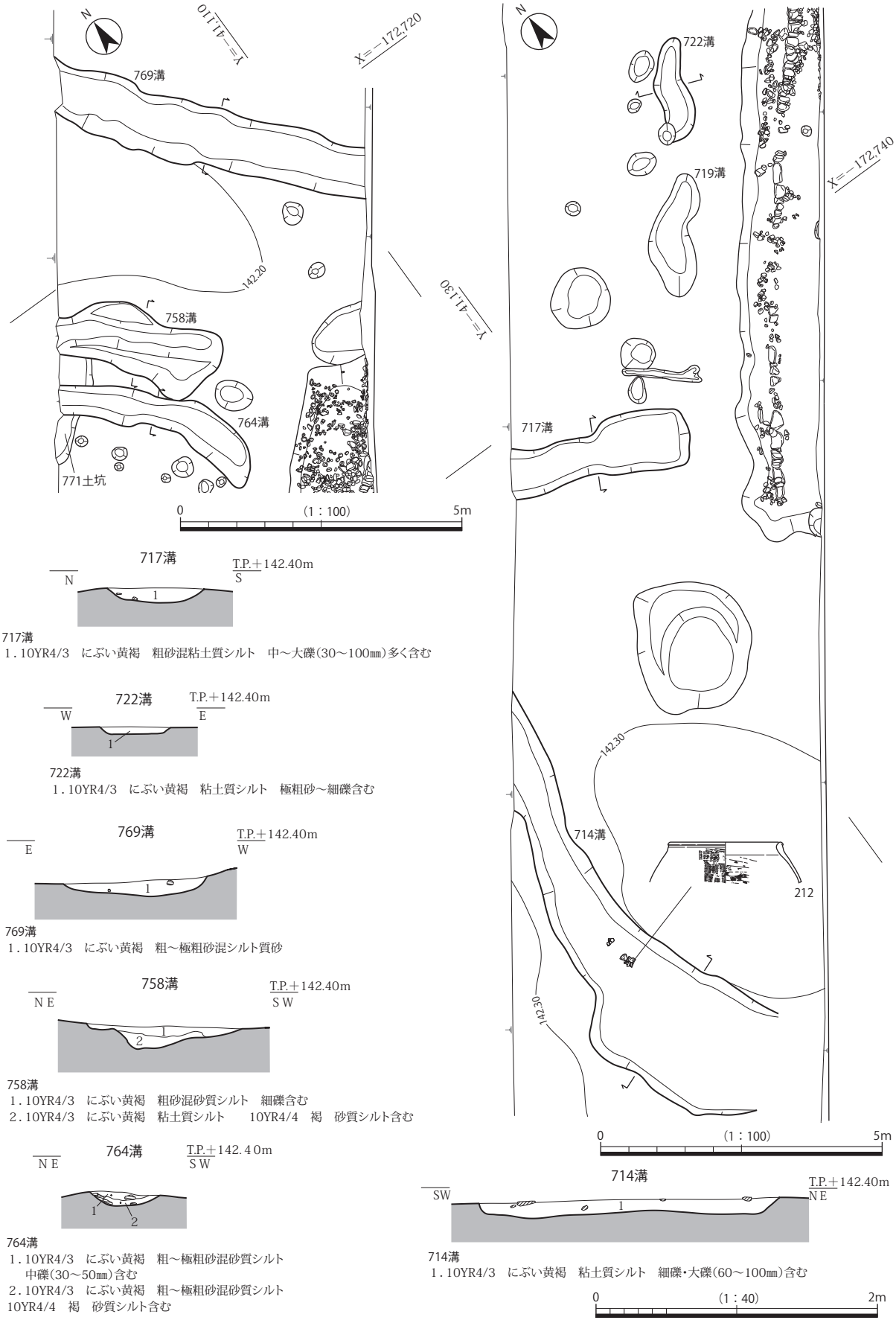


図 71　714・717・722・758・764・769 溝　平・断面

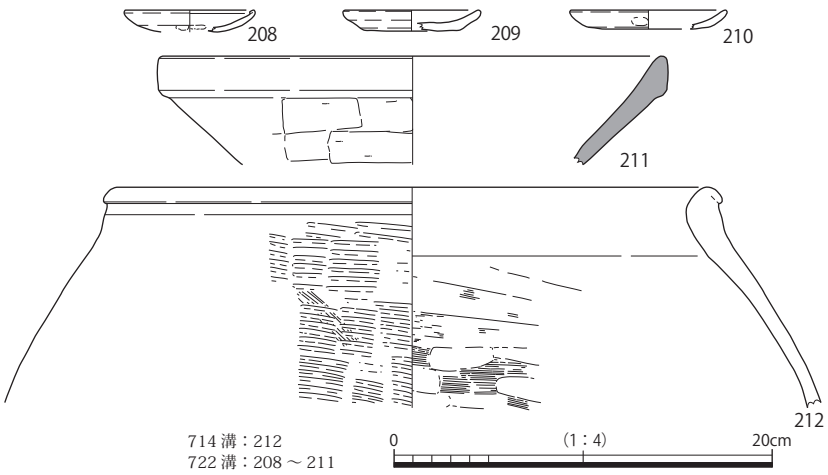


図 72　714・722 溝　遺物実測

土器甕が出土し、そのうち１点を実測した。212 は土師質土器甕である。口縁部は肥厚し端部はわずかに外折し、短い頸部から体部に広がる。調整は、外面が粗いタタキ、内面はハケ後ナデを行う。14 世紀末から 15 世紀前半であろうか。

717 溝（図 54・71）

４区中央南寄りの 713 石積み基礎南端に隣接し検出した。北西から南東方向に延び、調査区外西側に続く。規模は幅 0.90 ～ 1.05 m、深さ 0.10 mである。埋土は粗砂混じり粘土質シルトで溝の東側は大礫が多く混じる。

遺物は 14 ～ 15 世紀の陶器甕、瓦質土器擂鉢・羽釜・甕、土師質土器甕が出土したが、実測しえなかった。

722 溝（図 54・71・72、図版 37）

４区中央南寄りの 713 石積み基礎と並行に検出した。北東から南西方向に延び、規模は幅 0.40 ～ 0.50 m、深さ 0.06 mである。埋土は極粗砂から細礫が混じる粘土質シルトである。この溝と 719 溝は上部が削平され底部付近のみ検出したため、２条に分かれているが、埋土は同一で一連の溝であった可能性が考えられる。

遺物は土師質土器皿、瓦質土器皿・擂鉢・羽釜・甕が出土し、４点を実測した。

208 ～ 210 は土師質土器皿である。208 は底部から口縁部に緩やかに立ち上がり口縁端部を内側に折り込む。調整は口縁部は横方向のナデ、底部はユビオサエ後ナデを行う。209・210 は平底の底部から屈曲し口縁部へ立ち上がる。209 は口縁部内外面は横方向のナデ、底部外面未調整、内面はナデを行う。

211 は瓦質土器擂鉢である。口縁部は断面三角形でやや突出し、調整は外面体部がヘラケズリ、内面は摩滅により不明である。

出土遺物から 15 世紀後半と見られる。

758 溝（図 54・71）

４区中央の 713 石積み基礎北端に隣接し検出し、771 土坑と重複し後出する。北西から南東方向に延び、調査区外に続く。規模は幅 0.70 ～ 1.25 m、深さ 0.16 mである。

埋土は２層に分けられ、２層は粘土質シルトに砂質シルトが混じり、１層は粗砂混じり砂質シルトである。遺物は瓦質土器羽釜１点が出土したが、実測しえなかった。

764 溝（図 54・71）

４区中央の 758 溝に並行して検出し、771 土坑と重複し後出する。北西から南東方向に延び、調査区外に続く。規模は幅 0.50 ～ 0.70 m、深さ 0.10 mである。

埋土は２層に分けられ、粗砂から極粗砂混じり砂質シルトを主体とし、２層には基盤層が混じる。遺物は出土していない。

769 溝（図 54・71）

4 区中央の 713 石積み基礎北側に隣接し検出した。北西から南東方向に延び、調査区外に続く。規模は幅 0.90 ～ 1.10 m、深さ 0.10 mである。埋土は粗砂から極粗砂混じりシルト質砂である。遺物は出土していない。

この溝はほぼ現況の耕作地区画境に位置し、方向も一致することから耕作に伴う取・排水路の可能性が考えられる。

799 溝（図 54・73）

4 区中央の 810 石積み基礎から 5 m西側で検出した。810 石積み基礎と並行に北から南方向に延び、調査区外南側に続く。規模は幅 1.00 ～ 1.50 m、深さ 0.10 ～ 0.18 mである。埋土は 2 層に分けられ、いずれも粗砂混じりシルト質砂を主体とし、1 層は極粗砂が混じる。

遺物は瓦質土器擂鉢・甕、土師質土器皿・甕・羽釜が出土し、2 点を実測した。213・214 は 1 層から出土した瓦質土器羽釜である。口縁部は、213 は 214 に比べ短く内傾し、口縁部外面に段をもつ。調整は外面体部がいずれも横方向のヘラケズリ、内面は 213 が摩滅により不明瞭、214 はハケ後ナデを行う。213 の口縁部に 1 箇所の穿孔が見られる。15 世紀中葉に比定される。

調査区南部で検出した遺構

691 土坑（図 54・74、図版 26）

4 区南端で検出し 690 溝・692 土坑・693 土坑と重複し、690 溝に先行し、692・693 土坑より後

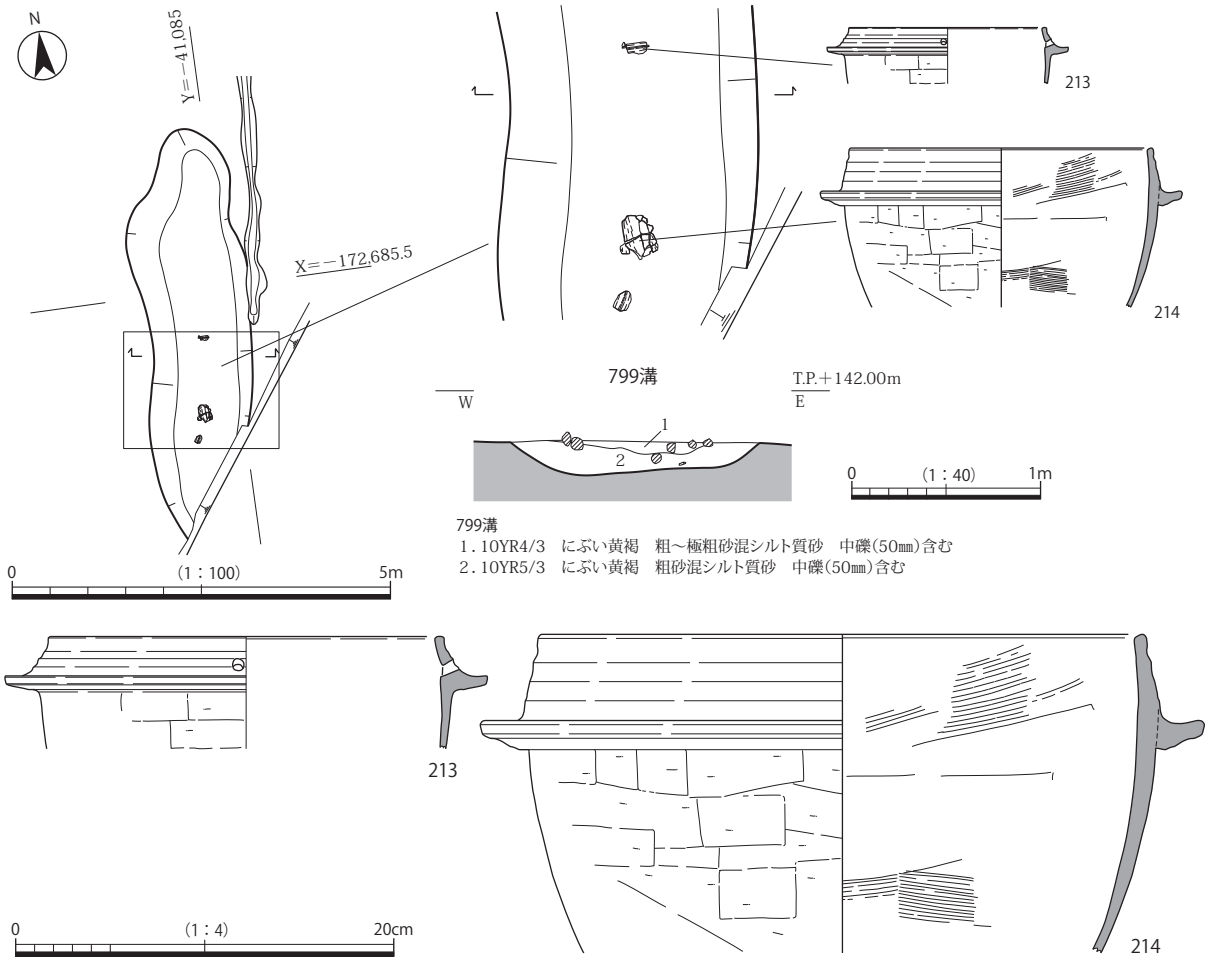
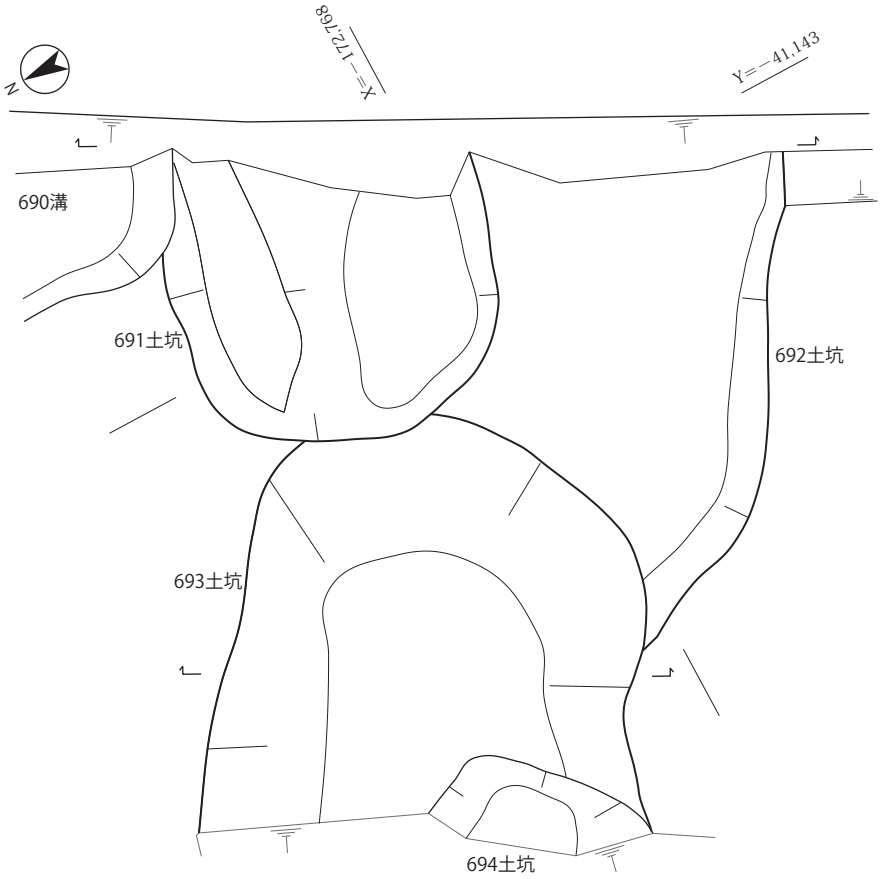
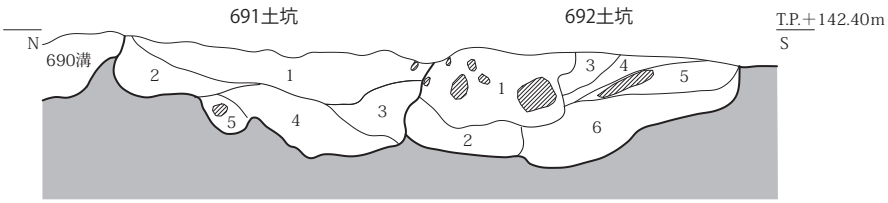


図 73　799 溝　平・断面・遺物実測

出する。全体平面形・規模は東半が調査区外のため不明であるが、検出規模は長辺 1.70 m、短辺 1.35 m、深さ 0.55 mである。

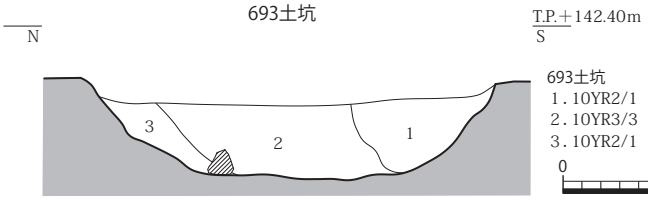
埋土は５層に分けられた。第５－２層を主体とし、４・３・１層には粘土質シルトブロックを含む。遺物は出土していない。





691土坑
1．10YR2/2　黒褐　粗砂混砂質シルト　細礫含む
　10YR2/2　黒褐　粗砂混粘土質シルトブロック(20～40㎜)含む
2．10YR2/2　黒褐　粗砂混砂質シルト　極粗砂少量含む
3．10YR2/1　黒　粗砂混砂質シルト
　10YR2/2　黒褐　粗砂混粘土質シルトブロック含む(20～30㎜)
4．10YR2/1　黒　粗砂混砂質シルトと10YR2/2　黒褐　粗砂混粘土質シルト混じる
5．10YR3/3　暗褐　粗砂混砂質シルト　極粗砂・大礫(500㎜)含む

692土坑
1．10YR4/6　褐　粗砂混砂質シルト
　10YR2/1　黒　粗砂混砂質シルトブロック・大礫(60～100㎜)・細礫含む
2．10YR3/3　暗褐　粗砂混砂質シルト
3．10YR3/2　黒褐　極粗砂混砂質シルト
4．10YR3/2　黒褐　粗砂～細礫混砂質シルト　細礫多く含む
5．10YR2/1　黒　粗砂混砂質シルト　細礫少量含む
6．10YR2/1　黒　粗砂～細礫混砂質シルト
　10YR3/3　暗褐　粗砂混砂質シルトブロック(10～20㎜)含む



693土坑
1．10YR2/1　黒　粗砂混砂質シルト　細礫少量含む
2．10YR3/3　暗褐　粗砂混砂質シルト　極粗砂少量含む
3．10YR2/1　黒　粗砂混砂質シルト　細礫少量含む

0　(1：40)　2m

図 74　691・692・693 土坑　平・断面

692 土坑（図 54・74、図版 26）

4 区南端で検出し、691・693 土坑と重複し先行する。全体平面形・規模は他土坑との重複と東半が調査区外に広がるため不明であるが、検出規模は長辺 2.5 m、短辺 1.8 m、深さ 0.6 mである。

埋土は 6 層に分けられ、6 ～ 3 層は第 5 － 2 層の黒色から暗褐色粗砂から細礫混じり砂質シルトを主体とする。3 層堆積後に掘り直され、2 層堆積後に 1 層の基盤層の粗砂混じり砂質シルトに第 5 － 2

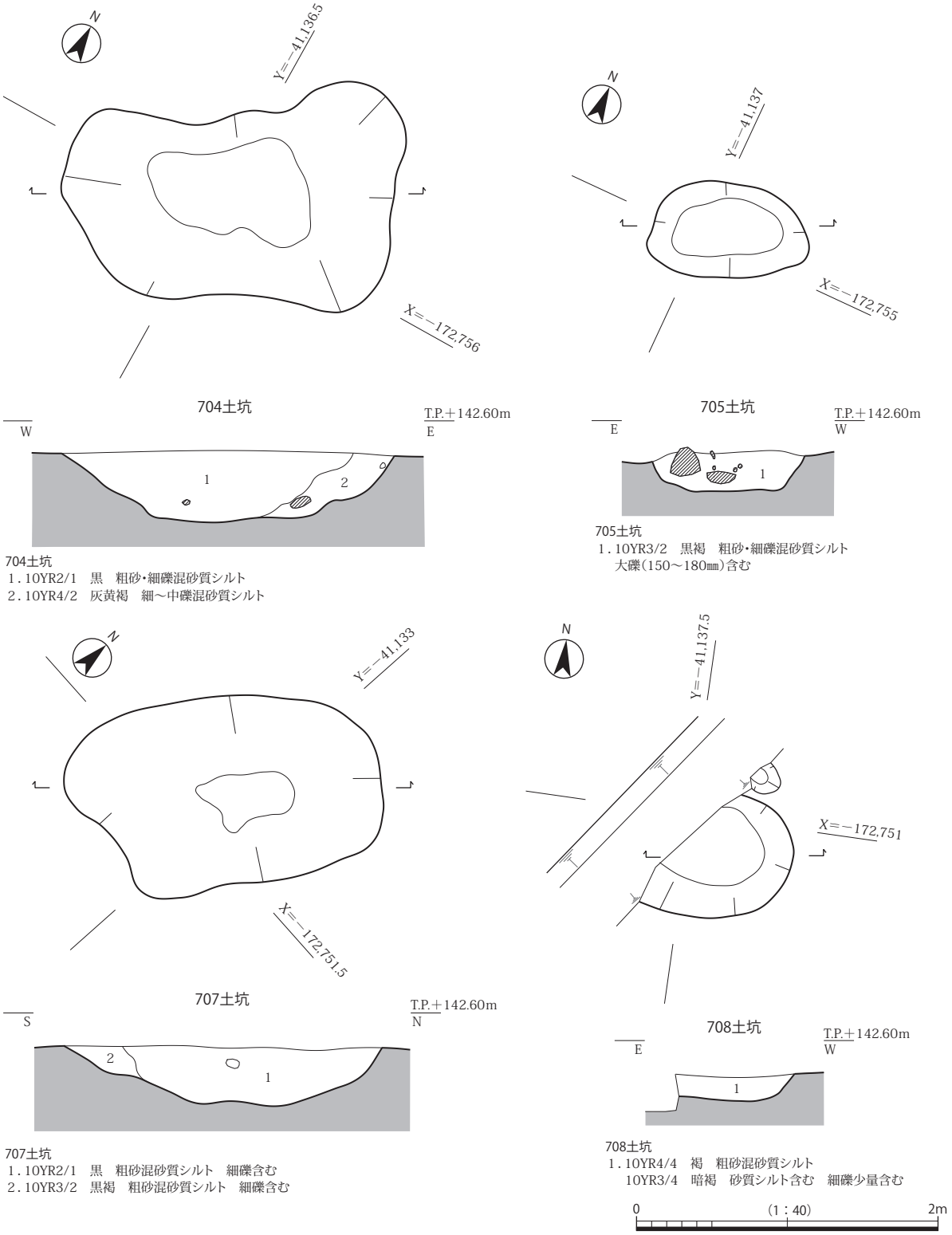


図 75　704・705・707・708 土坑　平・断面

層と大礫で埋め戻される。遺物は出土していない。

693 土坑（図 54・74、図版 26）

４区南端で検出し、691・692・694 土坑と重複した。691・694 土坑に先行し、692 土坑より後出する。全体平面形･規模は西半が攪乱され不明であるが、検出規模は一辺 2.10 m、深さ 0.38 mである。

埋土は第５－２層の黒色から暗褐色粗砂混じり砂質シルト主体とし３層に分けられた。遺物は出土していない。

704 土坑（図 54・75、図版 26）

４区南半で検出した。平面形は不整形な長方形を呈し、規模は長辺 2.20 m、短辺 1.20 m、深さ 0.48 mである。

埋土は２層に分けられ、２層は細礫から中礫混じり砂質シルト、１層は第５－２層に類似する粗砂から細礫混じり砂質シルトである。遺物は出土していない。

705 土坑（図 54・75、図版 26）

４区南半の 704 土坑に近接し検出した。平面形は楕円形を呈し、規模は長辺 1.05 m、短辺 0.62 m、深さ 0.25 mである。

埋土は第５－２層の粗砂から細礫混じり砂質シルトで大礫を含む。遺物は出土していない。

707 土坑（図 54・75、図版 26）

４区南半の 704 土坑北側で検出した。平面形は長方形を呈し、規模は長辺 2.10 m、短辺 1.25 m、深さ 0.38 mである。

埋土は２層に分けられ、いずれも第５－２層に類似する粗砂混じり砂質シルトである。遺物は出土していない。

708 土坑（図 54・75、図版 26）

４区南半の 707 土坑西側で検出した。全体平面形・規模は西半が側溝内であるが、平面形は長方形を呈すると推定され、検出規模は長辺 0.90 m、短辺 0.80 m、深さ 0.15 mである。

埋土は基盤層の粗砂混じり砂質シルトに砂質シルトを含む。遺物は出土していない。

680 溝（図 54・76、図版 26）

４区南端で検出した。東から西方向に延び､西側調査区外に続く。規模は幅 0.50 ～ 1.20 m､深さ 0.15 ～ 0.25 mである。

埋土は２層に分けられ、２層は第５－２層に由来する砂質シルトに基盤層の粘土質シルトブロックが混じる。１層は基盤層に由来する極粗砂から細礫混じり砂質シルトである。遺物は出土していない。

685 溝（図 54・76、図版 26）

４区南端で検出した。南東から北西方向に延び、西側調査区外に続く。規模は幅 0.70 ～ 1.10 m、深さ 0.14 ～ 0.16 mである。

埋土は第５－１層に由来する極粗砂から細礫混じり粘土質シルトである。遺物は出土していない。

686 溝（図 54・76、図版 26）

４区南端で検出した。南東から北西方向に 685 溝とほぼ並行に延び、西側調査区外に続く。規模は幅 0.90 ～ 1.25 m、深さ 0.12 ～ 0.49 mである。

埋土は４層に分けられ、４層は極粗砂から細礫混じり砂質シルトで堆積後に掘り直しがされる。３・２層は第５－２層を主体とし、２層は粘土質シルトブロックを含む。１層は極粗砂から細礫混じり粘土

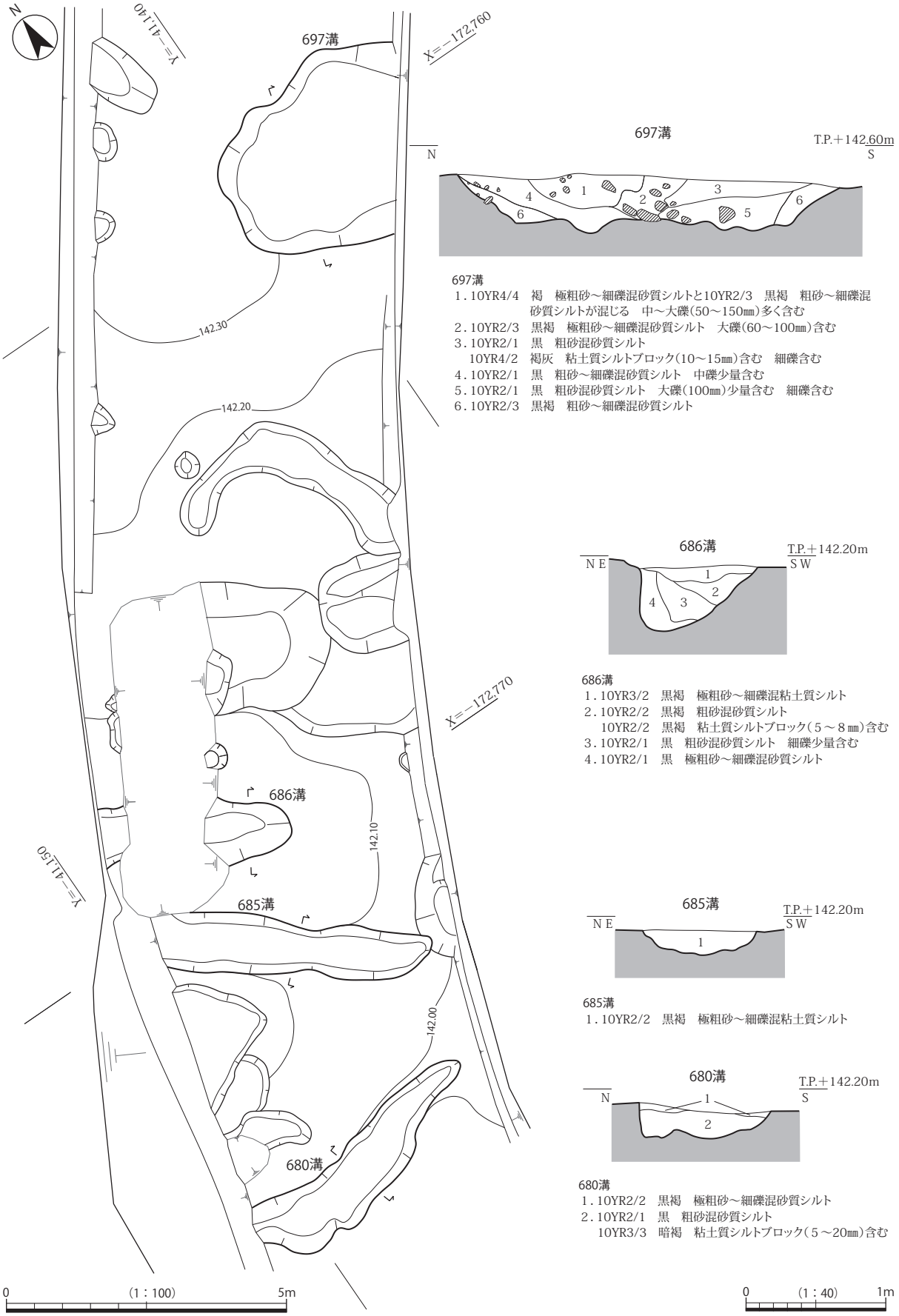


図 76　680・685・686・697 溝　平・断面

質シルトである。遺物は出土していない。

697 溝（図 54・76、図版 26）

４区南端で検出した。西から東方向に延び、東側調査区外に続く。規模は幅 3.50 m、深さ 0.27 ～ 0.40 mである。

埋土は６層に分けられ、６～２層は第５層に由来する粗砂から細礫が混じる砂質シルトを主体とし、５・２層には大礫が多く混じる。溝は少なくとも３回の掘り直しがされたと見られ、最終的に１層の基盤層と第５層の中礫から大礫で埋め戻される。遺物は出土していない。

調査区北部で検出した遺構

852 土坑（図 54・77）

４区北側で検出し、853 土坑と重複し後出する。全体平面形・規模は南半が調査区外であるため平面形は方形もしくは長方形を呈すると推定され、検出規模は長辺 2.35 m、短辺 1.60 m、深さ 0.23 m である。

埋土は２層に分けられ、２層は基盤層の粗砂混じり砂質シルトにシルト質砂ブロックを多く含む。1 層は粗砂から極粗砂混じりシルト質砂に基盤層のブロックを含む。いずれも人為的な埋め戻し土と考えられる。遺物は出土していない。

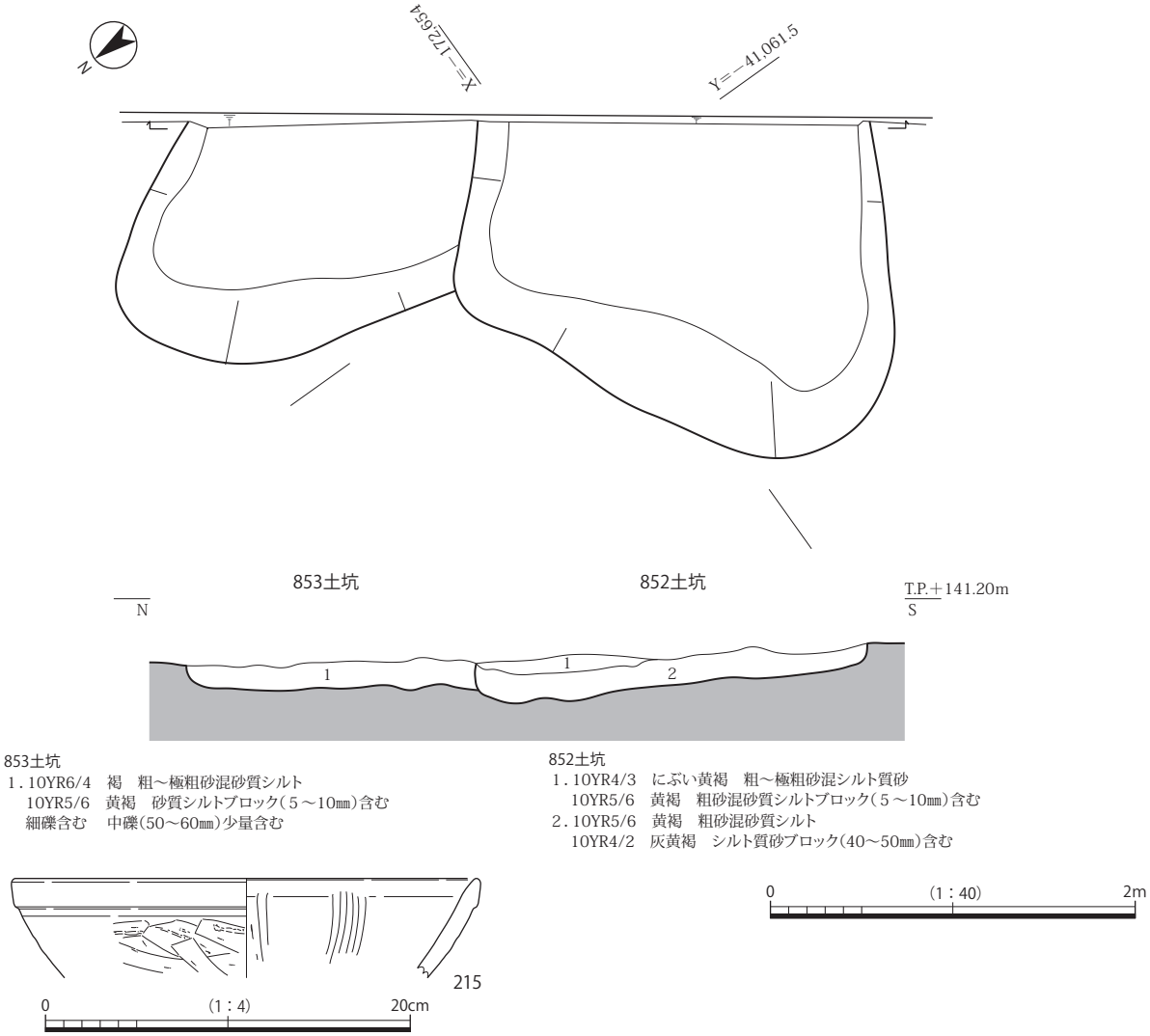


図 77　852・853 土坑　平・断面、853 土坑　遺物実測

853 土坑（図 54・77、図版 37）

4 区北側で検出し、852 土坑と重複し先行する。全体平面形・規模は南半が調査区外であるため平面形は不明、検出規模は長辺 1.60 m、短辺 1.30 m、深さ 0.15 mである。埋土は粗砂から極粗砂混じり砂質シルトに基盤層の砂質シルトブロックを含む。

遺物は瓦質土器擂鉢・甕が出土し、1 点を実測した。215 は瓦質土器擂鉢である。口縁上端は丸みを帯び、縁帯端部の稜はにぶい。調整は体部外面が不規則な斜め方向のヘラケズリを行う。15 世紀後半に比定される。

857 土坑（図 54・78、図版 26）

4 区北側で検出した。平面形は長方形を呈し、規模は長辺 1.20 m、短辺 0.70 m、深さ 0.27 mである。

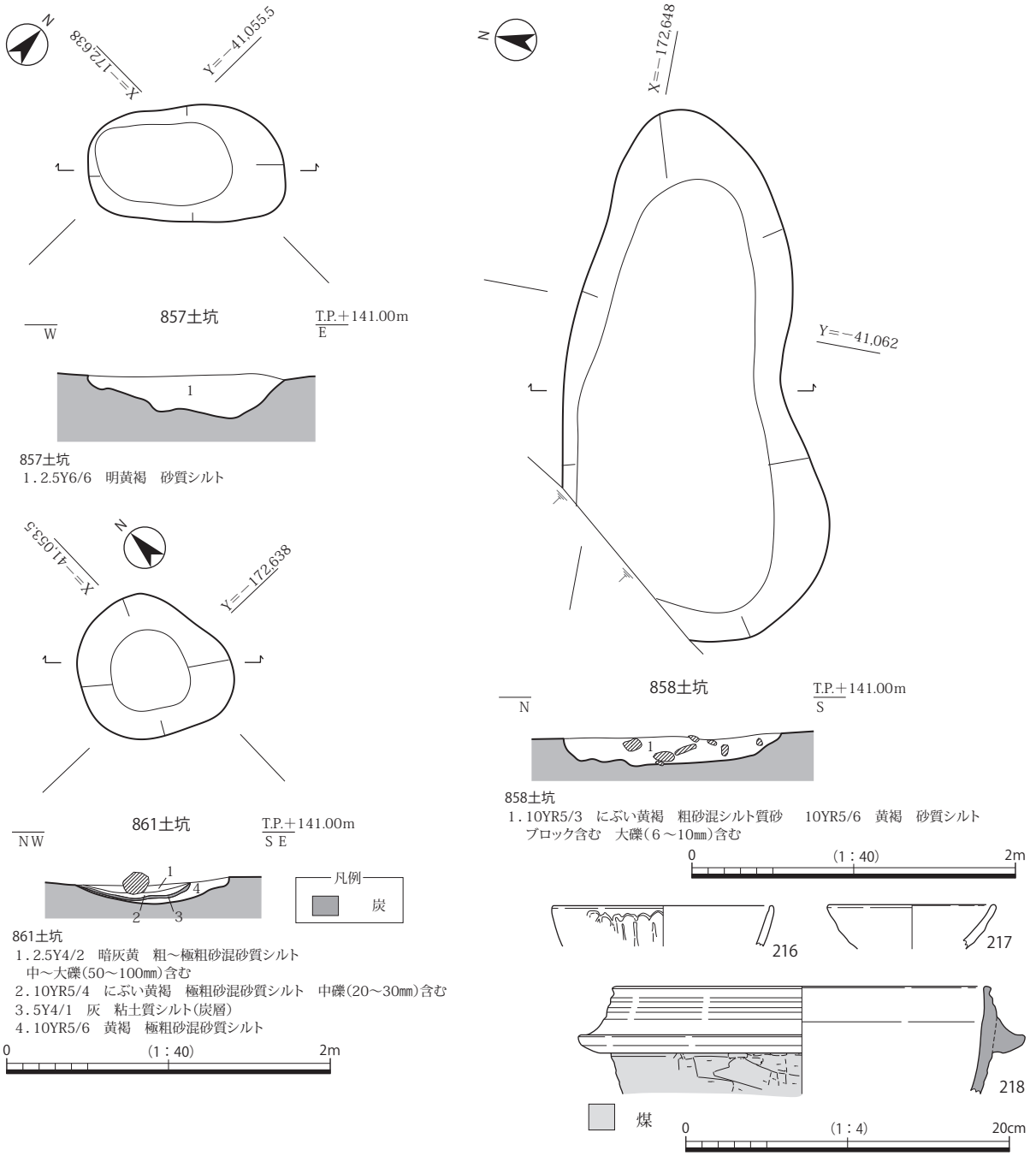


図 78　857・858・861 土坑　平・断面、858 土坑　遺物実測

埋土は基盤層に由来する砂質シルトである。遺物は出土していない。

858 土坑（図 54・78、図版 26・37）

４区北側で検出した。北西隅は側溝にかかるが、平面形は楕円形を呈すると推定され、規模は長辺 3.25 m、短辺 1.35 m、深さ 0.18 mである。埋土は粗砂混じりシルト質砂に基盤層の砂質シルトブロックを含む。

遺物は磁器碗、陶器皿、瓦質土器羽釜、土師質土器皿が出土し、３点を実測した。216 は青磁碗で外面に細線の蓮弁文をもつ。龍泉窯系。217 は陶器備前皿である。218 は瓦質土器羽釜である。口縁部はほぼ直立し、外面に明瞭な段をもつ。調整は体部外面は横方向のヘラケズリ、内面は摩滅により不明瞭であるがナデを行う。体部外面に煤が付着する。

時期は出土遺物から 15 世紀後半と考えられる。

861 土坑（図 54・78、図版 26）

４区北側の 857 土坑東で検出した。平面形は不整形な方形を呈し、規模は一辺 0.90 m、深さ 0.12 mである。

埋土は４層に分けられ、４層は基盤層に類似した極粗砂混じり砂質シルトで、３層は炭層である。土坑壁面や底面に被熱痕は見られず、土坑内に廃棄されたものと見られる。この炭層を洗浄したが遺物は出土していない。

862 土坑（図 54・79、図版 26）

４区北側で検出した。全体平面形・規模は南東端が調査区外であるが、平面形は不整形な長方形を呈すると推定され、検出規模は長辺 5.85 m、短辺 2.20 m、深さ 0.25 mである。

埋土は２層に分けられ、２層は基盤層に由来する粘土質シルト、１層は粘土質シルトと基盤層のブロックを含む。遺物は土師質土器甕片が出土したが、実測しえなかった。

863 土坑（図 54・79）

４区北側で検出した。全体平面形・規模は西側が調査区外であるため平面形は不明、検出規模は長辺 4.90 m、短辺 1.35 m、深さ 0.50 mである。

埋土は４層に分けられ、３・４層は粗砂から極粗砂混じりシルト質砂で３層は基盤層の粘土質シルトブロックを含む。３層堆積後に掘り直される。２層は基盤層に由来する粘土質シルトに１層のブロックが混じる。１層は粗砂混じりシルト質砂である。遺物は出土していない。

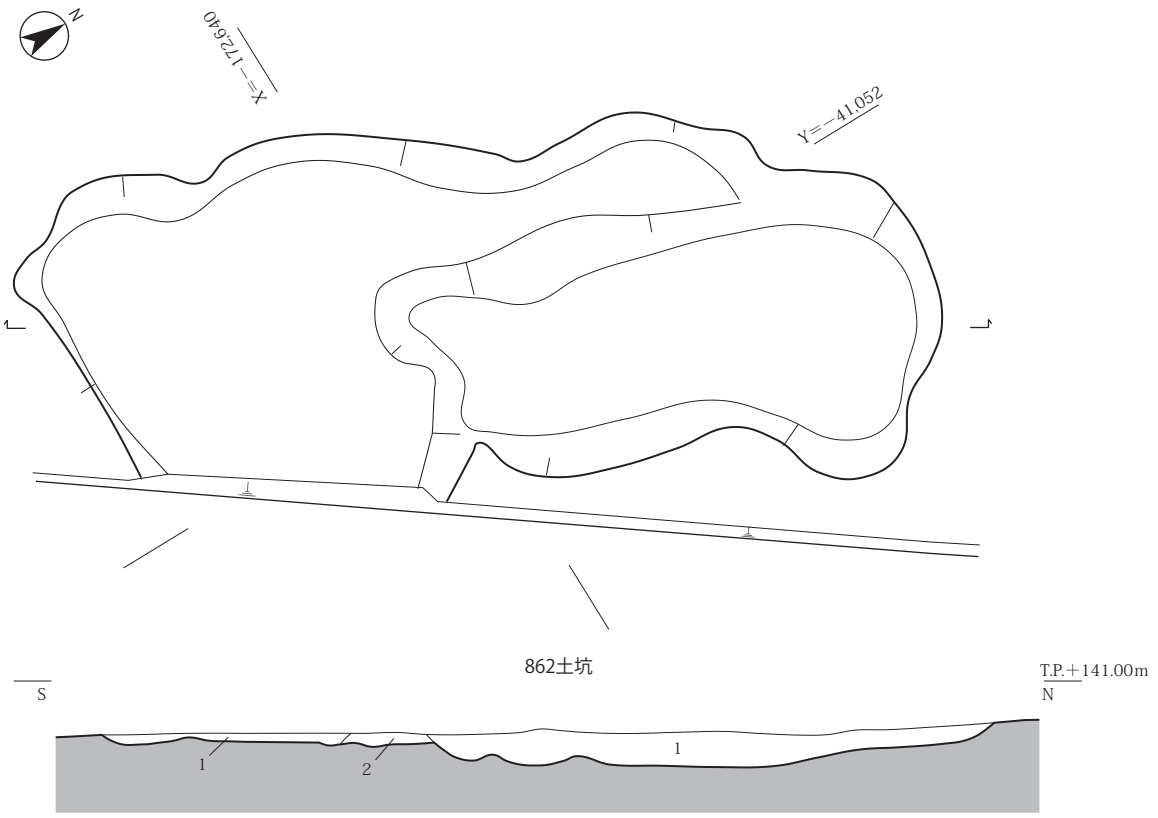
第６節　５区

５区は１区の西側に位置する。遺構検出面の標高は調査区南西端が最も高い T.P. ＋ 149.2 mを測り、東端と北端へとそれぞれ低く傾斜する。北端とは 1.7 mの標高差がある。

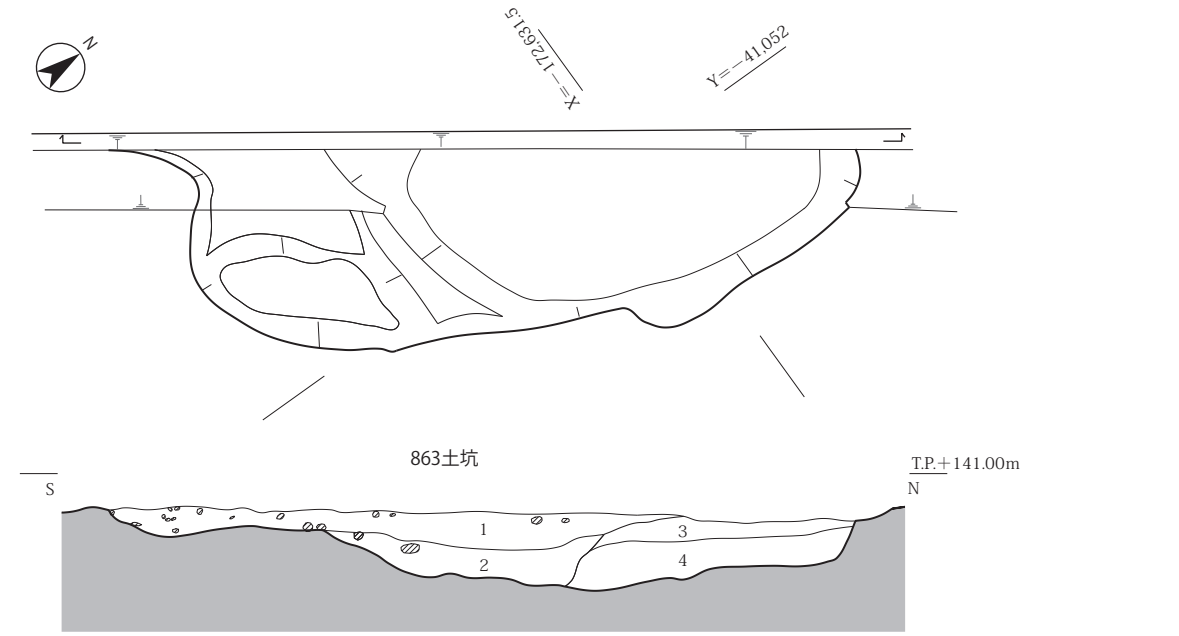
この調査区はほぼ全体に第３層が分布し、調査区北半には第４・５層が堆積した。そのため調査区北半では第３層下面、第４層下面においても遺構検出を行った。

第３層下面では溝、耕地区画に伴う段差、溝状の耕作痕を検出した。第４－１層下面は溝・杭列・耕地区画に伴う段差、４－２層下面は畦畔・耕地区画に伴う段差を検出した。調査区北側では現在の耕地区画と同位置に溝や畦畔が検出されたことから、この付近は中世から区画が踏襲されていると考えられる。

基盤層上面で検出した遺構には、竪穴建物２棟、掘立柱建物１棟、土坑、溝がある。特に調査区南



862土坑
1．2.5Y5/2　暗灰黄　粘土質シルトと10YR5/6　黄褐　粘土質シルトブロック(50～70㎜)混じる　大礫(60～150㎜)多く含む
2．10YR5/6　黄褐　粘土質シルト



863土坑
1．10YR4/6　褐　粗～極粗砂混シルト質砂　細礫含む　中礫(20～40㎜)含む
2．10YR5/6　黄褐　粘土質シルトと10YR4/6　褐　粗～極粗砂混シルト質砂ブロック(10～20㎜)混じる　中～大礫(20～80㎜)多く含む
3．10YR5/4　にぶい黄褐　粗～極粗砂混シルト質砂　10YR5/6　黄褐　粘土質シルトブロック(10～20㎜)・中礫(10～40㎜)含む
4．2.5Y5/6　黄褐　粗～極粗砂混シルト質砂　中礫(20～50㎜)含む

0　(1：50)　2m

図 79　862・863 土坑　平・断面

東側では竪穴建物や掘立柱建物が集中し、北側壁断面にも柱穴の並びを確認したことから当該期の集落が周辺に広がっていると考えられる。

第 3 層下面で検出した遺構（図 80・81）

966 溝（図 80・82）

5 区北西側で検出し、さらに調査区外に続く。この溝は耕地区画際に設けられた耕作に伴う取・排水溝と考えられる。規模は幅 1.05 ～ 1.36 m、深さ 0.06 ～ 0.08 mである。

埋土は粗砂から極粗砂混じり砂質シルトである。遺物は混入と見られる須恵器杯蓋、土師器杯が出

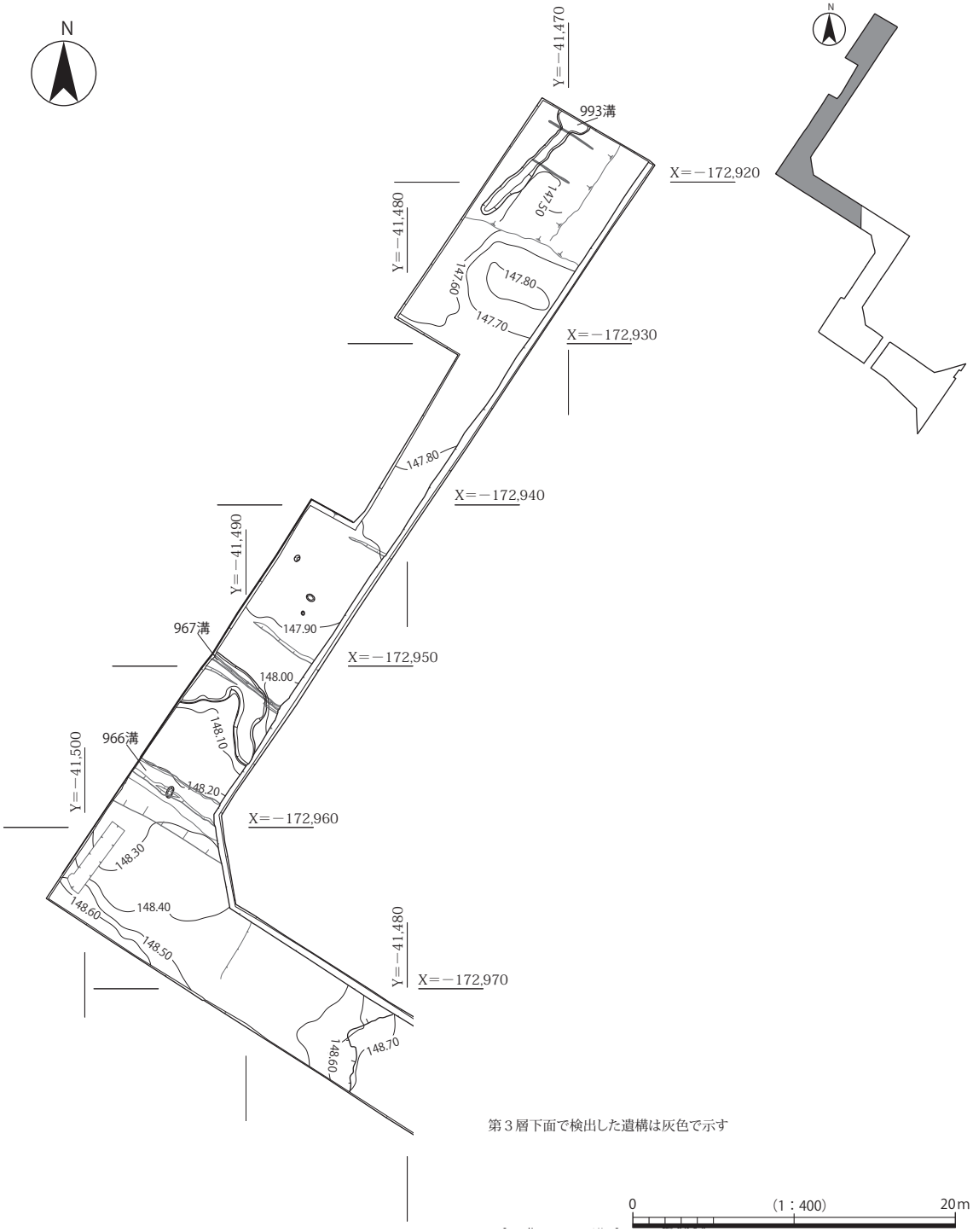


図 80　5 区　平面（1）

土した。

967 溝（図 80・82）

5 区北西側の 966 溝から北に 7 m地点で並行に延びる。さらに調査区外に続く。規模は幅 0.20 ～ 0.25 m、深さ 0.15 ～ 0.20 mである。

埋土は粗砂から極粗砂混じり砂質シルトでシルトが強い。遺物は出土していない。

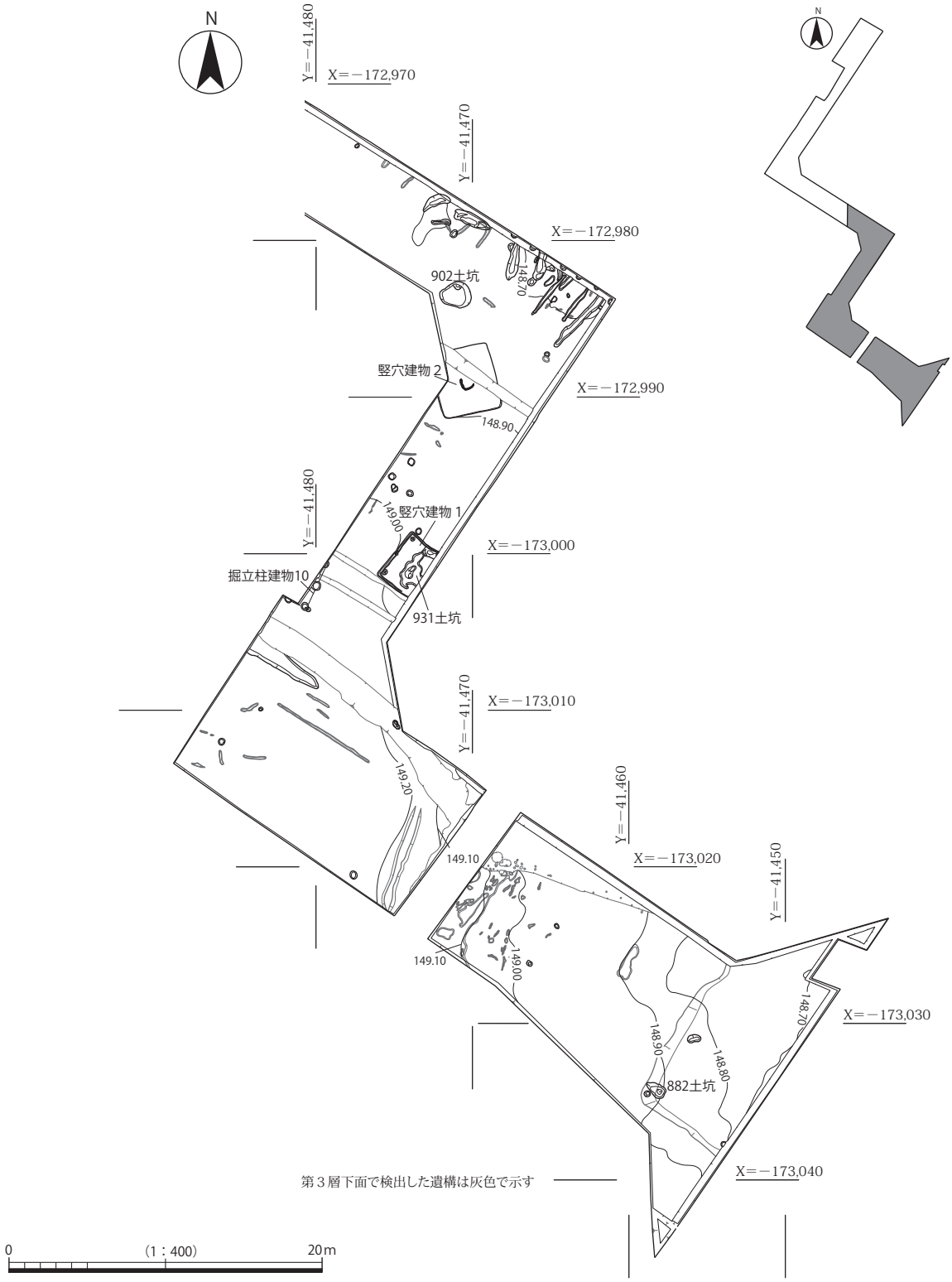


図 81　5 区　平面（2）

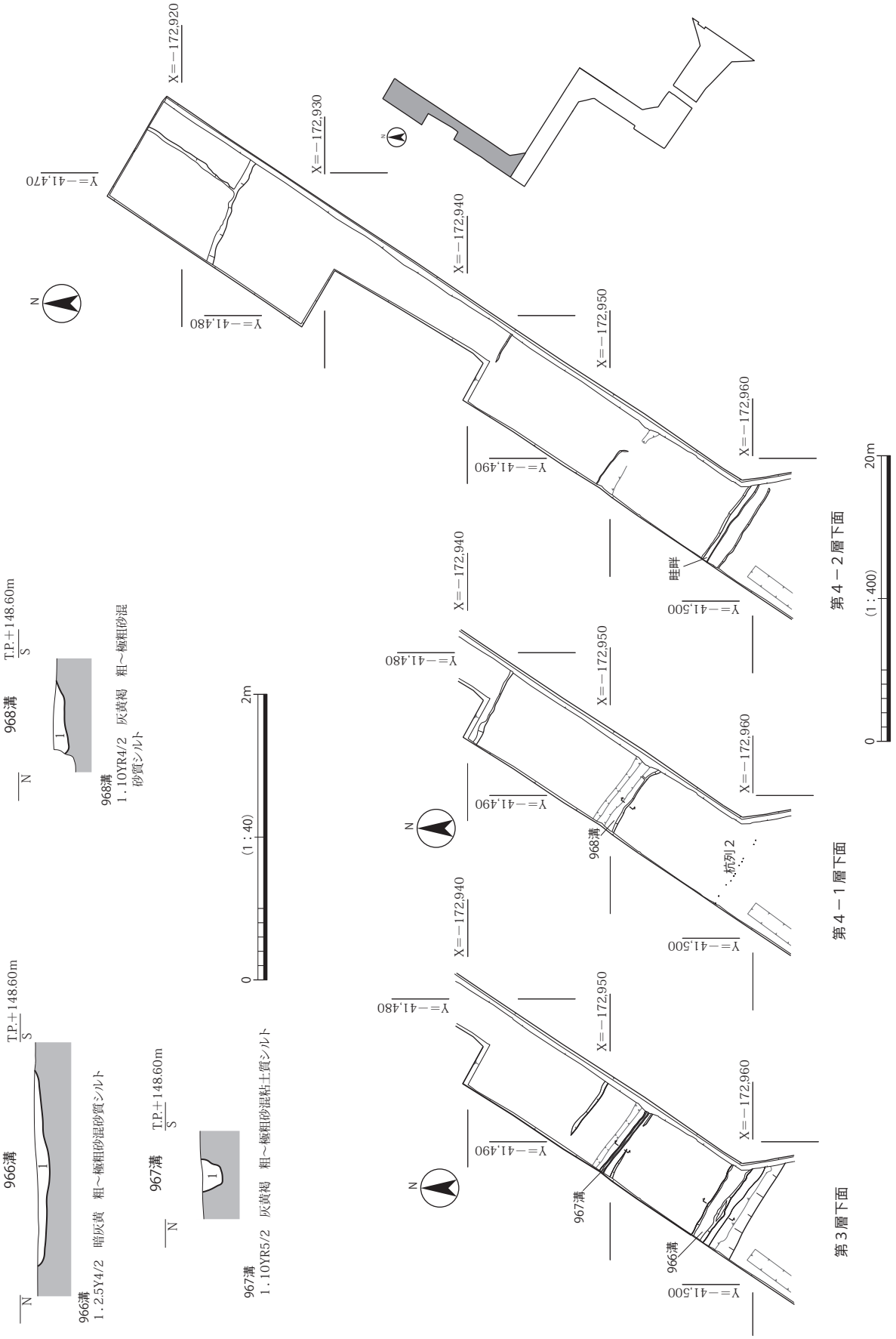


図 82　5 区　第 3・4－1・4－2 層下面　平面、966 ～ 968 溝　断面

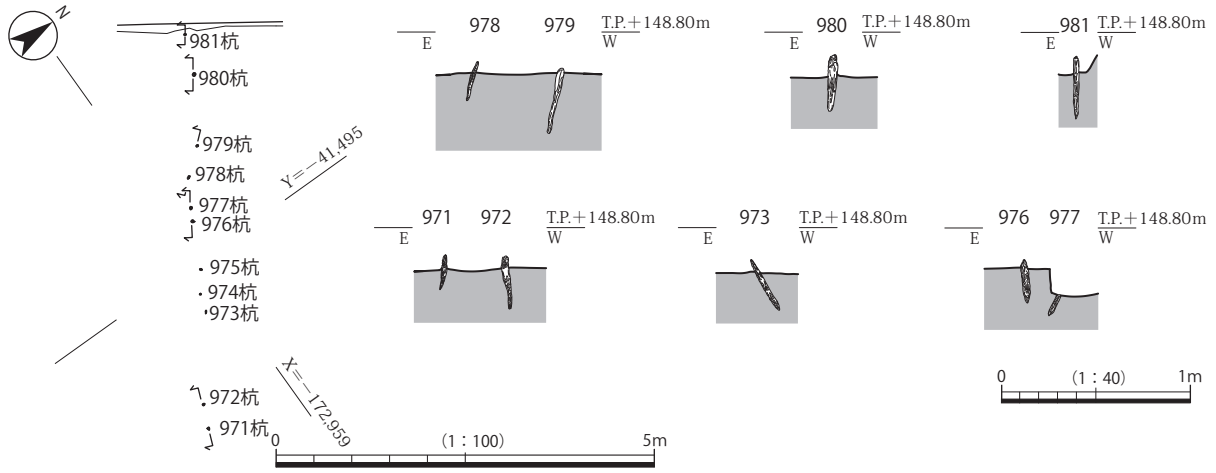


図 83　杭列２　平・断面

第４層下面で検出した遺構（図 82）

968 溝（図 82）

５区北西側で検出した。第３層下面の 967 溝とほぼ同位置・同方向に延びており、967 溝に先行する溝と見られる。967 溝に北側肩を壊されている。残存した規模は、幅 0.43 ～ 0.80 m、深さ 0.06 ～ 0.21 mで西から東へと深くなる。

埋土は粗砂から極粗砂混じり砂質シルトである。遺物は出土していない。

杭列２（図 82・83）

５区北西側で東西方向に 11 本の杭を検出した。この杭列は第３層下面で検出した 966 溝の南 0.5 m の地点で検出しており、第４－１層下面において耕地区画境の段差の土留めのために打ち込まれた杭列

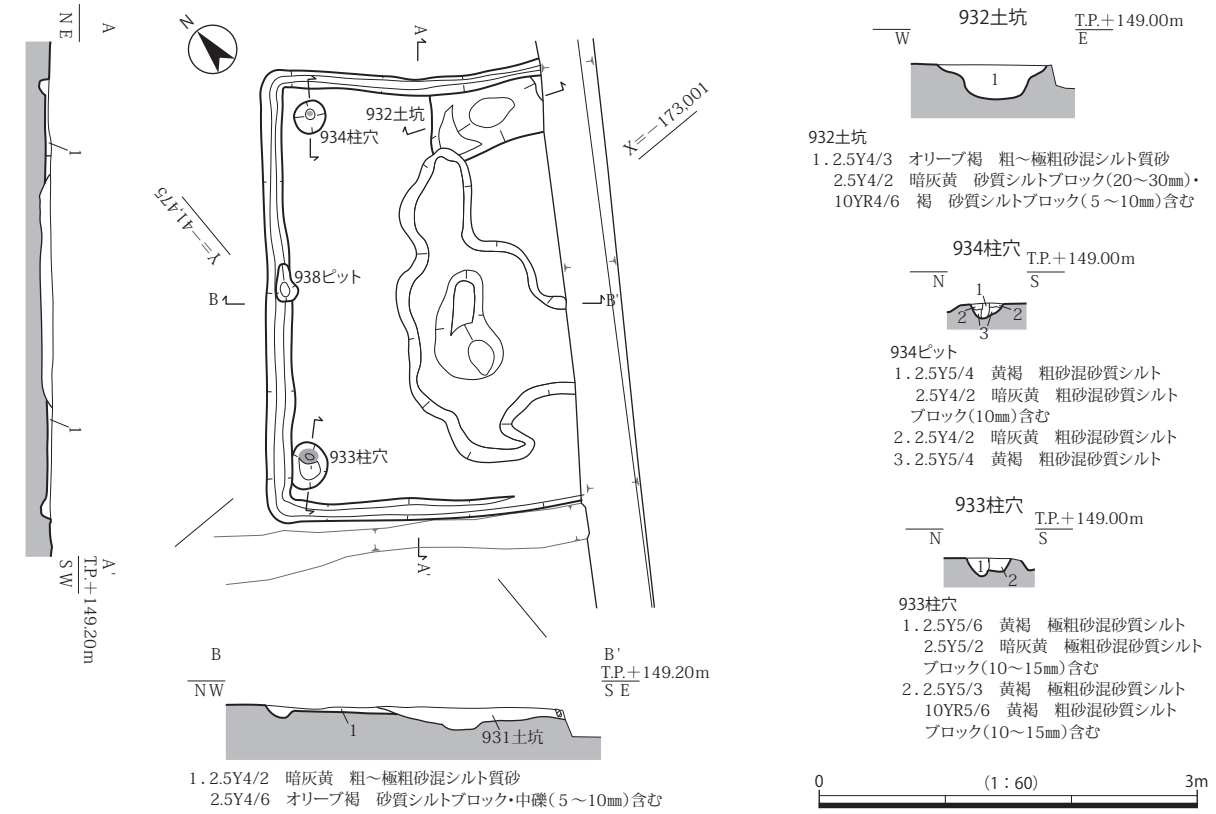


図 84　竪穴建物１　平・断面

と考えられる。杭は直径２～４㎝、残存長 12 ～ 36㎝である。節のある自然木を用い、先端は多角形に面取りし、尖らせる。

基盤層上面で検出した遺構（図 80・81、図版 27）

竪穴建物１（図 81・84、図版 28）

５区南東側で検出し、さらに調査区外東側に広がる。建物中央部は 931 土坑と重複しており残存しなかった。平面形は方形である。南北辺を主軸とすると 38°東に偏る。

検出規模は東西 2.40 m、南北 3.50 m、床面までの深さ 0.06 mである。周壁溝は南辺の一部を除き廻っており、幅 0.12 ～ 0.23 m、深さ 0.03 ～ 0.06 mである。埋土は粗砂から極粗砂混じりシルト質砂に基盤層のブロックが混じる。

西壁に沿ってピット３基を検出し、そのうち 934・933 柱穴が主柱穴にあたる。北壁際で 932 土坑を検出した。規模は長辺 0.84 m、短辺 0.43 m、深さ 0.27 mである。埋土は建物埋土と同様である。

遺物は出土していない。

竪穴建物２（図 81・85 ～ 89、図版 28・29）

５区南東側の竪穴建物１から北に８mの地点で検出し、北西隅は調査区外に広がる。建物は北西から

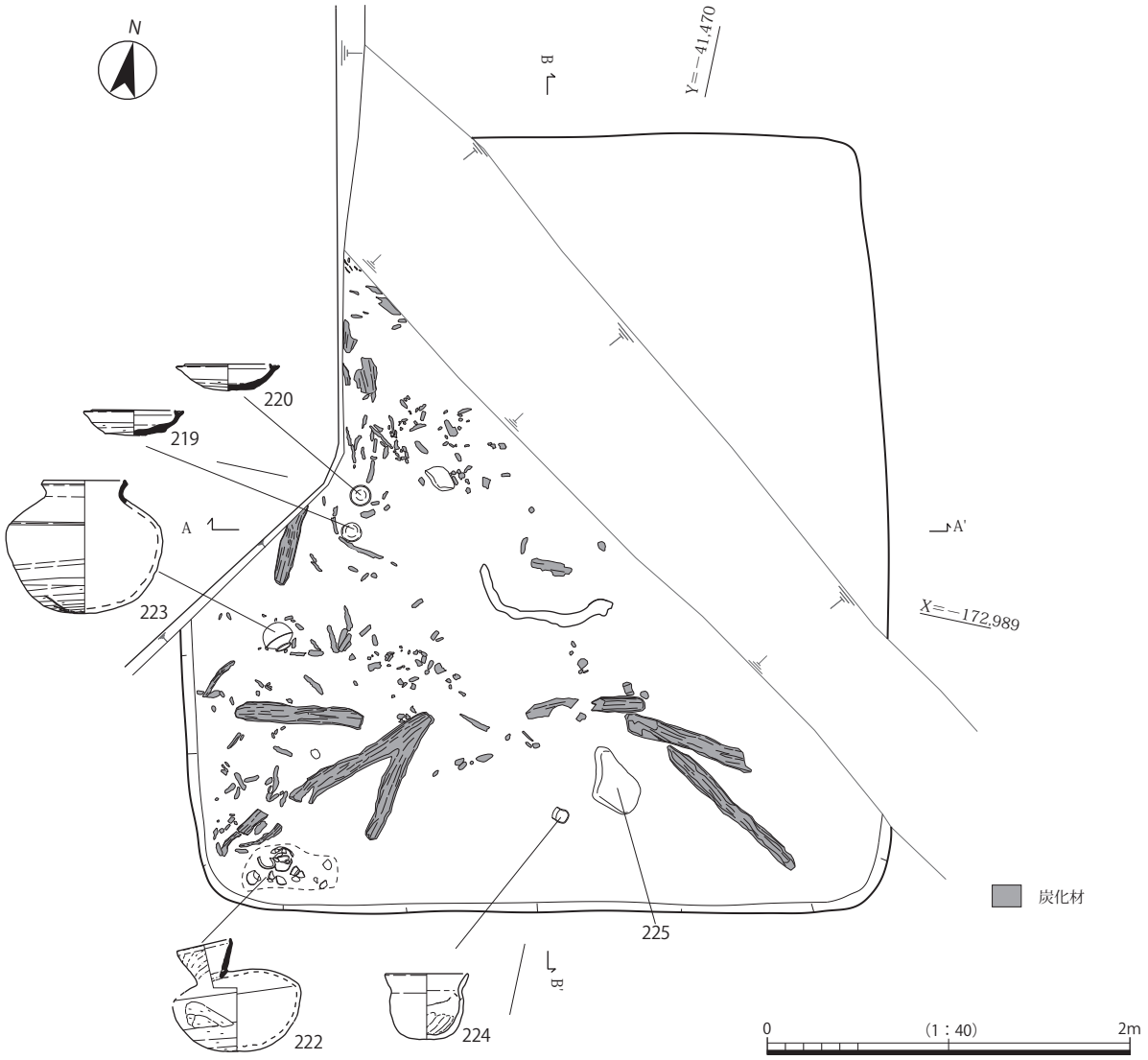


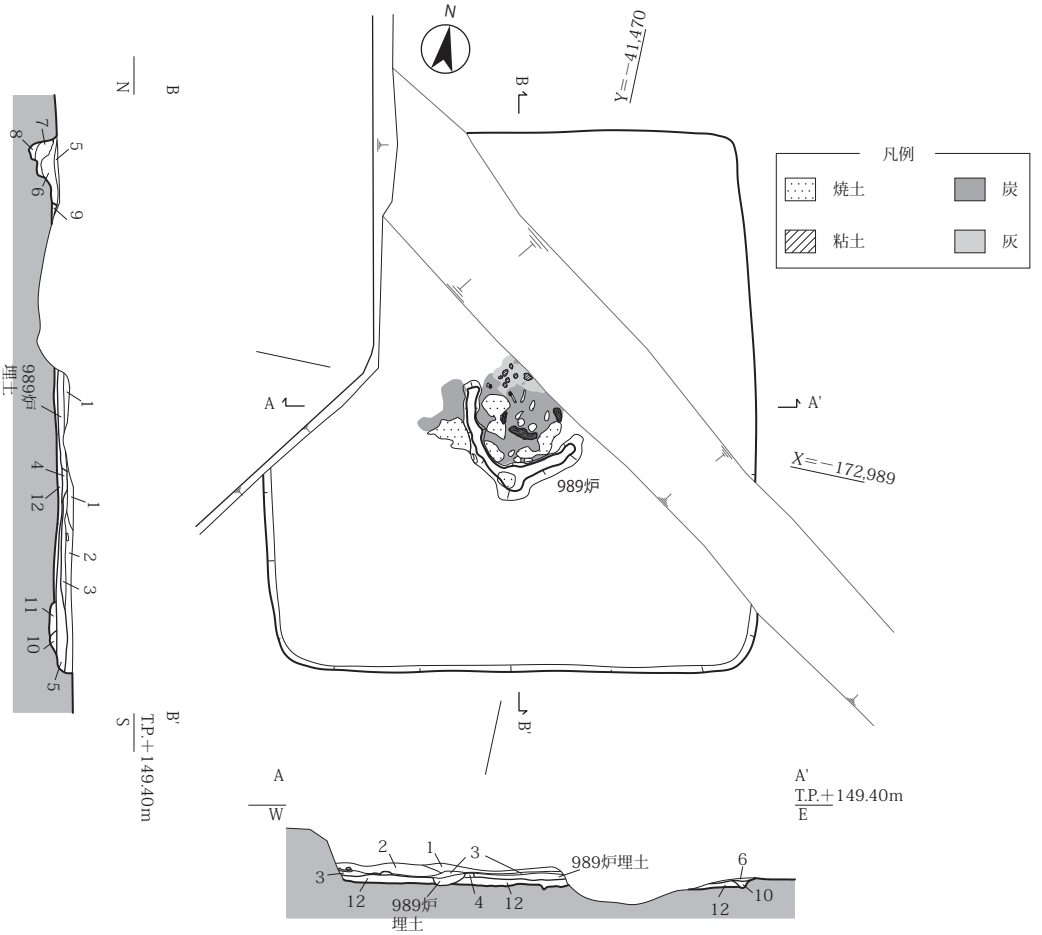
図 85　竪穴建物２　炭化材・土器・台石出土状況

南東方向に延びる溝状の攪乱により一部残存しない。平面形は方形である。南北辺を主軸とすると 16°西に偏る。

規模は、長さが東西 3.90 m、南北 4.30 m、床面までの深さは最大 0.12 mである。床面は溝状の攪乱より南西側は残存したが、攪乱を挟んで北東側は現代の耕地区画が南西側から北東側に一段低いため、第１－１層の現代耕作土の削平により残存しなかった。この建物は最終的に焼失しており、床面からは土器や建築部材と見られる炭化材を検出した。

埋土は 12 層に分けられた。12 層が整地時の極粗砂混じり砂質シルトブロックと基盤層のブロックが混じる層になる。５層が機能時に堆積したと見られる粗砂混じり砂質シルトで、その直上に焼失の際に堆積した炭や炭化材を含む粘土質シルトが堆積し、さらに１・２層の粗砂から極粗砂混じり砂質シルトで埋没する。

攪乱の南西側では、１・２層を掘削除去していくと全体に炭が広がり、建築部材と見られる炭化材



1．10YR4/2　灰黄褐　粗～極粗砂混砂質シルト
　7.5YR4/6　褐　砂質シルトブロック（２㎜）含む
2．10YR4/4　褐　粗～極粗砂混砂質シルト
　10YR3/3　暗褐　砂質シルトブロック（５㎜）・
　7.5YR4/6　褐　砂質シルト粒（２～３㎜）含む
3．10YR4/3　にぶい黄褐　粘土質シルト　炭粒・炭化材含む
4．10YR4/2　灰黄褐　粗砂混粘土質シルト
　10YR3/3　暗褐　極粗砂混砂質シルトブロック（10～20㎜）・
　焼土粒（１㎜）含む（989炉粘土帯）
5．10YR4/4　褐　粗砂混砂質シルト
　10YR5/6　黄褐　シルト質砂・細礫含む
6．10YR4/2　灰黄褐　粘土質シルト
　10YR4/4　褐　粗砂混砂質シルトブロック（30㎜）・
　焼土ブロック（５㎜）・炭（３㎜）含む
7．10YR4/6　黄褐　粘土質シルト
　10YR4/2　灰黄褐　粘土質シルトブロック（10㎜）少量含む
8．10YR4/2　灰黄褐　粘土質シルト
　10YR4/6　黄褐　粘土質シルトブロック（20㎜）・炭（３～５㎜）含む
9．10YR4/2　灰黄褐　粘土質シルト　焼土ブロック（５㎜）少量含む
10．10YR4/2　灰黄褐　粗砂混砂質シルト
　10YR5/6　黄褐　砂質シルトブロック（５～10㎜）含む（周壁溝）
11．10YR4/2　灰黄褐　粗砂混砂質シルト（970ピット）
12．2.5Y4/2　暗灰黄　極粗砂混砂質シルトブロック（20～30㎜）と
　2.5Y5/6　黄褐　極粗～細礫混砂質シルトブロック（20～30㎜）混じる

0　(1：60)　3m

図 86　竪穴建物２　平・断面

や土器を検出した。長さ 70 ～ 90㎝、幅 10㎝の大型の炭化材は建物のそれぞれ南東隅と南西隅から中央に向かって倒れたような状態で検出しており、建物の建築部材の一部と考えられる。これらの北側には細かい木材や草類が炭化したものも見られた。これらの炭化材と共に、西側では須恵器の完形の壺と

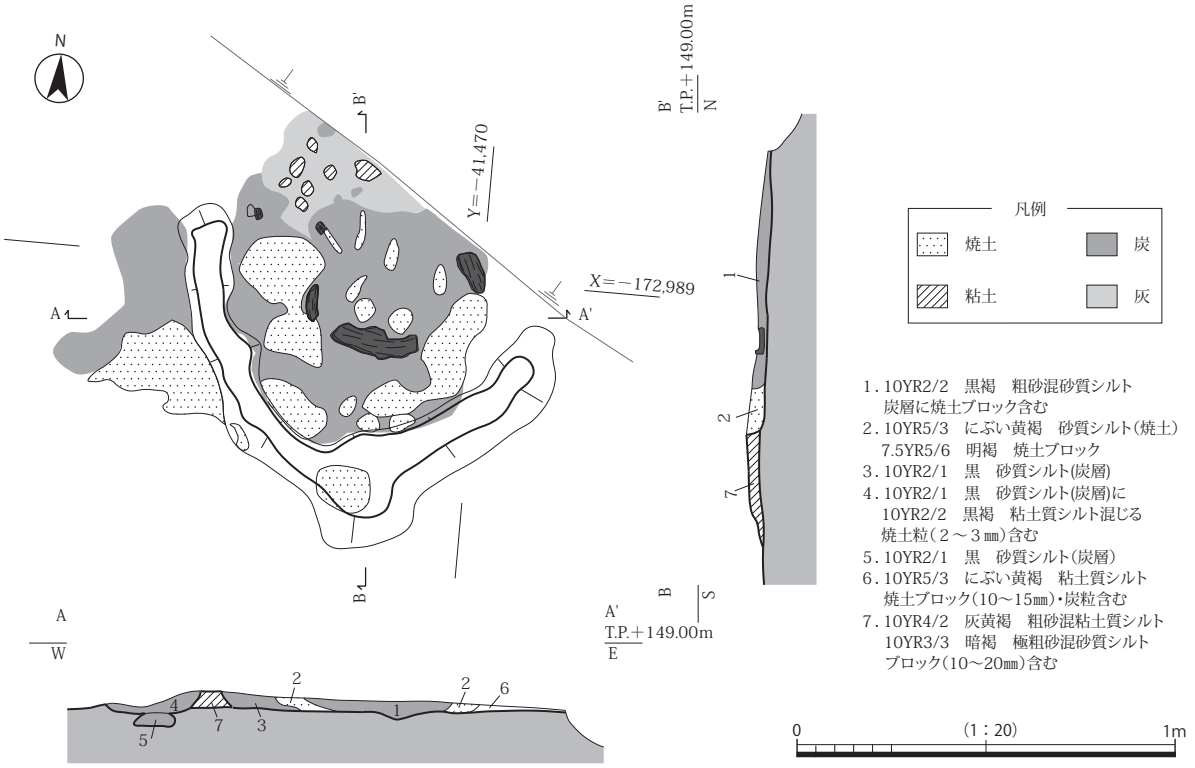


図 87　竪穴建物２　989 炉　平・断面

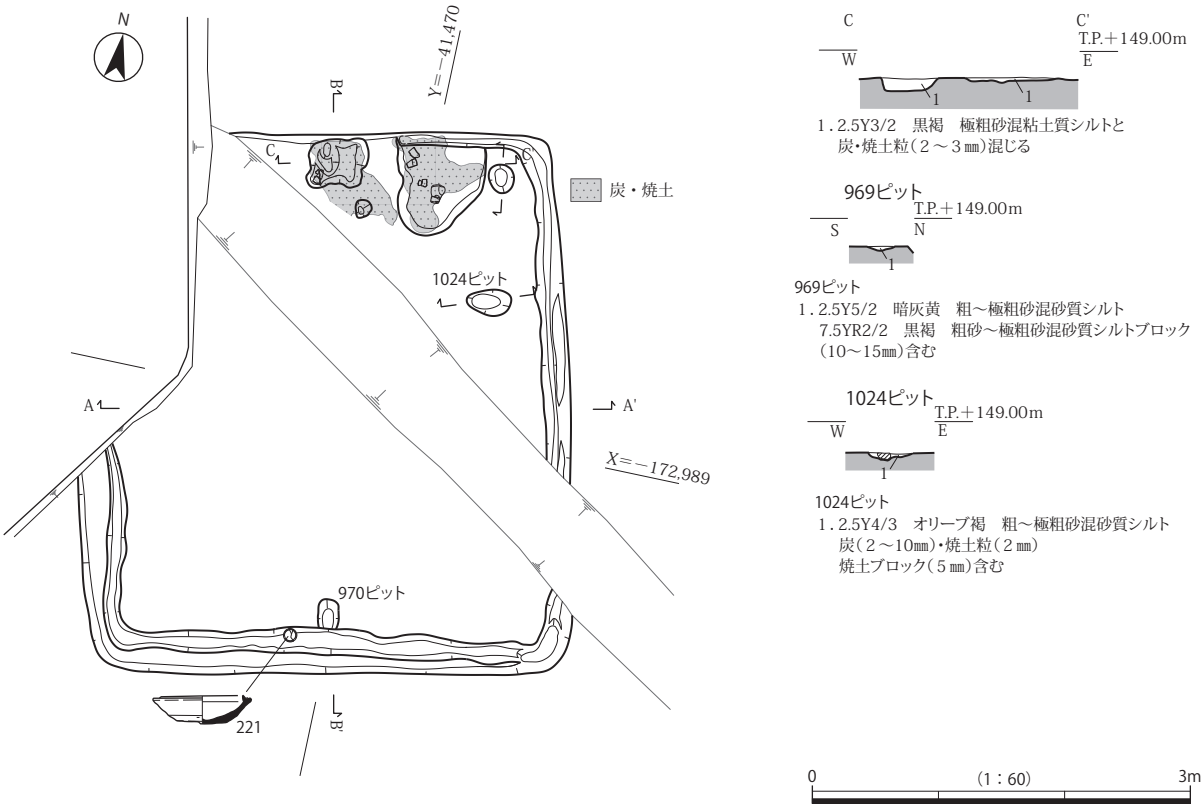


図 88　竪穴建物２掘方　平・断面

杯、南西隅には平瓶がばらばらに破砕した状態で検出された。

検出した炭化材のうち残存状態のよい９点の樹種同定を行った（第５章参照）。同定した９点のうち７点までが極めて柔らかく焼き膨れが入り、消し炭の状態であり高い温度で燃焼したことが分かった。炭化材の樹種は全てスダジイであった。スダジイはブナ科の常緑樹で近畿でも広く分布する。耐久・保存性が低いもののカビを防ぐ効果があり、柱などの建築部材に用いられる樹種である。

炭化材等を取り上げた後に床面を検出したところ、建物中央で「U」字形の粘土帯を検出した。この粘土帯は被熱により黒色に硬化し、粘土帯の内側やその周囲には焼土や炭が堆積していたことから、炉であると判断した。炉内部からは炭化材が出土した。内部及び周囲の炭・焼土層を洗浄したが微細遺物は出土しなかった。炉内部から出土した炭化材３点を樹種同定した（第５章参照）。その結果、スダジイとコナラ属クヌギ節と判明した。スダジイは火力が強いが火持ちが劣り、コナラ属クヌギは火力も火持ちもとても良い木材である事から燃焼材として組み合わせていたと推定される。

床面機能時に堆積した５・６層を掘り下げた段階で建物周囲を廻る周壁溝とピットを検出した。周壁溝の規模は幅 0.10 ～ 0.20 m、深さ 0.05 mである。周壁溝内からは 221 の須恵器杯身が出土した。ピットは３基を検出したが、主柱穴は検出されなかった。北壁際では炭層の分布を確認した。この炭層を掘り下げたところ、浅いくぼみで粘土などによる構築物は確認できなかったが、竈に伴う堆積物と考えられ、989 炉の構築以前に北壁際に竈が設けられていた可能性がある。

出土遺物は須恵器杯・平瓶・壺・甕、土師器杯・壺・甕、台石が出土し、７点を実測した。219・220・222 ～ 225 は床面、221 は周溝内から出土した。219 ～ 221 は須恵器杯身である。219・220 は口縁部の立ち上がりは内傾し非常に低く、体部下半は回転ヘラケズリ、底部は未調整。221 は 219・220 より口径が小さく、口縁部の立ち上がりがやや起きる。

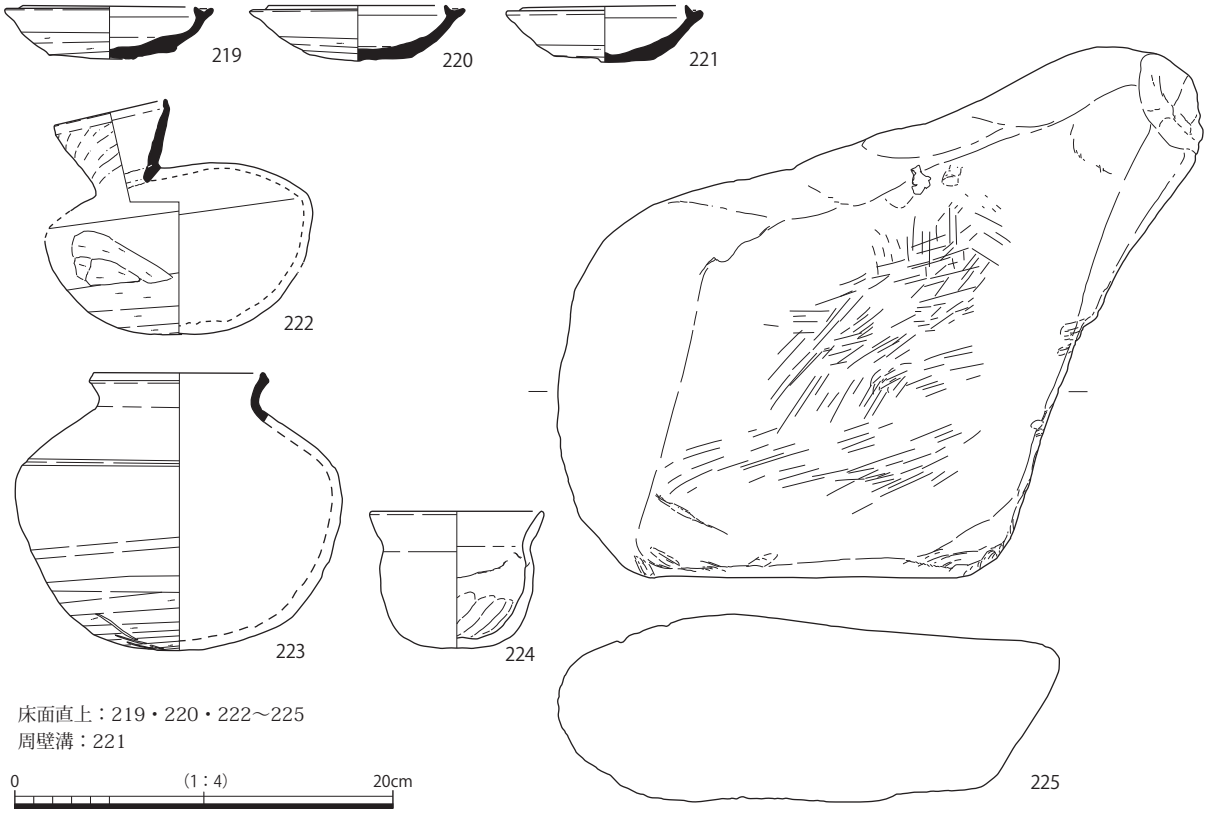


図 89　竪穴建物２　遺物実測

222 は須恵器平瓶である。頸部に成形時のナデの痕跡が残り、体部下半は回転ヘラケズリ後上半の一部に斜め方向のヘラケズリを行う。

223 は須恵器壺である。外面は底部から体部下半に反時計回りに渦巻き状の回転ヘラケズリを行う。

224 は土師器壺である。短い口縁部の小型の広口壺で底部は丸底に近い平底。調整は外面が摩滅により不明、内面はナデ、粘土紐痕が残る。

225 は台石である。表面は擦痕が残り、使用によりなめらかである。特に中央の 16 × 7 ㎝の範囲は平滑でやや黒ずんでいる。

建物の廃絶時期は、出土遺物から 7 世紀中葉と考えられる。

掘立柱建物 10（図 81・90、図版 28）

５区南東側で検出し、竪穴建物 1 の南西 3 mに隣接する。建物の大部分が調査区外西側に広がるため、建物の向きは不明である。東面を主軸とすると 26°東に偏る。

検出した建物規模は南北 2 間（3.1 m）、東西 1 間（1.2 m）である。身舎柱間寸法は、東面が北から 1.44 m、1.66 mで東西柱間寸法に比べ広い。掘方規模は直径 0.43 ～ 0.58 m、深さ 0.20 ～ 0.30 m、掘方底面の標高は T.P. ＋ 148.73 ～ 148.0 mである。全ての柱穴から柱痕跡を検出した。掘方埋土は粗砂から極粗砂混じり砂質シルトや基盤層由来の砂質シルトを主体とする。

遺物は 892 柱穴から土師器甕・須恵器杯、893 柱穴から土師器甕が出土したが、実測しえなかった。

882 土坑（図 81・91）

5 区南東端で検出した。平面形は不整形な楕円形を呈し、規模は長辺 1.30 m、短辺 0.78 m、深さ 0.26 mである。埋土は 3 層に分けられ、3 層は基盤層に第 5 ― 1 層に類似する粗砂混じり粘土質シルトブロックを含む。2 層は第 5 － 2 層の粘土質シルトに基盤層のブロックを含む。この層上面から 30㎝程の大きさの炭化材を検出したが脆弱のため取り上げはできなかった。1 層は第 5 ― 1 層に類似し、基盤層のブロックを含む。2 層は粘土質シルトに基盤層のブロックを含む。遺物は出土していない。

902 土坑（図 81・91）

５区中央東側で検出した。平面形は不整形な長方形を呈し、規模は長辺 1.95 m、短辺 1.60 m、深さ 0.23 mである。埋土は 3 層に分けられ、3 層は基盤層に暗灰黄色砂質シルトブロックを含む。2 層は第 5 －

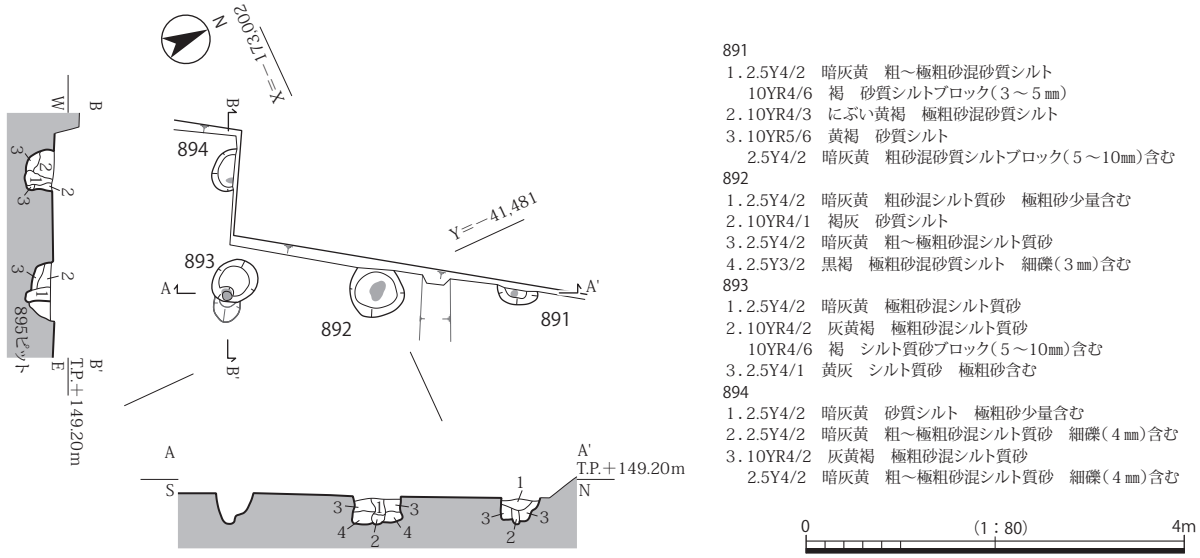


図 90　掘立柱建物 10　平・断面

1 層に類似する黒褐色砂質シルトに基盤層のブロックを少量含む。1 層は暗灰黄色粗砂から極粗砂混じり砂質シルトブロックや基盤層のブロックが混じる埋め戻し土である。

遺物は須恵器杯と土師器甕が出土し、1 点を実測した。226 は須恵器杯蓋で 7 世紀中葉に比定される。

993 溝（図 80・91）

5 区北端で検出した。南西から北東方向に延び、調査区外に続く。規模は幅 0.60 ～ 2.10 m、深さ 0.10 mである。埋土は 2 層に分けられ、2 層は粗砂から極粗砂と粗砂混じり砂質シルトブロックが混じり、1 層は粗砂から極粗砂混じり砂質シルトである。

遺物は生駒山西麓産の胎土の土師器甕が出土したが、実測しえなかった。

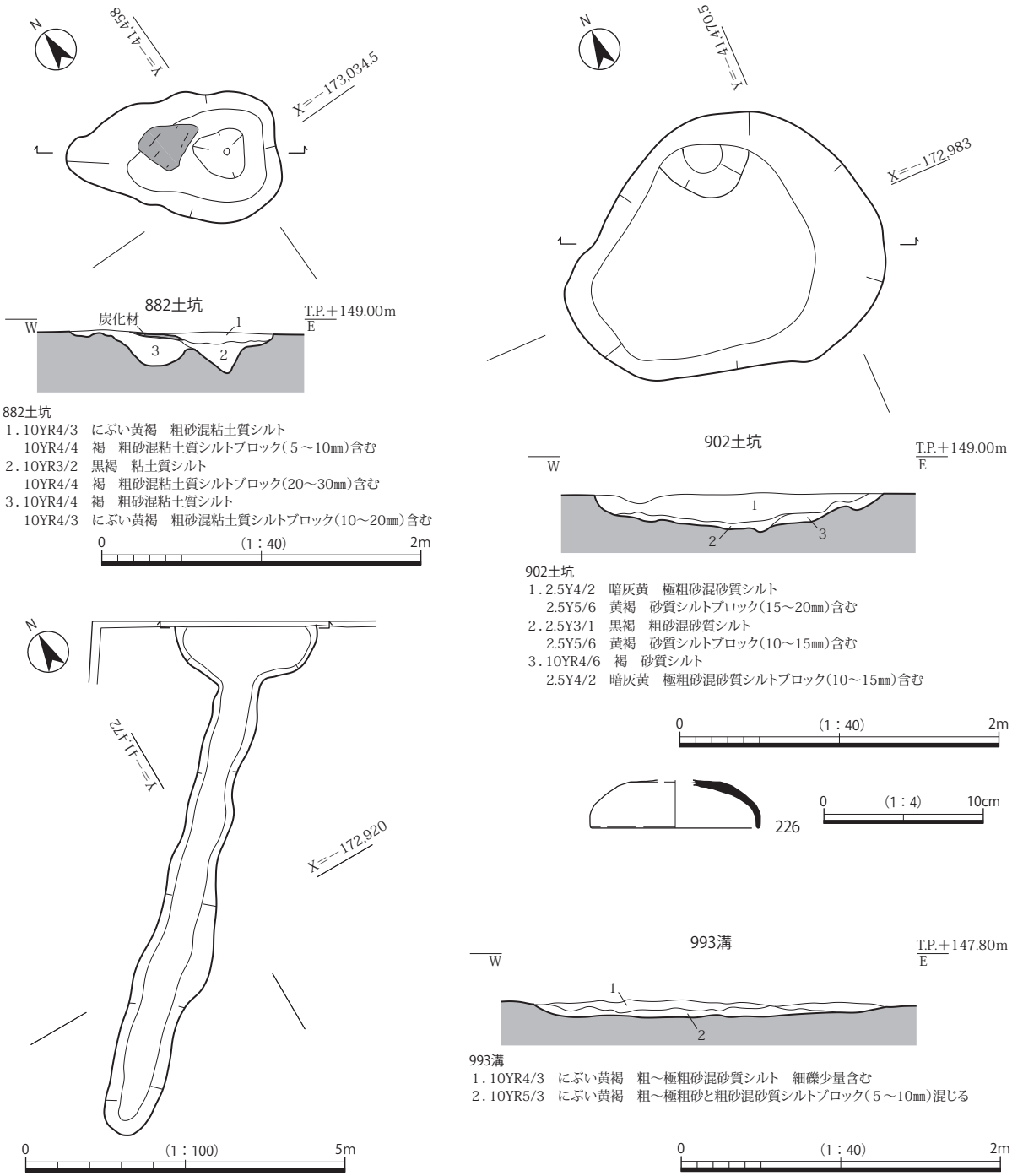


図 91　882・902 土坑、993 溝　平・断面、902 土坑　遺物実測

第 3 層出土遺物（図 92、図版 37）

第 3 層からは瓦器、瓦質土器、土師質土器、須恵器、土師器、製塩土器が出土した。227 は瓦質土器皿、228 は土師質土器皿である。229 ～ 233 は須恵器で 229 ～ 231 は杯蓋、232 は壺、233 は甕である。229・230 は 8 世紀中葉、231 は 7 世紀中葉に比定される。234・235 は土師器甕である。

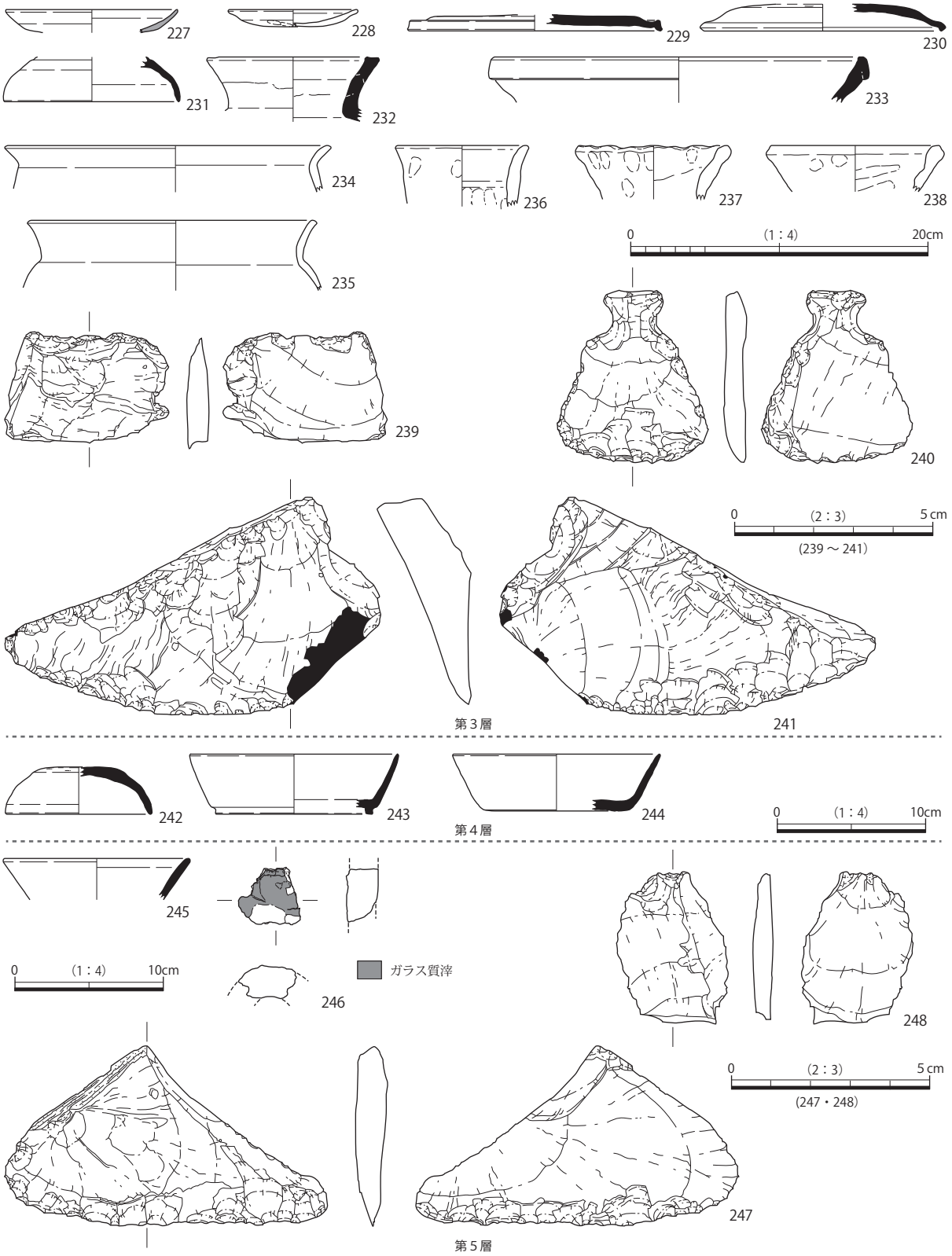
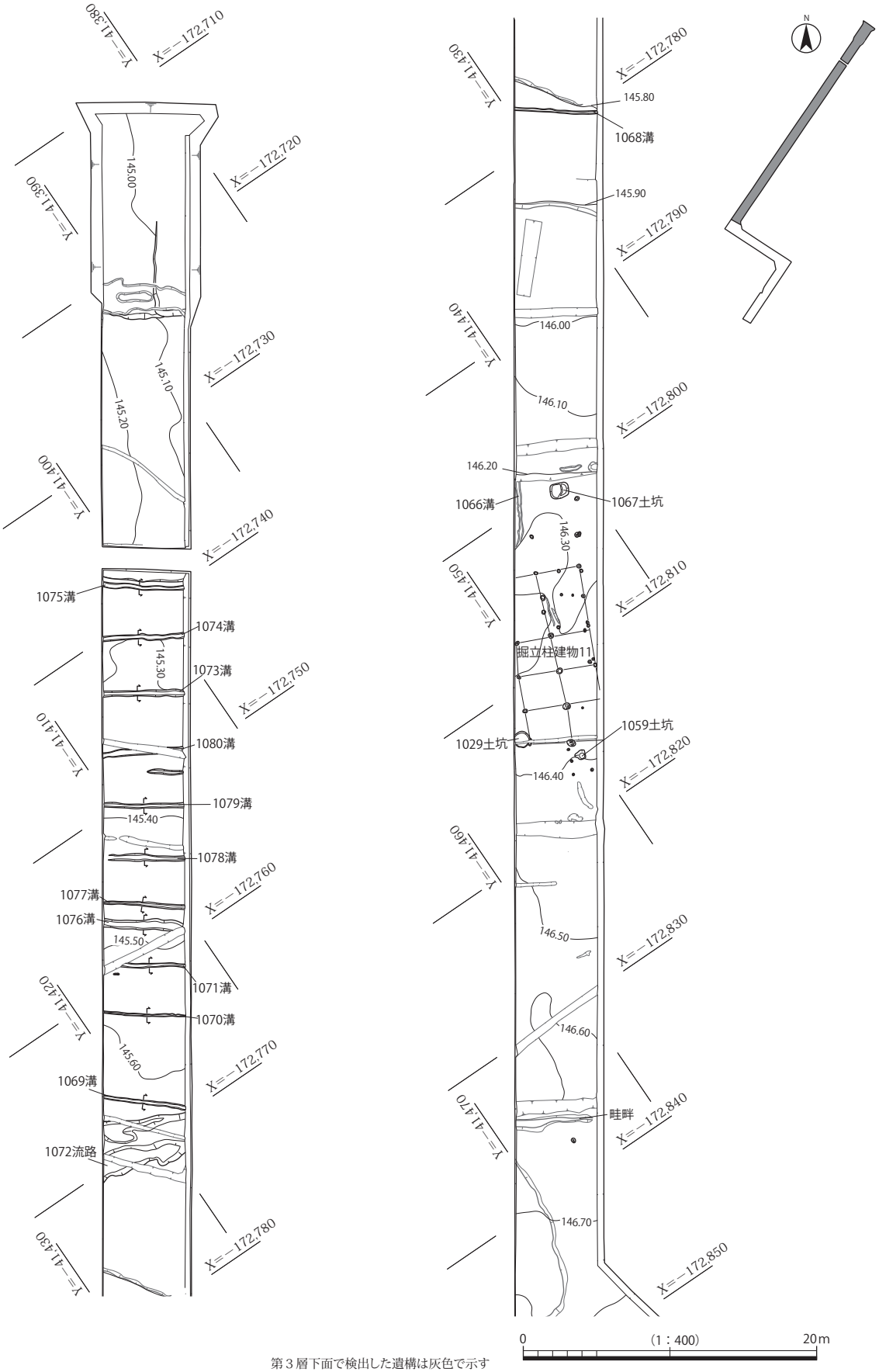


図 92　第 3 ～ 5 層　遺物実測



第３層下面で検出した遺構は灰色で示す

図 93　6 区　平面（1）

236 ～ 238 は製塩土器である。236 は口縁部はやや外反し、調整は摩滅により不明瞭だが内外面ともにユビオサエ後口縁部付近は横方向のナデを行う。237 は器厚が 0.8 ～ 1.0㎝と厚く、口縁部は大きく広がる。調整は口縁端部が指頭押捺によりうねり、体部は内外面ともにユビオサエ、内面はナデによりやや平滑である。238 は口縁部は大きく広がり、口縁端部が肥厚する。調整は口縁部がナデ、体部は内外面ともにユビオサエであるが内面は強いユビナデによる凹凸が見られる。この他に図示できなかったが製塩土器が 18 点（122.00 g）出土した。

239 ～ 241 は石器で 239 の楔形石器、240 の石匙、241 のスクレイパーがある。

第 4 層出土遺物（図 92、図版 37）

第 4 層からは瓦質土器、土師質土器、須恵器、土師器が出土した。その他に図示できなかったが、製塩土器が 5 点（29.20 g）出土した。242 ～ 244 は須恵器で 242 は杯蓋、243・344 は杯身である。242 は 7 世紀中葉、243 は 8 世紀後半、244 は 8 世紀前半に比定される。

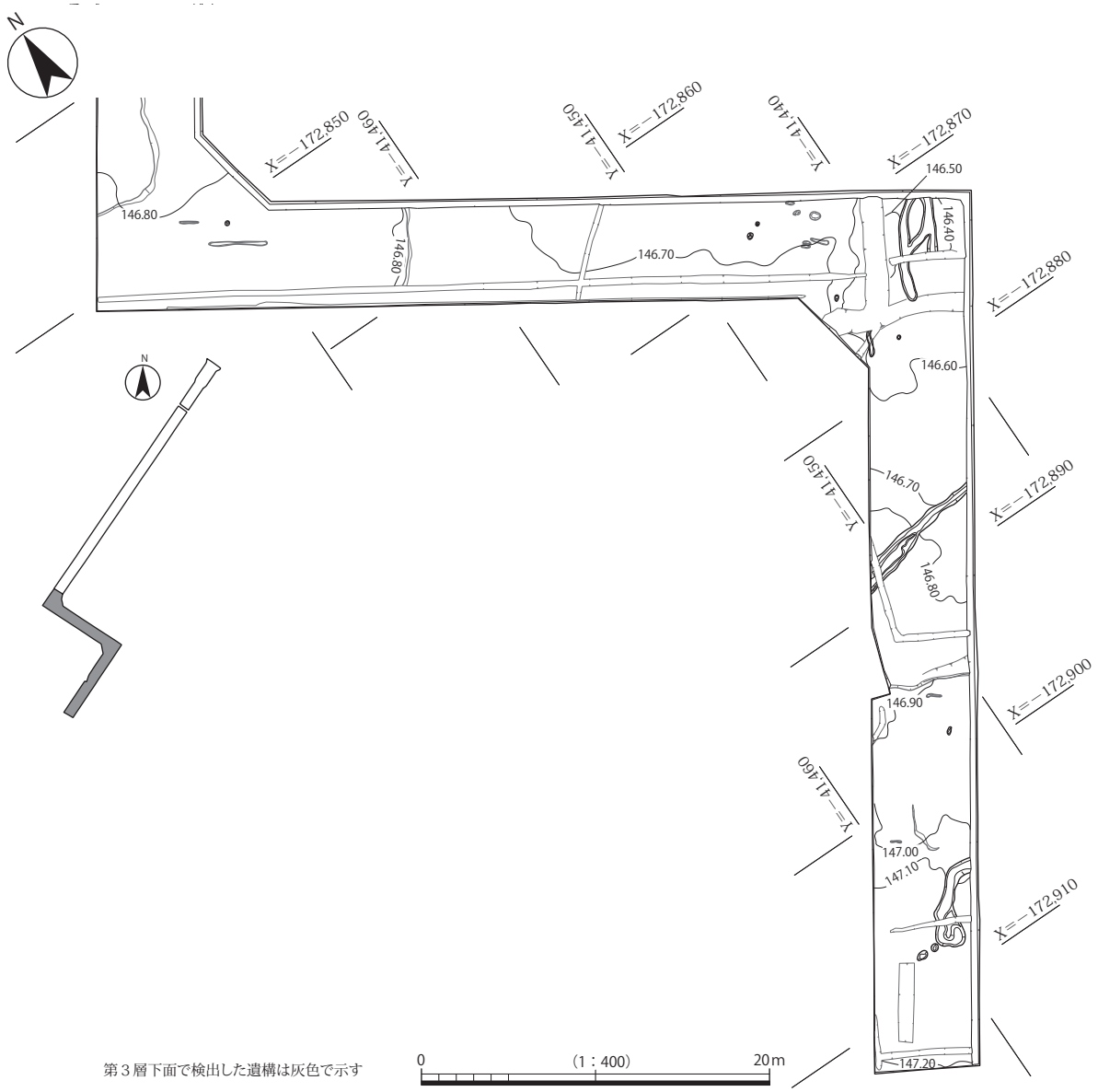


図 94　6 区　平面（2）

第５層出土遺物（図 92）

第５層からは須恵器、土師器、土製品、石器、サヌカイト剥片が出土した。245 は須恵器壺である。246 の土製品羽口の外面は被熱により灰色に変色し一部にガラス質滓が付着する。247 のスクレイパーは下端を両面から剥離調整を行う。石材はサヌカイト。248 はサヌカイト剥片である。

第７節　６区

６区は５区の北側に位置する。基盤層上面の標高は、南東端が T.P. ＋ 147.80 mと最も高く、北へはかなり傾斜し、北端は T.P. ＋ 145.00 mで南東端とは 2.8 mの高低差を有する。

調査区全体に中世の耕作土である第３層が堆積し、その下面において溝、畦畔、溝状の耕作痕を検出した。中世耕作土を掘削除去した後の基盤層上面では調査区中央で掘立柱建物１棟・土坑、北部で溝群を検出した。

第３層下面で検出した遺構

1066 溝（図 93・95）

６区北側で検出した。南西から北東から方向に延びる。規模は幅 0.30 ～ 0.40 m､深さ 0.05 mである。埋土は２層に分けられ、２層は粗砂混じり砂質シルト、１層は基盤層の粘土質シルトに炭や焼土が多く混じる。

遺物は瓦質土器皿、東播系須恵器鉢が出土し、２点を実測した。249 は瓦質土器皿で土師質土器皿と同じような形を成す。250 は東播系須恵器鉢である。調整は、体部外面が回転ナデのちユビナデ、内面は体部下半が斜め方向のナデを行い、底部外面に糸切痕が残る。口縁部外面は厚く自然釉がかかる。

時期は 13 世紀後半から 14 世紀初頭と見られる。

基盤層上面で検出した遺構

掘立柱建物 11（図 93・96 ～ 98、図版 32・37）

６区中央で検出した。建物は調査区に広がるため、建物の向きは不明である。南北を主軸とすると 22°東に偏る。1031 柱穴は 1029 土坑と重複し先行する。

検出した建物規模は桁行５間（11.8 m）、梁行２間（5.2 m）である。身舎柱間寸法は、揃っておらずばらつきが見られる。桁行東面が北から 2.00 m、2.26 m、2.40 m、中央が北から 1.80 m、2.50 m、2.50 m、2.40 m、2.40 m、西面が北から 2.30 m、2.30 m、2.20 mである。

掘方平面形は、円形を呈する。規模は直径 0.20 ～ 0.50 m、深さ 0.10 ～ 0.40 m、掘方底面の標高

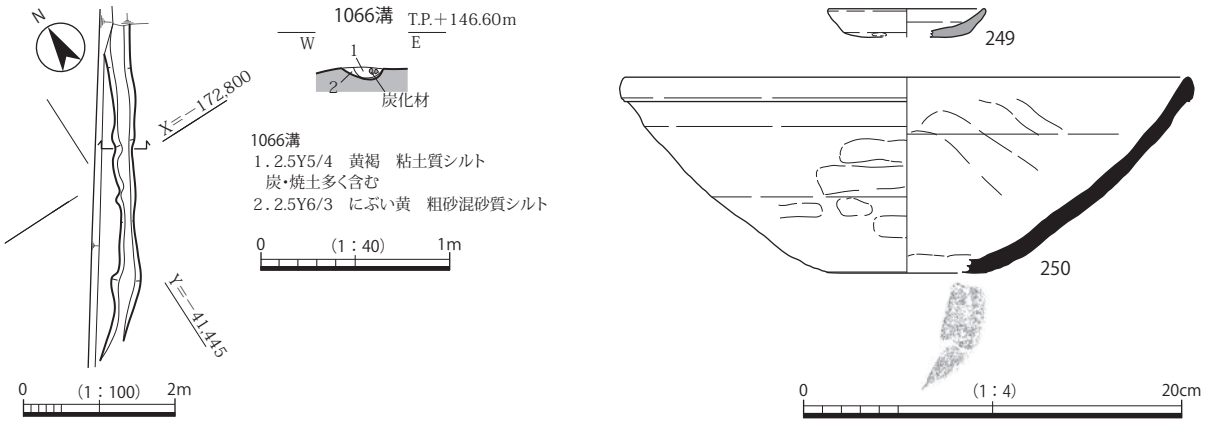


図 95　1066 溝　平・断面・遺物実測

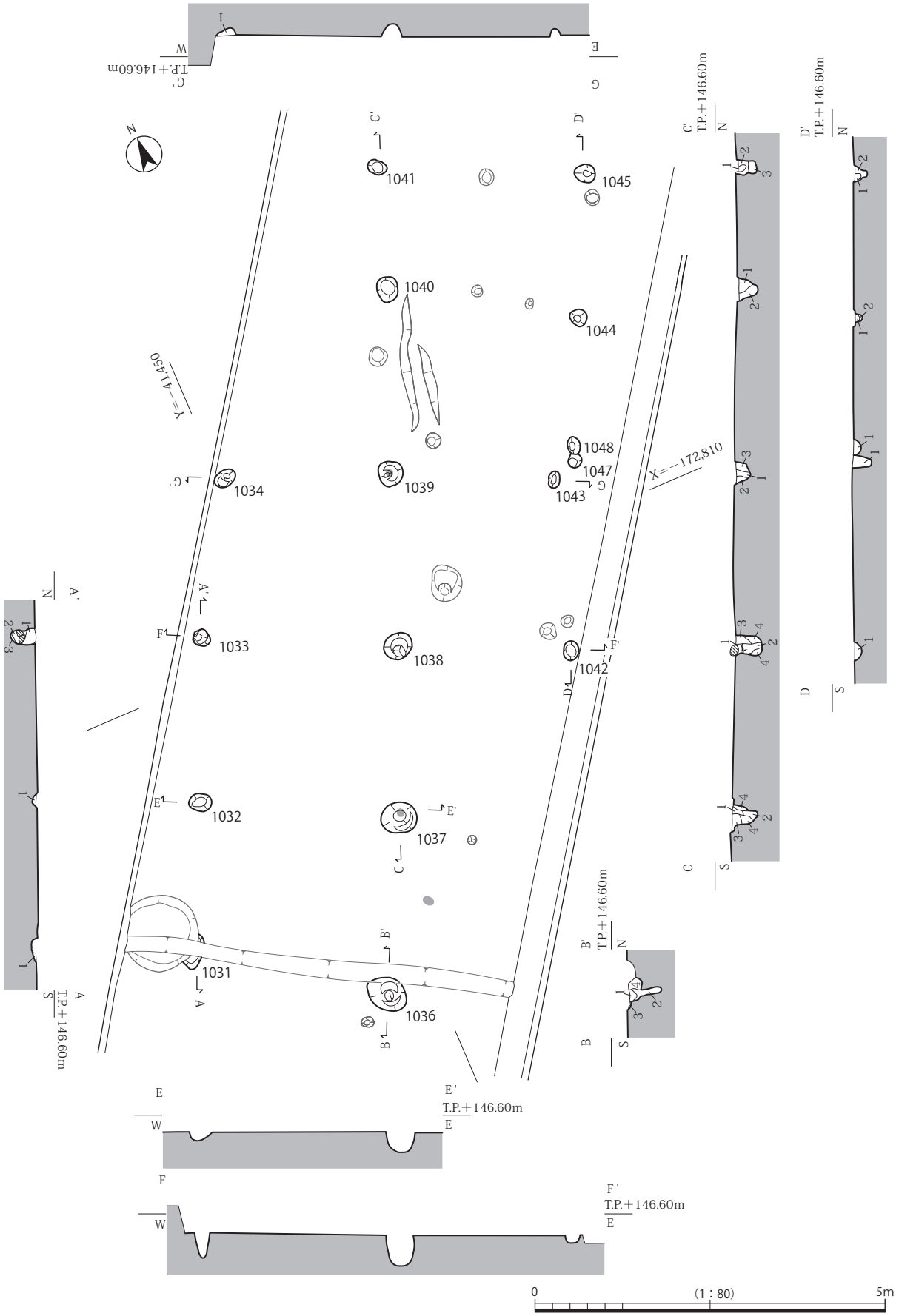


図 96　掘立柱建物 11　平・断面（1）

は T.P. ＋ 145.90 ～ 146.30 mである。桁行中央の柱穴規模は東・西面の柱穴に比べ大きい。1036 柱穴は柱当りの部分が 0.2 m程深い。その桁行中央は全ての柱穴から柱痕跡を検出した。掘方埋土は粗砂混じり粘土質シルトを主体とする。

遺物は 1034 柱穴から土師質土器皿、1037 柱穴から瓦器椀・土師質土器皿、1038 柱穴から白磁皿・瓦器椀・土師質土器皿、1040 柱穴から瓦器椀、1044 柱穴から瓦器椀・土師質土器皿が出土した。そのうち 3 点を実測した。

251 の白磁皿と 252 の瓦器椀は 1038 柱穴柱痕跡から出土した。251 は底部から口縁部まで全体に釉を掛け、口縁端部内外面の釉を削る。釉調は灰白色である。福建省系。252 の高台は紐状である。内面は口縁部が横方向のナデ、体部はナデ後数周のヘラミガキを施す。見込みにジグザク状の暗文を施

1031
1．2.5Y5/2　暗灰黄　粗砂混シルト質粘土
1032
1．2.5Y5/1　黄灰　粗砂～粗砂混シルト質粘土
　炭粒（２㎜）少量含む
1033
1．2.5Y5/2　暗灰黄　粗砂混砂質シルト　炭（２㎜）含む
2．2.5Y5/1　黄灰　粘土質シルト
3．2.5Y5/1　黄灰　粘土質シルトと
　2.5Y7/2　灰黄　粘土質シルトブロック（５㎜）
1034
1．2.5Y5/1　黄灰　粗砂混シルト質粘土
　炭粒（１～２㎜）・焼土ブロック(20㎜)少量含む
1036
1．5Y5/2　灰オリーブ　シルト質砂と
　2.5Y4/2　暗灰黄　粗砂混シルト質粘土ブロック(20～30㎜)混じる
2．2.5Y4/2　暗灰黄　粗砂混粘土質シルト
　5Y5/2　灰オリーブ　シルト質砂ブロック(10～20㎜)含む
3．2.5Y4/2　暗灰黄　粗砂混粘土質シルト　炭粒（２㎜）含む
4．2.5Y4/2　暗灰黄　粗砂混粘土質シルト
　5Y5/2　灰オリーブ　シルト質砂ブロック（５～10㎜）多く含む
1037
1．2.5Y4/3　オリーブ褐　粗砂混シルト質砂
　炭ブロック（５～10㎜）・焼土粒（１～２㎜）含む
2．2.5Y5/2　暗灰黄　シルト質粘土
　2.5Y6/6　明黄褐　砂質シルトブロック(10㎜)含む
3．2.5Y6/6　明黄褐・2.5Y4/3　オリーブ褐　砂質シルトと
　2.5Y5/2　暗灰黄　シルト質粘土まじる
4．2.5Y5/2　暗灰黄　粗砂混シルト質砂
　2.5Y6/6　明黄褐　砂質シルトブロック（２～３㎜）少量含む
1038
1．2.5Y5/2　暗灰黄　粗砂混砂質シルト　炭粒（２㎜）含む
2．2.5Y5/2　暗灰黄　粗砂混シルト質粘土
　2.5Y6/6　明黄褐　砂質シルトブロック（５㎜）含む
3．2.5Y6/6　明黄褐　砂質シルトと
　2.5Y5/2　暗灰黄　粗砂混粘土質シルトブロック(10～15㎜)混じる
4．2.5Y5/2　暗灰黄　粗砂混シルト質砂
　2.5Y5/2　暗灰黄　粗砂混シルト質粘土含む
　2.5Y6/6　明黄褐　砂質シルトブロック（２～３㎜）少量含む

1039
1．5Y4/2　灰オリーブ　粗砂混シルト質粘土
　5Y4/3　暗オリーブ　粗砂混粘土質シルトブロック(10～15㎜)含む
2．10Y5/1　灰　粗砂混シルト質粘土
　5Y4/2　灰オリーブ　粗砂混シルト質粘土ブロック（５～15㎜）含む
3．5Y4/2　灰オリーブ　粗砂混シルト質粘土
　10Y5/1　灰　シルト質粘土ブロック（３～５㎜）少量含む
1040
1．2.5Y4/2　暗灰黄　粗砂混粘土質シルト
　2.5Y6/8　明黄褐　粗砂混粘土質シルトブロック（３㎜）
　炭ブロック（３～５㎜）含む
2．2.5Y4/2　暗灰黄　粗砂混粘土質シルト
　2.5Y6/8　明黄褐　粘土質シルトブロック(10㎜)
1041
1．2.5Y6/4　にぶい黄　粗砂混粘土質シルト(基盤層)
2．10YR5/2　灰黄褐　粗砂混シルト質粘土
　10YR5/8　黄褐　粘土質シルトブロック(基盤層)（５～10㎜）含む
　炭ブロック(10㎜)含む
3．10YR5/2　灰黄褐　シルト質粘土
1042
1．2.5Y5/1　黄灰　粗砂混シルト質粘土
1043
1．2.5Y5/1　黄灰　粗砂混シルト質粘土
　炭粒（１～２㎜）・焼土ブロック(20㎜)少量含む
1044
1．2.5Y5/2　暗灰黄　粗砂混粘土質シルト
　2.5Y3/2　黒褐　砂質シルトブロック(10㎜)ごく少量含む
　炭粒（１㎜）少量含む
2．2.5Y5/2　暗灰黄　粗砂混粘土質シルト
　炭ブロック(10㎜)多く含む
1045
1．2.5Y4/2　暗灰黄　粗砂混粘土質シルト
　炭（２～３㎜）多く含む　焼土粒（２㎜）含む
2．2.5Y4/2　暗灰黄　粗砂混粘土質シルト
　2.5Y6/6　明黄褐　粘土質シルトブロック(10～15㎜)多く含む
1047
1．2.5Y5/1　黄灰　粗砂混シルト質粘土　炭粒（１～２㎜）少量含む
1048
1．2.5Y5/1　黄灰　粗砂混シルト質粘土　炭粒（１～２㎜）少量含む

図 97　掘立柱建物 11　平・断面（２）

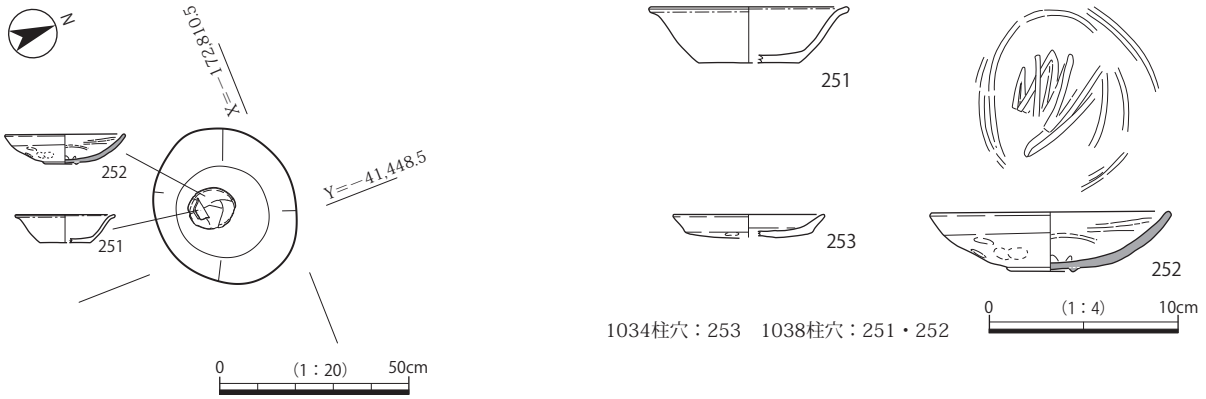


図 98　掘立柱建物 11　1038 柱穴　遺物出土状況、1034・1038 柱穴　遺物実測

す。

253 の土師質土器皿は 1034 柱穴から出土した。器高は 1㎝で浅く、口縁部は強いヨコナデで外反ぎみに広がる。

建物の廃絶時期は出土遺物から 13 世紀後半と考えられる。

1029 土坑（図 93・99、図版 33）

６区中央で検出し、一部を溝状に攪乱される。北西端が調査区外に広がる。掘立柱建物 11 の 1031 柱穴と重複し、後出する。平面形は円形を呈し、規模は直径 1.1 m、深さ 0.1 mである。

埋土は２層に分けられた。２層は炭層で層中には炭化材として形をなしているものがわずかにあり、最上部には焼土ブロックが混じる。底面付近は被熱により硬化する。1 層は粗砂混じり粘土質シルトで焼土や炭ブロックを含み、所々に炭の薄層が見られる。上部構造物が崩落した層であろうか。2 層から出土した炭化材の樹種同定を行った（第５章参照）。その結果、モミ属、ヒノキ、サクラ属、マツ属複

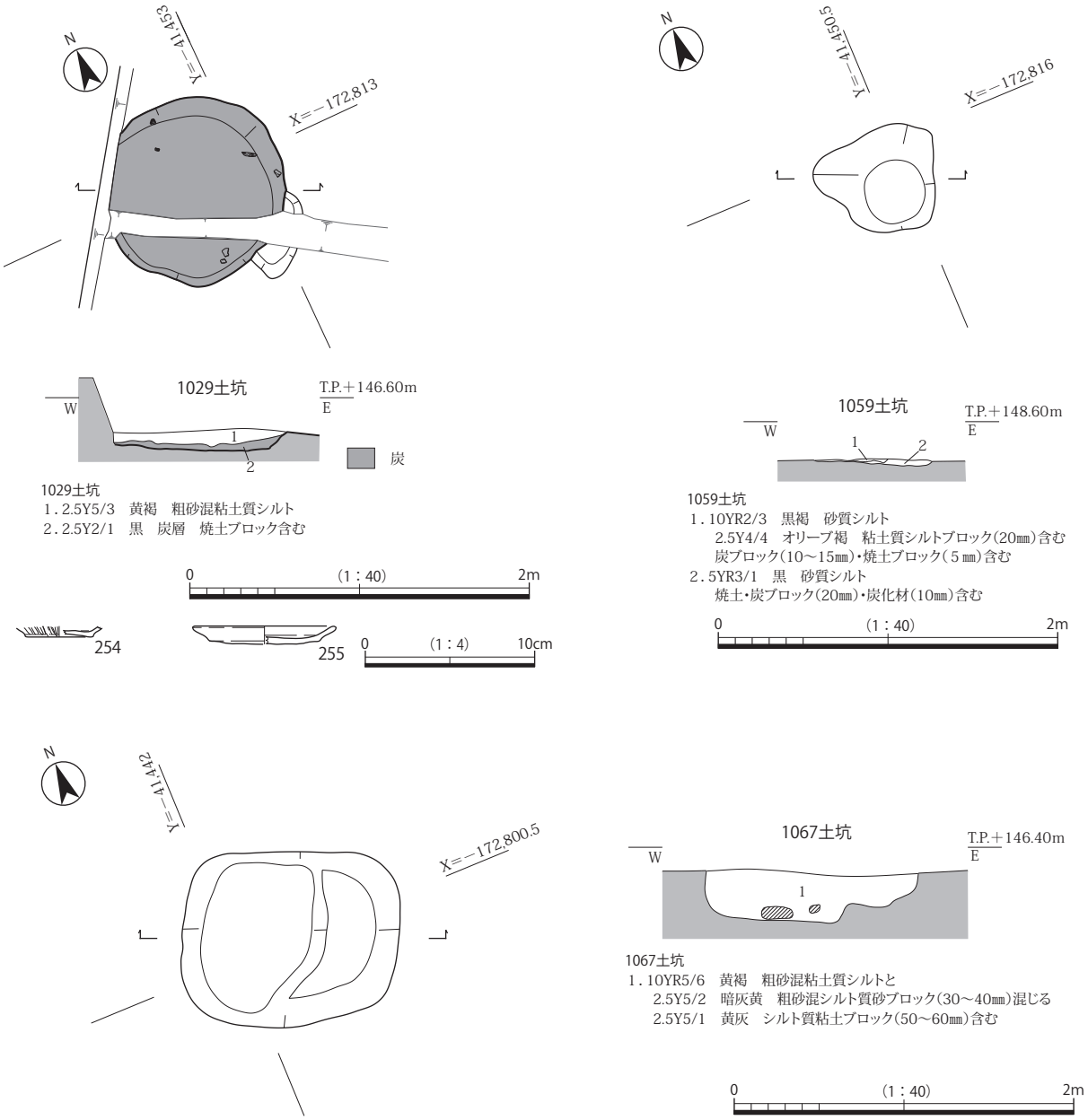


図 99　1029・1059・1067 土坑　平・断面、1029 土坑　遺物実測

維管束亜属が同定された。モミ属やヒノキなどの針葉樹は火付けが良いので焚き付け材に利用されることが多く、サクラ属は比較的早く着火し火を保たせる中薪に最適とされる。アカマツ（マツ属複維管束亜属）は火持ちは悪いが火力がとても強いため、焚き付けの燃料材として使用されたと考えられる。

このように土坑内から燃料材として使用されたであろう炭化材が出土し、土坑の壁・底面には被熱により硬化した箇所も認められたことから、何らかの製品を焼成した遺構と考えられる。

遺物は磁器合子、瓦器椀、土師質土器皿、陶器甕、瓦質土器甕が出土し、2 点を実測した。254 は白磁合子の身で底部外面は露胎である。

255 は土師質土器皿で口縁部は強い横方向のナデで外反ぎみになる。

遺構の時期は出土遺物が僅少であるが 13 世紀後半と考えられ、重複する掘立柱建物 11 とも矛盾しない。

1059 土坑（図 93・99）

6 区中央の 1029 土坑から東に 3 mで検出した。平面形は不整形な方形を呈し、規模は長辺 0.70 m、短辺 0.63 m、深さ 0.05 mである。

埋土は 2 層に分けられた。2 層は砂質シルトに炭化材や焼土ブロックを含み、1 層は砂質シルトに粘土質シルトや焼土、炭ブロックを多く含む。1029 土坑とは異なり、炭や焼土を廃棄した土坑と見られる。遺物は土師質土器皿が出土したが、実測しえなかった。

1067 土坑（図 93・99）

6 区中央の掘立柱建物 11 の 5 m北側で検出した。平面形は長方形を呈し、規模は長辺 1.27 m、短辺 1.03 m、深さ 0.30 mである。埋土は基盤層の粗砂混じり粘土質シルトと粗砂混じりシルト質砂ブロックやシルト質粘土ブロックが混じる。遺物は出土していない。

1068 ～ 1071・1073 ～ 1080 溝（図 93・100、図版 33）

6 区北側で東西方向にほぼ並行に延びる 12 条の溝を検出した。埋土から第 4 層下面の溝群と考えられる。北から 1075 ～ 1073・1080・1077 溝が 3 ～ 3.5 m間隔で並ぶ。その 1 m南の 1076 溝から間隔はまちまちになり 1076・1071・1070・1069・1068 溝は 2 m、3 m、5.5 m、14 m間隔に掘削さ

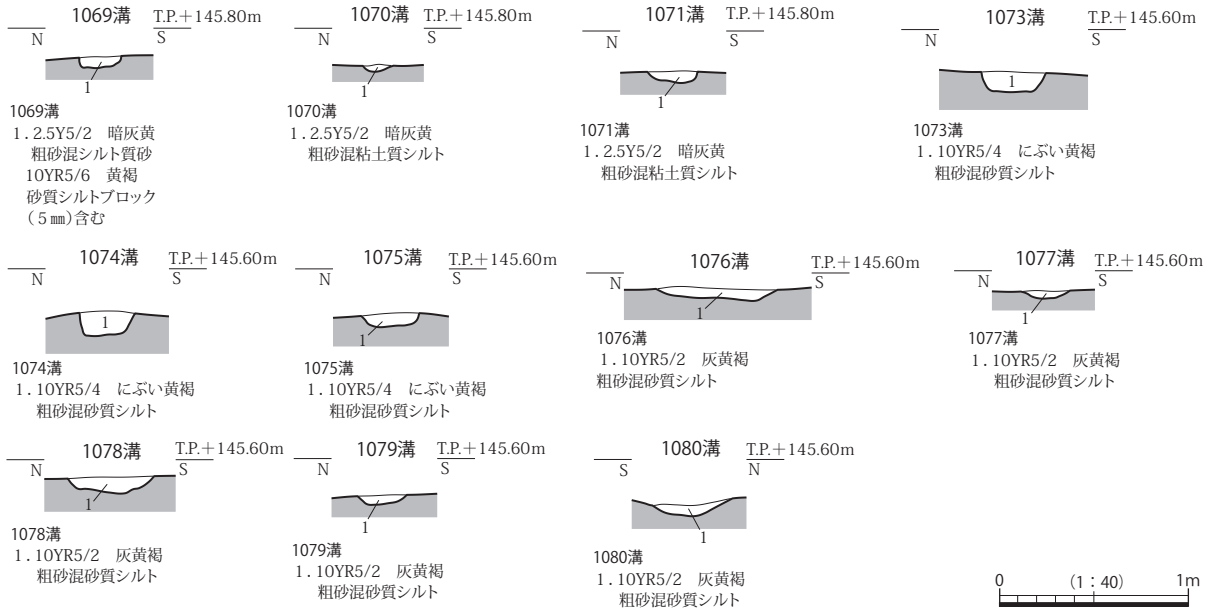


図 100　1069 ～ 1071・1073 ～ 1080 溝　断面

れる。規模は幅 0.15 ～ 0..6 m、深さ 0.03 ～ 0.1 mである。

埋土は大半が第 4 層の粗砂混じり砂質シルトである。1069 溝はシルト質砂に基盤層の砂質シルトブロックを含み、1070・1071 溝は粘土質シルトである。

遺物は 1069・1076 溝から土師質土器皿、1080 溝から瓦器椀が出土したが、実測しえなかった。

1072 流路（図 93・101）

6 区北側で検出し東西方向に延びる。規模は幅 2.85 ～ 3.65 m、深さ 0.16 ～ 0.20 mである。埋土は極細砂から極粗砂の水成層である。遺物は出土していない。

第 3 層出土遺物（図 102、図版 37）

第 3 層からは磁器、陶器、瓦器、瓦質土器、土師質土器、須恵器、土師器、砥石、サヌカイト剥片が出土し、他に図化できなかったが製塩土器が 1 点（3.70 g）出土している。全体に古代の土器より中世の瓦器、瓦質土器、土師質土器の占める割合が高い。

256 ～ 262 は青磁碗である。256 は外面に蓮弁文を描く。釉調は緑色がかった青色。257 は外面に剣頭を省略した蓮弁文を描く。釉調は深い緑色。14 世紀初頭～後半に比定される。258・259・261 は外面に鎬蓮弁文を描く。259 の口縁端部は輪花であろうか。261 の高台は断面四角で高台内部は刳りが浅く、そのため底部の器厚は厚い。高台畳付と内部は露胎である。いずれも龍泉窯系。13 世紀中頃～ 14 世紀初頭に比定される。260 は口縁部内面に 3 条の圏線を施す。同安窯系。262 は内面見込みに幾何学花文を描き、高台内部は露胎である。龍泉窯系。

263 は白磁碗、264 ～ 266 は白磁皿である。263 は玉縁碗で 12 世紀に比定される。264 ～ 266 は口縁部は短く直線的に開き、底部は平底である。いずれも全面に施釉するが、264 の口縁端部は口禿げである。13 世紀後半から 14 世紀前半に比定される。

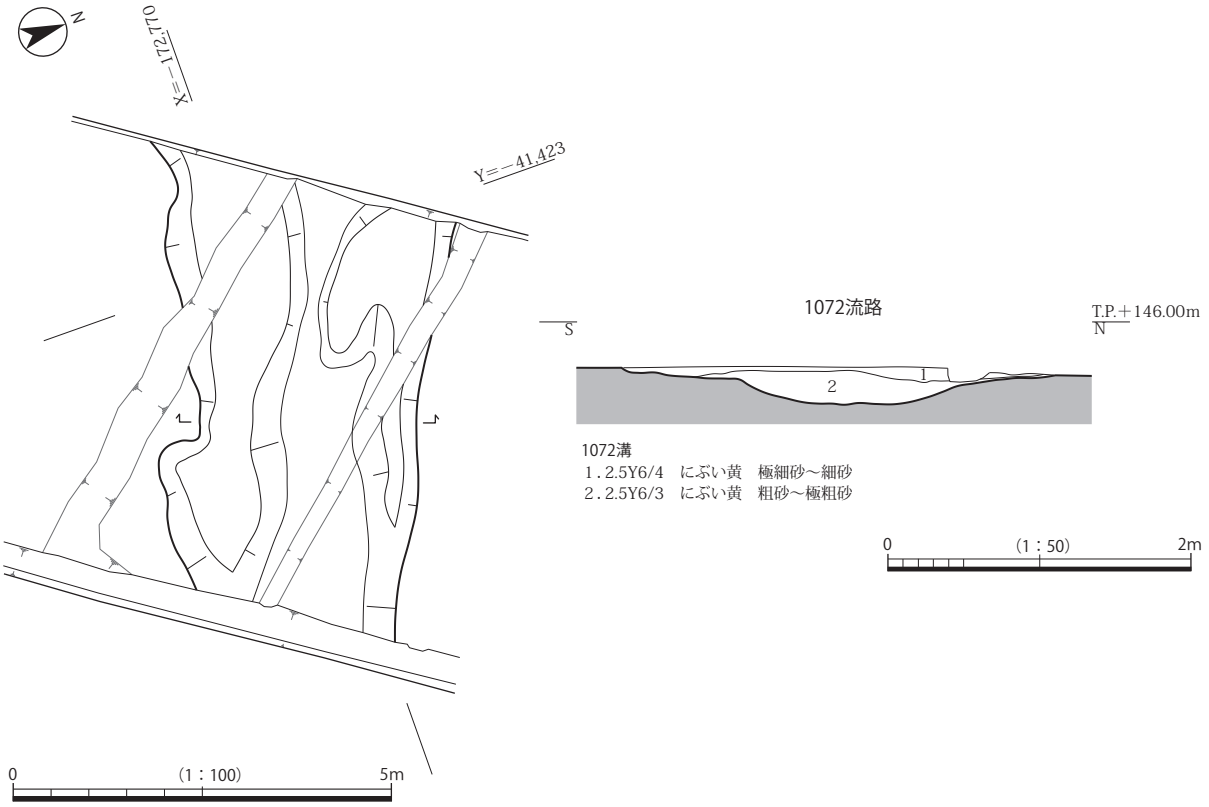


図 101　1072 流路　平・断面

267・268 は瓦器椀である。267 の調整は内面上部は横方向、下部は斜め方向のヘラミガキを行う。267 は 13 世紀後葉、268 は 14 世紀に比定される。269 は瓦質土器皿である。口縁部は横方向のナデ、底部はユビオサエを行う。

270 ～ 273 は土師質土器皿である。調整は 271 の外面口縁部が横方向のナデ、内面はミガキを行う。271・272 は口縁部は横方向のナデ、底部ユビオサエを行う。

274・275 は須恵器で 274 は杯蓋、275 は杯身である。274 は 9 世紀初頭、275 は 8 世紀中頃に比定される。276 は砥石である。277 は縦長剥片を使ったスクレイパーである。

第 4 層出土遺物（図 102、図版 37）

第 4 層からは磁器、瓦器、瓦質土器、土師質土器、須恵器、土師器、木製品、サヌカイト剥片が出土し、その他に図化できなかったが製塩土器が 1 点（3.00 g）出土している。278 は瓦器椀で内面は摩滅により不明瞭だが、ミガキを施す。279 は土師質土器皿、280 は瓦質土器羽釜で調整は体部外面がヘラケズリを行い、煤が厚く付着する。281・282 は木製品火付棒でいずれも先端は被火により炭化する。

283 はサヌカイト剥片である。

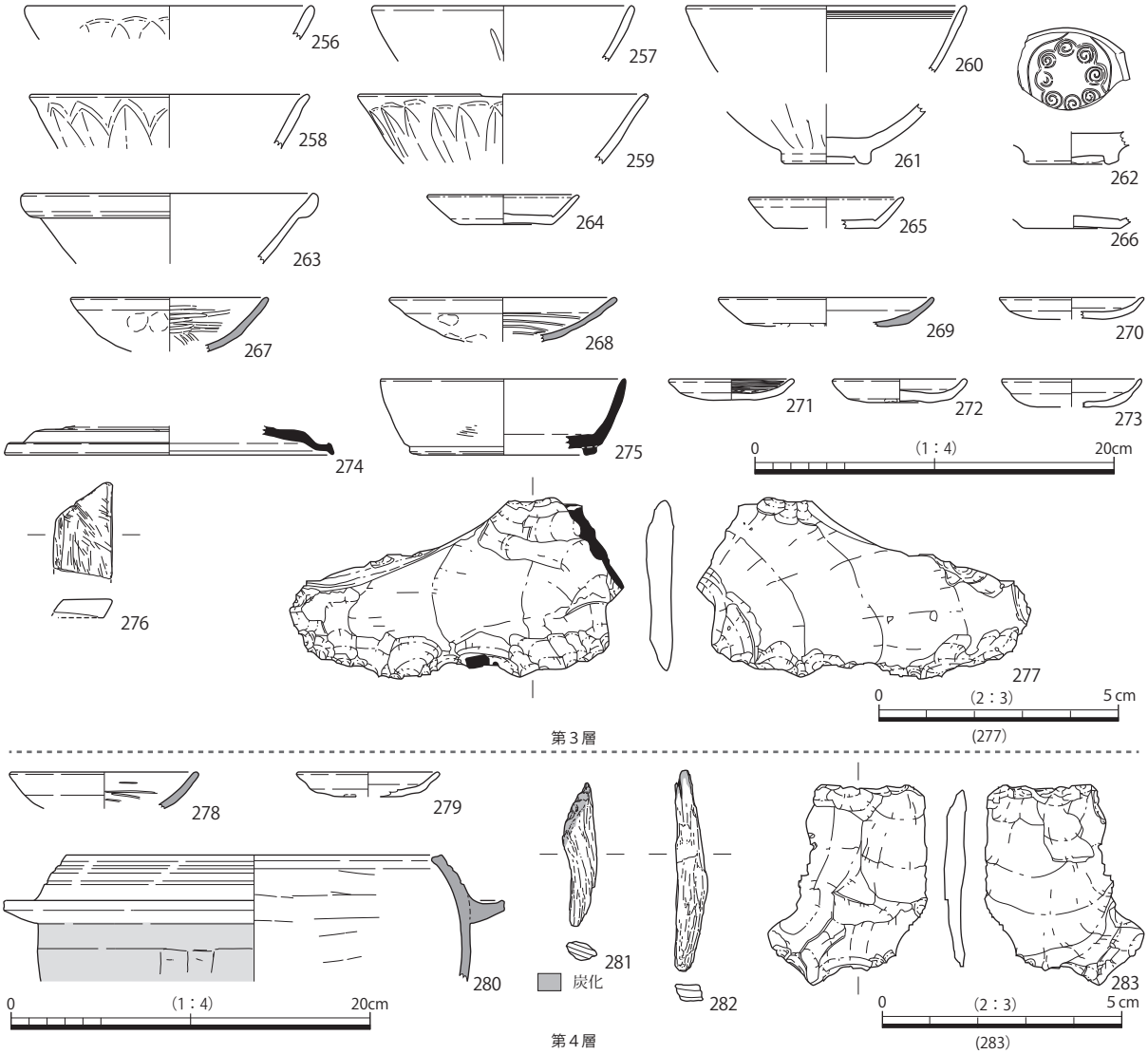


図 102　第 3・4 層　遺物実測

第５章　大型植物遺体同定分析

第１節　同定の目的

竪穴建物から出土した炭化材を樹種同定することは住居建築材の樹種構成が解り、また地域の植生と合わせると建築材に用いる樹種の選択性を考える資料となる。中世の土坑内から出土した炭を樹種同定することは周辺の植生や遺構の性格を検討する手掛かりとしたい。

第２節　試料について

今回同定対象となる大型植物遺体（木材）は飛鳥時代の竪穴建物、中世の土坑から出土した。

・竪穴建物２出土の炭化材　　９点
・竪穴建物２　989 炉出土の炭化材　４点
・1029 土坑出土の炭　　５点

第３節　樹種同定

（１）はじめに

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、木材構造から概ね属レベルの同定が可能である。花粉などの微化石と比較して移動性が少ないことから、比較的近隣の森林植生の推定が可能である。

（２）方法

方法は、木材に関しては、試料からカミソリを用いて新鮮な横断面（木口と同義）、放射断面（柾目と同義）、接線断面（板目と同義）の基本三断面の切片を作製し、切片をマウントクイックアクエオス（Mount-Quick“Aqueous”：大道産業）で封入し、プレパラートを作製し、生物顕微鏡（OPTIPHOTO-2：Nikon）によって 40 ～ 1000 倍で観察した。炭化材に関しては、試料を割り折りして新鮮な横断面（木口と同義）、放射断面（柾目と同義）、接線断面（板目と同義）の基本三断面の切片を作

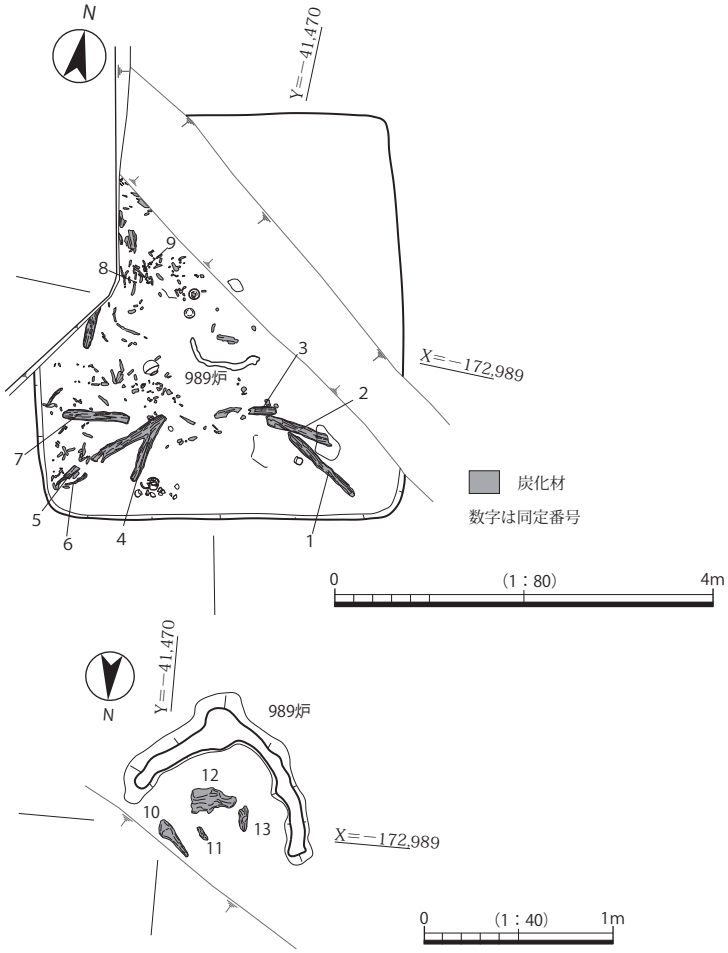


図 103　竪穴建物２　炭化材樹種同定

製し、落射顕微鏡（OPTIPHOTO-2：Nikon）によって 50 ～ 1000 倍で観察した。同定は、木材構造の特徴および現生標本との対比によって行った。

（３）結果

表２に結果を示し、主要な分類群の顕微鏡写真を示す。以下に同定根拠となった特徴を記す。

１）モミ属　Abies　マツ科

仮道管と放射柔細胞から構成される針葉樹材である。早材から晩材への移行は比較的緩やかである。放射柔細胞の分野壁孔は小型のスギ型で１分野に１～４個存在する。放射柔細胞の壁が厚く、数珠状末端壁が見られる。放射組織は単列の同性放射組織型である。

以上の特徴からモミ属に同定される。日本に自生するモミ属は５種であり、モミ以外は亜寒帯種である。常緑高木で高さ 45 m、径 1.5 mに達する。

２）マツ属複維管束亜属　Pinus subgen. Diploxylon　マツ科

仮道管、放射柔細胞、放射仮道管及び垂直、水平樹脂道などから構成される針葉樹材である。早材から晩材への移行は急な箇所と緩やかな箇所があり、垂直樹脂道が見られる。放射柔細胞の分野壁孔は窓状で、放射仮道管の内壁には鋸歯状肥厚が存在する。接線断面では、放射組織は単列の同性放射組織型であるが、水平樹脂道を含むものは紡錘形を呈する。

以上の特徴からマツ属複維管束亜属に同定される。マツ属複維管束亜属にはクロマツとアカマツがあり、どちらも北海道南部、本州、四国、九州に分布する常緑高木である。

３）ヒノキ　Chamaecyparis obtuse Endl.　ヒノキ科

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。早材から晩材への移行は緩やかで、晩材部の幅はきわめて狭い。樹脂細胞が見られる。放射柔細胞の分野壁孔は、ヒノキ型で１分野に２個存在する。放射組織は単列の同性放射組織型で、１～ 15 細胞高である。

以上の特徴からヒノキに同定される。ヒノキは福島県以南の本州、四国、九州、屋久島に分布する。日本特産の常緑高木で、通常高さ 40m、径 1.5m に達する。

表２　樹種同定結果

同定番号	登録番号	器種	調査区	地区	遺構名・層名	結果（学名 / 和名）		出土年月日	備考
1	サンプル 1	部材	5	15E-7j	竪穴建物 2	*Castanopsis sieboldii* Hatusima	スダジイ	2023/12/15	炭化材
2	サンプル 2	部材	5	15E-7j	竪穴建物 2	*Castanopsis sieboldii* Hatusima	スダジイ	2023/12/15	炭化材
3	サンプル 3	部材	5	15E-7j	竪穴建物 2	*Castanopsis sieboldii* Hatusima	スダジイ	2023/12/15	炭化材
4	サンプル 5	部材	5	15E-8j	竪穴建物 2	*Castanopsis sieboldii* Hatusima	スダジイ	2023/12/15	炭化材
5	サンプル 7-1	部材	5	15E-8j	竪穴建物 2	*Castanopsis sieboldii* Hatusima	スダジイ	2023/12/15	炭化材
6	サンプル 7-2	部材	5	15E-8j	竪穴建物 2	*Castanopsis sieboldii* Hatusima	スダジイ	2023/12/15	炭化材
7	サンプル 8	部材	5	15E-8j	竪穴建物 2	*Castanopsis sieboldii* Hatusima	スダジイ	2023/12/15	炭化材
8	サンプル 10	部材	5	15E-8i	竪穴建物 2	*Castanopsis sieboldii* Hatusima	スダジイ	2023/12/15	炭化材
9	サンプル 11	部材	5	15E-8i	竪穴建物 2	*Castanopsis sieboldii* Hatusima	スダジイ	2023/12/15	炭化材
10	サンプル 1	自然木	5	15E-8i	竪穴建物 2 989 炉	*Castanopsis sieboldii* Hatusima	スダジイ	2023/12/21	炭化材
11	サンプル 2	自然木	5	15E-8i	竪穴建物 2 989 炉	*Castanopsis sieboldii* Hatusima	スダジイ	2023/12/21	炭化材
12	サンプル 3	自然木	5	15E-8i	竪穴建物 2 989 炉	*Castanopsis sieboldii* Hatusima	スダジイ	2023/12/21	炭化材
13	サンプル 4	自然木	5	15E-8i	竪穴建物 2 989 炉	*Quercus* sect. *Aegilops*	コナラ属クヌギ節	2023/12/21	炭化材
14	サンプル 1	自然木	6	15D-6b	1029 土坑	*Abies*	モミ属	2024/2/9	生材
15	サンプル 2	自然木	6	15D-6b	1029 土坑	*Prunus*	サクラ属	2024/2/9	炭化材
16	サンプル 3	自然木	6	15D-6b	1029 土坑	*Castanopsis sieboldii Hatusima*	ヒノキ	2024/2/9	炭化材
17	サンプル 4	自然木	6	15D-6b	1029 土坑	*Pinus* subgen. *Diploxylon*	マツ属複維管束亜属	2024/2/9	炭化材
18	サンプル 5	自然木	6	15D-6b	1029 土坑	*Pinus* subgen. *Diploxylon*	マツ属複維管束亜属	2024/2/9	炭化材

４）スダジイ　Castanopsis sieboldii Hatusima　ブナ科

年輪のはじめに中型から大型の道管がやや疎に数列配列する環孔材である。晩材部で小道管が火炎状に配列する。道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる単列の同性放射組織型を示す。

以上の特徴からスダジイに同定される。スダジイは本州（福島県、新潟県佐渡以南）、四国、九州に分布する。常緑の高木で、高さ 20m、径 1.5m に達する。なお、試料のうち同定番号１、２、３、４、７、８、９、10、11 は極めて柔らかく焼き膨れが各所に入り、燃焼した消し炭（からけし）の状態であった。

５）コナラ属クヌギ節　Quercus sect. Aegilops　ブナ科

年輪のはじめに大型の道管が１～数列配列する環孔材である。晩材部では厚壁で丸い小道管が、単独でおおよそ放射方向に配列する。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少する。道管の穿孔は単穿孔を示し、放射組織は平伏細胞からなる同性放射組織型で単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織を示す。

以上の特徴からコナラ属クヌギ節に同定される。コナラ属クヌギ節にはクヌギ、アベマキなどがあり、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、高さ 15m、径 60cm に達する。

６）サクラ属　Prunus　バラ科

丸い道管が単独あるいは２～３個放射方向および斜め方向に複合して散在する散孔材である。道管の径は、早材部から晩材部にかけてゆるやかに減少する。道管の穿孔は単穿孔で、道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。放射組織は同性に近い異性放射組織型を示す。

以上の特徴からサクラ属に同定される。サクラ属には、ヤマザクラ、ウワミズザクラ、シウリザクラ、ウメ、モモなどがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する落葉の高木または低木である。

（４）所見

同定の結果、高向遺跡の木材は、モミ属１点、マツ属複維管束亜属２点、ヒノキ１点、スダジイ 12 点、サクラ属１点であった。

竪穴建物２からはスダジイ、竪穴建物２の 989 炉からはスダジイ、コナラ属クヌギ節が同定された。スダジイはやや重硬でやや耐久性があり、杭によく用いられるがタンニンが多いことからカビを防ぐ効果があり礎板や柱などの建築部材にも用いられる。他には鉢などの容器に用いられる。コナラ属クヌギ節は概して弾力に富み、耐久性があり、農具柄などに用いられる。燃料材として見るとスダジイは火力は強いが火持ちに劣り、コナラ属クヌギ節は火力および火持ちがとても良い材である。また、同定された多くは極めて柔らかく焼き膨れが各所に入り、燃焼した消し炭の状態であった。消し炭の状態になった炭化材は、火災で燃焼したあるいは燃料材として利用されたと考えられる。

そのため竪穴建物２より出土したスダジイは火災による燃焼を受けた可能性がある。また、989 炉より出土したすべてが燃料材とすると、火を長く保たせないが比較的強い火力を要する炉であったと考えられる。

1029 土坑からはモミ属、マツ属複維管束亜属、ヒノキ、サクラ属が同定された。モミ属は耐久・保存性は低いが軽軟であり加工が容易な材である。建物の内装や建具によく利用され、高い防虫効果と調湿・消臭効果が期待され食品などの保管箱に利用されることもある。マツ属複維管束亜属は木理はやや通直で、重硬で水湿によく耐え腐りにくい材である。そのため建築部材では水湿の影響を受けやすい柱、礎板などに用いられる。ヒノキは木理通直で肌目緻密で強靭であり、耐久・耐湿性も高い良材である。また加工工作が容易なため建築部材はもとより板材や小さな器具類に至るまで幅広く用

いられる。サクラ属は耐久・保存性の高い材で、切削・加工の難度は中庸で、概して堅硬な材と言え、椀や鉢などの刳物の容器に利用されてきた。燃料材としてみると、アカマツ（マツ属複維管束亜属）は火力がとても強いが火持ちが悪く、樹脂を含むので煙が多いが 200℃前後の温度では煙が少なく制御し易くなる。サクラ属は火持ちはコナラやカシに比べると劣るが、比較的早く着火するため中薪に最適とされる。モミ属やヒノキなどの針葉樹は火付けが良いので焚き付け材に利用されることが多い。焚き付け材となる針葉樹、火を保たせる中薪の役割をするサクラ属、強い火力となるアカマツを用いた焼成用の燃料材であった可能性は否定できない。

同定された樹種は温帯に分布する樹木ばかりであった。モミ属は温帯性のモミと考えられ、谷間や緩傾斜地の適潤な深層の肥沃地を好み、ヒノキは適潤性であるが乾燥した環境にも耐え、尾根、急峻地または岩盤上にも生育し、マツ属複維管束亜属は土壌条件の悪い岩山に生育し二次林を形成するアカマツと、砂地の海岸林を形成するクロマツとがある。スダジイは適潤で肥沃な深層土でよく成長するが、緩傾斜地や平坦地でも生育し、コナラ属クヌギ節は山林や乾燥した台地、丘陵地に生育し二次林要素でもある。サクラ属は排水の良いやや乾燥した斜面地に分布する。これらの樹木は当時遺跡周辺からか、または流通によって近隣地域よりもたらされたと推定される。炭化材であるため木製品としての用途は明らかにできないが、竪穴建物２では建築部材としてカビを防ぐ効果の高いスダジイが用いられた可能性が高く、その内部の炉では火持ちはしないが火力のあるスダジイを主にコナラ属クヌギ節を煮炊きなどの燃料材としたと考えられる。また、1029 土坑では焚き付け材の針葉樹、中薪のサクラ属、強い火力の燃焼材であるマツ属複維管束亜属の３種類の燃料材を用いた焼成が行われた可能性がある。

【参考文献】

伊東隆夫 1995「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ」『木材研究・資料 第 31 号』京都大学木材研究所・京都大学木質科学研究所

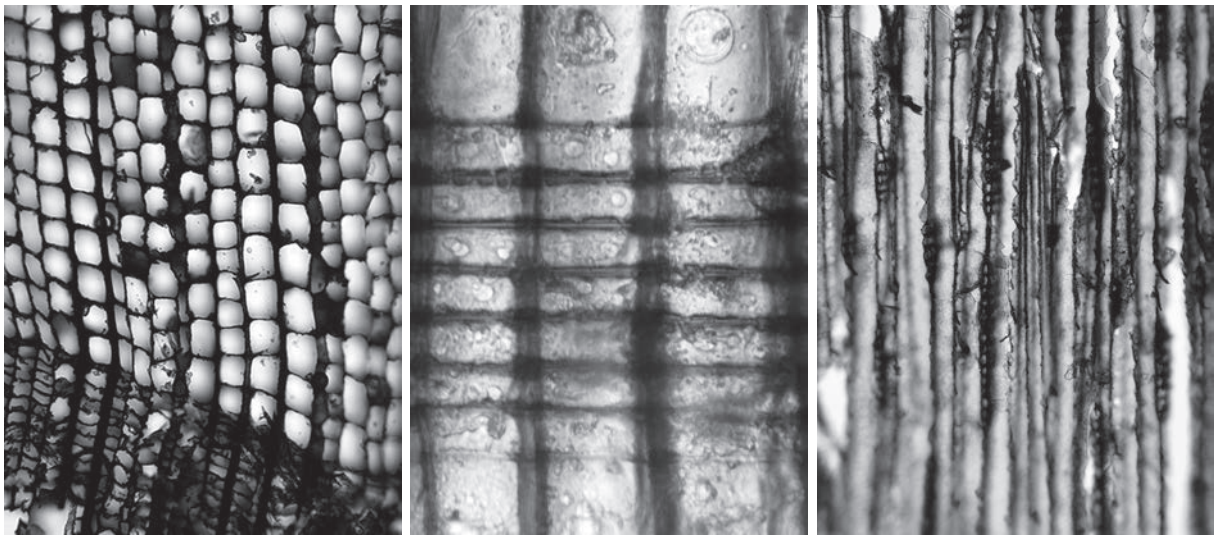
伊東隆夫・山田昌久 2012『木の考古学』雄山閣

佐伯　浩・原田　浩 1985「針葉樹材の細胞」『木材の構造』文永堂出版

島地　謙・伊東隆夫 1982『図説木材組織』地球社

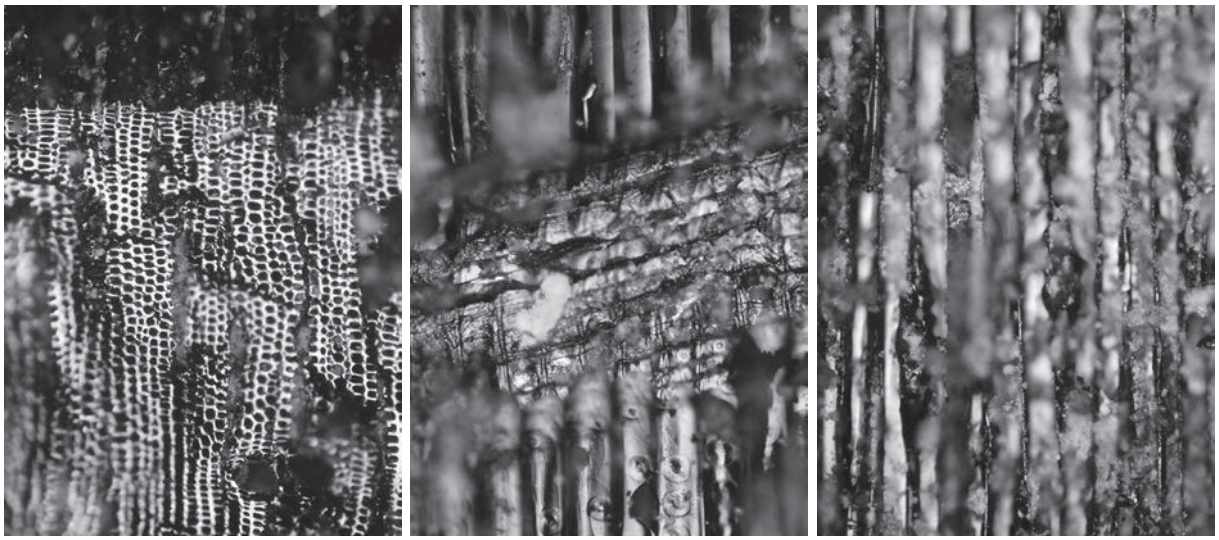
島地　謙・伊東隆夫 1988『日本の遺跡出土木製品総覧』雄山閣

写真７　木材写真１



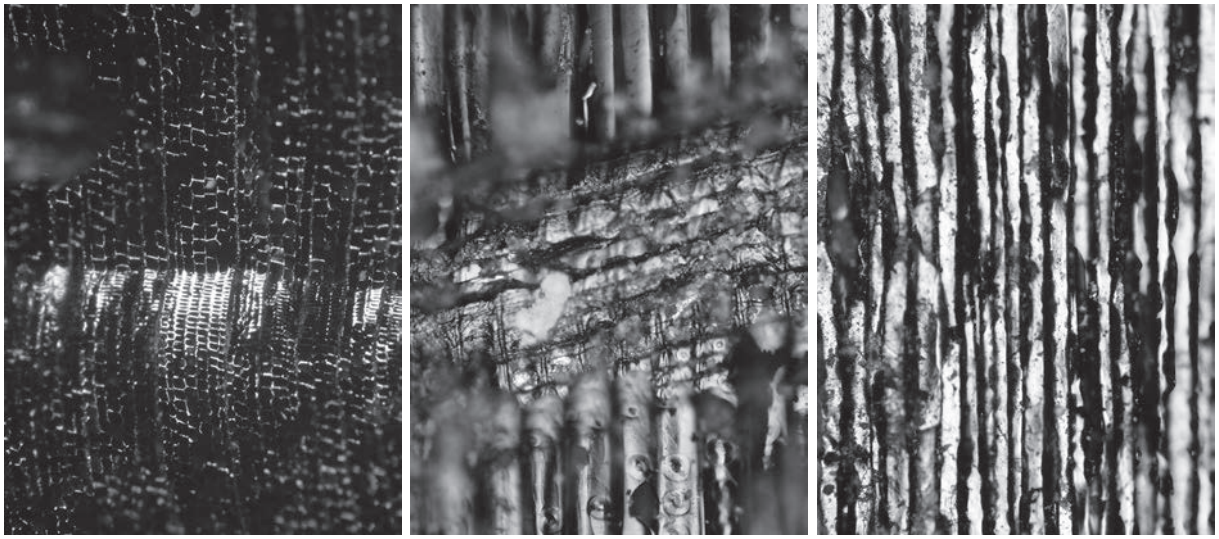
横断面　0.1mm　放射断面　0.1mm　接線断面　0.1mm

モミ属　６区 1029土坑



横断面　0.1mm　放射断面　0.1mm　接線断面　0.1mm

マツ属複維管束亜属　６区 1029土坑

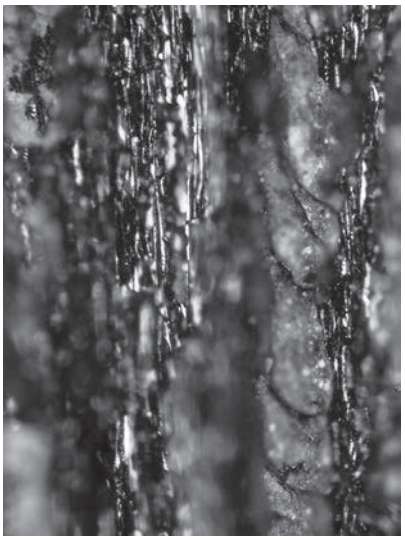


横断面　0.1mm　放射断面　0.1mm　接線断面　0.1mm

ヒノキ　６区 1029土坑

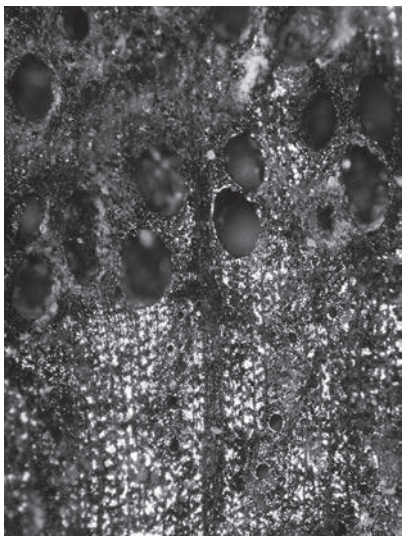
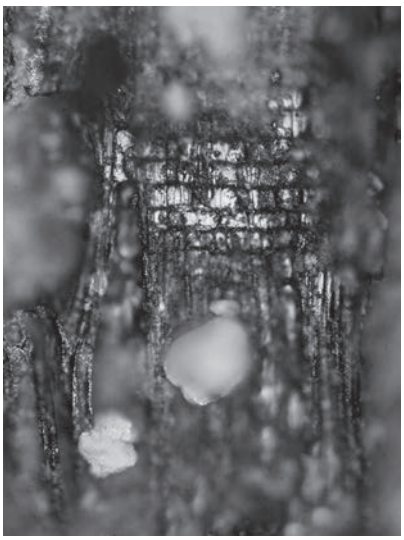
写真８　木材写真２





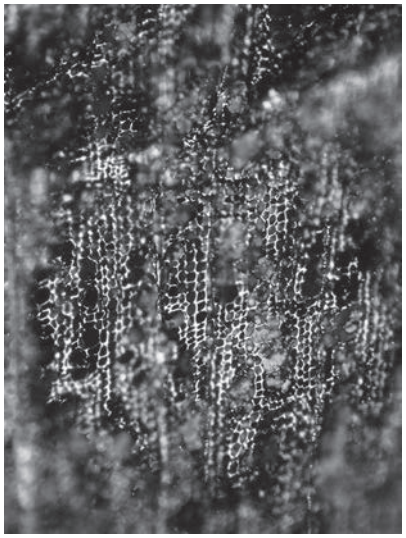
横断面　0.1mm　放射断面　0.1mm　接線断面　0.1mm

スダジイ　５区 竪穴建物2 989炉


横断面　0.1mm　放射断面　0.1mm　接線断面　0.1mm

コナラ属クヌギ節　５区 竪穴建物2 989炉



横断面　0.1mm　放射断面　0.1mm　接線断面　0.1mm

サクラ属　６区 1029土坑

第６章　総括

今回の調査では縄文時代から中世にわたる多くの遺構、遺物を検出した。ここではまず今回の調査成果とこれまでの調査成果とを合わせて時代順に遺構や遺物から土地利用の変遷をまとめていきたい。次にこの高向遺跡は中世の高向庄の荘域内にあり、これに関連すると考えられる遺構も多く検出されていることから絵図と古文書と合わせて総合的な考察を行う。

第１節　調査成果の概要（図 104）

（１）縄文時代

縄文時代中期末葉から後期初頭のピットを３－１区で 538 ピット、４区で 804 ピットの２基を検出した。538 ピットは残存したのは底部のみであったが縄文土器深鉢が据えられた状態で検出された。

これまでの調査では今回の調査地南方 400 mに位置するＩ－Ｆ区（図２参照）で耕作土層からではあるが縄文時代前期の土器と共に石鏃、石錐、刃器等の石器や石核、剥片、砕片が多量に出土しており石器製作にかかわる場があったとされている。住居等は検出されておらず居住域とは別の場所で石器製作を行っていたと想定されている。今回の調査で遺構が検出されたことで周辺にも遺構が存在すると推定される。

（２）弥生時代から古墳時代

弥生時代の遺構は検出されず、当該期の可能性がある石鏃が中世耕作土から出土しているのみである。これまでの調査では調査地に近接するＩ－Ｃ区と南方のＩ－Ｆ区から弥生時代の土坑が３基検出されているのみで人々の生活痕跡は希薄である。

続く古墳時代は、中世の耕作土から６世紀代の遺物が出土しているものの点数は少ない状況であった。これまでの調査では、５世紀代の集落が南方のＩ－Ｆ区と TKO01 －２区（図２参照）で確認されており、掘立柱建物や土坑が検出されている。当該遺跡の南西側に古墳時代の集落が存在したと見られる。

（３）古代

飛鳥時代から奈良時代は主に１・２区と５区の調査地南側を中心に多くの遺構を検出した。調査地南西の５区では７世紀中葉の竪穴建物１棟を検出した。高向遺跡はその地名から高向氏の本貫地といわれてきたが、これまで７世紀代の集落の様相が明らかでなく、遺跡の中でもこれまで調査事例のない丘陵裾部で建物が検出されたことは大変意義深いことである。

この竪穴建物の特徴は、中央にＵ字形の炉が設けられていたことである。北壁際に焼土や炭の広がりが認められたため、当初は竈が壁際に作り付けられていた可能性もあるものの、中央に炉があることは当該期の竪穴建物には竈が作り付けられていることが一般的である事を勘案するとかなり特異といえよう。また河内・和泉地域では飛鳥時代になると掘立柱建物が主体となり竪穴建物の検出例は稀になることからもこの建物は一般的な住居でなく工房の可能性も考えられるが、それを裏付ける遺物は出土しておらず建物の用途は不明といわざるをえない。

調査地南東の１・２区からは掘立柱建物９棟、溝５条をはじめとして多数の土坑・ピットを検出した。建物柱穴からの出土遺物がないため時期を特定することは難しいが、柱穴と重複する土坑や建物周囲の遺構は 10 世紀前半のピットが１基のみで他は７世紀中葉から８世紀前半であること、２区中央で検出

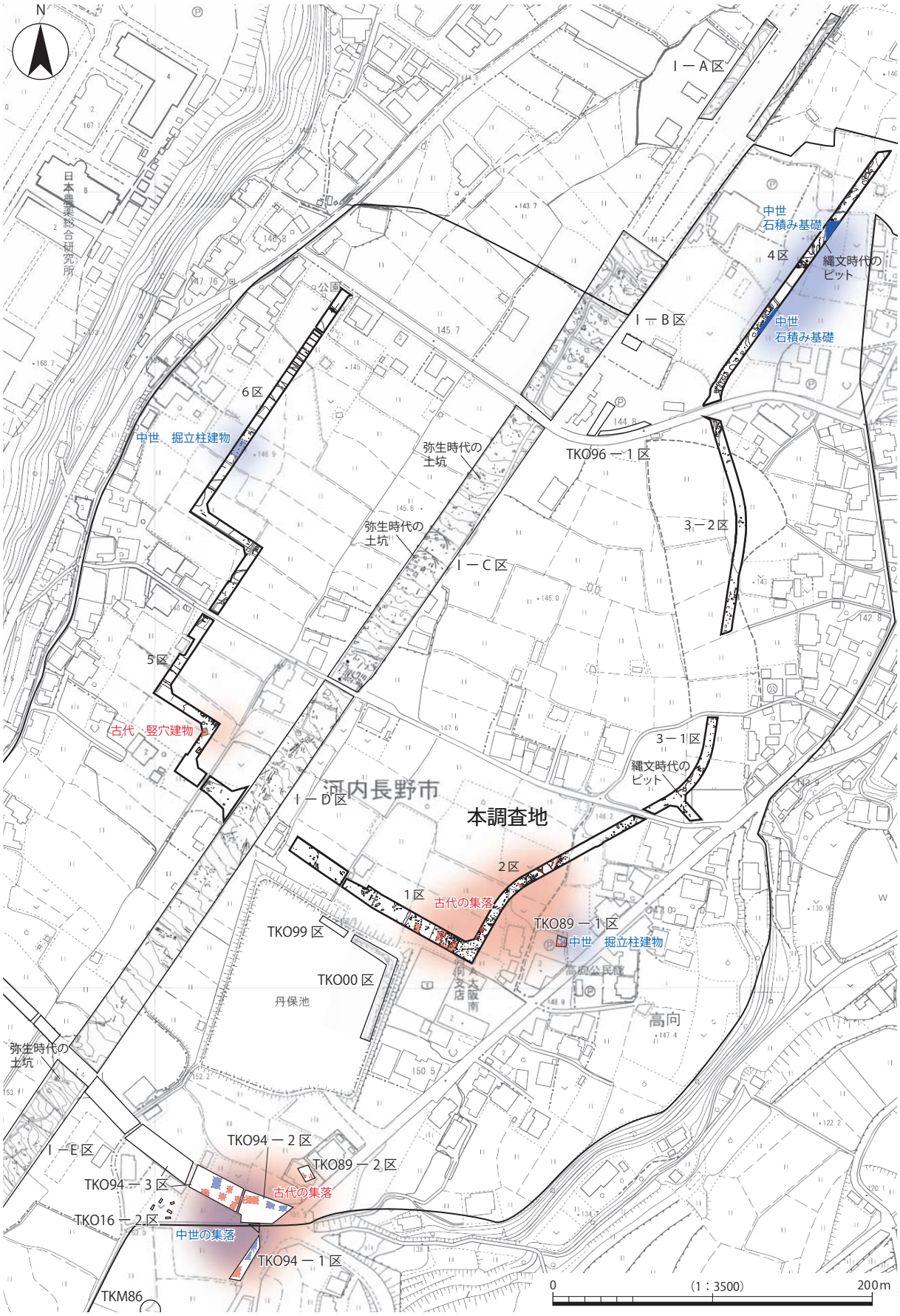


図 104　今回の調査と既往調査成果

した５条の溝が７世紀後半から８世紀後半であることから飛鳥時代から奈良時代にかけての時期が妥当であると考える。

そして掘立柱建物群は柱穴の重複関係と主軸方位から３段階に分けることが出来る。まず北から 31 ～ 34°東に偏る掘立柱建物５～９は重複するピットの出土遺物から８世紀後半から下ることはないと考えられる。この１群に対しての新旧関係は不明あるが、北から 13 ～ 15°東に偏る掘立柱建物１・２とその後に 25 ～ 26°東に偏る掘立柱建物３・４が建築される。この建物群から東側 45 mの TKO89 －１区では奈良時代の掘立柱建物１棟が検出されており、掘立柱建物１・２と同軸であることから同時期と考えられ、さらに周囲に集落が広がっていたと推定される。

その後の平安時代は２区で 10 世紀前半のピット１基を検出したのみで遺構数、遺物量共にかなり少なくなり、集落は一度途絶えると考えられる。

これまでの調査では、奈良時代の掘立柱建物が I―F 区で１棟、I―G 区で４棟、TKO94 －１・２区と TKO89 －２区で 10 棟、平安時代の掘立柱建物がＩ－Ｇ区で４棟検出されており古代の集落の中心は丹保池の南側とされてきたが、池の北側にも建物が点在することが明らかになった。

（４）中世

古代の遺構は調査地南半の１・２・５区で集中していたが、中世の遺構は北半の４・６区を中心として広がりを見せる。調査地北西の６区において 13 世紀後半の掘立柱建物１棟を検出した。掘立柱建物は規模が桁行５間、梁行２間以上である。周辺の中世耕作土からは青磁や白磁の碗・皿が出土しており、比較的富裕な屋敷であったと考えられる。これまでの調査成果ではＩ－Ｇ区で鎌倉時代の掘立柱建物４棟、TKO94 －１・２区で掘立柱建物５棟が検出されており、奈良時代と鎌倉時代の集落が同様の箇所で営まれていることが判る。1・2 区からは当該期の建物は検出されなかったが、近接する TKO89 －１区では鎌倉時代の掘立柱建物が検出されている。このことから周辺へも集落が広がる可能性も考えられ、遺跡内に集落が点在したといえよう。

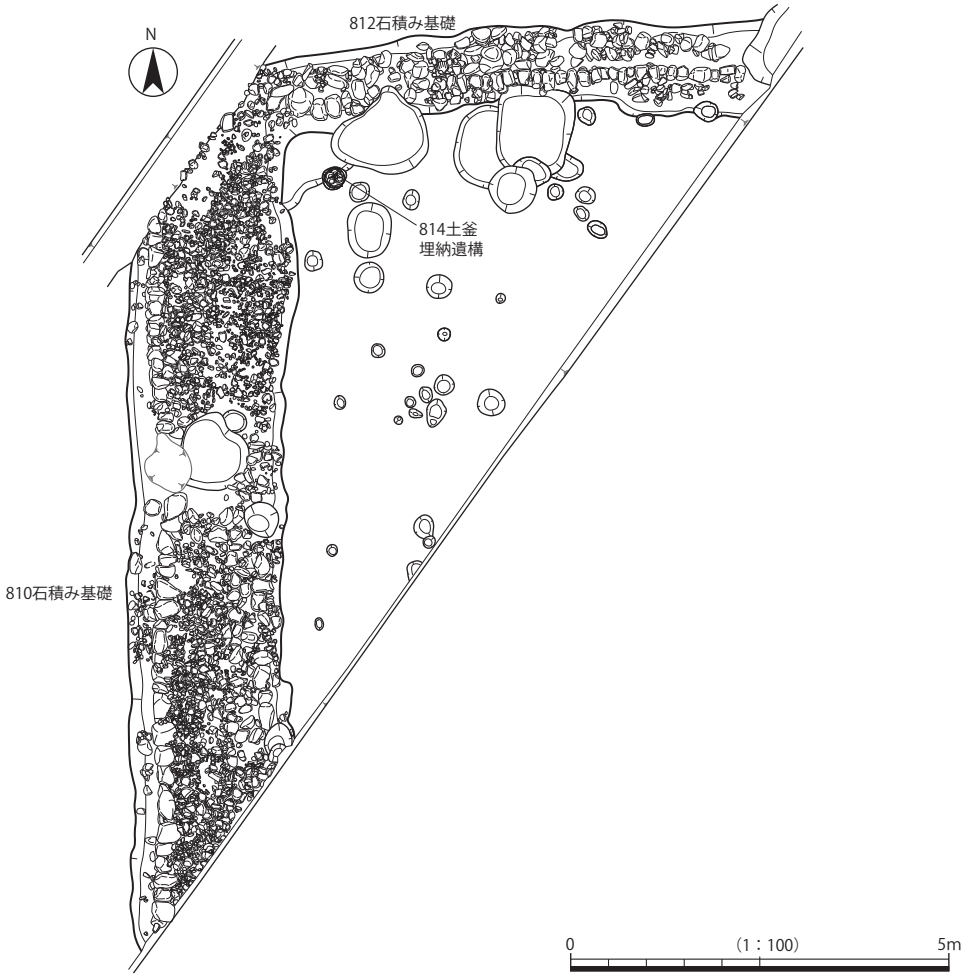
最も特筆すべき遺構として、４区から検出した 14 世紀後半から末の 810・812 石積み基礎と、15 世紀初頭の 713 石積み基礎、14 世紀末から 15 世紀初頭の 814 土釜埋納遺構が挙げられる。石積み基礎は壇上の高まりの周囲に廻らされた石積みの地下の基礎部分であると考えられ、土釜埋納遺構は地鎮に関する遺構とされている。713 石積み基礎は高まりの西辺にあたり、810・812 石積み基礎はそれとは別の高まりの西辺と北辺にあたる。814 土釜埋納遺構は、その高まりの北西角に位置する。このように２箇所の壇上の高まりが存在したと見られ、810・812 石積み基礎が周囲を廻る高まりは、検出した規模が南北 9.5 m、東西 6.7 mであり、面積は 63㎡以上となる。

石積みは、自然石を積み上げたいわゆる野面積みで石材の隙間には間詰石と呼ばれる礫を詰めている箇所が見られる。713・810 石積み基礎の特徴は石積の背後に裏込めをもつことで、その一部は栗石のみが充填されている。個々に見ると 713 石積み基礎の北角部分は石材が他部分と比べ大きく、掘り方も幅広で深く掘り下げられる。810 石積み基礎は石積み背面の裏込めの幅が 1.5 ～ 1.8 mと広く、いずれも石積みを強固にするために丁寧な基礎工事を行っていることが窺える。

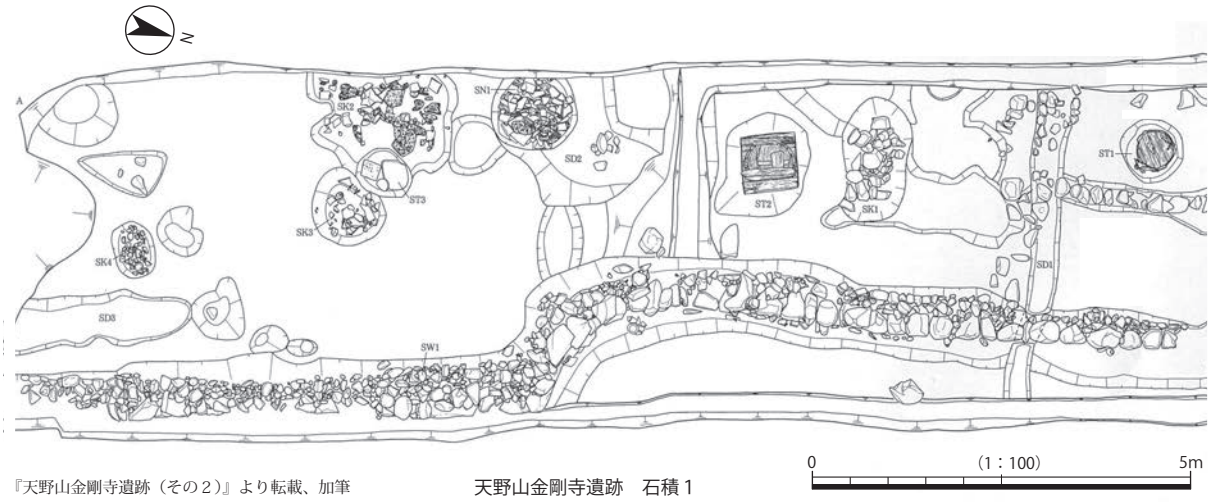
これに類似する遺構として、河内長野市内では天野山金剛寺遺跡で 17 世紀の石積み基礎が検出されている（図 105）。掘方の検出規模は長さ 16.8 m、幅 1.0 ～ 1.1 mである。掘方の中央に基底石を据え、背面に栗石を詰めている。石材の大きさは 20 ～ 30㎝の自然石である。

今回の調査で検出した 713・810 石積み基礎は、天野山金剛寺遺跡で検出された石積み基礎と同様

に裏込めに一部ではあるが栗石が充填されている。石積みと石垣の違いは栗石が入れられているか否かと考えられており、栗石は石垣背面の排水に重要で崩落を防ぐ効果をもつとされている（中井 2022）。このことから 713・810 石積み基礎は石垣に近い構造のものといえ、また 810 石積み基礎の掘方規模



今回の調査で検出した 810・812 石積み基礎



『天野山金剛寺遺跡（その２）』より転載、加筆　　天野山金剛寺遺跡　石積 1

図 105　今回の調査で検出された石積み基礎と天野山金剛寺遺跡で検出された石積み

の大きさから上部の石積みは残存しないが、かなり大規模な土木工事を行っていたと考えてよいのではないだろうか。

地鎮に関する遺構である 814 土釜埋納遺構は円形の掘方中央に瓦質土器羽釜を据え、その内部に土師質土器皿 10 点、その上に瓦質土器皿 6 点を納める。このような土釜埋納遺構はこれまでに河内長野市内の調査で天野山金剛寺遺跡で 16 例、その他に寺元遺跡、烏帽子形八幡神社遺跡、市町西遺跡などで検出されている。天野山金剛寺遺跡の 1 例を除き羽釜を用い、内部には今回検出した遺構と同様に瓦質土器皿と土師質土器皿が納められている事例が多く、瓦器椀や土師質土器皿のみや銅銭が加わる埋納遺構も見られる。

これまでの研究では羽釜と皿もしくは椀を伴うことが土釜埋納遺構の要件とされており、まさに今回の事例はそれに当てはまる。そしてこの土釜埋納遺構は、天野山金剛寺の『金剛寺文書』の研究から真言密教の修法である「土公供作法」によるものであるとされる。文書には、埋納する位置については建物の中心及び敷地内あるいは屋敷や建物の四方角とされている（鳥羽 2000）。814 土釜埋納遺構は壇上の高まりの北西角に位置しており、これと符合し、810・812 石積み基礎と 814 土釜埋納遺構の構築時期に時期差が見られないことから、壇上の高まりを造成した際に埋納したと考えられる。

その他に注目される遺構として 13 世紀後半の 1029 土坑が挙げられる。この土坑は直径 1.1 mの円形を呈し、壁が被熱して内部には炭が充填されていたことから何らかの製品を焼成したものと考えられる。TKO94 － 1 区において、これと同様の土坑が 2 基検出されており、時期は 13 世紀または鎌倉時代を下限とする。平面形は円形で規模は直径 0.90 ～ 1.07 mである。土坑内に炭化物が堆積し、底面は被熱による酸化が認められている。今回検出した土坑とは、時期や平面形、規模、土坑内部の状況が一致しており同様の遺構と考えられる。

また 1・4・5 区では畦畔や土地区画の段差、溝状の耕作痕を検出しており、屋敷地の周囲には耕作地が広がっていた事が判る。畦畔や土地区画の段差の位置と方向が現在の土地区画とほぼ一致する箇所が大半を占め、現在の耕地区画は中世から引き継がれていると考えられる。

第 2 節　絵図と史料から見る中世から近世の高向遺跡の景観

高向遺跡は、中世の高向庄の荘域内にあり、今回の発掘調査でも荘園に関連すると考えられる遺構が検出されている。また、中世に作成された荘園絵図、あるいは近世に描かれたかつての荘域に相当する場所の絵図が存在しており、現在でもこれらの絵図に書き込まれた、道、水路、社、堂、墓地を踏襲したと考えられるものが地域内に存在する。そこで、ここでは、これらの資料について総合的な考察を行い、今回の調査成果から高向庄について検討を行う。

（1）高向庄の概要

高向の地名が記載された古文書で最も古く遡るのは、天慶 7（883）年に作成された国宝「観心寺勘録縁起資財帳」であり、この中に「高向地、一町五段　家地七段・林五段・栗林三段」との記載があり、観心寺が当時、高向に領地を保有していたことがわかる。その後、中世では鳥羽上皇の御願寺である安楽寿院の所領として立荘され、康治 2（1143）年に発給された太政官牒が京都の安楽寿院に残る。当該文書には、高木、山峰幷河（石川）、和泉横路、楾谷に囲まれた範囲を高向庄として、国役を免除することが記載されている。やがて当庄は、鳥羽院皇女の八条院暲子内親王の所領として相続された。彼女は母である美福門院得子の領地も相続し、八条院領が成立し、その領地の数は、全国に 220 箇所以

上にわたり、やがて大覚寺統の基盤となり、南北朝時代には、後村上上皇女新宣陽門院に相承されている。なお、近接する金剛寺に伝わる古文書からも、中世における高向庄にかかわる事項を見ることができる。これによると、平安時代における長野庄の住人で金剛寺の檀越である源貞弘という在地領主がおり、その子孫と考えられる安楽寿院領高向庄住人貞円という人物が金剛寺と争いを起こしていることが記録されている。

鎌倉時代以降、荘園の支配や経営は中央にいる貴族から徐々に在地にいる武士へと移っていくが、隣接する地域にある烏帽子形城には碓井大和守定純という城主がおり、この人物によって荘域内の取水をめぐる争いが調定されており、高向庄の支配への関与があったものと考えられる。その後、豊臣秀吉が天下を統一すると、全国の荘園は廃止された。高向庄もこの時に廃止されたと考えられる。その後、近世では膳所藩領高向村となり、その後、近代の錦部郡高向村を経て、昭和 29（1954）年に河内長野市となっている。

（２）高向庄に関する絵図

高向庄のかつての姿を考えるうえで、重要な史料が３点存在する。１つは室町時代の後半期に作成された「河内国高向荘絵図」であり、２つ目は、江戸時代に作成された「河州錦部郡上原村堰絵図」であり、３つ目が同じく江戸時代に作成された「河州錦部郡加賀田領並びに隣接領境界図」である。

１.「河内国高向荘絵図」（図 106 上）

「河内国高向荘絵図」は、弘治３（1557）年に作成されたものであり、市内で見つかっている中では最古の地図である。紙本墨書であり、長さが 28.7㎝で、幅が 74.7㎝である。上を西、下を東、左を南、右を北として描かれている。

絵図中に記された弘安六年三月十四日の文字は、仮託されたものと考えられている（東京大学史料編纂所 2002）。中央右には用水に関する取り決めについての記事と考えられる文章が見られる。当該絵図は高向に所属する耕作地を示すことや用水の管理に主眼が置かれ作成されたものと推察できる。全体的な表現は、あまり写実的ではなく、絵図上部左には耕作地を示していると考えられる区画があり、区画内に文字が書き込まれている。これらは耕作に関する権利者などを記載しているものと考えられる。

絵図の上半部には、南北に続く「日野道」が描かれており、中央付近でこれに直交する道は「天野道」と記される。また日野道に並行する２本の水路を描いている。水路は墨書きの線の間に複数の波線を描き水の流れを表現する。水路のうち、上方のものには「上原」あるいは「上原井」という標記が見られる。「上原井」の井は川の水をくみとる所という意味があり上原用水の意味であろう。

下方のものは、「日野道」に沿って描かれており。これらのより上部には小山田丘陵と考えられる丘陵が描かれている。この丘陵の右端には「三昧山」とあり、墓地を示している。絵図の下半部に左右方向に描かれているのが石川と考えられる。石川については、水害によって流路が遷移しているため、現状の地形と照合する際には、注意が必要である。

また、寺院、神社、あるいは現在も残っている地名と見られるものも書き込まれている。これらの宗教施設の中には、現代に残っているものがあり、以下に詳細を記載する。

①三井寺

絵図の左上に「三井寺」とある。三井寺とは高向神社境内にある薬師堂の別名である。現在、入母屋造り瓦葺きの寄棟造の堂が建っている。三井寺に近い場所には「宮坊」と書かれている。高向神社に付属する建物を指すと考えられる。「ヤ九シトウ」とあるのは現在、高向神社境内にある薬師堂を意味す

ると思われる。

②惣持寺

絵図の中央下に「惣持寺」とあり、建物が描かれている。現在、惣持寺は存在しておらず、惣持寺跡とされる箇所とは一致しない。

③高恩寺

絵図の左下の川の下に「高恩寺」とある。この寺院は現存しないが、1764 年の『高向村明細帳』（図 110 下段右）に「白山権現　真言宗寺号高恩寺」、1670 年の『高向村検地帳』（図 110 上段）に「上久保　白山権現境内」とあるため、上久保に高恩寺があったことがわかる。図 107 の河州錦部郡加賀田領並びに隣接領境界図」の右下の石川の右に描かれる寺社が該当し、高向荘絵図に描かれた位置と一致している。

④三昧山

絵図の中央上に「三昧山」とある。三昧山とは墓地のことであり、地域内には現在、池坂墓地が同じ小山田丘陵に存在する。

⑤天野道

絵図の中央上部に「天野道」とある。天野道とは、天野に通じる道を示していると考えられる。現在の国道 170 号線の前身となす道路であったと見られる。

⑥天野無量寿院

絵図の中央上に「天野無量寿院」と２箇所にわたって見られる。金剛寺の子院に無量寿院があり、この子院が権利を持っていた土地を示していると考えられる。

２.「河州錦部郡上原村堰絵図」（図 106 下）

河州錦部郡上原村堰絵図は、製作年代は不明であるが、江戸時代のものである。寺ケ池水路（井堰）の全容を示す絵図であり、石川からの取水口（用水あげ口）から右端の寺ケ池と、そこから市村新田への水路までを描いており、この水を田地に引く村の内、最上流の上原村が全体の管理をおこなうために作り利用したと考えられる。描かれている上原村の部分は、旧高向庄の一部で、「河内国高向荘絵図」で描かれている場所とも重複する。上を西、下を東として、左を南、右を北として描かれている。

絵図には、南北にはしり、日野村に至る道が描かれている。この道の上部には、家屋や「今池」とされる池が描かれている。この他に、日野村へいたる南北の道を「水落」付近で横断する形で道が描かれており「河内国高向荘絵図」で示された天野道と考えられる。この他、上原村井溝、寺ヶ池溝、朝原溝の３本の溝が描かれている。

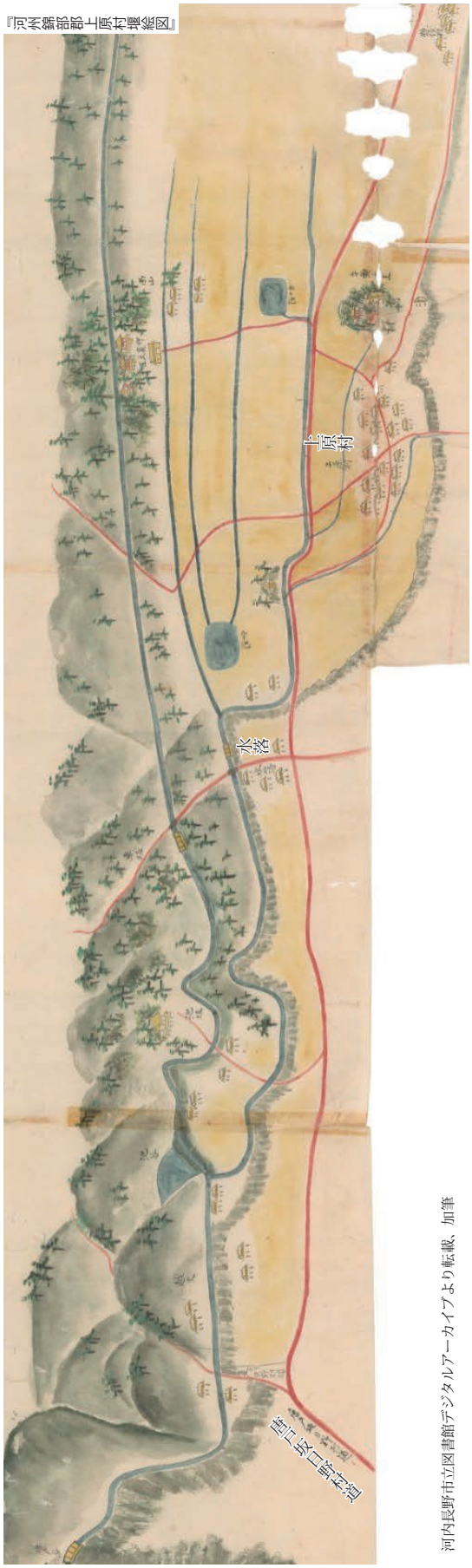
３.「河州錦部郡加賀田領並びに隣接領境界図」（図 107）

「河州錦部郡加賀田領並びに隣接領境界図」は、元禄８（1692）年に作成されたものであり、隣村どうしの境界をめぐる争論に備えて、双方の村の合意によって境界を決め、合意事項を保存するために作成されたものである。紙本著色であり、大きさは長さが 248cm、幅が 130cm である。上を南、下を北、左を北、右を南として描かれている。

「河内国高向荘絵図」と異なり、非常に写実的に家屋、田畠、社、村堂などが描かれ、道路を赤色、川や水路を水色、河岸段丘崖や川、池の堤を緑色で示している。なお、神社は赤い鳥居と、同じく柱を赤くした社と共に周囲に木々を描くことで表しているようである。寺は一般の家と異なり周囲に縁をめぐらす建物として表現され、木階が描かれる建物も見られる。現存する高向神社、薬師堂、八福寺と考

『河内国高向荘絵図』

『河州錦部郡上原村堰絵図』



河内長野市立図書館デジタルアーカイブより転載、加筆

図 106　河内国高向荘絵図と河州錦部郡上原村堰絵図

えられる建物、あるいはすでに消滅している地福寺、惣持寺と考えられる建物は、このような表現で描かれている。また、この他に右端に日野方面へ続く道が描かれている。地形としては、石川、石川西側の河岸段丘崖が描かれている。

以下、絵図と現在地とを照合する上で重要な５つの物件についてまとめる。

①高向神社と薬師堂

絵図（掲載部分）の左下部分に高向神社の境内が描かれている。鳥居の前に赤い柱を持つ本殿が描かれ、絵図の制作年代からすると現存する高向神社本殿そのものを描いたと考えられる。境内にある薬師堂は、瓦葺を表現したと考えられる灰色の屋根が表現されている。

河内長野市立図書館デジタルアーカイブより天地を逆にして転載、加筆

図 107　河州錦部郡加賀田領並びに隣接領境界図

②八福寺

絵図（掲載部分）の右上部分の池のそばにある瓦葺きが表現された建物は、その位置から八福寺ではないかと考えられる。

③地福寺

絵図（掲載部分）の左下部分に堂が描かれている。現在のこの場所には自治会館があり、かつて地福寺と呼ばれた寺院があったとされ、自治会館の中には彫刻や祭礼用具が保管され、敷地内には近世の墓石がある。

④惣持寺

絵図（掲載部分）の中央部分に「そうじん池」が描かれており、この付近に周囲に縁をめぐらす建物

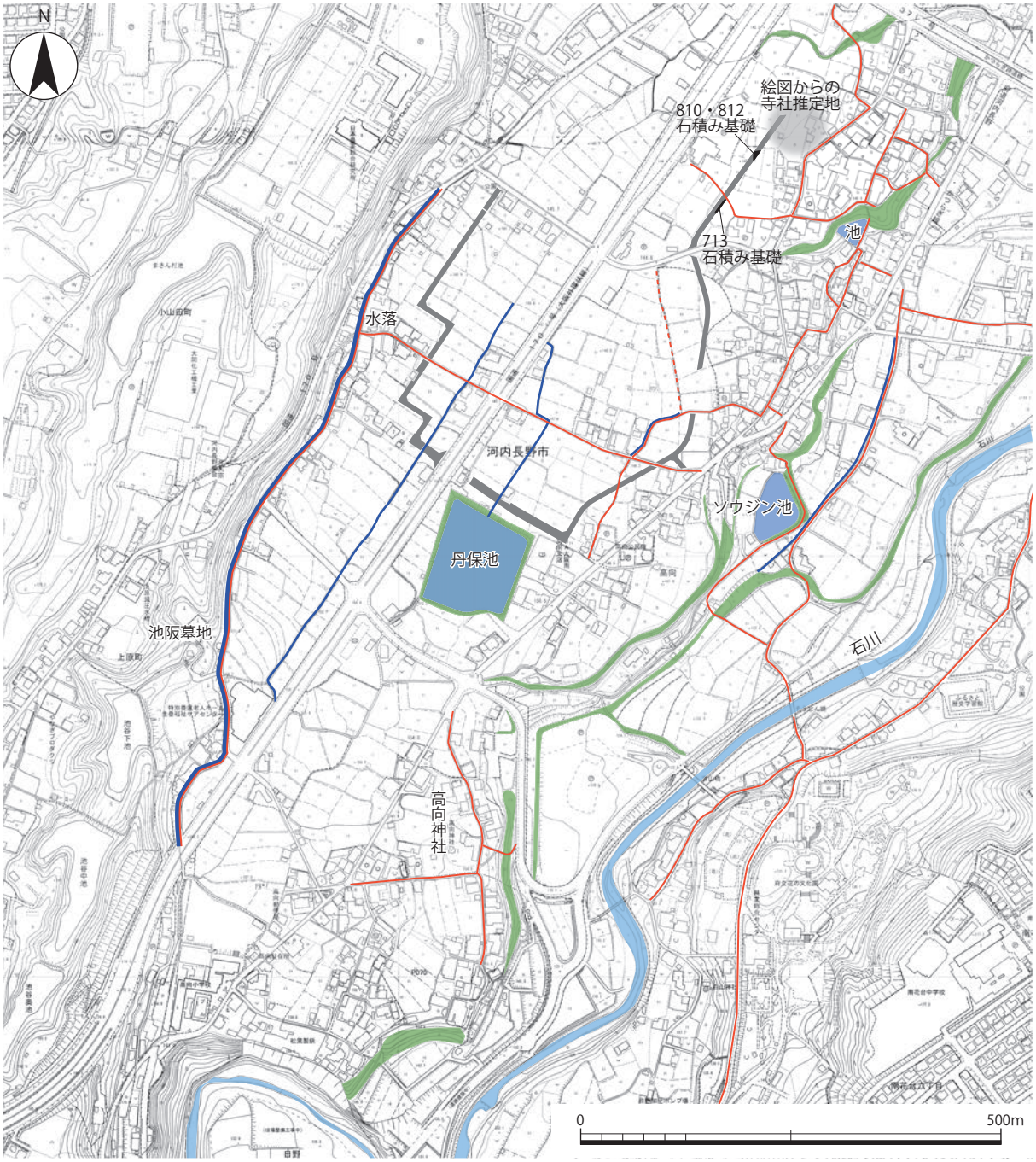


図 108　絵図との照合

が描かれており、惣持寺を示していると考えられる。この場所からは鎌倉時代の鎮壇具が出土している。

⑤丹保池

絵図（掲載部分）の中央左部分に「丹保池」が描かれている。現在も高向地区の水田に水を供給している丹保池は、四角形の特徴的な形をしている。

（３）絵図と現在地の対応関係

近世の絵図の２点は、比較的写実的に描かれており、また現在も存在している道、池、社、堂、池などが描かれているために、現状と位置を照合することができる。中世の「河内国高向荘絵図」に関しては、今回調査で検出した遺構が機能していたと見られる時代のものであるが、写実的ではなく、現状と照合できる構造物なども少ない。そこで、近世の絵図を介して、中世の絵図と現地の照合を試みてみたい。この上で、今回の調査で検出された中世の遺構が絵図ではどの付近にあたるのか明らかにしたい。

「河内国高向荘絵図」の上半部に描かれている日野道、天野道、２本の溝に関しては、「河州錦部郡上原村堰絵図」に赤線で表記されている左右に通る道、中央を上下に通る道、青線で表示されている２本の水路に相当するものと考えられる。これらのことから、絵図の上半分は近世の上原村の一部に相当するものと考えられる。一方で、「河内国高向荘絵図」に描かれている日野道及びこれに接する水路は「河州錦部郡加賀田領並びに隣接領境界図」にも描かれている。これらのことから、「河内国高向荘絵図」の下半分は近世の高向村の一部に相当するものと考えられる。

これらを現状と対比させると、まず、三昧山とは、現在の池阪墓地が一つの候補となる。次に、天野道は、現在の国道 170 号線の旧道に相当すると考えられるが、中世では、丘陵を登る箇所が墓地の南側にあるのに対して現在は、墓の北側となっている。天野道の南側にある不定形な区画は、谷間に開墾された田畑を示していると考えられるが、現在は谷の入り口がせき止められ、池谷下池、池谷中池、池谷奥池となっている。また、石川の東に上窪とされているのは、現在でも同じ場所に「上久保」の地名が残っている。

このように対比させた場合、今回の調査地は「河内国高向荘絵図」の右側下方に位置する。絵図に記される八福寺、三井寺は、現在の境内地と一致しないため、これは境内地そのものを示しているのではなく、これらの寺院が耕作に関わる権利を有していた耕作地を示していると考えられる。惣持寺とあるのは、耕作地ではなく、惣持寺そのもの場所を示していると考えられるが現在、惣持寺跡とされている箇所とは一致しない。

（４）４区で検出した石積み基礎について

今回の調査で検出された 713・810・812 石積み基礎は寺院に関連する壇上の高まりの石積みの基礎部分にあたると考えられる。しかしこれらの遺構が検出された箇所は、現在は水田となっており、地表では寺院境内の痕跡はない。このため、小字名や中世・近世の絵図によって、この遺構に関する検討を以下に行う。

まず旧土地台帳に記載された小字名に寺院の存在につながる名称が付近にあるのかどうか整理し、作成したのが図 109 である。810･812 石積み基礎の周囲の小字名は「クアンダイジ」であることが判明し、また東には「テンジンマエ」の名もみえる。寺院の名が「クアンダイジ」であり、また周囲に「テンジン」の名の神社があったことが推測できる。

次に近世の「河州錦部郡加賀田領並びに隣接領境界図」（図 107）に調査地付近に寺院が描かれてないかを確認した。先述した絵図と現在の地形の照合をもとに、近世の道や水路を現在の地図に記したの

が図 108 である。図 107 の絵図と図 108 を対照すると調査地 4 区の東に南北に通る道路が東に曲がる地点に神社と寺が描かれている。これが図 109 の小字名「宮山クワンダイジ」の箇所に該当する。

この絵図には寺や神社名は記されていないため、近世の文献史料に小字名にみえる「クアンダイジ」や「テンジン」の名がないかを調査したところ、寛文 10（1670）年作成の『高向村検地帳』（以下『検地帳』）、宝暦 14（1764）年作成の『高向村明細帳』（以下『明細帳』）、天保 14（1843）年作成の『高向村村鏡明細帳』（以下『村鏡明細帳』）にその名が記されていた（図 110）。『検地帳』（図 110 上段）の左上に「一反歩　下村天神境内」とある。この下村は昭和 7 年の地図で調査地近辺を指しており、調査地の近隣に「天神社」があったことが判る。また右下に「かんたいし」とあるが、その横に「はん

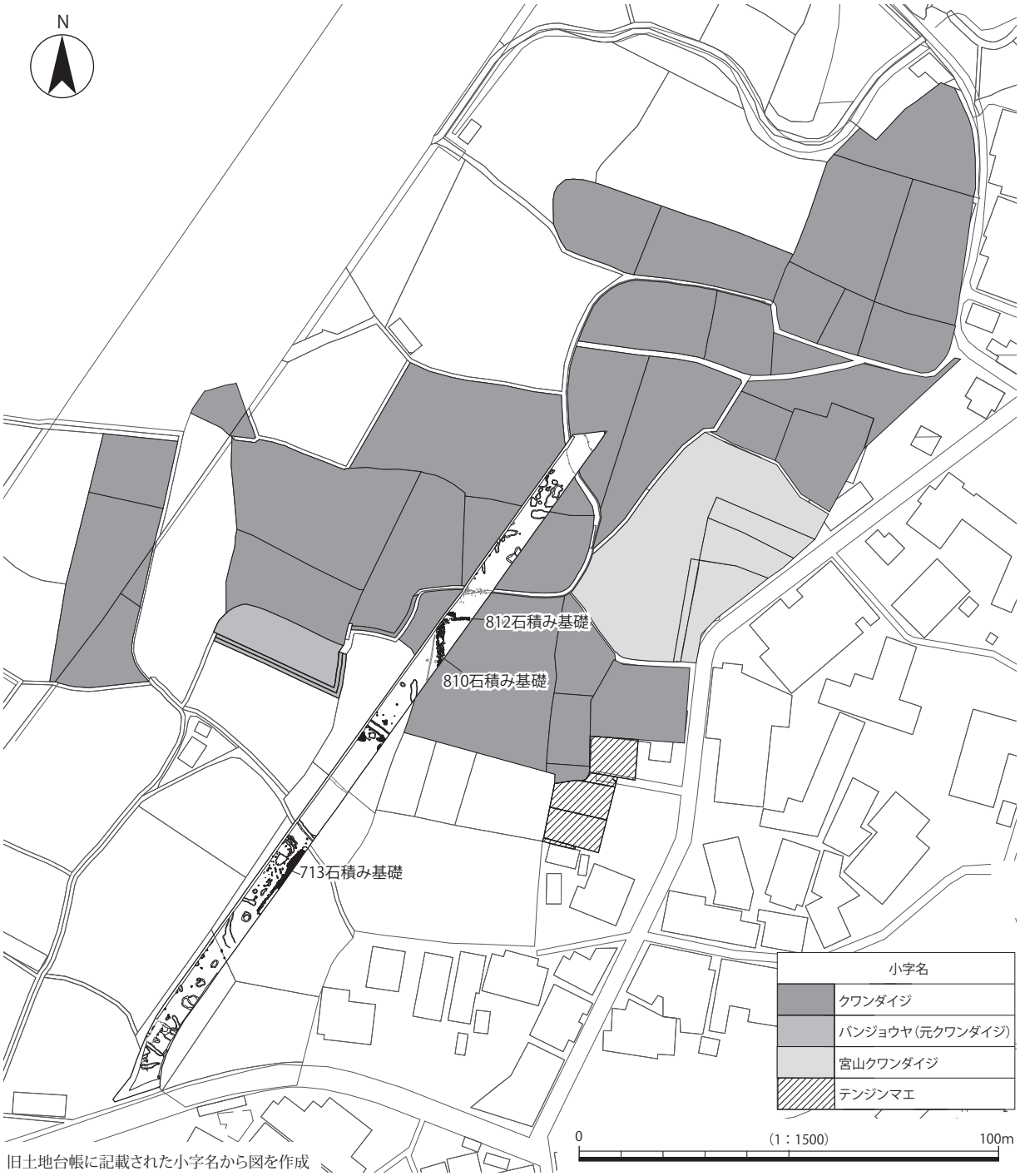


図 109　4 区周辺の小字地名

寛文十（1670）年六月　高向村検地帳より

一同　上田壱畝弐拾四歩　分米弐斗七升　同　人
一同　上田六畝拾八歩　分米九斗九升　同　人
一上田四畝歩　分米六斗　同　人
一西のかと　上田壱反弐畝三歩　分米壱石八斗壱升五合　喜左衛門
一上田四畝九歩　分米六斗四升五合　吉右衛門
一上田六畝弐拾壱歩　分米壱石五合　清右衛門
一上田弐畝歩　分米三斗　喜左衛門
一同　上田三畝拾五歩　分米五斗弐升五合　同　人
一東門の前　上田七畝弐拾四歩　分米壱石壱斗七升　同　人
一同　上田六畝拾弐歩　分米九斗六升　市　介
一東門の前　上田六畝三歩　分米九斗壱升五合　市　介
一西のかと　上田九畝拾五歩　分米壱石四斗　升五合　久次郎
一東門の前　上田三畝弐拾四歩　分米五斗七升　又右衛門
一西のかと　上田四畝弐拾壱歩　分米七斗五合　久左衛門
一同　上田六畝拾弐歩　分米九斗六升　同　人

一かんたいし　上田壱反三畝壱歩　分米弐石四升　孫兵衛
一かんたいし　中田弐畝歩　分米弐斗六升　孫兵衛
一同　中田壱畝三歩　分米壱斗四升三合　同　人
一はんしやうや　下田弐畝拾五歩　分米弐斗七升五合　同　人
一同　下田六畝歩　分米六斗六升　同　人
一同　上田三畝拾八歩　分米五斗四升　作左衛門
一同　上田壱畝六歩　分米壱斗八升　同　人
一はんしやうや　上田弐畝弐拾四歩　分米四斗弐升　作左衛門
一同　上田三畝九歩　分米四斗九升五合　同　人
一同　上田弐畝拾五歩　分米三斗七升五合　次郎兵衛
一同　上田三畝弐拾壱歩　分米五斗五升五合　同　人
一田じり　中田壱畝六歩　分米壱斗五升六合　喜左衛門
一同　中田五畝拾八歩　分米七斗弐升八合　同　人
一田じり　中田四畝六歩　分米五斗四升六合　喜左衛門
一同　中田五畝弐拾七歩　分米七斗六升七合　同　人

一屋敷拾八歩　藏屋敷
一弐畝歩　上ゑび　白山権現境内
一田壱畝弐拾壱歩　同権現付
一弐反三畝拾歩　上村　五社明神境内
一弐畝弐拾四歩　同御旅所芝野
一田四畝拾八歩　五社明神付
一壱反歩　下村　天神境内
一田畑壱反七畝弐拾壱歩　天神付
一四畝歩　地蔵屋敷
一畑四畝弐拾壱歩　同境内
一壱畝歩　観音堂屋敷
一田畑弐畝弐拾壱歩　同屋敷田地
一壱町七反三畝拾歩　永荒
一壱町五反七畝壱歩　池床六ケ所

右外書之宮地・同境内・御藏屋敷・永荒・池床、已上拾四ケ所雖為本高之内、当分御年貢御畝免有之所也、

寛文拾庚戌年六月日

甲斐庄喜右衛門内
小野寺加右衛門㊞
大西六郎左衛門㊞

『河内長野市史　第７巻　史料編４』所収　「高向村区有文書」に加筆

宝暦十四（1764）年五月　高向村明細帳より

字上久保
一井水筋　水入口ゟ井口迄三拾町、右同御領分日野村ゟ上り申候、
右井路筋ニ掛ケ樋弐ケ所御座候、右同断、
字向
一井水筋　水口ゟ井口迄拾四町、高向村領ゟ上り申候、右同断、
右井路筋掛ケ樋弐ケ所御座候、右同断、
一惣家数大小百七拾弐軒
人数七百九拾六人　男三百九拾七人　女三百九拾九人
出家　五人
大工　四人　牛　五拾弐疋
木挽　壱人　馬　壱疋
一氏神五社明神　高向村壱ケ村氏子
御神躰者
天満大自在天神
八幡大菩薩
牛頭天王　相殿

稲荷大明神
天照皇大神宮
右境内　東西四拾間　南北弐拾間　真言宗寺号　三井寺　無住
一白山権現
右境内　東西拾五間　南北弐拾八間　真言宗寺号　南恩寺（恩）　看防
一天満大自在天神
右境内　東西三拾間　南北三拾五間　真言宗寺号　菅多寺　看防
一寺六ケ寺
内
真言宗　惣持寺境内　東西拾五間　南北五拾間　看防
同　通法寺境内　東西三拾三間　南北六拾間　住持妙瑞
大念仏宗　地蔵寺境内　東西拾五間　南北三拾弐間　看防

『河内長野市史　第７巻　史料編４』所収　「山中源一郎家文書」に加筆

天保十四（1843）年九月　高向村村鏡明細帳より

右社往古ゟ有来り、勧請年暦知レ不申候、氏子之内ゟ年老之者撰取仕、神主役勤来り候、
一除地　甲斐庄喜右衛門様御領内ニ有之候、
白山大権現　社弐尺五寸　三尺五寸　柿葺
境内東西拾五間　南北弐拾八間
右境内ニ弁財天社壱尺五寸　板葺
阿弥陀堂　桁行二間半　梁行二間半　藁葺
右社往古ゟ有来り、勧請年暦知レ不申候、祢宜神主無御座候、宮座拾三人支配仕来り候、
一除地　甲斐庄喜右衛門様御領分有之、
天満大自在天神　社三尺　四尺五寸　柿葺
境内東西三拾間　南北三十五間　真言宗寺号　菅太寺　梁行三間　桁行六間
一除地観音堂　梁行弐間　桁行五間　瓦葺

右社往古ゟ有来り、勧請年暦知レ不申、祢宜神主無御座候、宮座三拾人支配仕来り候、
一除地大念仏宗　河州錦部郡古野村極楽寺末寺　八幡寺看坊
甲斐庄喜右衛門様領内ニ有之、
境内東西拾五間　南北三十弐間　寺梁行三間半　桁行四間　藁葺
右寺往古ゟ有来り、開基年暦知レ不申候、
但シ、三好忠太郎殿　甲斐庄喜右衛門様　両百姓持合之寺ニ御座候、
一除地真言宗　惣地寺看坊天仲
但シ、往古者同国錦部郡観心寺不動院末寺ト御座候得共、当時ニ而者右極楽寺末寺御座候、
境内東西拾五間　南北五拾間　寺梁行三間　桁行六間　藁葺
右寺往古ゟ有来り、開基年暦知不申候、三好忠太郎殿・甲斐庄喜右衛門殿百姓持合之寺ニ而御座候、
右境内甲斐庄喜右衛門様石塔有之候ニ付、年々御仏供料トして米壱石五斗被為下置候、

『河内長野市史　第７巻　史料編４』所収　「高向村区有文書」に加筆

図 110　近世史料に記された寺・神社名

しようや」の名も記される。これは旧土地台帳に記載される「バンジョウヤ」を示し、水田の箇所の小字名を記していると考えられる。しかし「かんたいし」の小字名から近隣に「かんだいじ」という寺院が存在した可能性を指摘できる。

『明細帳』（図 110 下段右）には村内にある寺院や神社の名称や境内の規模が記され、加えて『村鏡明細帳』（図 110 下段左）には建物の規模も記されている。『明細帳』には「天満大自在天神　真言宗寺号管多寺」、『村鏡明細帳』には「天満大自在天神　真言宗寺号菅太寺」とある。両史料では寺号が異なるものの読みはいずれも「かんだじ」と読め、天神社と管多寺（菅太寺）が同境内にあったことが判る。両史料に天神社と管多寺（菅太寺）が高向村のどこにあるのかは記されていないが、小字名の「テンジンマエ」、「クアンダイジ」と『検地帳』の「天神境内」に符合することから、調査地東方の絵図に描かれた寺社は天神社と管多寺（菅太寺）であると判断できる。この寺が真言宗であることは、今回の調査で検出した 814 土釜埋納遺構が真言密教の修法に基づいたものであることと一致する。

いずれの史料も境内は東西 30 間（54.6 m）、南北 35 間（63.7 m）とされる。建物規模は、菅太寺が梁行 3 間（5.4 m）、桁行 6 間（10.8 m）、神社の社が 3 尺（0.9 m））、4 尺 5 寸（1.26 m）とされる。この史料に記された境内の規模は、図 109 の小字名「宮山クワンダイジ」の範囲とほぼ一致することから、18 世紀後半には調査で検出した石積み基礎の箇所はすでに廃絶し、耕作地であったと考えられる。

さらに石積み基礎の構築年代である 14 世紀末から 15 世紀初頭にこの管多寺（菅太寺）が存在した証拠を探すべく調査を行った。「河内国高向荘絵図」（図 106）の中央右上に、「田地　神田寺」とあり、読みはかんだじと読めることから、漢字は異なるが管多寺（菅太寺）と同じ寺を指している可能性が高いが、この絵図の神田寺の位置は調査地とは一致しない。このためこれは神田寺の所有する田地を表していると考えられるが、少なくともこの絵図が作成された 16 世紀中頃に神田寺が存在したと推定できる。

（5）まとめ

高向庄は、平安時代に立荘され、その後中世後半期まで断続的な記録が残り、中世の荘園絵図や、中世の景観をある程度踏襲したと考えられる近世の絵図が残っており、比較的史料に恵まれた荘園遺跡といえる。また地域内には、絵図に表現された村堂、社があり、これらには中世に遡る彫刻や絵画が伝わっている。また、絵図に書き込まれた道、水路を踏襲したものも残っており、今回の調査でも建物跡、耕作痕が検出され多くの中世の遺物が出土した。特に 4 区で検出した石積み基礎は、寺院の存在を示すものであり、小字名や近世文書からもその存在を確認することができた。

このようなことから高向庄には、耕作地や民家の他に多くの寺院や神社が存在したことが明らかであり、これらのうち多くのものは近世あるいは現在まで残っている。

今回の調査で検出できた寺院関連遺構は中世に存在し、現存しない寺院の事例である。

【引用・参考文献】

河内長野市 1980『河内長野市史』第 7 巻　史料編四

東京大学史料編纂所 2002『日本荘園絵図聚影 五下　西日本 二・補遺』東京大学出版会

鳥羽正剛 2000「第 2 節　天野山金剛寺遺跡検出「土釜埋納遺構」における修法復元論
－『土公供作法次第』および口伝からのアプローチ」『河内長野市遺跡調査報告ＸＸⅨ
天野山金剛寺遺跡　緊急地域雇用促進事業に伴う天野山金剛寺出土品整理事業報告書』

鳥羽正剛 2001『天野山金剛寺遺跡（その２）』河内長野市教育委員会・河内長野市遺跡調査会

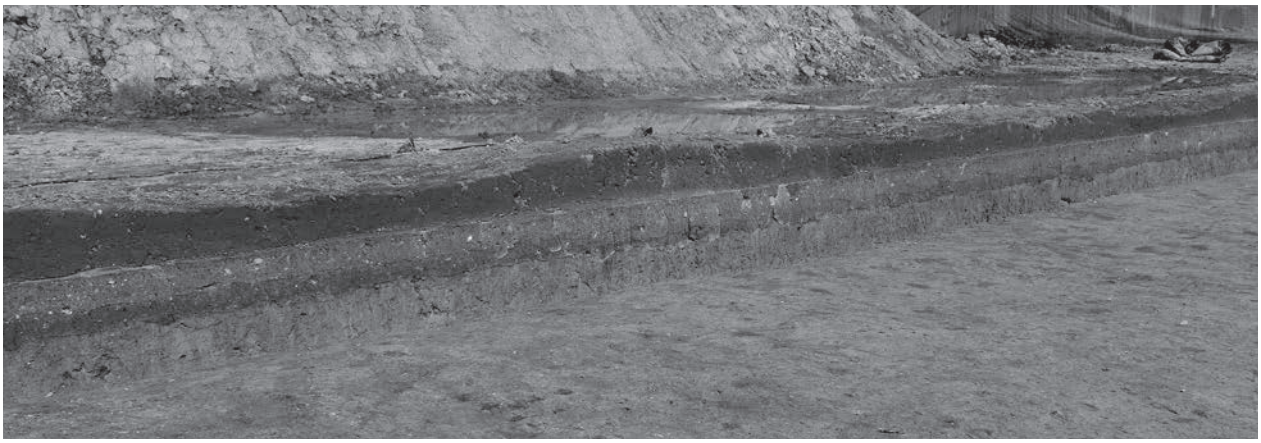
中井　均 2022『戦国の城と石垣』高志書院

写 真 図 版

1．調査地遠景（南から）

2．調査地から金剛山を望む（西から）

図版２

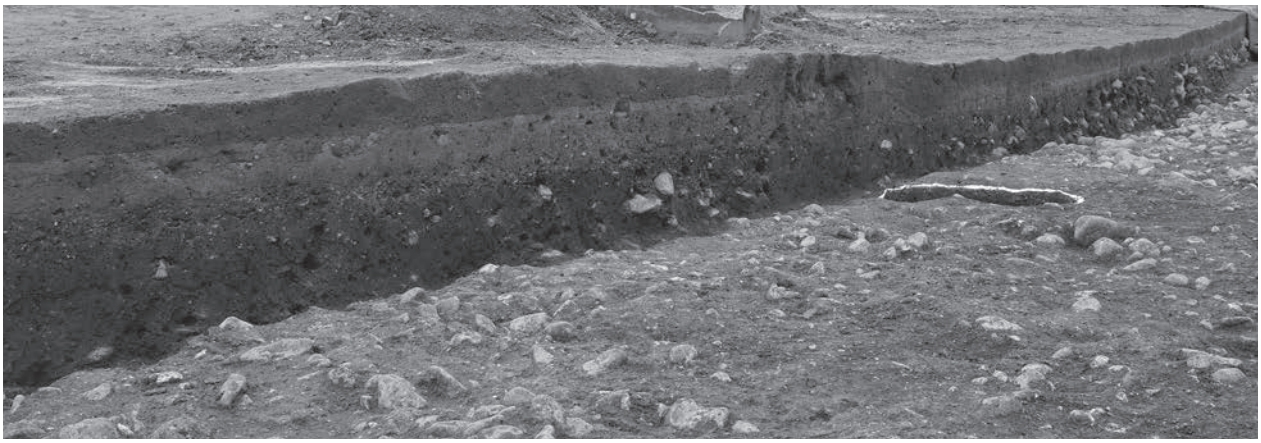


１．１区　北壁（Y ＝－ 41,385 ～－ 41,400 付近）断面（南西から）

２．１区　北壁（Y ＝－ 41,305 ～－ 41,320 付近）断面（南西から）

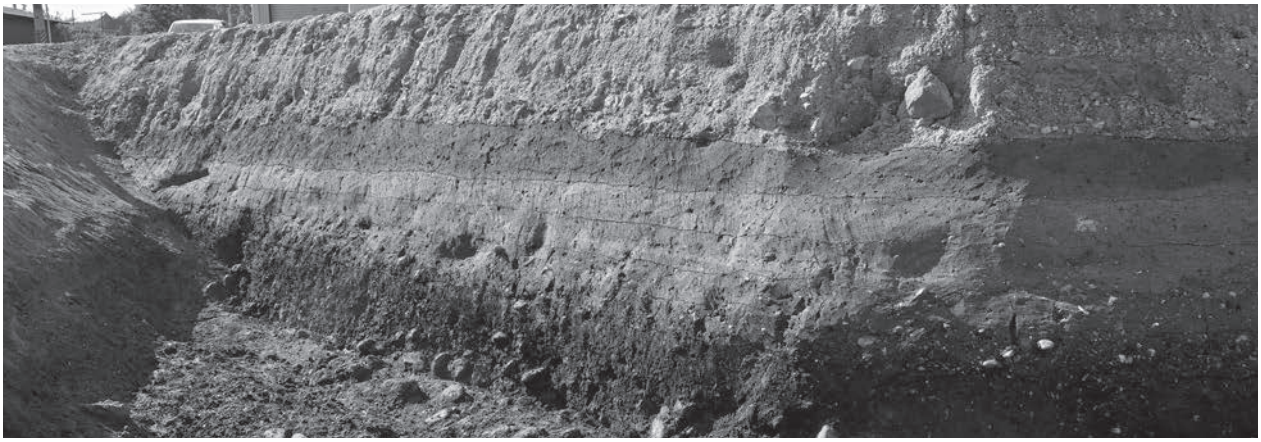
３．２区　西壁（X ＝－ 173,090 ～－ 173,105 付近）断面（南西から）

４．２区　西壁（X ＝－ 173,065 ～－ 173,075 付近）断面（南西から）



１．３－１区　西壁（X ＝－ 173,000 ～－ 173,010 付近）断面（南東から）

２．３－２区　西壁（X ＝－ 172,795 ～－ 172,810 付近）断面（南東から）



３．４区　西壁（X ＝－ 172,780 付近）断面（北東から）

４．４区　西壁（X ＝－ 172,670 ～－ 172,675 付近）断面（南東から）

図版４

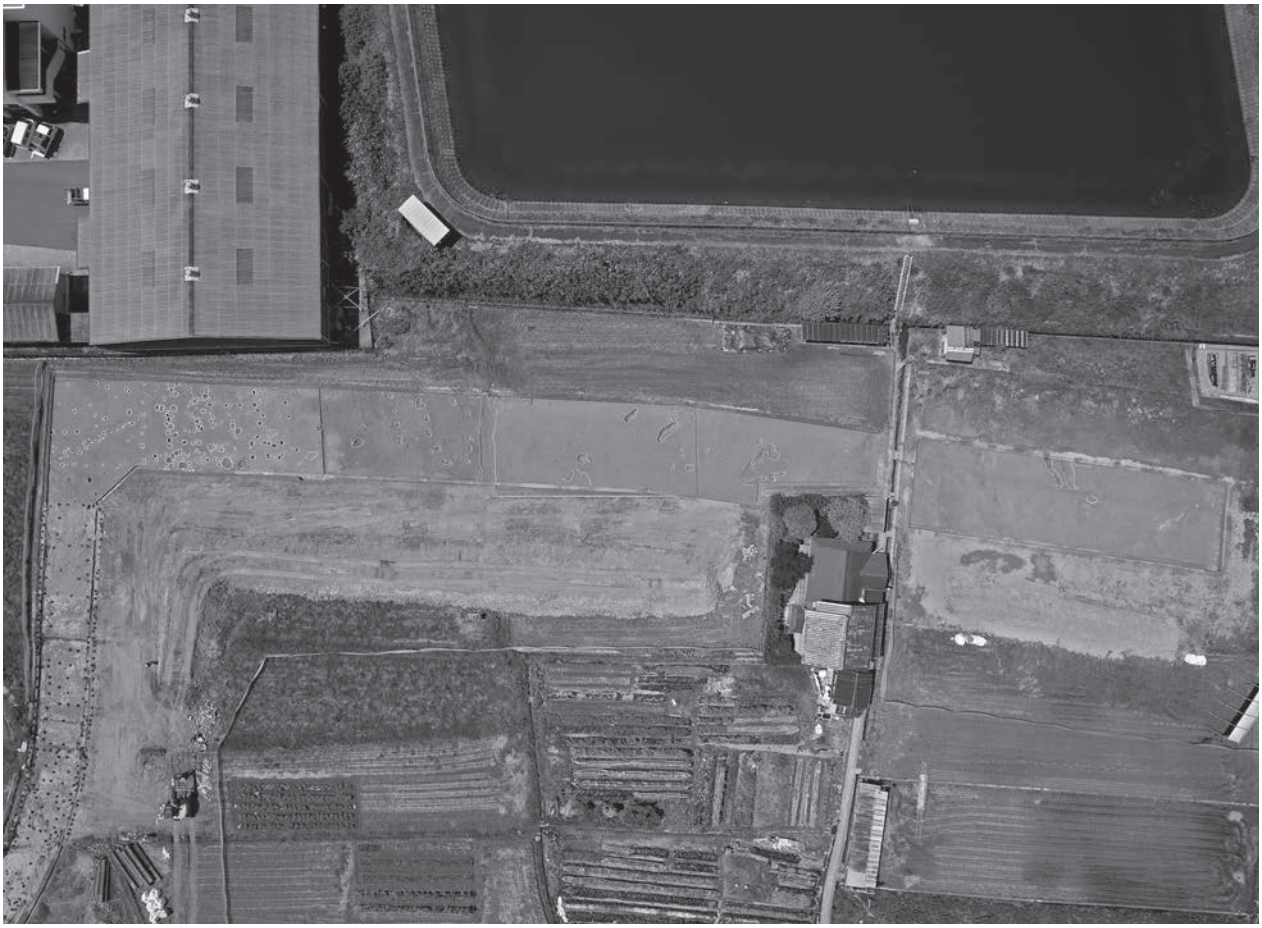
１．５区　北壁（X ＝－ 172,975 ～－ 172,985 付近）断面（南東から）

２．５区　北壁（X ＝－ 172,920 ～－ 172,930 付近）断面（南西から）

３．６区　北壁（X ＝－ 172860 付近）断面（南西から）

４．６区　東壁（X ＝－ 172,780 ～－ 172,790 付近）断面（南西から）

１．１区　全景（北東から）

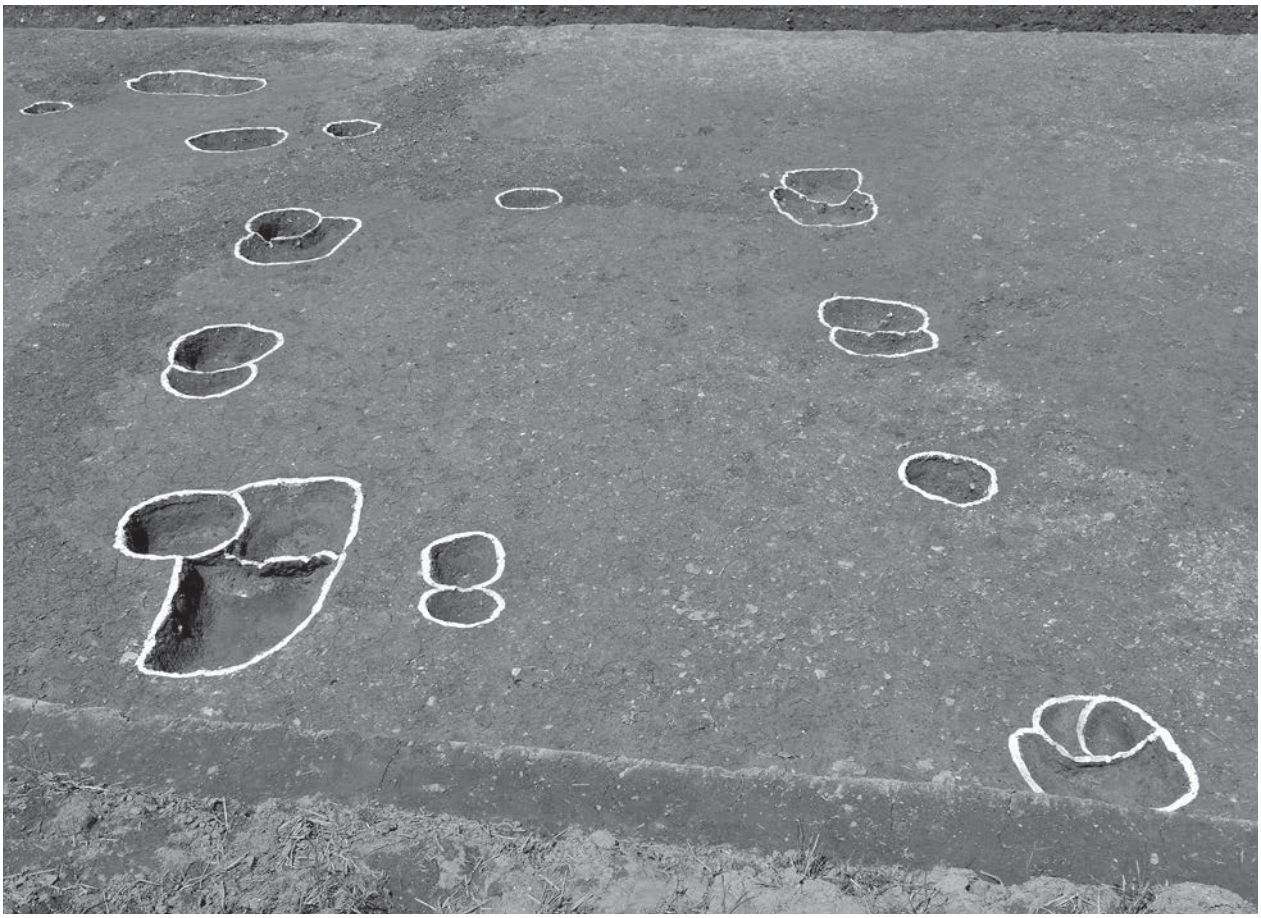


２．１区　全景（下が北）

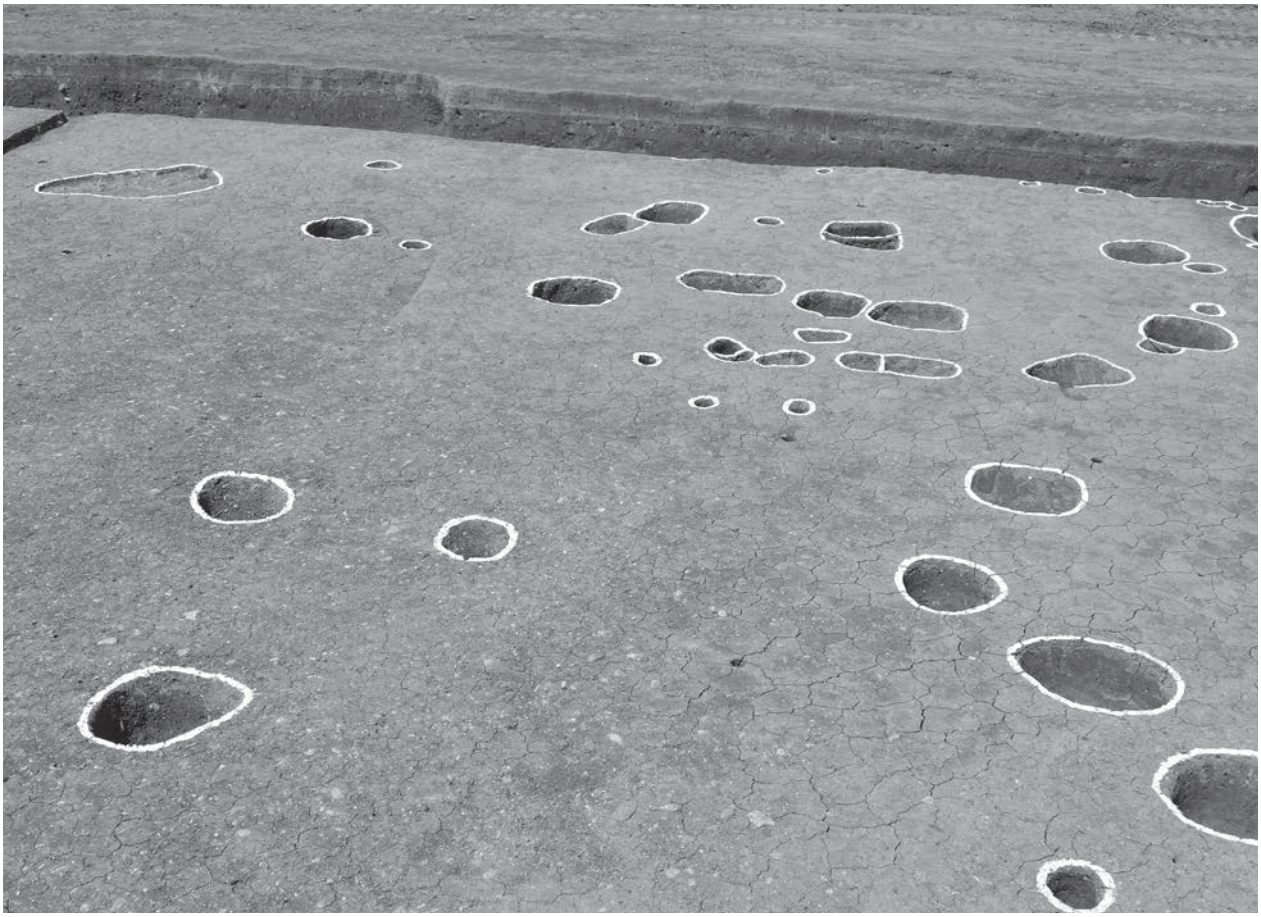
図版６

１．２区　全景（南西から）

２．２区　全景（左が北）



１．１区　掘立柱建物１　全景（南から）



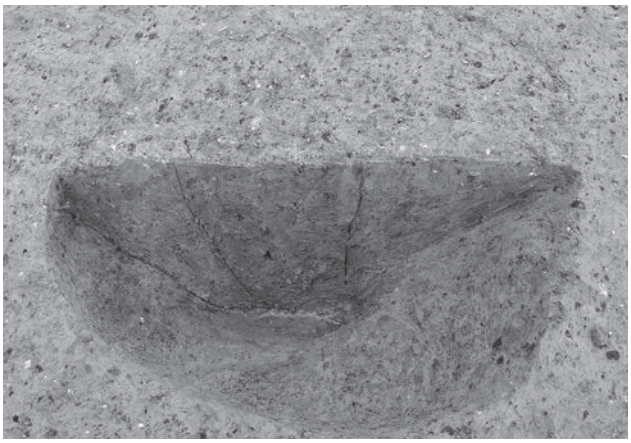
２．１区　掘立柱建物２　全景（南から）

図版８

１．１区　掘立柱建物３　全景（南から）

２．１区　掘立柱建物１　38 柱穴　断面（西から）

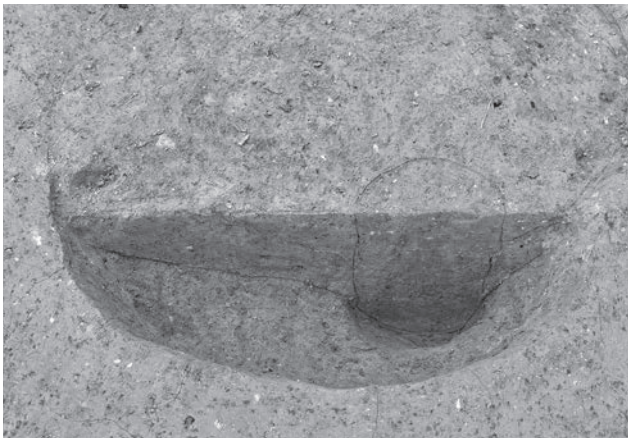
３．１区　掘立柱建物２　82 柱穴　断面（西から）



４．１区　掘立柱建物２　86 柱穴　断面（東から）

５．１区　掘立柱建物３　88 柱穴　断面（西から）

１．１区　掘立柱建物５　全景（南から）



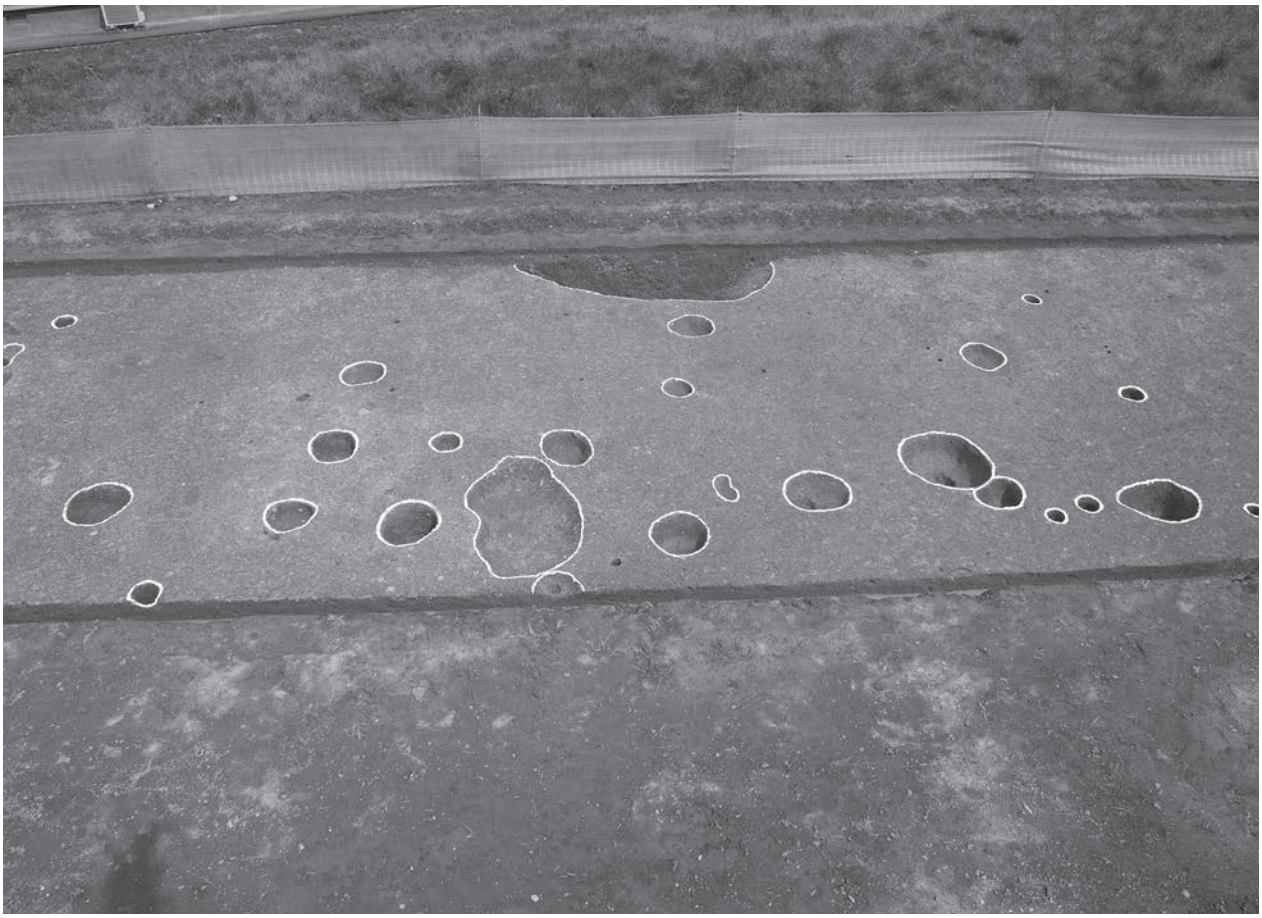
２．１区　掘立柱建物５　124 柱穴　断面（北西から）

３．１区　掘立柱建物５　127 柱穴　断面（北西から）

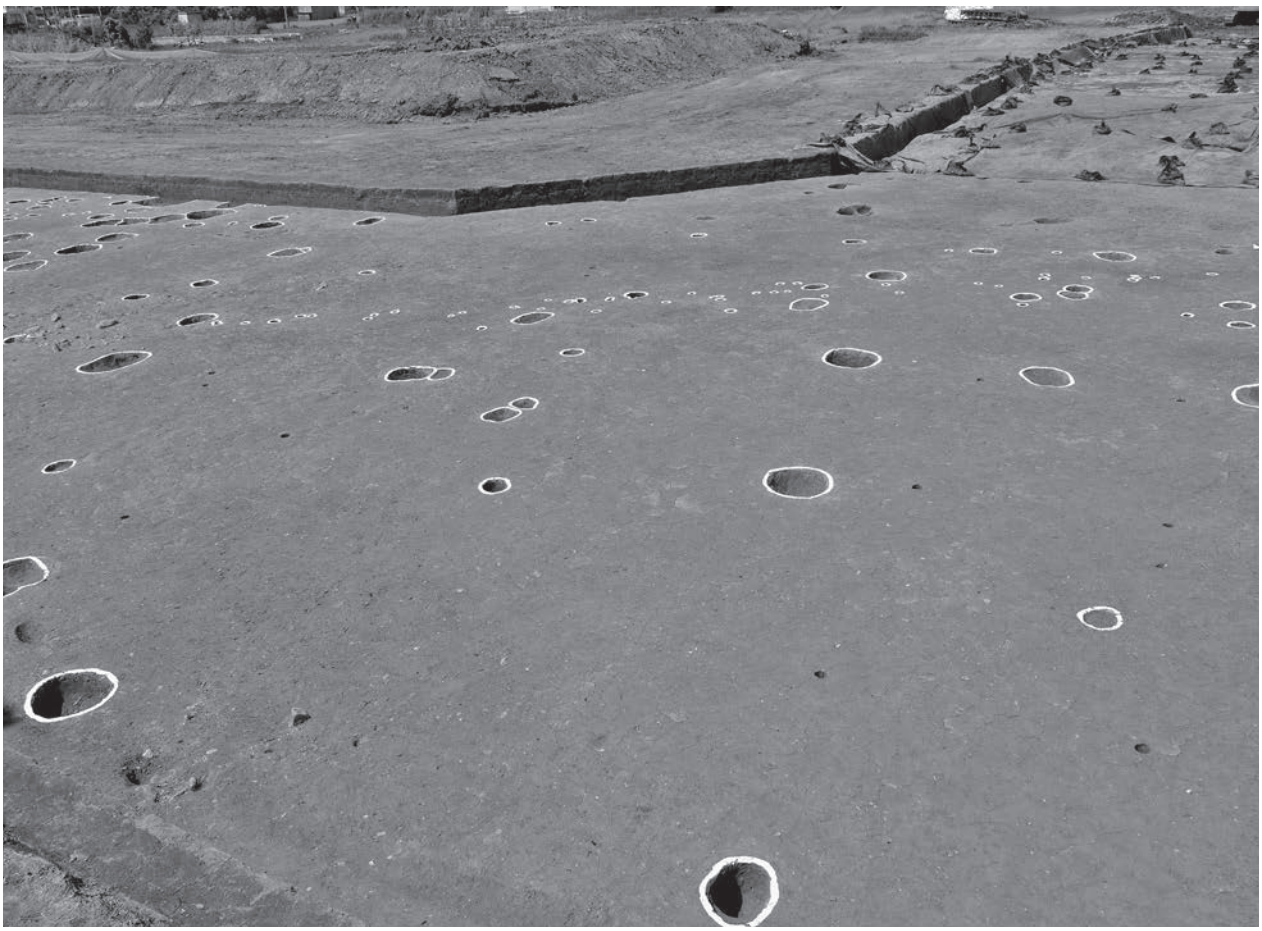
４．１区　掘立柱建物５　128 柱穴　断面（北東から）

５．１区　掘立柱建物５　129 柱穴　断面（南東から）

図版 10



１．２区　掘立柱建物６～８　全景（西から）



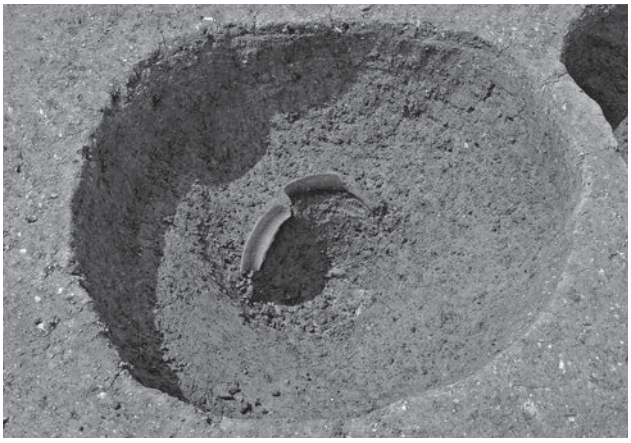
２．１区　柱穴列１～３　全景（南西から）

1．1区　173 ピット　遺物出土状況（北から）

2．1区　202 ピット　遺物出土状況（南西から）

3．1区　215 ピット　遺物出土状況（北から）

4．2区　309 ピット　断面（東から）



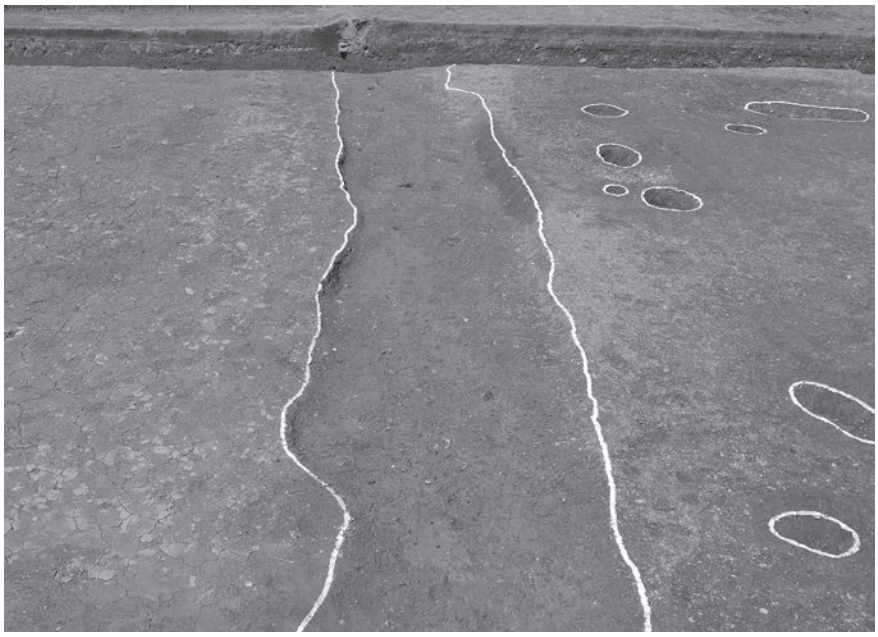
5．2区　309 ピット　遺物出土状況（北東から）

6．1区　25 土坑　断面（南西から）

7．2区　322 土坑　遺物出土状況（南から）

8．2区　348 土坑　遺物出土状況（南から）

図版 12



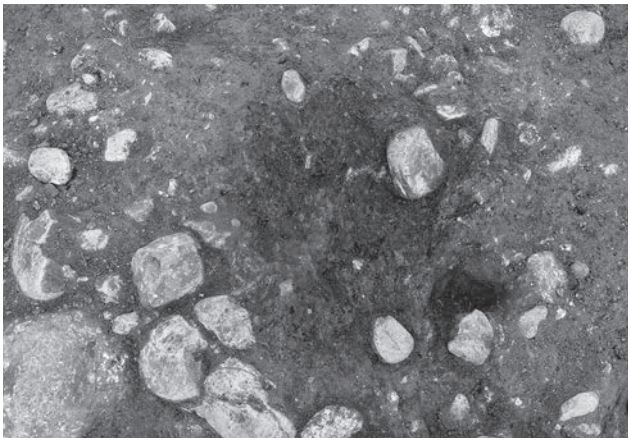
1．1区　34 溝　全景（南から）

2．2区　443・448 ～ 451 溝
全景（南東から）

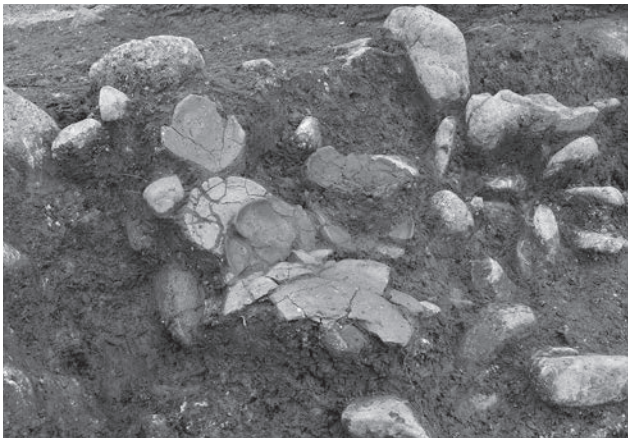
3．1区　杭列 1　全景（南西から）

1．3－1区　全景（南西から）

2．3－1区　538 ピット　遺物出土状況（北西から）



3．3－1区　548 炉　炭検出状況（南から）



4．3－1区　559 土坑　遺物出土状況（南西から）

5．3－1区　547 溝　断面（南西から）

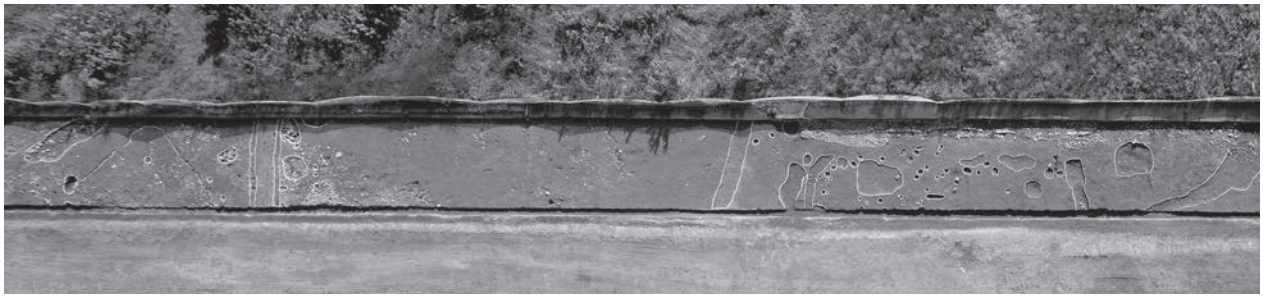
図版 14

１．３－２区　全景（南から）

２．３－２区北端　全景（南から）

1．4区　全景（南から）

2．4区北部　全景（左が北）



3．4区中央部　全景（左が北）

4．4区南部　全景（左が北）

図版 16

1．4区　713 石積み基礎　検出状況（北東から）

2．4区　713 石積み基礎　中位検出状況（北東から）

1．4区　713 石積み基礎　A ライン断面（南西から）

2．4区　713 石積み基礎　B ライン断面（南西から）

3．4区　713 石積み基礎　C ライン断面（南西から）

4．4区　713 石積み基礎　D ライン断面（南西から）

5．4区　713 石積み基礎　石積み補強状況（南西から）

6．4区　713 石積み基礎　遺物出土状況（南から）

7．4区　713 石積み基礎　掘方遺物出土状況（南東から）

8．4区　713 石積み基礎　掘方遺物出土状況（南西から）

図版 18

1．4区　713 石積み基礎　石積み全景（北から）

2．4区　713 石積み基礎　完掘状況及び東壁断面（北から）

1．4区　713 石積み基礎　石積み北端（北西から）

2．4区　713 石積み基礎　石積み北部（北西から）

3．4区　713 石積み基礎　石積み中部（北西から）

4．4区　713 石積み基礎　石積み北部背面（南西から）

図版 20

1．4区　810・812 石積み基礎　検出状況（北から）

2．4区　810 石積み基礎　石積み検出状況（北から）

3．4区　812 石積み基礎　石積み検出状況（西から）

1．4区　810 石積み基礎　A ライン断面（南から）

2．4区　810 石積み基礎　B ライン断面（南から）

3．4区　810 石積み基礎　C ライン断面（南西から）

4．4区　812 石積み基礎　A ライン断面（東から）

5．4区　812 石積み基礎　B ライン断面（東から）

6．4区　810 石積み基礎　掘方遺物出土状況（西から）

7．4区　812 石積み基礎　掘方遺物出土状況（北から）

8．4区　812 石積み基礎　掘方遺物出土状況（北から）

図版 22

1．4区　810・812 石積み基礎　石積み全景（西から）

2．4区　810・812 石積み基礎　石積み全景（北西から）

1．4区　810 石積み基礎
裏込め内石積み・石列　（南から）

2．4区　810 石積み基礎
石積み前面　（北西から）

3．4区　810 石積み基礎　石積み背面（東から）

4．4区　812 石積み基礎　石積み前面（北東から）

図版 24

1．4区　814 土釜埋納遺構
断面（北から）

2．4区　814 土釜埋納遺構
上部瓦質土器皿　出土状況
（北から）

3．4区　814 土釜埋納遺構
下部土師質土器皿　出土状況
（北から）

1．4区　774 土坑（北西から）

2．4区　774・775・778・787・795 土坑（西から）

3．4区　714 溝（南から）

図版 26

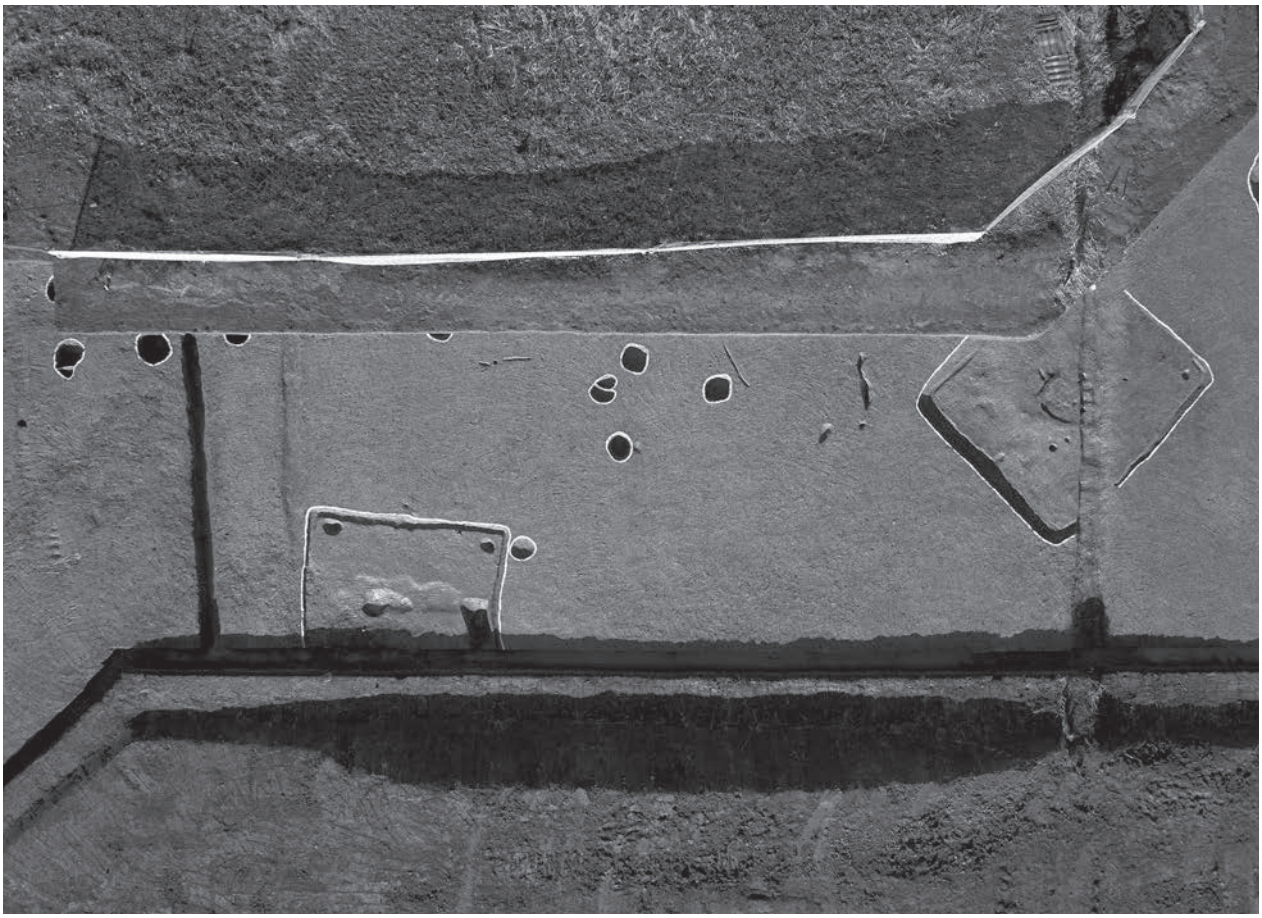
１．４区　南部土坑・溝群（北西から）

２．４区　北部土坑群（西から）

1．5区　全景（南西から）

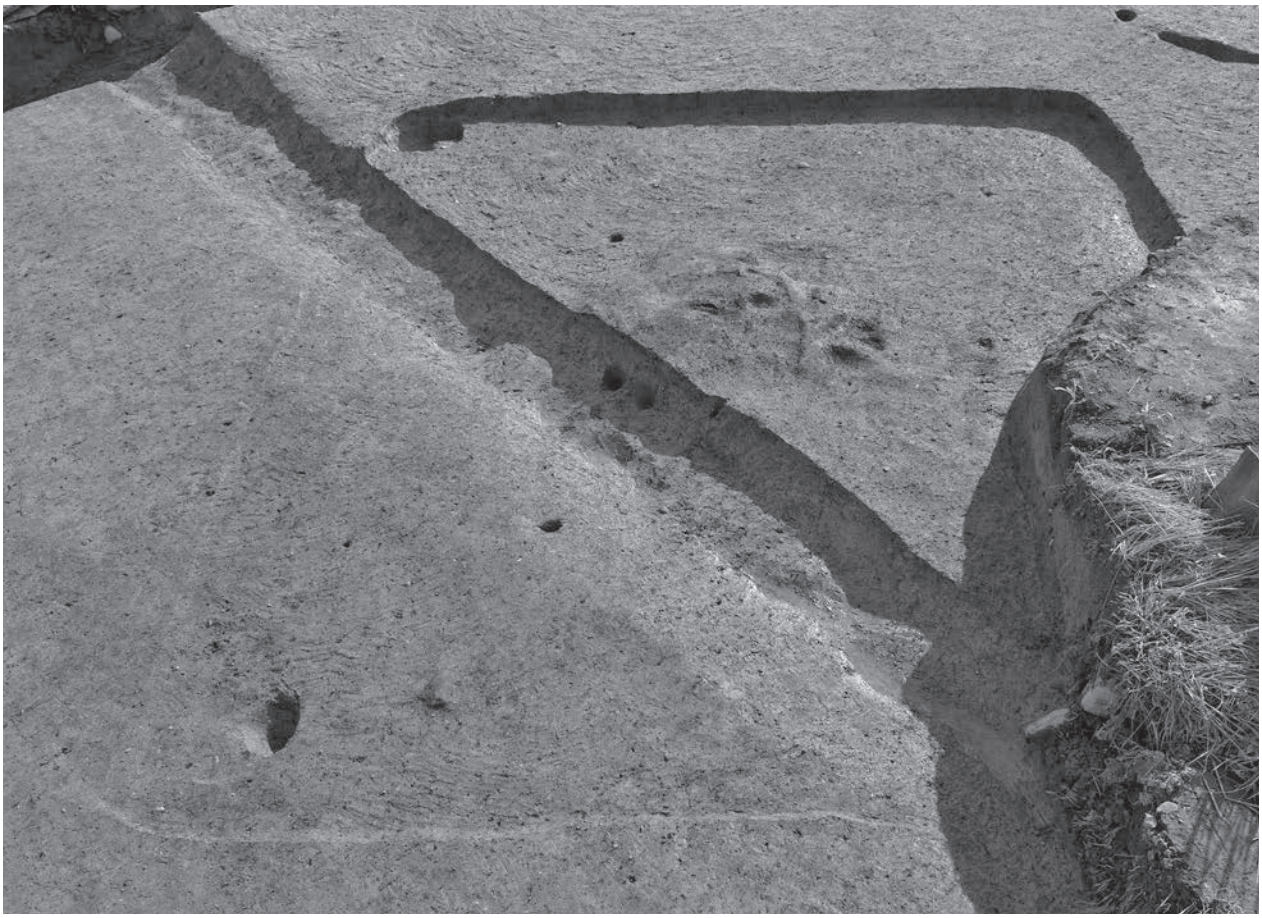
2．5区　全景（北東から）

図版 28



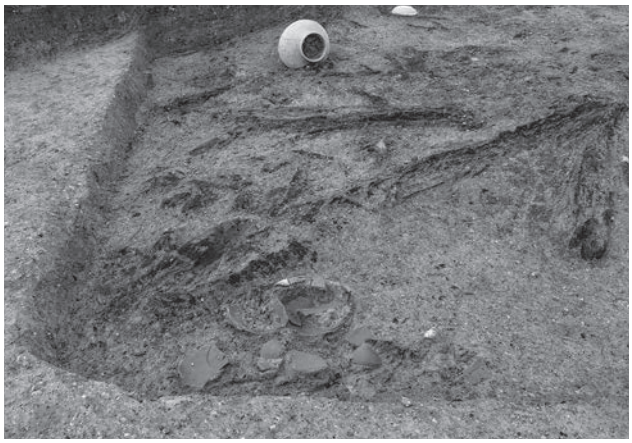
１．５区　竪穴建物１・２、掘立柱建物 10　全景（右が北）

２．５区　竪穴建物１（南東から）

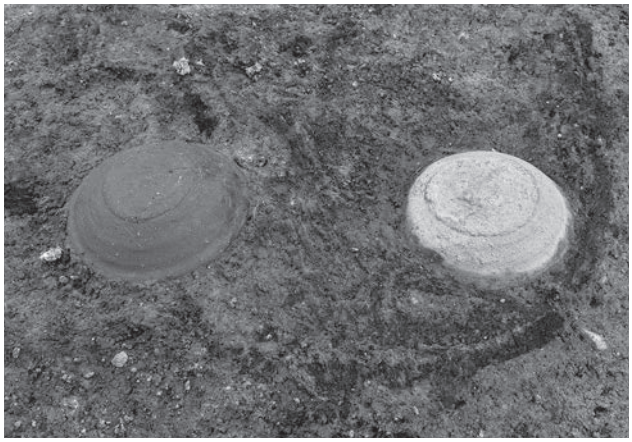


1．5区　竪穴建物２（北から）

2．5区　竪穴建物２　989 炉（北から）



3．5区　竪穴建物２　炭化材・土器出土状況（南から）



4．5区　竪穴建物２　土器出土状況（西から）

5．5区　竪穴建物２周壁溝　土器出土状況（南から）

図版 30

１．６区　全景（南東から）

２．６区北半　全景（南西から）

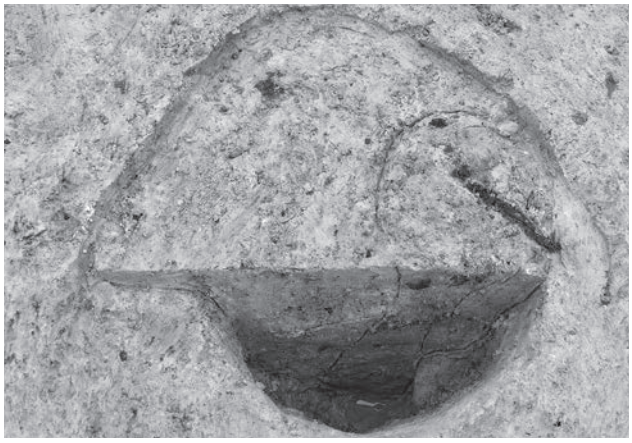
1．6区南半　全景（南東から）

2．6区北端　全景（南西から）

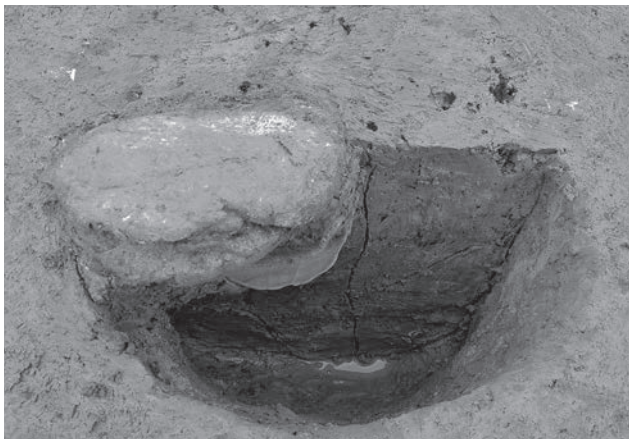
図版 32

1．6区　掘立柱建物 11　全景（東から）

2．掘立柱建物 11　1033 柱穴　断面（西から）



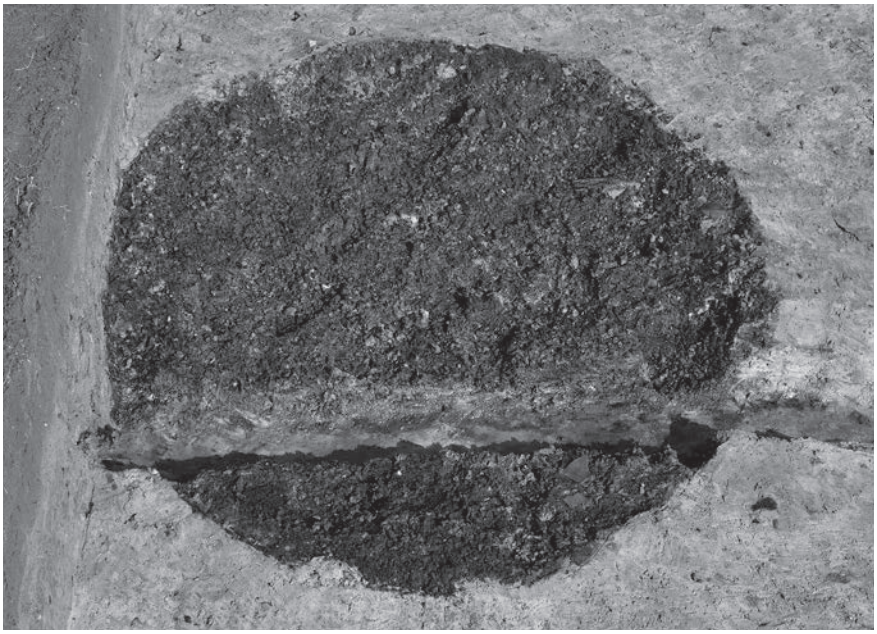
3．掘立柱建物 11　1037 柱穴　断面（東から）



4．掘立柱建物 11　1038 柱穴　断面（東から）

5．掘立柱建物 11　1038 柱穴　遺物出土状況（東から）

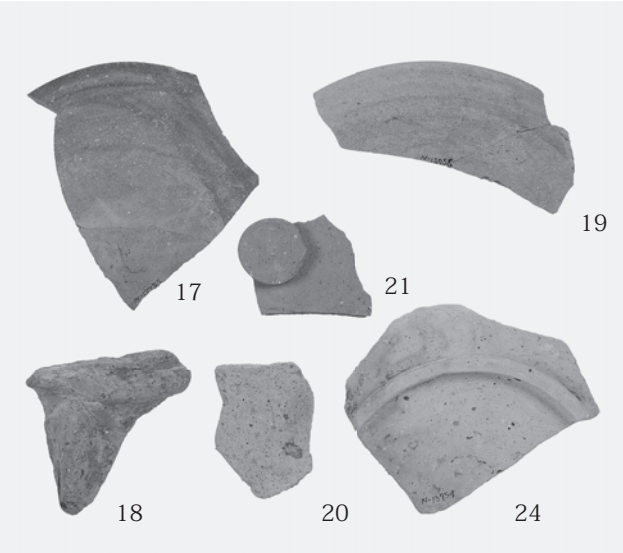
1．6区　1020 土坑　断面
（南西から）

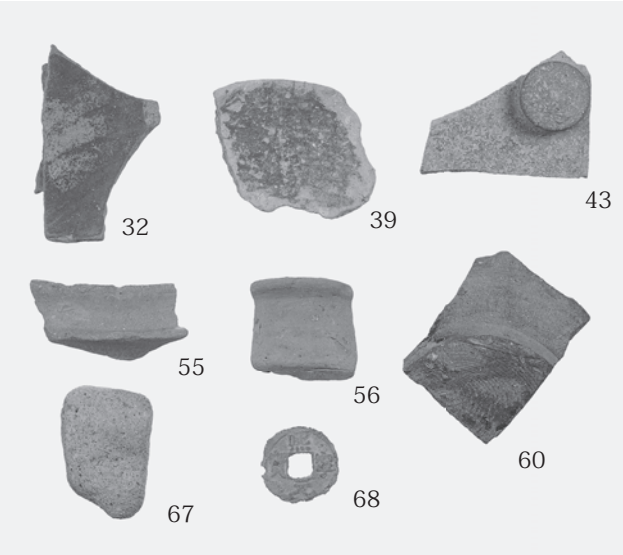


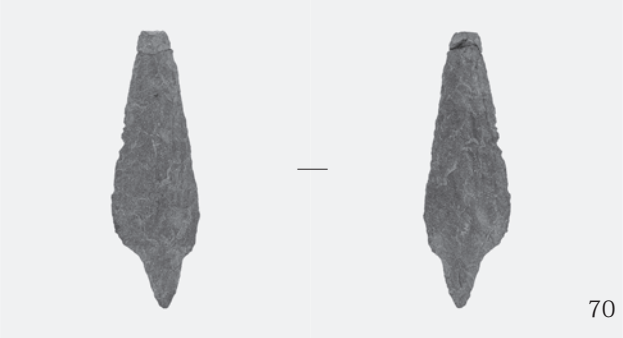
2．6区　1020 土坑　炭検出状況
（南西から）

3．6区　1069 ～ 1071・1073・
1074・1076 ～ 1080 溝　全景
（南東から）

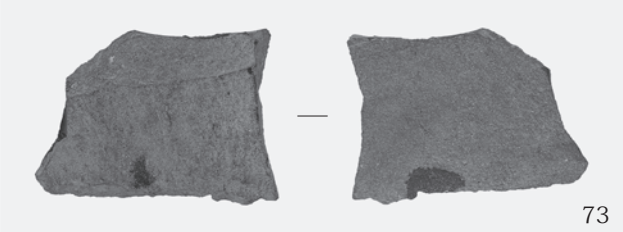
図版 34

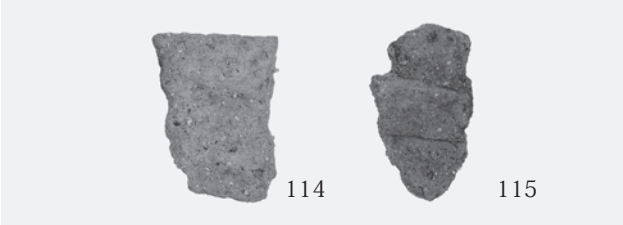


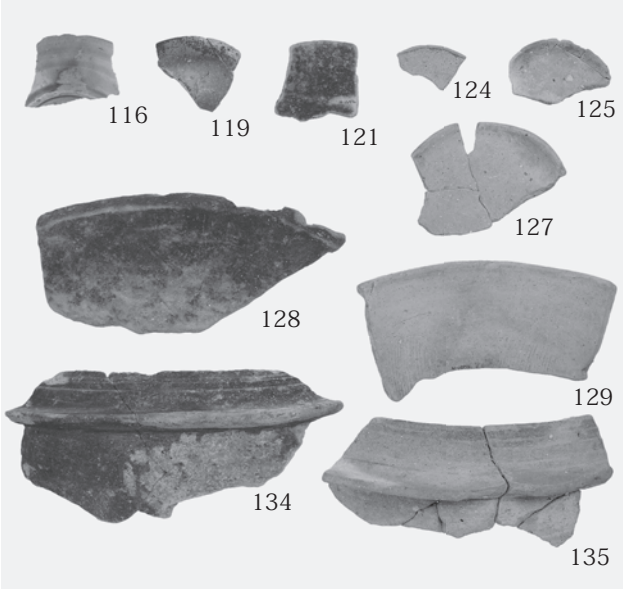


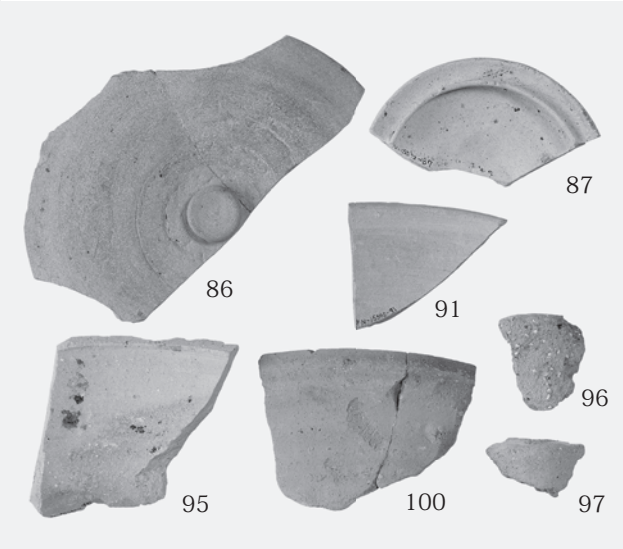

70


72


73


114
115

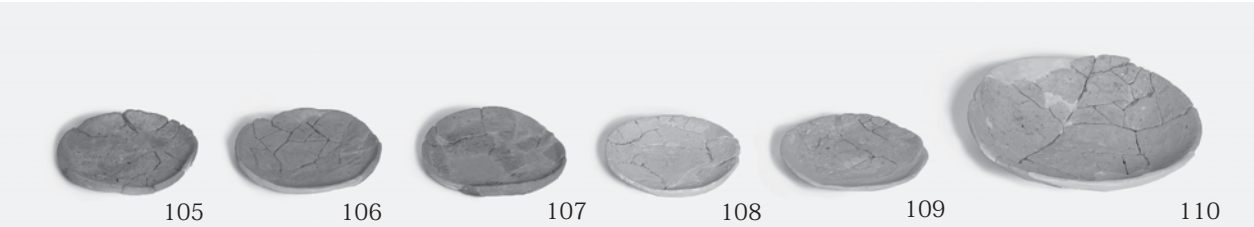

116
119
121
124
125
127
128
129
134
135


86
87
91
96
95
100
97


136


104

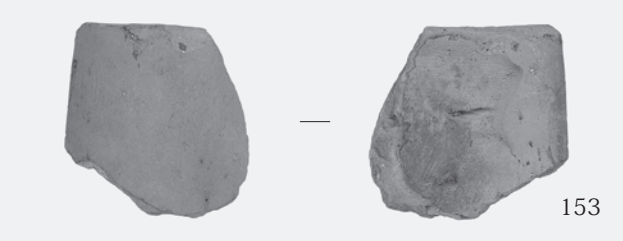

138

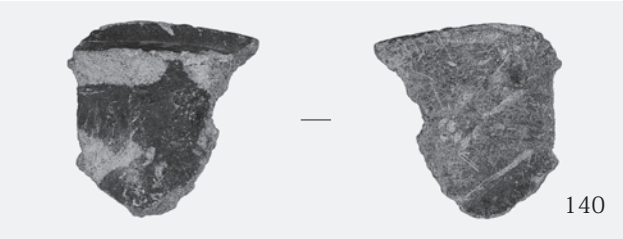

105
106
107
108
109
110

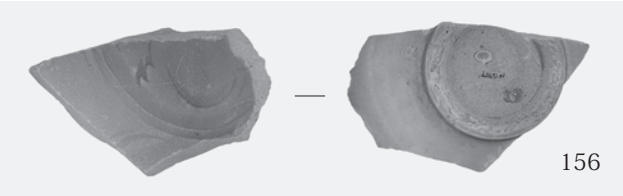
図版 36


147
139

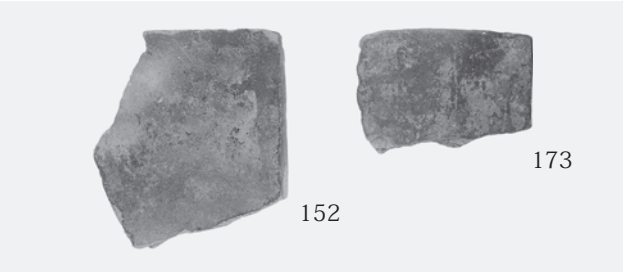

150


153

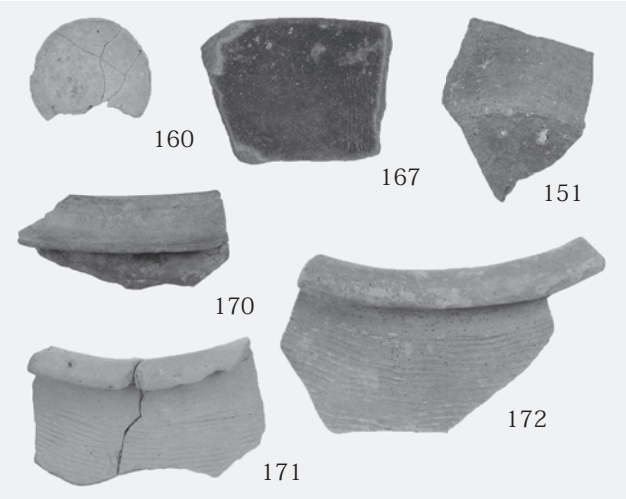

140


156

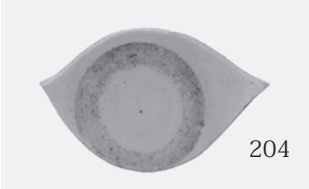

141
142


173
152

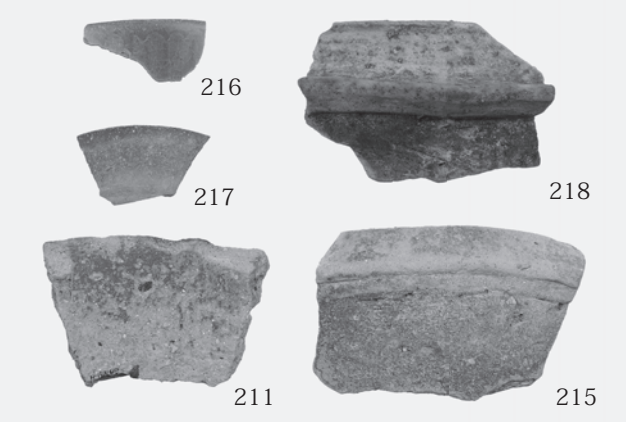

200
189
184
188
185
187
186

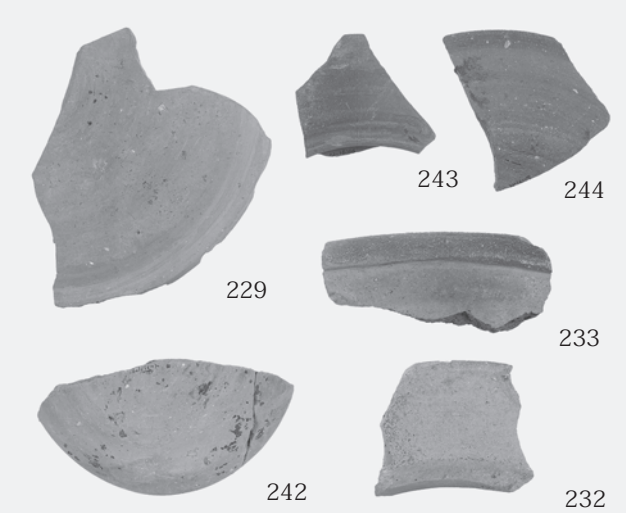

160
167
151
170
172
171

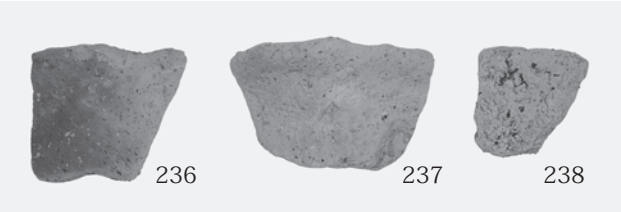

175


204

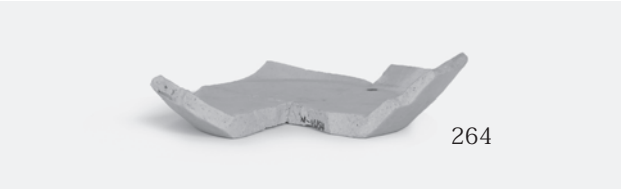

180

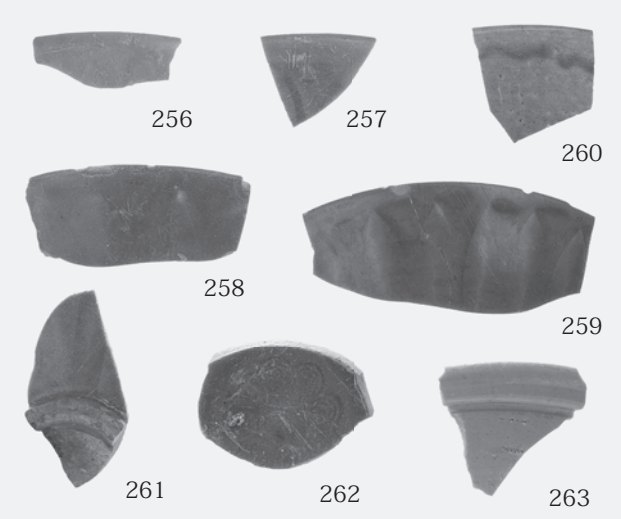

216
217
218
211
215

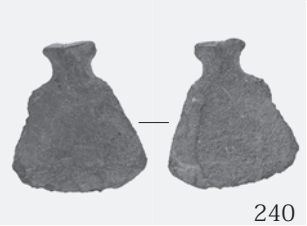

243
244
229
233
242
232

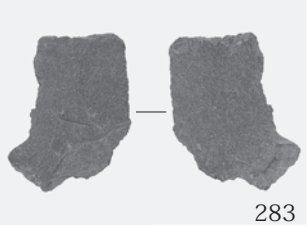

236
237
238

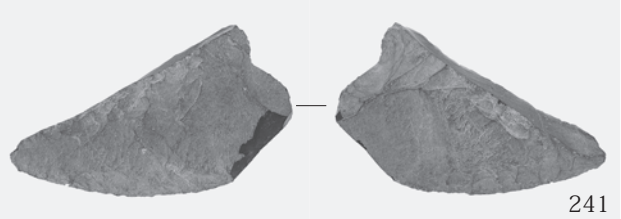

251
252

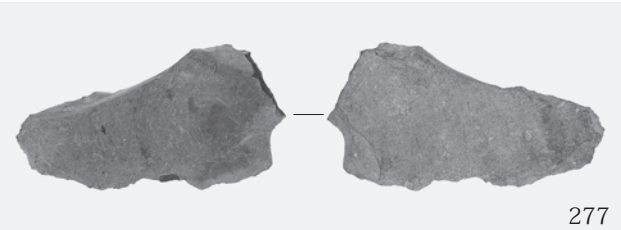

264


256
257
260
258
259
261
262
263


240


283


241


277

報　告　書　抄　録

ふりがな	たこういせき
書名	高向遺跡
副書名	河内長野市高向・上原土地区画整理事業に伴う発掘調査報告書
シリーズ名	河内長野市文化財調査報告書
シリーズ番号	第 67 輯
シリーズ名	河内長野市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	42
シリーズ名	公益財団法人 大阪府文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第 337 集
編著者名	太田宏明、福佐美智子（編）
編集機関	公益財団法人　大阪府文化財センター
所在地	〒 590 － 0105　大阪府堺市南区竹城台３丁 21 番４号　TEL072 － 299 － 8791
発行年月日	2025 年（令和７年）３月 31 日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード		緯度・経度	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号				
高向遺跡（たこういせき）	大阪府河内長野市高向（おおさかふかわちながのしたこう）	27216	23	北緯 34° 26′ 26″ 東経 135° 33′ 02″	2022.03.01 ～ 2024.05.02	7272㎡	土地区画整理事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
高向遺跡		縄文時代	ピット	土器	
	集落	古代	掘立柱建物、竪穴建物、溝、土坑、ピット	須恵器、土師器	7 世紀中葉の竪穴建物
	集落	中世	掘立柱建物、土坑、ピット	瓦器、瓦質土器、土師質土器	
	社寺	中世	石積み基礎、土釜埋納遺構	陶磁器、瓦質土器、土師質土器、瓦	

要約

石川の河岸段丘に立地する遺跡で、縄文時代と古代から中世にかけての遺構・遺物を検出した。主な遺構は飛鳥時代の中央に炉が設けられた竪穴建物や古代の掘立柱建物９棟を検出した。これまでの調査で遺跡南半を中心に集落が見つかっていたが、さらに北側に拡がることがわかった。中世では掘立柱建物、壇上の高まりの周囲に廻らされた石積みの地下の基礎部分と考えられる石積み基礎、地鎮に関連する土釜埋納遺構を検出した。石積み基礎は寺院に関連する遺構の可能性が考えられたため、周辺の絵図等の検討を行った。その結果、当該地にはこれまで知られていない寺院が中世に存在したことが明らかになった。

河内長野市文化財調査報告書第 67 輯
河内長野市埋蔵文化財調査報告書 42
公益財団法人 大阪府文化財センター調査報告書 第 337 集

高向遺跡

河内長野市高向・上原土地区画整理事業に伴う発掘調査報告書

発行年月日　2025 年 3 月 31 日

編　　集　公益財団法人 大阪府文化財センター
大阪府堺市南区竹城台 3 丁 21 番 4 号

発　　行　河内長野市教育委員会
大阪府河内長野市原町一丁目 1 番 1 号

印刷・製本　株式会社明新社
奈良県奈良市南京終町 3 丁目 464 番地